
薙刀女の異世界物語

さむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薙刀女の異世界物語

【Nコード】

N8043S

【作者名】

さむこ

【あらすじ】

大学生の百合奈は事故により生を終えた。が、異世界にて再び生を与えられる。

『異世界で素敵な恋人つくって幸せな家庭を築くのよ!!』

そう意気込む百合奈が一目惚れしたのは実は人間ではなくて……

特技は薙刀と料理なお気楽娘が繰り広げる、異世界RPG風恋愛ファンタジー

作者初心者なため色々と問題（誤字脱字、ご都合主義等）があるかもしれませんが、それでも良いという方、読んでってください。

第1話　白い空間から落とされました（前書き）

初投稿です。

よろしく願います。

第1話　白い空間から落とされました

うきやあああーっ

雲の上から地上に向かって真っ逆さまっ
身一つのスカイダイビング状態

なんで、なんでっ！？

このままじゃ確実に墮落死：痛いのイヤーっ
でも風圧が強すぎて気も失えない！

せっかく生き返ったばっかでこんなのイヤすぎるうーっ

そう、私、生き返っちゃったの。

車に追突されそうになった犬をかばって自分が車に撥ねられ、一度はご臨終になったのだ。

その時は夢中で一瞬の出来事のように感じたけど、遠くで救急車のサイレンと

誰かの悲鳴が聞こえた気がしたところで真っ暗闇に包まれた。

そして気がつくと何も無い真っ白な空間に居た。

立っているのか、浮いているのかもワカラナイ。

ここはどこなんだろう…

私、死んじゃったのかな…

ここはアノ世って所かしら？

あの犬は助かったのかな…

なんて事をぼんやり考えていたら突然、声が聞こえた。

『そなたが救った者は生きておる。だがそなたは死んだことになっておる。』

そして、ここは「あの世」とやらではない』

！！！！！！だ、誰？！

どの方角から声がしたか分からず、私はきよろきよると辺りを見回した。

でもやっぱり真っ白なままで、何もない。

とりあえずよくわからないが私は死んじゃったらしく、あのワンちゃんはまだ生きているらしい。

良かった。

せっかく庇ったのにワンちゃんもご臨終になってたら死に損だしネ。出来れば私も生きていたかったケドさ…

とりあえず此处はどこか誰の声とか難しく考えるのは置いとこつ、うん。

『何ゆえ己の命をかけてまであの者を助けたのだ？』

謎の声が私に問いかけた。

は？っと思っただけ、しばし理由を考える。

「ええと、深い意味はなかったんです。咄嗟の事でしたから。何故と聞かれても困っちゃいます…」

だつて咄嗟に体が動いちゃったんだもん。

あえて理由を言うなら…そこに犬がいたから？

『…左様か。意味は無い…と。…まあ、良い。
ところで、そなたは、このままだと輪廻の輪に入ることになるのだ
が…』

「はあ、天国とか地獄とかに行くワケじゃないんですね。」

『命は輪廻の輪を巡り世に出でる。そして天命を全うした命はまた
輪廻に入る。その繰り返しだ』

「そうなんですか、てつきり閻魔様に会って天国行きか地獄行き
か判断されるかと思ってました。」

「じゃあ、私はこのまま生まれ変わるってことですか？」

『それがそなたの望みなら。だが、そうではない選択肢も、ある。
そなた、世に未練があるのでないか？別の道を選ぶならば、その
未練も成就するやもしれんが。』

！！ぎくつ。

み、未練…なんで、未練あるってバレたの？！

私の未練。

それはズバリ！

素敵な男性と恋愛して幸せな家庭を築くこと！！

つい2ヶ月前に大学生になったばかりの18歳な私は、カレシいないのも18年。

ええ、カレシいない歴〃年齢というヤツです（泣）

幼い頃から薙刀を習っていた私は、日々の稽古と勉強、それに母も祖母も他界しちゃったから

家事もしていたのよ。

なかなか多忙な学生時代を過ごして来たので、恋愛に対して憧れはあったものの、

いかんせん時間が無い…

でも！

父も1年前に再婚して新しい奥さんとラブラブ生活を送りやがってる。

私も大学入学を機に地元を離れて一人暮らしを始め、時間もできた。これからですよ！

私は恋活に励んで、絶対に素敵な恋人みつけてラブラブ生活を送るのだーっ

そして、ゆくゆくはラブラブな恋人同士からラブラブな夫婦となるのだーっ

て、意気込んでた矢先に犬を庇って、こうなっちゃったの。

恋人ナシなのはおるか、恋愛もしないまま、キスも未経験なまま人生終了するのは

いくら楽観的な私でも、ちょっと切ないゾ。

なので私は真っ白な空間に声高に告げた。

「未練、あります！売るほどあります！一度も恋愛しないままなんて悲しいです！」

『……左様か。では、そなた、余の世界にて生きてはみぬか？』

はい？！…えーと、意味がワカリマセン。ここは素直に聞いてみようか。

『余の世界とそなたが今まで居た世界は異なるところに存在する。他にもいくつかの世界が存在しているのだが…』

実は、余の世界の活性化のために異世界の者を余の世界に招き入れておるのだ。

極稀にはあるがな』

私の心を読んだかのように、『声』が続く。

『もちろん、招き入れる者は見極めている。そなたは余の世界に適合できる性質の持ち主であるうえに

無償で命を救った性質の持ち主だ。害はないであろう。』

……害はないって…なんなんだ？

『だが、そなたに強要はできぬ。このまま輪廻の輪にはいるか、余の世界で生きるかは、そなたの自由だ。いかがするか？』

「あの、今更なんですが、あなたはどなたなのでしょう？神様ですか？」

質問に質問で返す私。だって気になるし。

『余は神という存在ではない。言葉にするならば、世界の監視をする存在だ。』

「…わかりました。（本当はわかつちやいないけど…まあ、いつか）とりあえず私は、

このまま輪廻の輪とやらに入って生まれ変わるか、あなたの世界とやらで、

もう一度生きてみるかの二者択一なんですね？」

『いかにも』

ふむ、どうしよう。

道理を通すなら輪廻の輪行きだよな。それが命の流れみたいだし。でも、目標（恋人ゲットして後にラブラブ夫婦）を達成せずに、この命を終わらせるのもイヤかも…

うん、決めた。

「あなたの世界に行きます。（そして目標達成するのだ）」

『うむ。では、そなたに余の世界で生きていく力、心身強化や意思疎通能力を授けよう。』

おおいに余の世界を活性化してくれ。期待しているぞ。』

「はあ…ありがとうござ…あああああ〜〜っつ」

突如、真っ白だった空間に色ができた。

私の足元に真っ青な空。

足元に……空?!!

うきやあああーーーーっ

落ちてます、私。

ものすごい風圧です。

『監視者』のばーかーやーろーっ

第2話〜巨大黒鳥に激突したら羊さんに歓迎されました（前書き）

お気に入り登録して下さった方、ありがとうございます！

第2話　巨大黒鳥に激突したら羊さんに歓迎されました

ー いまだ落下中です。

雲を突き抜けて落ちちゃってます。

そして気付く。

こんな上空にいるのに、凍えるほどの寒さを感じてないよ
これって『監視者』の心身強化のおかげなのかな？

だとしたら感謝だね

つて、そもそもヤツが落としたんじゃないか！

感謝する必要なんてナシ！！

生き返らせてくれた人物（？）に内心憤っていると、何か黒いものが見えた。

なんだか、かなり大きな黒い鳥のようだけど…。

落下を止められるはずもなく、ぐんぐん近づいていく。

鳥は私に気づいてないようだ。

そりゃそうだろう、かなり上空にいるのだ。普通は下、よくて横しか気にかけないか。

でも、このままじゃぶつかる、危ない！どうしよう！！

大声で「避けて」って言いたくても、風圧で口がまともに開かないしっ

ああー、もう駄目！！

ドンっっ

私は膝から鳥の上、背の羽の間（人間だと肩甲骨あたり？）にダイブ
鳥が柔らかいのか、心身強化の賜物なのか、思ったほど痛くなかつ
たよ。

けど

激突1秒後、ピタッと鳥が止まる。

そして…そのまま真下に落ちた。

（再び）うきやああーっっ

鳥――？！

もしかして失神しちゃったとか？！

ご、ご、ごめんね～！

恨むなら『監視者』を恨んでネ。

でもキミ随分大きいねえ。10mはあるんじゃない？

そんなのんきな事を思いつつ、私は鳥と共に地表にダイブすること
となった。

ずどおおおん！！

周囲に大きな音を響かせて、巨大黒鳥と私は地面に着いた。

巨大黒鳥は飛んでいた姿のまま、お腹から地面に落ちたので鳥の背中にいた私は無傷。

結果的に巨鳥がクッションになってくれたってことね。

とりあえず、助かった。ほつ。

せつかく生き返ったのに恋愛せずに死にたくなかったし。

あ、でも、このバカでかい鳥は大丈夫かな？

意図的では無いとはいえ、鳥を犠牲にして助かったんじゃあ目覚めが悪い。

まだ軽く落下時の衝撃が残る体を動かし、鳥の背中から降りて鳥の頭の方へと周って見ると、鳥の目が薄っすらと開いた。
良かった、どうやら鳥は生きてるみたい。

！！！！

えっ？！

な…何？…

こ…こわい…………

鳥の目が、明らかに強烈な意思を帯びて睨んでる。

恐怖で、体が硬直してしまっていた。

その目に宿るのは怒り？
いや違う、これは殺意。

この鳥をこんなめにあわせたのは確かに私。（『監視者』のせいでもあるのか??）

だから、こんな目で睨まれるのは当然なのかもしれない。
だけど……

コイツはヤバイ!!

本能が危険信号を点滅させてる。
逃げなきゃっ

でも、すぐに逃げようとするものの、足が動かない。

早く、早く逃げたい!

この巨大黒鳥が動き出す前に、離れなきゃ!

恐怖で動かない体、動かない体に焦る心。

パニックになりそうだった、
その時

いきなり、私と鳥から少し離れた所に淡い光が出来た。

その光は徐々に人の形となり、4人の人が現れたではないか!

えええええー?!

彼等は私のほうへとやってくる。

え、ちょ、待って。

そう思っても彼等は待ってくれずに近づいてくる。

そして、彼等の姿をしっかりと見た私は啞然。

だって、人間っぽいのに、人間じゃないんだもん！

身体は人間と変わらない。

でも、顔が…なんていうか、羊とか山羊のようなんだよっ
頭の上に何か角みたいなのがついていて、目も楕円形っぽくて緑色
をしている。

髪は黄色味がかった白で全員クルクルパーマ。

こんな姿をしている人、見たことも、聞いたこともない。

違う世界。

ホントにここは異世界なんだ。

「ギルガを地に墜としたのは、あなたですか？ か弱そうなのに凄いですね！」

突然現れた人たち（人なのか？）をボーゼンと見る私に、一番年長
っぽい方が話しかけてきた。

凄いつて…空から落ちて偶然追突しちゃっただけなんですが…

何と言っていていいかわからず、まだボーゼンとしている私を、皆さん

アレ？って表情で見ていたが、ふいにざわめく。

「まずい！ギルガが起き上がりそうだ。すぐ収容所に送ろう。」

そういつて彼らは件の巨大黒鳥を取り囲むと、何やらブツブツと呟き手のひらを鳥にむけた。

すると、鳥の周りを淡い光が取り囲んで――
と思った瞬間、鳥は跡形もなく消えちゃった。

ええええー？！（part 2）

なんで、なんで？！

あんなデカイの、どうやって消したんだ？？
イリユージョン？？？

更にボーゼン。

ポカンとアホ面しているだろう私に、彼等は再び話しかけてきた。

「あの…、ギルガを墜としたのは貴女ではないのですか？何故このような場所にいるのですか？」

「…何故このような場所にいるのかは、私が聞きたいです……」

「はい？」

「…ここは何処なんですか？あなた方は誰なんですか？あの大きな鳥は何故消えたのですか？（さすがに私は誰？とは聞かなかったケド）」

頭がプチパニック状態の私は、思いつくがままに質問を繰り返した。

目の前にいた人（？）が困惑気味に「……落下時に頭を打ってしまったのでしょうか？」と呟いた途端、なにかがプチッ

私は弾けたように訴えた。

「頭は打ってません！私は…私は違う世界から来たんです！」

その言葉に、羊もどき4人衆がポカン。

コイツやっぱ、オカシインじゃね？黄色い救急車必要？
なんて思わないでよ？！

誤解されないように、必死で、一生懸命、誠心誠意、犬を庇って事故ったところから今に至るまでを語った。

結構、支離滅裂な説明だったけど、彼らは驚いた表情をしながらも真摯に聞いてくれた。

いい人達だなあ。

「…貴女の話は俄かには信じがたいのですが…いずれにせよギルガを退治してくれたのは貴女であるということは確かなようです。我が一族は長年にわたりギルガに、あの怪鳥に苦しめられておりました。貴女はわが一族の恩人です。是非、我が一族の街シプグリールにおこしくください。歓迎いたします」

そういつて羊4人衆は方膝をつき、腕を胸の前にもって来て頭を下げた。

そんな傳かれても困るしっ

私は焦ってしまい、アタフタしながら言った。

「あ、あの、私、よく状況をわかってなくて、でも、そんな頭下げてもらうほどの事したつもりはないし、えと、その、色々お尋ねして良いですか？あ、お顔あげてください」

すると彼らは膝をついたまま顔をあげ、やわらかく口角をあげ「なんなりと、お尋ねください」と言ってくれた。
やっぱり良い方達だ。

「はつきり言つて私は、この世界に来たばかりで何も知りません。言語は理解できますが、知識は皆無です。生まれたての赤ちゃんと同じなんです。…だから、この世界のこと教えてもらえませんか？」
「承知いたしました。ですが、ここでは落ち着いてお話するのは難しいので、やはりシプグリールへお越しいただけますか？申し遅れました。私は魔獣の羊緑族、メルーロと申します。こちらの者達は私の部下で、カハール、シゼーレ、タガーテです。よろしければお名前を教えてくださいいただけますか？」

「あ、はい、私の名前は百合奈です」

「リーナ様とおっしゃるのですね」

「いえ、ゆ・り・な です」

「失礼しました。ユ・リーナ様」

「いえいえ。ゆりな です」

「ユリーナ様？」

「……はい。」

細かく訂正するのも面倒くさい。

百合奈とユリーナ、たいして変わらないから、まあいいか。

「ユリーナ様、我ら羊緑族はユリーナ様を手厚く御持て成しさせていただきます」

「……ありがとうございます。あの、シプグリールと言う所は、ここから遠いのですか？」

今、私達がいる所は岩や木が点在している、ただっぴろい草むら地

だ。

人が住んでいる気配は見当たらないんだけど…

「ええ、ここからだと徒歩で行こうとすれば夜になってしまいますが、空間魔法で転移いたしますで、すぐ着きますよ」

さも、当たり前のように「空間魔法」などと言うメルローさん。

そうか、この世界は魔法が存在する世界なんだ。

さっきの巨大黒鳥もきつと魔法を使ってどっかに移動させたんだね。

そんなことを思いながら、私はメルローさん達が何やら呟いてる（おそらく魔法）のを見てみると、足元にキラキラしている物を見つけた。

屈んで手にとってみる。

それは真つ白な玉砂利のような石だった。

所々に金粉をまぶしたみたいになっていて、とても綺麗。

わあ、異世界の石は綺麗だな。もらっちゃっていいかな？良いよね、うん。

河原の石を持ち帰るような感覚で、穿いているジーンズのポケットに入れた時、メルローさんが私を呼んだので、小走りで彼等のところに向かった。

どうやら転移の準備が整ったらしい。

宙に淡い光が浮かんでいるよ。

魔法だ……魔法だよ！

ス・テ・キ

初体験する魔法に内心ワクワクしながら、私は彼等の「空間魔法・転移」とやらで、この場を離れたのだった。

第3話〜豪華なお部屋でこの世界のお話を聞きます〜（前書き）

今回、少し長めです。
説明文が多いです。

第3話　豪華なお部屋でこの世界のお話を聞きます

ぐにゃん

気持ち悪い…。

転移って内臓シェイクされてるみたい。

アツという間だったけど、結構気持ち悪かった。

空間魔法とやらで移動した私たちは、シプグリールの街を一望できる丘の上にある大きなお城みたいな建物の前に立っていた。

「第一番隊隊長メルーロ、ギルガを墮とせし方をお連れいたしました。族長にお会いしたく、謁見願います」

お城の入り口前にいた門番らしい人にメルーロさんが告げると、門番さんは歓喜と驚愕が入り混じったような表情で私を見た。

あ、私、この門番さんが思ったことわかった

（あの巨大黒鳥やつつけたんだ、すげー！やったー！って、こんなひ弱そうなオンナが?!）

ってとこだろうな。

メルーロさんだって私のこと「弱そう」って言ってたしね。

気後れしつつも、お城の中に入っていくメルーロさんの後についていく。

広々とした廊下を歩くこと数分、不意にメルーロさんが私の方へ振り返った。

「ユリーナ様、見知らぬ所へいきなり来て、ご不安もおありでしょう。いち早くこの世界のことをお知りになりたいと思われているかと存じますが、まずは我が族長にユリーナ様をご紹介したいのです。」

まあ、当然でしょうね。

私もこれから情報収集とかでお世話になるわけだし、族長さんとやらに挨拶するのは礼儀でしょう。

お友達のお宅に遊びに行ったときに、その家のご家族に挨拶するのと同じよね。ん？微妙に違うかな？

「族長さんへのご挨拶は当然のことだと思ってますよ。でも私、この世界の挨拶の仕方がわからなくて……。私のいた国では膝は付かずに腰をまげて頭を下げるのですが、それだと失礼にあたりますか？」
「いえ、大丈夫ですよ。ユリーナ様の思うとおりになさって下さい。」

「

メルーロさんが柔らかく微笑みながらそう言ってくれたので一安心。

それから更に数分歩くと、キレイな模様が細かく彫られてる大きな両面扉の前に着いた。

扉の前に立っている兵隊さんっぽい人にメルーロさんが何事か告げると、兵隊さんは先程の門番さんと同じような表情で私に視線を向けてきたが、すぐに扉を開けてくれた。

メルーロさんに続き、一步踏み入れた途端、視界に入っただのは豪華絢爛な場所。

なんじゃ此処は……

ベルサ ヌ宮殿？ バツキ ガム宮殿？ シェーンブル 宮殿？？

きらびやかすぎる……

こんなゴージャスな場所にパーカーにジーンズ姿の私。明らかに場違いだね?! ホントに入って良いの??

「ユリーナ様、どうされましたか?」

「あ、えっと。あまりにも素晴らしい所なので気後れしてしまっています……」

「大丈夫ですよ。族長がお待ちですので、どうぞ」

怯む気持ちを何とか落ち着かせて、メルローさんに続く。

ふつかふかの高価そうな絨毯を3分の2くらい進んだところで、メルローさんが歩みを止めて膝をついき、玉座(なのかな? めっちゃ豪華な椅子)に腰掛けている壮年の人(?) に向かって口を開く。

「族長、第一番隊隊長メルロー、ギルガを墮とせし方、ユリーナ様をお連れ致しました。ギルガは手配者収容所に転移させたこと、ご報告致します」

「うむ、大儀であった。…そなたの言を疑うわけではないが、本当にこちらの女性がああギルガを墮としたのか?」

う。やっぱり、おかしいって思いますよね?

うろたえる私に、大丈夫ですってカンジでメルローさんが微笑むと、私がこの世界に來たいきさつなどを族長さんに順立てて説明してくれた。

私が異世界から來たと聞いて族長さんもビックリしてるみたいだったけど、すぐに元の表情に戻った。

でも「そうか、その奇妙な服は異世界の服装なのだな…」と呟いたのは聞こえていましたけどね。

パーカーにキャミ、ジーンズという服装は異世界では奇妙なのか…

そして、メルローさんの説明が一通り終わると、族長さんは豪華な椅子に座ったまま、私をジッと見た。

「まずは、例を言おう、ユリーナ殿」

族長さんにお礼を言われ、私はひたすら恐縮する。

「いえ、あの、私はホントたいしたことしてないんです。偶然なんです」

「それでも、ユリーナ殿がいなかったら、我らはギルガの恐怖に脅かされ続けているところなのだ。もちろん、布令の通りに大金貨1000枚を与えよう」

「はあ…（金貨って…お金ってことよね。これからこの世界で生きていくには、お金も必要よね。大金貨1000枚がどのくらいの貨幣価値があるのかは分からないけど、ここは素直に頂戴しちゃう）…ありがとうございます」

それにしても、お金もらえるなんて、あのバカでかい鳥は賞金首だったのね

棚から牡丹餅だわv

「ところでユリーナ殿。今宵はギルガが居なくなつたことを祝い、盛大に晩餐会を開く予定なのだ。是非ユリーナ殿もご出席くだされ」
「えっ！！！！晩餐会？！わ、私はこちらの食事のマナーは全く知らなくて、その、お気持ちは嬉しいのですが……」

晩餐会って、そんなあ…。

そりゃ、こちらの世界の食事は大いに興味あるけど、多分たくさんの方が集まるんだよねえ…気疲れしそうだし、出来ればお断りした

いな…

そんな消極的な気持ちで族長さんを見ると、彼は苦笑した。

「ユリーナ殿もお疲れだろう。部屋を用意するので、まずは一息ついてください。晚餐会まではまだ大分時間もあるので、メルーロにこの世界のことを聞くと良い。メルーロ、ユリーナ殿を東の貴賓室にお通ししなさい」

「は、承知いたしました。ではユリーナ様、ご案内いたしますので、こちらへどうぞ。族長、御前失礼致します」

メルーロさんが一礼したので、私も同じようにし、族長の間から東の貴賓室へと向かった。

案内された貴賓室もすごい部屋だった。先程の族長の間ほどでは無いが充分ゴージャスだよ！

豪華で高級そうな絨毯にカーテン、フカフカのソファに、高そうなテーブル。

思わずキョロキョロしているとメルーロさんがソファをすすめてくれたので、遠慮なく座る。

私の向かい側のソファにメルーロさんがかけると、早速この世界 -

- ヘアグというらしい - のことを話し出してくれた。

ヘアグの世界観は、地球と違って球体ではなく平面に大陸や海が存在し、最果ては濃霧に阻まれて先に進むことは出来ないという。

驚いたことに、ヘアグには大小2つの太陽があり、月が無いのだ。

夜空に輝くのは星だけ。

大きい太陽は「主光」といい、小さい太陽は「副光」というらしい。主光は東から昇り、副光は西から昇り、副光が主光に完全に隠れて2つの光が合わる時を「正光」といい、この時間は昼食をとる時間になるのだそうだ。

日本で言う正午と同じ時間よね、正光と正午って似てるなあ

へアグには人間以外にも魔物、精霊、怪物が居て、人間・魔物・精霊は共存しているが、怪物は各々好き勝手に生きていて、神出鬼没で生態系はイマイチ不明らしい。気性は残虐で獰猛、よく人間やおとなしい魔物の町や村を襲っているのだそうだ。

あの巨大黒鳥ギルガも性悪な怪物だそうで、災害、厄災扱いらしく、ここシブグリールも年に2、3度ほど襲撃されていたんだって。

あの鳥、性悪な怪物だったんだ…あの殺気はハンパなかったもんね。ヤツが動く前にメルーロさん達が来てくれて良かったよ。お礼言うのは私の方だね

扉がノックされ、メイドさんらしき女性がお茶セットとお菓子と思われる物を銀色のワゴンに載せて入ってきた。

あれ？この人、顔は族長さんやメルーロさんと同じような羊さん風な顔立ちだけど、角が無い。

女性だからかな？…まあいいや。

女性は優雅な動作でテーブルの上にお茶とお菓子を置くと、一礼してしずしずと退室した。

黄緑色をしていて、ハープっぽい香りのお茶と、クッキーのような焼き菓子。

美味しそう

ちなみに茶器や器も、この豪華なお部屋にふさわしく高価そうなものだ。

メルーロさんが、どうぞ、と勧めてくれたので、お茶を一口飲んでみる。

うん、美味しい！

少し甘みがあるけど、後味がスツキリしていて飲みやすい。

思わずニツコリした私にメルーロさんが「お口にあったみたいで良かったです」と微笑みながら、同じようにカップに口をつけた。そして、また話の続きをしてくれる。

ヘアグには中央にかなり大きい大陸があり、その周りに様々な島が点在するらしい。大陸は1つしかなく、

東の地は風の神の加護があり、魔物の「魔竜」精霊の「風の精」人間の「青の民」が、

西の地は土の神の加護があり、魔物の「魔獣」精霊の「土の精」人間の「緑の民」が、

南の地は火の神の加護があり、魔物の「魔鳥」精霊の「火の精」人間の「赤の民」が、

北の地は水の神の加護があり、魔物の「魔甲爬」精霊の「水の精」人間の「黒の民」が、

それぞれに国や都市、街や村や居住区を成して暮らしているらしい。魔物の魔鳥・魔獣・魔竜つてのは想像つくけど、魔甲爬って何？つて聞いてみたら、水蛇や鰐や海亀や蟹の魔物なのだそうだ。なるほど。

「青の民」は青い髪に藍色の目、「緑の民」は緑の髪に茶色の目、「赤の民」は赤い髪に橙色の目、「黒の民」は黒の髪に灰色の目をしているという。

へへ、と話を聞きながら内心戸惑う。

だって、私、目の色が藍色なんだもん！

曾祖母がイギリス人なんだけど、隔世遺伝なのかな、小学校の高学年頃から段々目の色が青みがかってきちゃったの。それでも中学2

年くらいまでは光の角度で青みがかって見える程度で普通は黒目だったから気にしてなかった。

でも高校生になってからは完全に藍色の目になってしまい、カラーコンタクトじゃないかと疑われたんだよね。だからわざわざ黒のコンタクトをしていたのよ。大学生になってからは面倒だから黒コンは止めたけどさ…

今の話だと、「青の民」の目に「黒の民」の髪ってことになるじゃん。

見た目もイレギュラーってことだと思っただけど、それにしても羊緑族の方々は友好的。

気にしなくても大丈夫よね。

私はお茶をまた一口飲んで、気持ちを落ちつけ、メルーロさんの話に意識を戻した。

次にメルーロさんは魔法について説明してくれた。

魔法の種類は風、土、火、水、空間、重力があり、それらとは別に魔物や精霊は独自の魔法が使える。また、魔物や精霊は魔力がなくとも独自の能力があるのだそう。人間は独自の能力というものは無いが、魔物や精霊と召還契約をして彼らの力を借りることが出来るのだとか。

ヘアグの全人口の半分は魔力をもたないので、魔力があるというのは力があるということになるらしい。

そうか、半分は魔力が無い人になるんだ。良かった、魔法なんて当然使えないもんね、私。

「じゃあ、メルーロさんは貴重な人材ってことですよね、空間魔法なんて使っていたのですから」

って何気なく言ったら、メルーロさんは少し照れたようだった。

40代の中年に見えるメルローさんがなんか可愛く見えちゃったよ。
あはは

そういえば、メルローさんは何歳なんだろう？

女性に年齢を尋ねるのはためらっちゃうけど、男性は構わないよね

「メルローさんは、何歳なんですか？」

「私ですか？今年で36歳になります。」

「そうなんですか（ちよっと老けてるな）ええと…、私は今、
18歳で、今年19歳になるんです。」

私が18歳っていった途端、メルローさんはすごく驚いた顔をした。

「え？！ユリーナ様は御歳18歳なのですか？11、2歳くらいと
思ってたが…」

ええ？！11、2歳って、小学生じゃん。そりゃ無いよ

「私、そんなに幼く見えますか？私のいた国では20歳になると成
人式といって大人だと認められる式を行うんです。あと1年で私も
成人なんですよ」

まだ大人じゃないけど、もうすぐ大人なんだぞ。知識は赤ちゃん
並みだけど。体は立派な（？）女なんだぞ！と、ちよっとムツとし
ながら言う。

すると、メルローさんが見開いた目を更に見開いた。

「大人になる儀式が…20歳？ヘアグでは人間は15歳が成人です
よ」

はいい？！15歳が成人？そっちがビックリだよ！！

あ、でも成長速度が早いのかな？だとしたらメルーロさんが老けるのも納得するんだけどな…

それとも時間の流れが違うとか。あ、何かやな予感。

「あの…、ちなみに1年間って何日ですか？」

「704日です…」

ななひやくよん！

704日ですか、365日の約2倍じゃん。予感的中。

おそらく時間軸が違うんだろな…太陽2個あるし。地球見たいに丸い星じゃないみたいだし。

「あの…ユリーナ様のいらした世界では1年は何日なのですか？704日ではないのですか？」

「はい、私の居た世界…地球って言うんですけど、地球では1年は365日なんです。1日24時間、7日間で1週間、30日か31日で1ヶ月なんです。ヘアグとは違いますね…」

「なるほど、地球…と言う世界と、ヘアグでは1年間の日数が2倍近く異なるのですね…」

「ええ、地球では18歳ですが、ヘアグ年齢はいくつになるかよくわかりません…」

「そうですねえ…」

なんとなく、私たちはカップを手に取り、お茶を飲んだ。お互いちょつと気まずいカンジ。

ハハハ、と空笑いして一息ついた後、仕切り直すようにメルーロさんが幾分落ち着いた声で話し出す。

「地球という世界と、ヘアグでは時間が色々と違うみたいです。まず、1日は26時間で、1ヶ月は44日、1年は16ヶ月で70

4日となります。

1月から4月までを風の季節、5月から8月までを火の季節、9月から12月までを土の季節、13月から16月までを水の季節、といいまして、月ごとにも別名があります。

1月〓風の青月、2月〓風の赤月、3月〓風の緑月、4月〓風の黒月
5月〓火の青月、6月〓火の赤月、7月〓火の緑月、8月〓火の黒月
9月〓土の青月、10月〓土の赤月、11月〓土の緑月、12月〓土の黒月

13月〓水の青月、14月〓水の赤月、15月〓水の緑月、16月〓水の黒月

と、言います。

日付けは夜明け時に変わり、時刻は正光を基準としてます。夜明けから正光1時間前までを風の刻、正光1時間後から火の刻、土の刻、水の刻となり、正光前後1時間とは別に、それぞれ6時間ごとの刻を刻みます。」

ふむふむ。

ヘアグは26時間だから、正光前後の時間を無視して24時間に置き換えてみると…午前6時から正午までが風の刻、正午から18時までが火の刻、18時から深夜0時までが土の刻、深夜0時から6時までが水の刻ってワケね。

どうやら1分60秒で1時間60分というのは同じみたいなので助かった。

私が頭の中であれこれと置き換えて考え込んでいると、メルローさんが「色々と一度にお教えしても、ユリーナ様が大変ですよ。ユリーナ様が、ヘアグの共通文字をお解かりになるなら、一般知識や、一般常識などをまとめて書きましようか？」と言ってくれた。

おおーっ、それは大変ありがたい提案！

実は私、この貴賓室の本棚にある本の背表紙がちゃんと解かるのだ。つてことは、ヘアグの共通文字とやらも解かるだろう。

『監視者』の意思疎通能力、ぐっじょぶ！

と、いうわけでメルー口さんの申し出に甘えることにした。

メルー口さんには、よけいな手間かけさせちゃうけど、私は聞いても忘れちゃう確立高いし書いて残してもらえると後からおさらい出来るから、とっても助かるの。

そんなこんなで、気づけばかなり時間がたっていたようだ。お腹すいたなあ。

お茶とお菓子じゃ足りません…晚餐会に出席しないとゴハンにありつけないのかしら…

でも、今は一度に色々ありすぎて、あまり人前に出る気になれない。

「メルー口さん、失礼を承知でお願いがあるのですが…先ほど族長さんがご招待してくれた晚餐会、辞退させていただきたいのですが、良いですか？」

ためらいがちにお願いすると、メルー口さんはあっさりと承知してくれた。

「族長もわかってらっしゃるでしょう。ユリーナ様を晚餐会にご招待したのは、形式上のこともありますから。もちろんご出席くださるに越したことはないですが、ご無理をさせてまでとは族長も思っておられないですよ。後ほど、こちらに食事をお持ち致しますので本日はこのまま御寛ぎ下さい。私はこれで一旦失礼いたします。」

「あ、はい。色々ありがとうございます。」

メルー口さんは笑顔になり、では、と一礼して部屋を出て行った。

第4話　お金持ちになっていた自覚はありませんでした（前書き）

今回も説明が主流になっちゃいました。

説明役がオジサマから女のコに変わります。

第4話　お金持ちになっていた自覚はありませんでした

メルーロさんが退室してからしばらくはソファに座ったままボケ々としていた。

普段だったら豪華な部屋に一人で居るのは落ち着かないけど、今は脳が情報処理にいつけなくて、部屋の様子なんて気にならなかった。

それでも体は正直に空腹を知らせてくる。

お腹がゴハンちょーだいってキュルキュルと訴えているよ。

確か食事持ってきてくれるって言うってたよね？まだかな？

こちらの世界の食事ってどんなのかな？

お茶とお菓子が美味しかったから実は期待してマス

食事のことを考えているとコンコンつとノックの音がしたので返事をした。

すると「失礼致しますう」と可愛らしい声がして、愛くるしい女のこ（でも羊顔）がワゴンに食事と思しき物を載せて入ってきた。

さっき、お茶をもつて来てくれた人は中年に見えたが、この女のこは女子高生くらいに見える。

緩く三つ編みした髪に、茶色のワンピースっぽい服を着ていて、白いカフェエプロンのようなものを着けている。

「はじめましてユリーナ様あ、あたし、ミリアと申しますう。ミリーとお呼びくださいあい。メルーロ様からのお申し付けでえ、お食事お持ちいたしましたあ。ユリーナ様はヘアグは初めてって聞きましてえ、違う世界の方に会えるなんてえ、あたしスツゴク幸運です

う。あ、お部屋薄暗いですねえ。明るくしてよろしいですかあ？」

「あ、はあ、お願いします。」

「きゃあ、私ごときに「お願いします」だなんて言ってくたさるんですかあ、嬉しいですよ。でも、そんな丁寧に言わないでくださあい。あ、お食事すぐにお仕度致しますねえ」

… なんだか話し方が独特だし、やけにテンション高いコだな

だけど不思議とイヤな印象は無い。

その明るさにこちらもつられてしまうような魅力のある女のこなのだ。

ミリーは「では明るく致しますう」と言い、入り口付近の台座の上にある箱の蓋を開けた。

すると、とたんに部屋全体が明るくなる。

すごい！どーなってるの？！

電気なんて無い世界だよね！魔法か何かなのかな？

好奇心から台座に近寄り箱の中を覗いて見ると直径10cmくらいの輝く石があった。

「あ、その石は光源石ついていいましてえ、暗い場所でも明るくしてくれるんですよ。もともとはヘト石なんですけど1ヶ月間正光の光を吸収させると石が光って光源石になるんですよ。」

ミリーがワゴンから次々とお料理ののった食器をテーブルにのせながら教えてくれる。

「さ、お仕度できましたあ、どうぞ召し上がってくださいい」

やったあー！

やっとゴハンだわ もう、お腹ぺこぺこなのよ！

早々と座り、いただきますと手を合わせ食事に手をのばそうとして、ハツと躊躇う。

テーブルに並んでいる食事は一流レストランのようにキレイに盛り付けられている。

どれも美味しそうんだけど……ぶっちゃけ、これ、おいくらですか？と聞きたくなった。

「あ…ここまで用意してもらって今更なんだけど、あの、私、お金もお食事代わりになるものも何も持つてないの…。それでもいいよ」「何をおっしゃってるんですかあ、ユリーナ様あ！」

まだ全部言い終わらないうちにミリーに遮られちゃった。

「ユリーナ様は我が一族の恩人なんですう！羊緑族の英雄なんですう！食事代なんて、お気になさる必要ないですう！」

握りこぶしで訴えるようにミリーが言う。

その意気込みにタジタジになっちゃったけど、つまりゴチになれるってことよね。ラッキーv

パンが数個（しかも温かい。焼き立てだよ、きやつほう）、具沢山の野菜スープに黄色いソースがかかった肉のソテー（何のお肉かわからないけど、見た目はチキンっぽい）、豆っぽい和え物に、他にも副菜と思しきものが数皿。大きな銀皿には数種類の果実っぽい物が山盛りにあって、ミリーが色々切り分けてくれた。

「でもユリーナ様あ、お金ならあ、かなりの大金をお持ちでしょう？ここではもちろんお食事代などはいただきませんがあ、お金のことは気にされること無いんじゃないやありませんかあ？」

「え？私、お金持つてないよ？」

「おかしいですねえ、ギルガに掛けられてた褒賞金つてユリーナ様が受け取られたと思ってましたあ」

「あ、そうだったわ。そーいえば忘れてた。族長さんが大金貨1000枚与えるとか言ってくれたんだったわ」

「やっぱり、ユリーナ様お金持ちじゃないですかあ。それだけあれば、10年は働かずに贅沢して暮らせますよう」

その言葉にパンを持ったままフリーズ。

大金貨1000枚つて…100万円くらいの価値だったらラッキーくらいに思ったけど…もつとスゴイのか？

「あ、あのね…私、ここでの貨幣価値わからなくて。お金のこと、教えてもらってもいい？」

食事の手を休めて、居住まいを正しミリーを見る。

すると彼女は「どうぞそのまま召し上がりながら聞いてくださーい」と言いながら、お金のことを話してくれた。

「私ごときで僭越ながらあ、お話をさせていただきますう。えっと、お金はヘアグ全土同じなんですう。

大金貨が一番高くつて、次に中金貨、小金貨がありますう。

それから大銀貨、中銀貨、小銀貨。あと、大銅貨、中銅貨、小銅貨がありますう。

小銅貨10枚で中銅貨1枚、中銅貨10枚で大銅貨1枚、大銅貨5枚で小銀貨1枚、

小銀貨5枚で中銀貨1枚、中銀貨5枚で大銀貨1枚、大銀貨2枚で小金貨1枚、
小金貨2枚で中金貨1枚、中金貨2枚で大金貨1枚になるんです。
えっと、お金の価値はあ、ユリーナ様がいましがたお手にされてた丸パンのお値段が中銅貨7枚から大銅貨1枚くらいですう。」

「つまり、ええと、このパン1つ100円と考えると、大銅貨1枚が100円玉1枚と仮定して…

指を折り折り計算してみる。

100円玉5枚は500円玉1枚〃小銀貨1枚
中銀貨1枚は2500円、大銀貨1枚は12500円、小金貨1枚
は25000円、中金貨は50000円、大金貨は10万円

「つまり、ええと、私は10万円を1000枚もらったってことだから、1億円。

い、い、いちおくえん……っ

宝くじは300円しか当選しなかった私が、どんなに頑張ってバイトしても月々5万円しか稼げなかった私が、異世界生活半日で1億ですか……っ

あの鳥、どんだけ……っ

フリーズ通り越して石化。

固まってる私をミリーが「どうかしたんですかぁ？お食事、さめま

すよう？」と氣遣わしげに見つめてくれるけど、ゴメン、今とてもじゃないけど平常心になれないデス

「あつ、ああ、ごめんね。大金貨1000枚の価値の凄さに怯んだっていうか……。私、今まで1ヶ月つて、いやいや、ええと、30日でね、5万円……中金貨1枚稼ぐのが精一杯でね……」

「え?! ユリーナ様、働いていたんですか?すでに成人されてたんですね」

「ううん、成人までには、あと1年かな。つて、働くのつて成人してからなの? ミリーは何歳になるの?」

「あたしは今年の土の黒月で17歳になりますう。ユリーナ様は成人されてないのに働いていたのですかあ? ヘアグでは未成年が働くつてことありませんから、ビックリですう」

「私もミリーが成人してたなんてビックリだよ。私のいた世界、地球つて言うんだけど、地球は1年間365日なの。ヘアグの半分だね。だからかな、年齢と見た目の感覚が違ふみたい。」

「ほええ、「ちきゅう」というところは時間が半分なんですかあ」
「そういえば、私の生まれた国では平均寿命年齢80歳なんだけど、こっちは40歳くらいになるのかな?」

「ええとお、こちらではあ、人間の寿命はだいたい64、5歳ですねえ。魔物や精霊は種族に寄りますがあ、150歳くらい生きる者もいますよう。私達羊緑族は魔獣の中でも短命なのでえ、人間と命の長さも成長・老化速度もほとんど同じなんですがあ、人間と同じくらい繁殖率が良いのでえ、数が多いんですう。」

「そうなんだあ。色々教えてくれてありがとう」
「どういたしましてえ（にっこり）」

そんな会話をしながら、食事を美味しくいただきました。
結構な量があつたけど、全部完食よ!

こちらの世界の食事が味覚にあつて良かったよ。食事つて大切だ

ものね。

その後何故かドツと疲れがでたので早めに寝させてもらった。
ベットの中で今日1日を振り返り、これからどうしようか、と考える。

思わぬ形で大金貨1000枚という大金を得たけど、なんだか嬉しいというより、戸惑っちゃう。

6畳一間のアパートで節約暮らしをしていた平民には、過ぎたお金だよ。

そりゃあ、この世界で生きていくためにはお金は必要だろうけど、不相应な大金なんか持っていても困っちゃう。

お金目当てのロクデモナイ男が寄ってきたらどうすんだ！

イイ男は、楽して得たお金で怠惰な暮らしをするような女なんか相手にしてくれないよ、きつと。

やっぱり、お金は働いて稼がないと。働かざる者食うべからずって言うしね。

でも、ここって成人してないと働けないみたいだし…どうしよう…

まあ、いつか。なんとかなるでしょ。

明日からのことは起きたら考えようっと。

睡魔に逆らうことなく、私はそのまま深い眠りに落ちていったのだ。
った。

第4話 お金持ちになっていた自覚はありませんでした（後書き）

羊緑族の街『シブグリーン』は
羊、緑からつけました。

単純でスミマセン（^^;）
名づけて結構難しい……

第5話　朝から族長さんとお話しました

異世界・ヘアグ・にきて初めて迎えた朝は、スッキリした目覚めだった。

夢もみなかったよ。

うーん、とベッドの中で体を伸ばし、そのままゆっくりと簡単なストレッチをしてから起き上がって部屋を見渡す。

「この世界って、人間より魔物の方が裕福なのかね…あはは…」

この部屋は東の貴賓室ではなくて、幾つか有るという客間の一つなんだけど、なんていうかさ、どこぞの高級ホテルのロイヤルスイートですか?! って言いたいくらいに無駄に広くて豪華。

昨日、食事が終わってからミリーが案内してくれたんだけど、思わず「部屋間違えてない?」って聞いちゃったもん。

これだけ広いと思いつきりを動かしても大丈夫そうだし、薙刀の型でもやろっかな。

私が習っていた薙刀術は、お祖母ちゃんの生家に伝わるもので、この流派にも属していない。

小学校1年生の時にお母さんが他界しちゃって、お祖母ちゃんにお世話になることになったんだけど（お父さんは商社勤務であんまり日本にいなかった）偶然お祖母ちゃんが薙刀を振るうのを見たの。それがとつてもカッコよくて、お祖母ちゃんに頼み込んで教えてもらったんだ。

稽古はかなり厳しかったけど、挫折することなく続けてた。今やっている型は、実際に得物を持っていなくても出来る基本的動

作。これは目を瞑っていてもできるのよ。

幾つか基本型をこなした頃、「ユリーナ様、お目覚めですかぁ？」とドア越しに声がしたので、はいと返事をしながら開けると、タオルや何かの壺や桶っぽい物がのったトレーを持っているミリーがニコニコ顔で立っていた。

「おはようございますう、ユリーナ様。朝のお手水道具をお持ちしましたぁ。入ってもよろしいですかぁ？」

「うん。どうぞ」

ミリーはトレーごとテーブルに置くと、道具の使い方を教えてくれた。

青い壺に入っているのは身体洗浄液で、絞った濡れタオルにしみ込ませて顔を拭くんだった。ちなみに身体洗浄液は、髪も顔も体もOKな万能液なんだそうだ。

これ一本でシャンプー、リンス、ボディウォッシュ、洗顔料になるなんて！

スゴイです。

お次は緑の壺に入った口内洗浄液で、マウスウォッシュみたいにお口クチュクチュするだけで歯がツルツル！

これもスゲーです。

朝の身支度を整えると、族長さんが待っているという部屋に案内された。

まずは朝の挨拶と昨夜の晩餐会欠席のお詫びを言ってから、勧められた椅子に腰掛ける。

「朝早くに呼び立ててすまないの。今日はこの時間しか都合がつかなくてな」

「いえ、そんな。お気になさらないでください」

「実はユリーナ殿に報告したいことがあったの…。昨夜の晩餐会でギルガの脅威は去った旨を皆に伝えたのじゃが…ユリーナ殿のことは話してないのじゃ」

ん？なんで？って気持ちが悪く表情に出ていたのか、族長さんはおもむろに口を開くと理由を話し始めてくれた。

理由その1 11、2歳に見える少女が天災級の怪物ギルガを倒したとは信じてもらえそうになく、族長が虚言していると疑われる可能性あり

理由その2 ギルガに懸けられていた報奨金狙いで盗賊なんかには襲われる可能性あり

理由その3 ギルガの強さは世界中に知れ渡っている。そのギルガを倒した者を打ち倒せば名をあげられると思う戦士達に狙われる可能性あり

理由その4 異世界人というだけで物珍しさから狙われる可能性あり

なるほど。ごもつともです。

理由1はともかく、他は私の為を思つての理由だわ。

「確かに仰るとおりですね。ご配慮ありがとうございます。…あの、こんなに気を使っていたくのは何故なのですか？」

「何故、というと？」

「その…お気を悪くされたら申し訳ないですが…メルローさんやミリーはギルガをやっつけてくれた恩人だからって言つてたけど、褒

賞金を受け取る時点で私は恩人にはならないと思うんです。得体の知れない異世界の小娘に、長である族長さんが気をつかってくださり、しかもかなりな高待遇なので…何か理由があるのかと。あの、もちろん良くして下さることは感謝していますが…」

「ふむ。ユリーナ殿はなかなか洞察力がありですなあ。いや、なに、ユリーナ殿が我々を信頼してくれば、異世界の知識や技術を教えていただけるかと思っておったのじゃ」

「異世界の知識…技術？」

「左様、昨日ユリーナ殿が着ていた服も初めて見たものじゃった。新たな知識や技術は我等の一族を更に発展させてくれると思うのじゃ」

更なる発展……それって『監視者』の言っていた世界の活性化に繋がるかも。

それに1人立ちできるまでは色々と配慮してくれそうな羊緑族さんにお世話になる方が得策だよね。

「わかりました。私がお伝えできる知識や技術はたいしたものではないかもしれませんが、それでも良ければ尽力いたします。」

「そうか！それはありがたい。我々もユリーナ殿のお力になるよう協力は惜しみませんぞ。心行くまでここに滞在してください」

「ありがとうございます」

こうして族長さんと私は相互協力関係となったのでした。

なんとかなるでしょうと思つてたら、ホントになんとかなりそうで良かったよ。

とりあえず、あの豪華すぎる客間を変えてもらつて、私でも働ける職業を教えてもらおうと。

第6話　魔法を使えるようになりました

ヘアグに来てから10日間が過ぎた。

滞在するお部屋を一番小さい客間（それでも12畳くらいある）に変えてもらった私は、身の回りのことも出来るだけ自分でするようにしたので、こちらの生活環境にもだいぶ慣れてきた。

でも、ここはヘアグの中でも生活水準が高い街みたいだから、あまり慣れると1人立ちできなさそうだなあ。気をつけないと。

この10日間でメルーロさんやミリーが常識や知識を教えてくれたから、随分とヘアグのことがわかった。

外見が未成年の何の経歴もない女子が働くのはかなり難しいってことも、残念ながらわかったよ…（泣）

だけど、そんな私でも稼ぐことができる道もあるんだって。

それはズバリ、冒険者ギルドって所に登録すること！

冒険者ギルドというのはヘアグ中であって、怪物退治や盗賊の捕縛から民間の雑用まで、ありとあらゆる依頼を請け負っている機関なんだって。

誰でも登録できるから、私でも大丈夫みたい。

誰でもいいなら登録者はすごくたくさんいるんだろうな～と思うけど、実はそうでもないらしい。

冒険者家業は命がけになるので報酬は高めのものの、命を落す者や途中で辞めてしまう者も多いんだとか。

なるのは簡単だけど続けるのは困難ってことなのね…。

私も冒険者になった途端にご臨終はイヤなので、しばらくはシプグ
リールで特訓させてもらうことにした。
手始めに薙刀を手に入れなくちゃね。

……シプグリールに薙刀はありませんでしたorz

仕方ないので図に書いてメルーロさんに説明して、シプグリールに
ある鍛冶屋さんに特注で作ってもらうことにしたんだけど、初めて
作る武器なので日数がかかるんだって。

ちなみに薙刀の説明をした時「早速、異世界の技術を教えてくださ
ってありがとうございます」とお礼を言われちゃいました。

わざわざ作ってもらうんだから、お礼を言うのはむしろ私だよね。

ヘアグ生活15日目のこと

すっかり私のお守り役になってしまったメルーロさんから「今日は
魔法の修行をしましょう」と言われてビックリ。

私、魔法なんて使えないですよ？って言ったら「ユリーナ様からは
魔法の力を感じます。それもかなり高い魔力です。修行すれば魔法
を使うこともできると思いますよ」だって。

マジっすか？！

きゃっほう、魔法、素敵！これぞ異世界の醍醐味！！

修行しますよ、もちろん！

修行というのは、ひたすら座禅でした。

大きな円形の魔方阵みたいな絨毯の真ん中に、ひたすら座りつづけ

るの。

じつと心静かにして、自分の内にある魔力を感じ取るための修行ってことなんだけど……何もせずジツとしてるって結構ツライね。魔法っていうのは自分のイメージを魔力で具現化するものらしいので、強い魔力があつたとしても、自分で魔力を感じ取れなければ意味がないんだって。

でも是非是非魔法を使いたいから、諦めないわよっ

へアグ生活20日目（お座り修行5日目）

それは唐突だった。

体中の経絡が一気に活性化したかのように使われてないと言われてるDNAが目覚めたかのように脳内のシナプスがつながったかのように自分に未知の力を感じた

きゃ~~~~、素晴らしい、これが魔力だよ！やったね、私。これであこがれの魔法が使えるよ！

早速メルーロさん監修のもと、どの属性の魔法が使えるかを色々試してみた。

どうやら私は「風」「水」が上の上、「重力」が上の中、「空間」が中の上、「土」が下の中、「火」は下の下、ってカンジみたい…「風」と「水」は100%イメージ通りにいく。えっへん。でも、「土」と「火」はほとんどイメージ通りにならないの…使うなっってことだね。ぐっすん。

あと、魔法は他属性と組み合わせても使えるとのこと。

「風」＋「水」で吹雪、「火」＋「土」で溶岩、「土」＋「風」で砂嵐、「火」＋「風」で火炎竜巻、「土」＋「水」で泥沼、といった具合だ。

他にもたくさん組み合わせ魔法はあるみたいだし、独特の組み合わせ魔法を使う術者もいるみたい。

私も色々組み合わせ魔法を使ってみたけど、吹雪しか上手く出来ないーっ

落ち込んでいじけてたら、そもそも複合魔法は高等魔法だから１種類使えるだけでも素晴らしいって言ってくれた。

……なぐさめはいらないよ、メルローさん

魔法に目覚めた私は、新しいおもちゃを手に入れた子供のように嬉々として魔法の修行に明け暮れた。

ファンタジー小説とかドラ エとかのRPGの魔法をイメージして複合魔法も色々試しまくったりして。

でも１日中フルに魔法を使うとヘトヘトになり、魔力が落ちるのを感じてしまう。（マヒヤ とか、バギクロ とか大技ばかりイメージしてるからなのか？）

ぐっすり寝れば魔力は回復するけど、やはり戦闘メインは薙刀がいないかな。

魔法は補助的に使ったり、いざという時の切り札にしようっと。

ヘアグ初日～１５日目は一般常識・知識の勉強

１５日～２０日は魔力開発修行

２１日～２３日は魔法修行（主に属性確認）

２４日～３０日は複合魔法の稽古

私はちやくちやくと力をつけていった。

第7話、雷を発生させたらキラキラの鳥さんが来ました（前書き）

上手く文章が区切れなくて、少し長めになってしまいました（^^；）

第7話　雷を発生させたらキラキラの鳥さんが来ました

ヘアグ生活31日目

本日の魔法練習は一人ぼっち

いつもはメルーロさんが付き添ってくれていて、彼の都合が悪いときは部下のカハールさんやシゼーレさんが修行してくれるんだけど、今日は皆さん時間がとれないんだって。

申し訳ないですって言われたけど、彼等も第一番隊の仕事の合間をぬって私に付き合ってくれているんだから、気にしないでほしいな。私の事情を知っているのは族長さん、メルーロさんにカハールさん、シゼーレさん、タガーテさん、そしてミリーの6人なので、修行に付き合えるのも第一番隊4人衆だけ。

外部には『族長が昔の恩人から預かった人間』ってことになっていくの。

今は風の3刻（午前9時くらい？）で、初めてメルーロさん達に会った場所、つまりギルガとの落下地点にいる。

実はずつと試してみたかったことがあったので人目につかないところに行きたいとお願いしたら、メルーロさんがここまで転移してくれた。

…やっぱり転移は気持ち悪かったケド。

「この辺りは怪物もあまり居ないはずですが、充分お気をつけください。…本当はお1人などしたくないのですが…」

「大丈夫ですよ！過信してるわけじゃないですか魔法も使えますしね」

「…わかりました。では正光頃にお迎えに来ます」

そう言っただけで心配そうにメルローさんは転移でシブグニールに戻った。心配してくれるのはありがたいんだけど、私って心配させるほど弱いのかなって複雑になる。

早く強くなって冒険者デビューしたいな。

さてと、気を取り直して魔法の練習しよう。

実は疑問に思ったことがあるのよ。

この世界には何故、雷系の魔法がないのだろうと。

どうやらヘアグは雪や雨や強風はあっても、雷が発生することが無いみたいなの。

平面の世界だからかな、気候も安定してるし気圧が乱れることもないのかも。

だけど、私はドラエの勇者専用魔法ギガデーンを使ってみたい。

ライデーでも良い。

そのためには雷を発生させねば！……雷ってどーやって起こるんだっけ？

たしか気流の摩擦で静電気がおきて、雷雲ができて、ゴロゴロピカッ、だったっけ？

そんなイメージをしながら「風」「水」「重力」の魔力を手に込める。

すると、バチバチと音がして雨雲を丸くしたような、テニスボールくらいの大きさの球体が手のひらの上に来た。

お、良いカンジじゃん

私は雷雲から雷が落ちるイメージをして、手のひらに出来た灰色の球体を10mくらい先にある木の真上目掛けて投げた。

ヒュン・・・ピカッ・・・ズドオオン
投げた・・・球体から雷発生・・・落雷

……木が黒焦げになっちゃった。
まだ微かにバチバチいつてるし。
えーと……これは、ライデン成功?!
やったー!

「すっげー、今の何?何?」

突如、声が聞こえた。

驚いて辺りを見回してみたけど、誰も居ない。空耳?

「な、今のどうやったの?魔法にしちゃー見たことも聞いたこと
も無いヤツだしなあ。特殊能力?でもアンタ人間だよな?」

空耳……じゃない!!

「だ、誰?っていうか、どこに隠れてるの?」

「オイラ、別に隠れてなんかいないし〜。」

ふわり

微かな風が吹いて、上から一羽、鳥が私の目の前に飛んできた。

うわぁ……キレイ

それは芸術品のようにキレイな鳥だった。

驚っぱい鳥だけど、尾が60cmくらいあり、頭部にも鬣っぱいの
がついてる。

金・赤・オレンジといった色味の羽が絶妙なグラデーションを作り、キラキラしている。

ルビーに細かい金粒が塗された様な瞳は絶妙な輝きを放っている。

「え…っと、鳥がしゃべった？」

「で？今の木を焦がしたのって何なのさ？」

私の目線の高さに合わせて羽ばたいているキレイな鳥は、再度質問してきた。

「え…あ…その…あれは魔法です…。「風」「水」「重力」の組み合わせ魔法になるのかな…？っていうか、アナタ鳥なのに何で話せるの？どーなってるの？」

「へー、あれ魔法なんだ！異質の新魔法編み出すなんて、アンタすげーじゃん。たまたま、この辺りフラフラしてたら変な魔力の波動感じてさー、いやあ、珍しいモン見れたよ！そーいやアンタ自身も珍しいのナ。髪と目。北と東の色を持つてるなんてさー名前なんていうの？ちなみにオイラはレギってんだ」

オイラ珍しいもん好きなんだよねー、アンタ気に入ったよ、と鳥が話し続ける。

「鳥が…鳥が話してる…鳥が…」

「鳥、鳥って、さっきから何だよ。鳥っていつでもオイラ魔鳥じゃくん。魔物がヘアグ共通語を話すのは当たり前！」

「あつ、魔鳥！アナタ魔物なのね！そっか、なるほどー！」

最初の15日間で魔物のことも勉強済みよ。

たしか、魔物は下級魔、中級魔、上級魔という、動物（魔物）型と人型、2通りの姿をとれるんだっけ。

人型の方が人間や精霊と共同生活するのに便利だから、街に住んでいる魔物はたいてい人型になっているみたい。

人型は魔力の質によって完成度が変わるらしいので、下級魔は人型といっても動物と人間混合な姿になっちゃうけど、上級魔は完全に人間の姿なのだそう。

ちなみに中級魔の上ランクの羊緑族の人型は、体は完全に人間、顔がちよっと羊（魔物型）といったカンジ。

でも、魔鳥と魔竜は崖の窪みとか森の木の上とかを住処にしている種族が多くて、むしろ人型は不便だから滅多にならないとも聞いたなあ。

あれ？でも此処は魔鳥じゃなくて魔獣の地のハズでは？

「ねえ、魔鳥って南の地にいるんじゃないの？ここ、西の地だよ？」

「んー、まあ何ていうかさー、ぶっちゃけ南は飽きた」

飽きたって…それで故郷離れてフラフラしてんのか、この鳥。自由だなー、おい。

「それにアンタだって北か東の出身だろ？なんで西にいるのさ？」

うつ、どうしよう？

この鳥に事情全部話しちゃって大丈夫かな？

不躰にジッと金ルビーの瞳を見つめると、視線をそらすことなく私を見返している。

この鳥から感じられるのは純粋な好奇心だけで、警戒本能は動かなかった。

なんとなくだけど、この鳥なら話しても大丈夫って思ったんだ。

「…話せば長くなるよ?」

呟くように確認をとると、構わないと言うので、私はレギと名乗るキレイな鳥にヘアグに来た経緯を端的に話した。

レギは興味津々といったカンジで私の話を聞いてくれてたけど、一通り話し終わると、金ルビーの目を二カつと細め、ぐふふふ楽しそうに笑った。

「異世界人って、存在が珍し!生き返るワケが恋人探しだなんてさゝ!やっぱアンタいいな。で、名前は?オイラはさつき名乗ったのにアンタの名前聞いてない」

「あ、そうだよ、ごめん。私は…(百合奈っていつでも聞き間違えられちゃうんだろな)…ユリーナよ。よろしくね」

「ユリーナか!よろしくな…。あのさ、ユリーナが嘘つきじゃないつてのは承知でさ、聞きたいんだけど…」

「なあに?遠慮なんていらないよ」

「ん…ギルガをやったのが、ちょっと信じらんないっていうか、オイラも一度ギルガと接触したことあるんだけど、すげ〜デカくて強い怪物だったからさ、人間のオンナ一人が落ちてきた衝撃くらいで、やられるかな〜って思ってたさ。」

「確かに、とっても大きな黒鳥だったよ。私が落ちた所って、背中の真ん中、羽の付け根っていうか、人間でいうところの肩甲骨あたりになるのかな?そこに膝から突っ込んだの。そしたら一瞬ピタッと止まって地面にまつ逆さまよ〜。よく考えたら、レギの言う通りよね、あんなに大きな鳥が私ごときの体重で落ちるかなあ、不思議」

「…なるほど。」

「何が、なるほど、なの?」

「ユリーナが落ちた所、急所だよ。」

「……え?」

「だから、急所。いかにギルガといえど、急所やられたらイチコロだったんだな。」

「……そうだったんだ。すごい偶然……」

もしかしたら『監視者』が意図的に私をギルガの上に落としたのかも……なんて一瞬思っただけ、起きた事を考えてみても結果は変わらないから、色々推測するのはやめよう。

「なー、なー、ユリーナさあ、恋人探してんだろ？ オイラなつてやろうか？」

唐突すぎる申し出に、目が点状態の私。

「はああ？！何言ってるの？ レギは鳥じゃん！ 私、恋人は人間がいー！」

「鳥っていうなよ、魔鳥だよ。でも人間が良いのかよ、オイラずっと人型でいるの苦手なんだからな。残念だな。あ、そうだ、代わりに召還の契約してやろうか？ 上級魔は滅多に人間と契約しないんだけど、ユリーナのこと気に入ったから特別な」

「え？！レギって上級魔なの？ って召還の契約？」

「おうよ、オイラ高等な上級魔じゃーん。魔鳥の中じゃ朱焰族って強いんだぜ！ 人間に召還の契約してやるなんて、ありえないんだぜくぐふふふ」

いきなり恋人立候補されたり、召還契約してくれるとか言われたり、ワケワカラン

「あのさ、イマイチよく分かってないんだけど……召還ってさ、私の都合で勝手にレギを呼びつけて私の役に立ってもらってことですよ？」

「勝手に呼びつけてって…ユリーナってホント珍しいな。召還をそんな風に考えるヤツいないぜ？でもまあ、そーゆーことかな」
「じゃあ、契約はしない」

私はあつさり、レギの申し出を断った。

レギは鳩が豆鉄砲くらったような表情で（鳩じゃなくて魔鳥だが）私を見ると

「信じらんねー！上級魔の召還契約を断る人間なんているのかよー！っ？！」

って、叫んだ。

「ここにいるじゃん。もうっ。私はね、自分の身勝手にレギを振り回したくないの。召還ってのは好きじゃない」

するとレギは益々楽しそうに目を細めて、クルクルと空中で回転した。

器用ですね、レギさん。

「ぐふふふっ。召還は好きじゃないってか。益々気に入ったよ。ユリーナさあ、そのうちギルドに登録して恋人探しすんだろ？オイラも付いて行ってやるよ。ユリーナといると楽しそうだし。」

「え、ホント？それは嬉しい！レギ、お友達になってくれるの？」

「オトモダチ？友達って…規格外発言。ユリーナってマジ異世界人なんだな。発想が違うよ。」

規格外…人間と魔物が友達なのはイレギュラーなのかな？

でも仲良く共存している間柄なんだから、友達って発想は別にヘンじゃないと思うよ？

「お友達は駄目なの？」

駄目なんて言わないで欲しいな。

初対面なのに話しやすく、見た目も芸術品なレギ。

メルーロさんやミリーも親しくしてくれるけど、レギとは気さくに接することができるんだ。

仲良くしようよという思いを込めてジッと金ルビーの瞳を見る。

少しの間、見詰め合っていたけど、フツとレギが笑った。

「いいよ。構わない。友達になってやるよ」

やったあ！嬉しい！

このキレイな鳥さんと私は友達！

「きゃあ、やったあ、ありがとうレギ」

この世界で初めて友達ができた喜びでピョンピョン飛び跳ねたら、レギにヤレヤレってカンジで生暖かく見られちゃったよ。

雷の魔法が成功して、友達まで出来て、ルンルン気分な私なのでした。

第7話　雷を発生させたらキラキラの鳥さんが来ました（後書き）

主人公の特殊魔法を作りたくて、こうなりました。

なかなかカッコイイものがいふかばず…

結局は雷ってことになってしまいました。

ちなみにレギは主人公の親友役であって、恋人ではないです。

早く相手役を登場させてラブラブさせたいっ

第8話　旅立つことが決まりました

「全くユリーナ様には驚かされることばかりです」

主光と副光がもうじき重なるって頃、お迎えに来てくれたメルローさんはレギを見るなり硬直。

お友達になったのとレギを紹介したら、いつも穏やかで冷静な羊緑族随一の魔戦士メルローさんがオタオタしたもんだから、思わず笑っちゃった。

「しかし…南の金魔と友達とは…前代未聞ですよ…」

まだ驚きから冷め切っていないといった様子のメルローさんが、そんなことを呟いた。

「あれ？ええと、確か金魔と銀魔っていうのは、魔物の中でもトップクラスで…2強魔っていわれているんですよ？」

「そうですね。ユリーナ様は物覚えが良いですね」

「え？でもレギは朱焰族ってう魔鳥ですよ？金魔って種族ではないのでは？」

キョトンとして尋ねると、何故かメルローさんは困った顔をした。レギは大爆笑してやがる。

なんだよう、一体。

「私の説明不足でしたか…。あのですね、金銀魔というのは体に金や銀の色を持っている魔物のことでして、種族名ではないんです。

朱焰族は金魔なんです」

マージで……?!

「ええええ?! レギって最強魔鳥なの?! そんな凄い魔物がどうして私と召還契約してくれようとしたの?!」

「ん? ユリーナを気に入ったからじゃ〜ん。とりあえずオモシロそうだから繋がったのかなって」

「……あ、そう。そりゃドーモ」

あははは、と乾いた笑いの私。

引きつった笑いのメルローさん。

ぐふふ〜と楽しそうなレギ。

「と、とりあえず正光時ですし、ミリーが昼食をご用意してますのでシプグールに戻りましょう。レギ殿はいかがされますか?」

「ん〜、そっちが問題なければ同行しても良い〜? 他種族の街もオモシロそう〜」

問題ないようなので、レギも一緒に来てくれることになった。

レギって価値基準が『珍しい』とか『面白い』で出来ているんだね
…あはは…

族長さんの館に戻ると、とりあえず族長さんやミリーにレギを紹介した。

上級魔（しかも南の地最強の金魔）が自分達の街に来ること自体珍しいのに、私の友達だといわれて流石の族長さんの驚きを隠せていなかった。

ミリーに至ってはオドオドビクビクして落ちつかない様子だったけ

ど、レギは気にした様子もなく普通にしていたから、ミリーも段々といつもの調子に戻ってくれたよ。変に緊張されても困っちゃうし、戻ってくれて良かった。

ヘアグ生活40日目

初めてここに来た日は火の黒月4日だったので、今日から土の季節に入る。

2つの太陽がまだ地平線から姿を見せない夜明け前、私は自主トレのためシプグリールから少し離れた場所に薙刀を持って立っていた。

8日前にようやく薙刀が完成したんだよね。手渡された時はかなり嬉しかったよ。

手に馴染ませるため、その日は一日中薙刀振るっちゃったんだよね。

「気持ち良い朝だね、すがすがしいな。空気が新鮮！」

「……昨日もそう言ってたよ、ユリーナ」

「いいじゃない、朝が気持ちいいと良いことありそう！」

「それも昨日言ってたし」

「もー、レギったら、いちいちツッコまないでよ」

「へいへい、そろそろやらないと主光が昇りきっちゃうよ」

「むむう」

レギを軽く睨むと、出来上がったばかりの薙刀を構えた。

体に、薙刀に、風の魔力を込めて意識を集中させる。

「じゃ、やるよ」

レギが特殊能力で10cmほどの石ころ10個を放り投げると同時

に薙刀を振るう。

スパッ、スパッ、スパッ、スパッ、スパッ、スパッ、スカッ、スカッ、スカッ

………ポトッ…ポトッ

あちゃー、2個はずした。ちえ。

でも、切った石は殆ど真つ二つ。風の魔力で速さと刃物の威力を高めてるとはいえ、なかなか腕前じゃない？

「もうちょつとレギが高く放ってくれたら全部切れたかもなのにい」「そんなことしたら意味ないだろ」。これはユリーナの素早さと、敵を的確に捕える力を上げるためにやってんだから」

「そうだけど…じゃあ、もうちょつと魔力こめちゃおっかな」

「それも駄目。一日中使ってもバテない程度の魔力じゃなきゃ」

「ううう…正論言いやがってー！クヤシイよう」

「んじゃ、もう一回ね。今度は石の数、減らそうか？」

「ヤダ！10個、制覇してやる！」

「はいよ」

そうして、私は今朝もレギと楽しく(?)朝練に励んだ。

ヘアグ生活42日目

「ユリーナ、他者を屠ったことはある？」

レギがサラッと、ゴハンまだ？みたいな軽い口調で聞いてきた。

質問の意味が解らなくて、どーゆーこと？みたいな顔でレギを見ると、いつもよりも真面目な顔をしている。

「だから、ユリーナは殺ったことあるか？って聞いたんだよ。本気で自分の命を奪おうとしてる敵を仕留めたこと、ある？」

質問の意味を理解した途端、体が強張った。

そう、そうなのだ。この世界は命と命の奪い合いが日常的にある世界なんだ。

ましてや私は冒険者を目指すんだから、命のやりとりが当たり前になるかもしれないんだ。

「……な、い。無いよ。私の生まれた国は平和だったから……」

「だろうな」。ユリーナ見てるとわかるよ。でもさ、襲われたらやり返さなきゃ自分がやられるってのは解るだろ？…初めて屠った時って人間はさ、いや、魔物も精霊だって、平素じゃいられない。気が落ちたり乱れたりする。」

私はいつになく真剣に言うレギの言葉に、あの殺気を思い出した。

- - ギルガの目 - -

未だに思い出すだけで身震いがする。恐怖にのまれそうになる。

私は思わず、自分で自分を抱きしめるように腕を押さえた。

「ユリーナ？」

レギが気遣うように呼んでくれる。

「あ、…ごめんね。ちょっと、思い出しちゃっただけなの…」

「思い出すって？」

「ギルガの目。あの時ね、私、殺気だけでホントに死んじゃうかと思っただ…」

「え？ギルガは気絶してたんじゃないかって？」

レギが金ルビーの目をパチクリさせる。

「うん…地面に落ちて…あの時はギルガが怪物だなんて知らなかったから、私のせいで死んじやったらどうしようって思ってた…背から降りて頭の方にまわったら、薄っすら目を開けて…怖かった…そんなに凄まじい殺気、二度と味わいたくない…」

ボソボソと話していると、レギが近くまで飛んできて私の肩にとまった。不思議と重みを感じないし、爪も痛くない。

「なーんだ、心配してソンしたじゃん、オイラ」

「へ？」

「ギルガの殺気の中てられても気絶しなかった精神力ってことだろ？大丈夫だな、ユリーナは」

「は？」

「実戦になっても平気そうだな。良かったよ。んじゃ、ユリーナも大分強くなったし、ボチボチ行こうぜ」

「え？」

「ギルドに登録すんだろ？シプグリームにはギルドは無いらしいからさ。ギルドがある街は、ここからだとなーエンが一番近いんだってさ。あそこは大都市だし。とりあえずなーエンに行こうぜ」

「え、うん」

なんだかレギに流されるように、旅立ちを決めてしまったよ。

まあいつか。いつまでも羊緑族の所にいても未来の恋人には会えないだろうしネ。

それに大都市なら、もしかして素敵な出会いがあるかも…うふ

立ち直りの早い私は、目標達成の希望に胸をふくらませたのです。

第9話　旅立ちにむけてお買物に行きました（前書き）

少しシモ話が出てきます

第9話　旅立ちにむけてお買物に行きました

その日の夜、族長さんに時間をとってもらい、そろそろヌーエンへ行つて冒険者になろうと思っていると告げた。

「うむ。あいわかった。できればこのままシプグリールに居てもらいたいものじゃが…引き止めるわけにもいかんしの。ユリーナ殿がもたしらしてくれたものは貴重な財産になる。感謝しておるぞ」

「いえ、こちらこそ本当にお世話になりました。少しでもお役にたてたなら光栄です」

私が教えたものつていうのは

- ・ 薙刀という武器の形状
- ・ ファスナーの形状（パーカーについていたファスナーを族長さんの前で開け閉めしただけなんだけどネ）
- ・ 蒸す、揚げるといふ調理法（こちらは焼く、炒める、煮るつてのが主な調理法みたい）
- ・ 蒸し料理、揚げ料理の作り方（プリンや茶碗蒸し、天ぷらやポテチ等。大好評でした）
- ・ 新たな創作調味料（マヨネーズもどきやケチャップもどき。こちらも大好評）

これくらいなんだけど、いずれも画期的らしく、上手く商売にすれば莫大な財産になりそうだといふので族長さんにとっても感謝されたの。

私が教えたことを商売にして世に広めてもらったなら、少しでもヘアグの活性化に貢献できたってことになりそうだし、この世界に来

た意味があるよ。

いつもの客間に戻りレギと雑談していたらミリーが来た。

「ユリーナ様あ…シプグリールをお発ちになるってホントですかあ…？」

そんな泣きそうな顔して言わないでえっつ
ここはとっても良いところだけど、働きたいし、恋人みつけたいの
ようっ

「…うん。近々ヌーエンに行くつもりなの。ミリーには本当にお世話になったわ。ありがとう」

「うっつ。ユリーナ様あ…」

ミリーは悲しい顔をして俯いたが、すぐに顔をあげてくれた。

「ユリーナ様には目標がおりになるのですものお…いずれ行かれるとわかってましたしい…承知いたしましたあ。旅に必要な物もご用意するんですね？街に買いにいかれるならご案内いたしますう」

ミリーの申し出をありがたく受けて、次の日はお買物に行くことになったのでした。

シプグリールの市場はかなり広く、羊緑族が経済的に豊かであると伺い知れるわ。

魔物としては中級でも、商売人（商売魔？）としては上級だよね。人間顔負けの商才があります。

独自の羊毛品や革製品や食料加工品などを、西の地に限らずヘアグ

中に輸出してるらしく、羊緑族はお金持ちが多いみたい。
だから大金貨1000枚も出せるんだね
族長の館もやたらと豪華だしさ。

市場は広くって、魔物と思しき方や人間がいっぱいいるよ
気をつけないと迷子になりそう。

レギは私の肩にとまったまま、キョロキョロと物見遊山。

ミリーが始めに案内してくれたのは、布用品全般を扱うお店。
服や下着、帽子に靴下といったものから布団まで、たくさんの商品
がある。

羊緑族さんからも何着か服や下着は貰ったけど、やっぱり自分で買
いたいよね。

服や下着、タオルっぽい綿の布も大中小サイズ数枚買い、皮と布と
綿でできた寝袋っぽいものも購入。

あと、忘れちゃいけないのが「吸引布」

これは、ヘアグでオムツ代わりとかに使われていて、下着に挟んで
使う物。

ヘアグに来て初めて月イチのものがきた時にミリーに相談したら、
この布を渡され説明してくれた。

この布の吸収力は抜群で、一番多い二日目の夜も全く洩れてなくて
軽く感動したのよ。

「吸引布」は無くなると困っちゃうので大量に買い込んだじゃあつと。

そういえばヘアグにはトイレットペーパーが無いんだよね。

用を足し終わった後はウォシュレットみたいに水で洗って瞬間乾燥
ってカンジ。

排泄物もそのまま洗った水と共に気化されちゃう。

便器に「水」の魔法が込められているからしいけど、詳しい仕組
みはよくわからない。

旅をしている間の排泄後処理は自分の「水」魔法で片付けようっと。

なんだかんだで布用品だけでも結構な荷物になったので、人通りが
少ない路地に行き、空間魔法で亜空間を出して買ったものをポンポ
ン放り投げる。

手ぶらで買い物、手ぶらで旅ができるステキ魔法「空間魔法・亜空
間道具袋」

しかもこの「亜空間道具袋」、亜空間内は時が流れてないから仮に
生肉入れても腐らないし、収納量も無限大。取り出すときは、亜空
間から出したい物をイメージするだけ。

なんて素晴らしいんだ！使えて良かった、空間魔法。

お次は雑貨屋さんっぽいお店。

ここでは食器類や簡単な調理道具を買う。

その後は小物類。

火付け棒（発火魔力がこめられてる10cmくらいの棒）、温石（
水に入れるとお湯になる石）、身体洗浄液（例の、これ1本で4役
こなす万能液）、口内洗浄液に衣類洗浄液や食器洗浄液などの洗浄
液類を数種類とミニ光源石などを購入。

火付け棒を買うときにレギが「オイラと一緒に火に困ることなんて
ないのに〜」ってボソッと呟いたけど、備えあれば憂いなしってい
うしさ。

あと、傷を治す液とか解毒液とか体力回復液とかをしこたま買い込
む。

魔法でも治癒できるんだけど、やっぱり備えあれば憂いなしだね。

地図も売っていたのでもちろん買ったのだが、西の地とその周辺の
ものしかなかった。

まあ、他の地の地図は当面いらないか。

小物道具屋の隣は魔道具屋だったので興味本位で立ち寄ってみたけど、何をどう使うのかとか、どのような効果があるのかとかよく分からなかったので、とりあえずレギが薦めてくれた魔力増幅ブレスレットを買い、早速身に着けてる。

武器屋ではナイフを数本と、小型の剣も購入。

もちろん戦闘用ではなくて、木の枝を切ったり食事の支度の時に使うの。

防具屋にも寄ったけど、鎧や楯とかは重くて適いません…

なんかないかな〜と物色していると、なかなか可愛いデザインのブーツがあつたので手に取ると、重みを感じないくらい軽かった。

そのブーツは防御力もそこそこあるけど、装着者の素早さがグンっと上がるのだとか。

『監視者』に心身強化してもらっているとはいえ、女性である私はどうしてもパワーや頑丈さに欠けちゃう。打撃に弱く非力な私にとって、素早さはかなり大事。

先制攻撃と見かわしの速さ、逃げ足の速さは私の命綱！大事スキル「素早さ」

それがグンッとあがるなんて、そりゃ〜お買い上げ決定ですよ。

大金貨5枚もするけど、今の私は大金持ち！ためらうことなく即買いよ！

防具屋のおじちゃんも、まさかホントに私が買うと思ってなかったらしく、カウンターに大金貨をチャリリンと置くと、すごい驚いた顔したよ。

でもそのあと凄い笑顔になり

「いや、ウチの最高値商品購入者が嬢ちゃんのように可愛い女の子だなんてね。でも嬢ちゃん金魔連れてるくらいだから相当強いんだろ？強い人に使ってもらえればワシも嬉しいよ。そっだ、こいつはオマケだ。」

オマケだと言って渡されたのは、指貫の皮グローブと青紫のグローブだった。

「嬢ちゃんの手、マメが出来てる。なにかしらの武器を扱ってるんだろ？このグローブは薄手の割には丈夫だから邪魔にはならんよ。んで、このグローブは数年前、入り用があるから金に代えてくれといわれて買取った物なんだ。イイ品なんだが、なかなか買い手がつかなくてな。自分や知り合いが使うには小さいし、かと言ってそのままにしておくのも勿体ねえ。丈や幅も嬢ちゃんにぴったりだし、もっててくれ」

わ、ありがとうございます！とお礼を言い、私は喜んでオマケを頂戴した。（大金貨5枚の大物買いしたし、遠慮なんかしない）グローブもローブも役に立つものだし、ラッキー

「よかったですねえ、ユリーナ様あ。そのグローブ、綺麗なお色でユリーナ様によくお似合いですう」

ミリーがニコニコで褒めてくれた。

最後に、食料品や調味料などを売っているエリアに行く。

実は族長さんの館の厨房で蒸し料理や揚げ料理を伝授する傍らで西の地の料理や調味料も教えてもらっていたの。

食材や調味料の味はだいたい把握してるから、迷わずどんどん購入する。

「亜空間道具袋」にしまうので、果物とか野菜もいっぱい買っちゃった。

買い物から戻ると、メルローさんが待っていてくれた。

「まもなくヌーエンへ発たれるとか。転移目印さえあれば魔法で送るのですが、お役に立てず、申し訳ない」

「申し訳ないだなんて、とんでもない！充分すぎるほど良くしてもらってます！」

私は慌ててブンブンと横に首を振った。

初めて行く場所に転移するには目印がなければ出来ないと知ったのは、ヘアグにきてから22日目、魔法修行をしている時のこと。

メルローさんはギルガの羽を持っていたのでギルガの所に転移できたし、収容所にもギルガの羽が保管されていたので、送ることが出来たのだそうだ。

一応、メルローさんには私の髪の毛を渡してある。

代わりに私はメルローさん自作の転移紙を貰った。これに伝えたいことを書いて、魔力を込めればメルローさんのもとに転移されるという郵便屋さん真っ青な紙らしい。

こんなもの作っちゃうなんて、メルローさんて強いだけじゃなくて頭もいいのね。

そして旅立ち前日の夜

亜空間にしまっているものを全部出し、買い忘れが無いかをチェック。

一通り確認が済み、荷物を元に戻そうとして、気付く。

ジーンズのポケットに右ころ入れっぱなしだった。
まあ、いっか。入れっぱなしでも。

私はたいして気にせず、そのままジーンズも亜空間に入れ、しっか
りと睡眠をとるべくベットにもぐりこんだのでした。

第9話　旅立ちにむけてお買物に行きました　（後書き）

お買物の様子を考えるのは楽しいです。
ショッピングしたいっ

第10話、初めての戦闘、初めての野宿をしました（前書き）

軽い戦闘描写があります。

第10話　初めての戦闘、初めての野宿をしました

「お世話になりました。ありがとうございました」

シプグリールの北門まで見送りにきてくれたメルーロさんやミリー、数人の羊緑族さん達に今までの感謝をこめて頭を下げた。

「いえ、滅相もない。こちらこそユリーナ様には大変感謝しております。また、いつでもお越しく下さい」

昨日改めて族長さんに旅立ちの挨拶をした時も「いつでも来ると良い、歓迎するぞ」と言ってくれたつけ。ありがたいな。

「ユリーナさまあ、いつてしまわれるのですねえ…あたし寂しいですがあ、旅のご無事をお祈りしてますう…うううう」

「ミリーったら、そんな涙ぐまないでよ。そのうちまた寄らせてもらうよ」

「絶対、絶対いらしてくださいねえ！」

「うん、また来るね。じゃあ、そろそろ行こうか、レギ」

少し離れた木の枝にとまっていたレギが近くに飛んできて私の肩にとまった。

もう一度お礼を述べ、一步踏み出す。

「お元気でー！」

「また来てくださいー！」

「ご無事をお祈りしますー！」

そんな心温まる羊緑族さん達の言葉を背に、ヌーエンを目指し進み始めたのでした。

シブグリアルからヌーエンまでは、結構遠いらしい。

途中でいくつか人間や魔獣の集落があるものの、歩くとなんと20日はかかるというので、馬を借りたのだ。

馬は乗れないと困りそうだったから、羊緑族の方に馬具の装着方法から乗り方、手綱の取り方なども教えてもらい、今では一人で乗りこなせるようになっているの。

今までの私だったら短期間で乗馬なんてできなかったと思うけど、運動神経が格段によくなったうえに、お馬さんとも何となくコミュニケーションがとれたので、なんとか乗りこなせるようになったのよ。

これもきつと心身強化と意思疎通能力のおかげよね。

ヘアグにおいての主な移動手段は馬か馬車、自分の足になるんですよ…

機械の類はあんまり無く、飛行機や列車、車なんて当然あるわけない。

魔法がある世界なんだから、もっと楽で便利で速度のある乗り物があってもよさそうなのにな。

さて、ヌーエンまでは特に急いでるわけでもないし、初めての旅なので時間をかけて行きましようか。

シプグリールを出発して2時間弱、早々と怪物サンのお出ましです。

えーっと、この怪物、なんと例えたらいいんでしょうか…

頭部が虫系、体は獣系。昆虫獣とでもいったら良いんでしょうか？
初めての敵はスラムとかの小柄で可愛げのあるヤツが主流じゃないの？

なんでこんなヘンな姿の、しかも結構強そうな怪物が初の敵なのだ？

が、しかーし！悠長に疑問を感じてる暇は無いつぱーいつ

姿は珍妙でも、こちらに向けてくる気配は明らかに危険っ
殺つたるでーっと言わんばかりに目をギラつかせてくるよーっ

チラッとレギを見ると、我関せずと言わんばかりに近くの木にとまって傍観してやがる。ちょいムカ。

オイラが手を出すまでも無いじゃーんって視線を寄越されたよ…

あー、そうですか、そうですか！わかりましたよ！！

怪物に情けは無用。うかうかしてれば自分がやられる。

怪物の位置とヤツラがこちらに向かつてくる速さを見極め、自分自身と薙刀に風の魔法を込めて攻撃。

ブーッと魔法で素早さを上げた私は、超スピードで怪物に近づくとヤツラに身構える隙を与える前に薙刀を振るった。

勝負は一瞬

朝練の石のように5匹を一刀両断！

見掛け倒し？と疑いたくなるほど、あっさりと昆虫獣は倒れた。

ふう、なんだかあっけなく勝ったな…なんだか拍子抜け。
でも…気持ちは落ち着いてるつもりでも…何故だろう、薙刀の柄を
握る手は小刻みに震えてしまう。

深く息をつくとしげが戻ってきて、ぐふふふと笑う。

「やるじゃんユリーナ。オイラが特訓しただけあるね。グルボガ
5匹を瞬殺！ん？どうかした？元氣ないじゃん」

「あ…あの昆虫獣、グルボガっていうんだ…。なんだか…た
とえ怪物でも…ちよつと、ね…戦いは早く終わらせたいから…す
ぐ倒せて良かったっていえば良かったのかもしれないけど…」
「けど？」

目を閉じ、また深く息を吸って吐いた後。

「命を狙われるってこと、実際に自分が手をくだすってことを、理
屈じゃなくて体で理解したよ」

そう言い切った。

笑うように細められてた金ルビーの目が、真剣さを湛えてジッと私
を見据え、それから視線を私の手に向けてきた。

皮グローブを装着した手はまだ少し震えているけど先程よりは落ち
着いてる。

再度、深く息を吸って、ゆっくりと吐く。

薙刀を握り締めている手の震えは、もう無い。

しげはまた、ぐふふふと笑い、空中で3回転してから、そろそろ
行こうと促してきたので「うん」と頷き、薙刀の刃を専用の布で拭

って亜空間にしまうと、気を取り直すように頭を軽く振って馬に乗り再び進みだしたのでした。

小娘一人に驚っぱい鳥（金魔だが）だけのせいなのかなんなのか。初エンカウントのグルボガを皮切りに10分おきくらいの割合で怪物がご登場。

なんなの？この遭遇率！

レギは、アドバイスやサポートに徹すると決めているのか、怪物のほとんどを私が倒しているんだよっ

朝練もそうだったけど、結構スパルタだね、レギさん。

この調子でいけば、ヌーエンに到着するまでには一端の魔戦士になつてるんじゃないか？

…それはそれで良いけどさあ。

やたらと怪物が多いせいで、正光になる頃には実戦にためらいがなくなつてきちゃったよ。

だんだんと感覚がヘアグに馴染んできてるのかも。

ぼちぼちお腹もすいたし食事も兼ねて休憩をとろってことで、適当な木陰に座り亜空間から食材や調理道具なんかをとりだしゴハンの準備。

本日のランチはパンに燻製肉と葉物野菜を挟んだものに、羊緑族の方に教えてもらった根菜のスープ、それと果物。

レギは野菜を食べないっていうから、食べやすいように細かく切った燻製肉と、好物だというグクコの実（カシユーナッツっぽい実）を用意してあげた。お馬さんは適当に草を食んでいる。

「は、青空の下で食べるゴハンは美味しいね」。このスープ、初

挑戦だけど我ながら上出来」

「オイラもグクコの実はゆっくり味わいたいからなく、怪物に邪魔されないように結界はところごと」

レギの目の輝きが増したと同時に、私達の半径3mを取り囲むように陽炎が出来た。

「もしかして、あの陽炎が結界なの？すごいレギ、さすが最上級魔！でも結界はれるんなら、私達あんなに怪物に会わずに済んだんじゃないの？」

「結界ならユリーナだって出来ると思うよ？オイラは火の力を使ってるけどさ、ユリーナは風か水の力でいけるんじゃない？ただ、移動しながらの結界ってのは難しいし、結界に頼りすぎるのは良くないから常時使用はあんまり勧めない」

「……了解。ただね、思ったより怪物が多いからさ、もう少し会わずにすむ方法ないかな」

「ん、確かに最近へアグ全土で怪物が多くなったみたいけど、さつき上空からこの周辺見たけどこの先は拓けた場所だったし、そんなに怪物もいないんじゃないかな」

「そっか、ちよつと安心」

食事が終わると、洗浄液と水の魔法でチャチャツと食器や調理器具を洗ってから水分蒸発させて亜空間に戻す。

水魔法のおかげで食器洗浄器なんてメじゃないよってなスピードで洗いが片付いちゃう。使えて良かった、水の魔法。

そして、早速結界の練習。

水幕が自分の周りを覆い、外界シャットアウトなイメージをしながら水の魔力を手に込めると、半径3m、高さ3mくらいのドーム上の水幕ができた。

よっし！どうやら成功のようだわ！やったねv

その後はレギの言ったとおり怪物にもそんなに会わずに済んだので、割と順調に先へと進むことができた。

そんなこんなで段々と日が暮れてきたから、暗くなるまえに野宿できる場所を見つけて準備しなくちゃ〜と思っていたんだけど、レギがあっさり見つけてくれたの。

レギと一緒に来てくれて本当に良かったよ。

夕食を済ませた後、サッパリしようと亜空間から取り出したのはバケツサイズの桶を2個に身体洗浄液と温石。

昼間に習得したばかりの結界を半径1mくらいの範囲に施して（外からは結果内が見えないので、のぞき防止も兼ねて。のぞくヤツなんかいなくてツつこまないで！乙女心を察してクダサイ）マッパになると、魔法で二つの桶に水をはって温石をポポイ。

桶の一つに洗浄液をポタポタと数滴垂らしたら、洗浄液入り湯の出来上がり。

手をつけて、全身を洗うイメージをして魔力をこめてみる。いいカンジです！

髪の毛一本一本から足の指の間まで洗浄液湯が巡ってるわ〜

その後、洗浄液を入れてない桶の中に手を入れて、お湯でキレイに流すイメージをしながら魔力をこめて洗浄液湯を洗い流す。スツキリです。

濡れた髪や体、使った桶も魔法で水分蒸発させて乾かす。サッパリです。

水の魔法ってホント便利だな〜。シャワーもどきが3分で終了だよ！今日着ていた服も同じ要領で洗濯・乾燥してから桶と共に亜空間に仕舞い、新しい服をだして着替えてから結界解除。

野宿なのに体や服を洗えるなんて、魔法と小道具に感謝だね。

寝袋を出して就寝準備をしていると、辺りの様子を見に行っていたレギが戻ってきた。（ちなみにレギは鳥なのに夜目が利くらしい。さっすが金魔だね）

「この辺りは比較的怪物は少ないみたいだけど、それでも油断しない方がいいよ。夜は人間の盗賊も出るって言っし。寝ている間結界といった方が良いかな。オイラ張ってやろうか？」

「ホント？お願いするわ。ありがとレギ」

「そのかわり明日もグクコの実ちょーだい」

交換条件かいつ。

でもグクコの実（1房に10粒くらいついてて大銅貨1枚）で、身の安全が得られるならお安いもんです。その条件、のみましよう。

レギが結界を張ってくれたところで、亜空間から地図と光源石を取り出す。

今のだいたいの位置を確認すると、今日くらいのペースで進んでも10日あればヌーエンに着けそう。

ふあああ、と欠伸をしながら寝袋に潜り、レギにおやすみと言うと野宿の緊張感もなんのその、瞬く間に眠りについたのです。

第11話 初めて訪れた村は閑散としていました

ヘアグに来てから47日が経過しました。いまだヌーエンに向けて旅を続けております。

そして、ワタクシ早くも野宿にヘコたれそうです…あうう

魔法も使えず道具もロクにない旅人さんに比べたら、かなり恵まれた旅してるってのは分かるよ？

でもね、アウトドア好きなわけでもない日本の一般人だった私には連日の野宿はキビシーの。怪物との戦闘や馬での移動で蓄積された疲れがね、なかなかとれなくてさ…。

心身強化されてなかったら、挫折してたかもしれない。

さてさて。

この日も夜明け前に起床して、体を慣らすためにレギと軽く朝練をしたらササッと朝食をとって出発です。

ここ数日は、遭遇した怪物を倒しつつ休憩や食事をとって先へと進み、少し薄暗くなってきた頃に野宿の準備をして就寝、の繰り返し。いつものように野宿の準備をして夕食の仕度をしていると、レギの好物グクコの実が無いことに気づいた。

「あれ？ユリーナ、今夜はグクコの実ないの？」

そう言って私が用意した夕食を見るレギ。

「そうなの、まだあるかと思ったけど昼ので最後だったみたい。適

当に亜空間に入れてたから大体の量しか把握してなくってさ。ゴメンゴメン。もっと買ってあげれば良かったなあ」

今夜のゴハンはお肉と根菜をシチューっぽく煮込んだもの（レギも食べやすいように具は小さめに切っております）と、葉物野菜のサラダ。あとはマンゴスチンみたいな果物とパン。

レギにはシチューもどきとグクコの実を用意するつもりだったんだけど、ま、しょーがないか。シチューだけで我慢してネ。

就寝前に地図を確認すると、どうやらコルエンという人間の村にだいぶ近づいているようで、ここからだとも明日中に着けそう。よし、明日はコルエンでお泊りしよう。

「レギ、明日コルエンって村に着くから寄ろうよ。そこでグクコの実を買ってあげるね」

「お、約束だからな。良かったくぐふつ」

シプグリールの市場でこの世界の人間は見たけど、人間の村というのは始めてだ。

どんなところなのかなとワクワクしながら就寝したのでした。

次の日も夜明け前に起床、準備をして出発です。

朝の清しい空気を感じながら馬を走らせるって気分爽快！

私の速度に合わせて少し前を飛んでいるレギも、朝日に照らされてキラキラ度が増しているよ。輝いています、レギさん。

爽やかな朝を堪能しつつ進むこと1時間、前方に怪物の気配がして手綱を引こうとしたら、レギに目で止められた。

ん？倒さなくていいの？無視しようとしても、怪物って追いかけてくるんでしょ？

アレ？ってな視線を向ける私にレギはチラッとこちらを見た後、飛行速度をあげて怪物へと向かっていった。と思ったら、なんの躊躇いもなく

ぼおおおおおお

火炎を吐いた。

でっかいバツタみたいな怪物3匹は黒焦げ、墨になっていた…すげえ…

レギは何事もなかったかのように私の近くに帰ってくると

「こんな雑魚に時間とらずに、さっさとコルエン行こー」

すぐに先へと飛び始めた。

あゝ、これは、あれだね。早くコルエンでグクコの実を買って欲しいんだね。

どんだけ好きなんですか、グクコの実。

そりゃレギが戦ってくれたら私はかなり楽だけど…グクコの実を買わないと怒るだろうな…あはは…はあ…

その後も襲ってきた怪物はレギが倒してくれたので、コルエンの村には正光になる頃に到着しちゃったよ。

村に入る前に適当な木に馬をつなげ、亜空間から飼い葉と馬用の桶

を取り出して水を満たし「ここで待っててね」と声をかけてから、ワクワクしながら村へと入っていったのでした。

が。

ワクワクという気持ちはコルエンの村に入って5歩で消滅。5分じやないよ、5歩だよ！

つまり、入ってすぐガツカリしちゃったってこと。

だって、真昼間だというのに活気どころか人通りすら無い。

いくら昼食時だからって…人っ子一人いない…寂しいよう…

人が生活してる雰囲気はあるからゴーストタウンってわけじゃなさそうだけど、これじゃ宿を探すのも難しそう…グクコの実なんて論外だね、こりゃ。

「ねえレギ、この村なんかおかしいよね？」

「そうだなあ、オイラもこの村は初めて来たけど、この雰囲気は不気味だ。でも怪物の気配はしないしなあ…」

この調子じゃ、今夜も野宿になっちゃうのかなあ…せつかく村に來たんだから屋根のあるところで寝たかったんだけどな。

鬱々たる気分で歩いていると、前方に大きな屋敷があったので近づいてみる。

すると、門扉の内側で中年のおばちゃんが庭掃除しているのが見えるではないか！

やったー！第一村人発見！

「こんにちはー！」

大きな声で元気よく挨拶をすると、そのおばちゃんはビックリ顔

「あれまー、予定より大分早いご到着ですねえ、村長はお屋敷の中

にありますので、ささ、どうぞ中へ中へ」

いそいそと門扉を開けてくれる。

ん？「予定より大分早い」って？？

確かに予想してたより早くこの村に到着したけど、この初対面のおばちゃんには関係ないことよね？しかも村長って、誰？

頭の中は？？？って感じだったけど、とりあえず、おばちゃんに促されるままお屋敷へと足を進め、案内されるがまま部屋へと入り、勧められるがままソファに座った。

この状況は一体なに？

チラッとレギを見ると平然としているし。特に危険はなさそうだから、まあ、いつか。

程なくして、村長と思しき中年の男性がお部屋に入ってきた。

私はソファから立ち「初めまして」と挨拶をすると、中年の男性は笑顔で「どうぞお掛けください」と言ってくれた。

「初めまして。私はコルエンの村長でズアラットと申します。」

「あ、私はユリーナです。こちらは友達のレギです。」

村長さんは私の膝に乗っているレギを驚いた表情で見て「……友達……魔鳥と人間が……友達？」とブツブツ言っていたが、気を取り直すように頭を振るい、私に視線を戻した。

「早速ですが、貴女様をお願いしたいことは、裏山に棲みついている怪物を退治してもらうことです。すでにギルドの依頼書で詳細はお

わかりでしょうが、改めて私から説明させていただく「待ってください！」

大慌てで村長さんの話を遮る私。

人の話は最後まで聞くのが礼儀だろうが、この場合は仕方ない！

「裏山の怪物とか、ギルドの依頼書とか、はつきり言って何のことか分かりません。私はただ、たまたま今日この村に立ち寄っただけです。もしかしたら、お人違いをされてませんか？」

村長さんはポカンとした表情を見ると、その時お茶を運んできた中年の女性（さつき案内してくれた人。奥さんだそうだ）に「おい、どうなってるんだ？」とぼそぼそと囁いた。

「金魔を従属させてるみたいだし…てつきりギルドから派遣されてきた高ランクの魔法士の方だと…そんな…まあ、どうしましょう…」と、こちらもぼそぼそ言っている。

おーい、お二方さん聞こえてますよ

余計なことに首を突っ込む必要はないかなとは思いつつも、事情が気になったので、村長さんにお話を聞かせてもらうことにしたのでした。

第12話　コルエン村はワケありの村でした

コルエン村の村長スラットさんのお話を要約すると。

コルエン村には徒歩30分くらいの場所に半日ほどで麓から山頂まで往復できる程度の高さの山があり、グシの花という山頂にのみ生えている花があるんだって。

その花の根は治癒効果があって、様々な薬の原料に使われているみたい。

グシの花は生命力、繁殖力が強く、次々と根を生やすのでコルエンの村の貴重な収入源になっているのだそう。

だけど2ヶ月くらい前のこと。村人が山頂に行こうとすると地震や地割れがおこった。

それも行く度に発生し、山頂にたどり着けなくなってしまい、グシの花の根を採取できなくなっちゃったんだって。

困った村人は大都市ヌーエンまで赴き、有名な占い師に山頂の不思議な現象の原因を占ってもらったところ、どうやら山頂付近に力の強い怪物が棲みついでいて、誰も寄せ付けないようにしているらしい、との事。

山頂の怪物はグシの花を食べ漁って、より己の力を強化している、とも占いに出たらしいんだけど、力の強い怪物を倒せるほどの者はコルエンには居ないそう。

で、村中で相談した結果、ギルドに怪物退治を依頼することになったものの、収入源を断たれている小さな村のコルエンが支払える報酬は大金貨3枚。

どのような姿の怪物なのか、どのような攻撃をするのか、そもそもどの程度力が強いのか、一切情報が無い怪物退治の報酬が大金貨3

枚。

ギルドの依頼難易度ランクも3ツ星、5ツ星とあいまいな扱い。

（ギルドの依頼には内容と報酬にあわせてランクがあり、容易いものが1ツ星、難しくなっていくほど星が増え、もっとも高ランクなものは5ツ星で報酬も高いんだって）

こんなややこしい依頼を引き受けるギルド登録者はなかなか現れず、村人達は次第に焦り、落胆し、村はすっかり活気を失ってしまったというワケ。

なるほど。皆さん収入源が断たれてるもんだから引き籠もりになっちゃったんだ…。

でも！ついに依頼を引き受けた冒険者が現れたと数日前にギルドから連絡がきたのだ。

（ギルドに依頼をすると伝達石が渡され、ギルドと依頼人は連絡がとれるんだって。依頼が解決して報酬金を支払うときに伝達石も返却するらしい。）

良かったね～～！

もちろん村長は大喜びしたものの、もし冒険者が怪物を退治できなかったら村人は更に気落ちしてしまうだろうと配慮して、冒険者が来ることはまだ村人には秘密にしているそう。

その旨をギルドから引き受け手の冒険者に伝えてもらい、コルエンに到着したら真っ直ぐに村長の屋敷に来てもらう手筈らしい。

冒険者の到着予定は今日の日没前とのことなので、今夜は村長の屋敷で宿泊してもらって明朝に裏山へ案内するつもりなんだって。

だから予定より早い到着とか言われたワケね。納得しました。

「いや…家内が勘違いしてしまい申し訳ない。冷静に考えれば、こんなに若く美しいお嬢さんが怪物退治というのもおかしいですな。」

若く美しいって私？「若い」はともかく「美しい」はお世辞ですよ
ね、村長さん。

「ですが、ユリーナさんは北の髪に東の目をしてますし、髪も目も
みごとに色濃くて。金魔もいますし、てっきり敏腕の魔法士かと思
ってしまっただんです。」

おばちゃん、もとい、奥さんが申し訳なさそうに言う。

どうやら私の髪と目の色は誤解されちゃうみたい。

東西南北の地の民って、髪と目がそれぞれ独特の色だってことは教
えてもらったけど、それが人間の全てではなくて、むしろ「地の色」
をもつ人間の方が少ないのだとか。

「地の色」の人間は魔力がある者が多く、色が濃いほど力も強いら
しい。

カラーリングを一切しなかった私の髪は、真っ黒。

目は紺というには薄いけど、藍というには濃いといった色。

おまけに金魔までいるし。

いかにも魔力たっぷりありますし強いですって外見なんだね…は
うう…。

ちなみに村長さん夫妻は薄い黄緑の髪にクリーム色の目をしている。

「あの…私、一応、特定の武器と魔法は使えますが、たいして強
くないんです。見掛け倒しといってもいいくらいでして…。辛い事
情を伺っておきながらお役にたてそうになくて、申し訳ないです」

「いやいや、謝らないでください。ユリーナさんが心を痛めることなんてありません。今日中には冒険者様もお越しになるでしょうし。そうだ、ユリーナさんは何処に向かっていたのですか？」

「ヌーエンです。実は私、ギルドに登録しようと思っっているんです。私の出身は大陸ではなくて北東の島でして、今まで訳あってシプグリールの羊緑族の族長さんのもとでお世話になってたのですが、先日15歳になり成人しましたので一人立ちをしようと思ひまして。」

異世界から来ました」とか言つと面倒くさそうだしね。
出身地詐欺且つ年齢詐欺です。

今、私が話した「私の経歴へアグ版」は羊緑族の族長さんが考えてくれたの。

異世界人だと周りに知られると今後色々と面倒に巻き込まれてしまう可能性もでてくるというので、いつそ偽の経歴を作ろうということになったのよ。

もちろん私も族長さんの意見に同意した。面倒はゴメンだ。
経歴詐欺への罪悪感？そんなのミジンコ程度にもありません。

「そうだったのですか。では、これから発たれますか？」

「実は連日野宿だったので、出来れば今日はこの村に泊まりたかったのですが…」

「それなら、今夜はウチに泊まってください」（奥さん）

「え？でも冒険者さんも宿泊されるのですよね？私まで…ご迷惑ではありませんか？」

「ウチはもともと宿屋も兼ねてるんです。グシの花の根の買い付けに來た商人に部屋を提供してたりと、数ヶ月前までは賑やかだったんですけどねえ。最近はめっきり客足も途絶えてしまつてねえ。ユリーナさんのような美人さんが泊まってくれたら私も主人も嬉しいのよ。」

村長さんのお屋敷が宿屋だったなんて！
探す手間が省けたよ！！今夜の宿、決定！

宿代は前払い制がヘアグの常識みたいなので、奥さんに代金を支払うと案内された部屋へ入りベットへダイブ。
手足を伸ばして寝転がるって気持ちいい！

「ねえ、レギ。裏山の怪物ってどんなヤツなのかな？ひとっとびし
て、見て来れない？」

「面倒くさい」

「むむう……。ん〜でもなあ、どんな怪物か気になるなあ……。そうだ、
私ちよっと思つてみようかな。」

「何言つてんだよ。止めとけ止めとけ。ギルドのヤツにまかせてお
けばいいんだよ」

「そうだけど……。なんかこの村の人たちが気の毒で……。もちろん怪物
と戦おうと思つてゐるわけじゃないけど、姿だけでも分かれば冒険者
さんに教えてあげられるし。日没までには時間あるよね。重力魔法
で体軽くして風魔法で速さをあげれば馬に乗らなくてもすぐ往復で
きるだろうし……。よし、私、行つて来る！」

すぐさま部屋を出て行こうとすると、しょーがないな〜ってカンジ
でレギがついてきてくれた。

村長さん夫妻に裏山までの道のりを尋ねると、止した方がいいと引
き止められちゃったけど、様子を見に行くだけで日没までには帰つ
てきますと言うと、結局はお気をつけてと送り出してくれたのでし
た。

裏山までは一本道だったし怪物にも会わなかったなので、すぐに到着

数ヶ月前まではコルエンの人たちが頻繁に往復していただけあって、山道とはいえ結構歩きやすい。

呑気に植物観察しながら山頂を目指して進んでいたら、思ったよりも時間が過ぎていたようだ。

道草くつてる場合じゃない。ハイキング気分はやめて、先を急ごう。ペースを早めて歩き出してから10分くらいたった頃、ふいにレギの気配が緊張した。

「どーしたの？レギ」

「……ユリーナ、くる。浮け」

すぐさま重力と風の魔力で地面から1mほど離れた途端。

地響きがして、今さっき私がいた所の地面に亀裂が入ったではないか！

啞然としつつ宙に浮かんだままちよつと進み着地すると、亀裂は徐々に塞がり地面は元通りになった。

「……ユリーナ、引き返そう。この力…オイラでもマズイってカンジするんだ」

レギがいつになく真剣に言うので、お気楽な私でも流石に危険だと察した。

「うん、わかった。すぐ帰ろおおおおお？！」

急に何かに引きずられるような感覚がして、視界がグニヤリと歪む。

「ユリーナアーン」

「レギーーっっ」

レギの叫び声が聞こえた方へと必死で手を伸ばしたものの、私はそのままグニャグニャする感覚に引き込まれてしまったのでした。

第13話、コルエン村の裏山で大ピンチ！です（前書き）

軽い戦闘描写、流血描写があります。

第13話 コルエン村の裏山で大ピンチ！です

…ここは……どこ？

グニャグニャの感覚が無くなったと思ったら、やけに見晴らしの良い場所にいた。

もしかして…山頂？

私、どうしてこんな所にいるの…？レギはどうしたのかな？

意識は朦朧としてるし体もフラフラするけど、何とか気合を入れて立ち上がった時。

ゾクっつ！！

肌に突き刺さるような気配がして、一気に意識が覚醒。

あ、なんか、すごくイヤな気配を感じるんですけど…

これ、ギルガ並みの殺気っぽいんですが…

ギギギ と擬似音が聞こえそうなほど、ぎこちなく首をまわすと。

予感的中っ

巨大な怪物がいらっしやるではあーりませんかあーっつ（泣）

そこにいたのは3つの頭を持つライオンのような体に3本の尾を生やした怪物。

顔の真ん中に大きな目1つ。顔が3つあるから、3ツ目になるのか？
ケルベロス＋ライオン＋メデューサ？？？

おっと、怪物の形状なんてどうでもいいじゃん！（怪物の姿を確認するという本来の目的は忘れてる）

なんでいきなりここに来ちゃったんだか分からないけど、早く逃げよう！！

- - ワレ ノ チカラ ヲ カワシタナ ニンゲンフゼイ ガ
コシヤク ナ マツサツ ダ - -

うきやあああーっ！！

脳裏に不吉な重低音が響きましたよ！今の何？怪物？言葉を話したわけじゃないのに何故？！

もしか、これも『監視者』の意思疎通能力？

へアグ共通文字言語だけじゃないの〜っ？！

動揺しまくる私をよそに、巨大怪物は低い唸り声をあげると3ツ目をギラリと鈍く光らせた。

すると、鏝のような石が大量に勢いよくこっちに向かってくるではないか！

つぎやあああ〜っつ！！

マテマテちよつと待てーっ！イキナリ攻撃ですかー？！

咄嗟に水の結界を張って鏝石を防いだけど、幾つかの石は結界を抜

けてビシビシと掠った。

掠った部分の服が裂け、血が流れる。

これは……逃げられない！

この攻撃の早さ、威力、…背中を向けたら、きつと殺られる。

怪物の力量を瞬時に悟った私は応戦する覚悟を決め、水の結界を張ったまま亜空間から薙刀と傷を治す液を出してぶっかけ（塗るなんて悠長なこととしてられない）傷を治すと、結界を解除した。

解除すると同時に「水」と「風」で怪物の周りに吹雪を発生させ、すぐに薙刀を構えると「風」で素早さと鋭さ、「重力」で身軽さの魔法をかけ、怪物が吹雪を消し去ろうとしている間に突っ走って間合いを詰め、真ん中の首に狙いを定めて渾身の一振り！

でも。

怪物の首を獲ることはできなかった。かろうじて少し切り傷がついただけ。

「風」の薙刀は石でもスパッと切れるのに、この怪物にはかすり傷程度のダメージしか与えられなかった。

サツと後退し距離をあけると、脳内に再び不気味な重低音が響く。

- - ワレ ニ キズヲ ツケタナ ツクヅク コシヤク ナ ニ
ンゲンメ マツサツ ダ - -

もしかしくなくても私、火に油を注いじゃいましたかね？

うーわゝゝっ、どうしよう、どうしよう、どうしようっっ

涙目になりながら水の結界を張り、怪物の攻撃に備えた時

「ユリーナアア！生きてる？？」

この声…レギ？！

地獄に仏！山頂にレギ！

「レギーー！なんとか生きてるよう！うわああんっ」

レギは凄い速さで飛んできて、アっという間に私の近くに来てくれた。

そして泣きそうになった私をチラッと見て、すぐに怪物を見る。

…ジャマ ナ マモノメ ニンゲン モロトモ マッサツ ダ…

再び不気味な重低音が何か言ってきたけど、レギは金魔なんだゾ！もう、こっちのもんだわ！！

「レギ、あの怪物に南の金魔の力を見せ付けてやって！」

他人もとい他鳥まかせです。

「オイラ無理。」

なんですとー！っ？！

サラッと顎カックン発言がまさないでえっっ

頭真っ白になったところに再び鎧石攻撃がきた。

が、レギが少し前へ飛び激しい火炎を吐くと、鎧石が消し炭になっていた。

すごい、レギってやっぱり凄いじゃん！

「ユリーナ、目を硬く瞑ってて！」

そうレギが言ったので、訳も分からず目を瞑る。

ピカッ

目を瞑っていても、もの凄い眩しさを感じた。

「レレレレギ?! 何したの?」

「怪物の目を眩ませただけ」。時間稼ぎだよ。でも今更逃げたところでアイツは確実に追ってくる。だから仕留めなきゃ駄目だ。」

「あうう。でも「風」の薙刀でも首獲れなかったし、「吹雪」も消されたし…どうやって攻撃したらいいか…」

「アイツには「地」のガードがかかっている。物理攻撃はおろか魔法攻撃も効きにくくなっちまってるんだ。ガードが消えれば何とかなりそうだなあ」

「ガード消すって、どうやるの?」

「ここが南の地なら「主神の加護」でオイラが消せるんだけど…ここ西だからなあ、うーん…なんか方法ないかなあ…うーん…あ、そうだユリーナ!」

「主神の加護」って何? と思ってたら、レギに呼ばれた。

「オイラと初めて会ったときに使ってた、木を黒焦げにした魔法。あれだよ! あれは異属性だからガード関係無く効くんじゃないかな、やってみる価値ありだよ!」

「そうか…「雷」か。わかった、やってみる。魔力全部つかってマックスパワー雷を落としてやるわ!」

私は薙刀を亜空間にしまうと、集中して魔力を形成した。

「風」「水」「重力」の魔力と共に、さっきの鎂石の傷の恨みもサクッ込めて両手の間にサッカーボールくらいの大きさの雷雲球を作る。

100億ボルトの電力で怪物は黒焦げなイメージを、しっかりと、はつきり、くつきりとする。

恋人もできないままマツサツされてたまるか！
マツサツされるのはオマエだ、怪物！

視力が回復してきたのか、大きな目を3つともパチパチさせている怪物の頭上めがけて、思い切り雷雲球を投げる。

ピカッ

ズガアアアアアン

「グアアアアツッ！！」

バチバチバチチチ……

不気味な咆哮をあげ、怪物は黒焦げになった。

「や…やった…？」

持てる全ての魔力を一気に使ったせいか、全く体に力が入らず、私はヘナヘナとその場に崩れ落ちた。

「やったあ！やったじゃんユリーナ！やっぱ、その魔法凄えよ！つて大丈夫かあ？」

「大丈夫じゃない……レギごめん。私、全然体が動かないや。話す

のもシンドイ……」

「そつか。まあ、そうなっちゃうよな。とりあえず、しばらくはこ
のまま休んで……！……！」

いきなりレギが私の背中あたりの服をグツとつかむと、2 mほど飛
び上がった。

「あっ」

どうしたのかと思ったら、なんと地面に亀裂が入ったのだ。

驚く暇もなく、私ごと飛び上がったレギ目掛けて鎚石が飛んで来た。

！……！

怪物、あんなに黒焦げになったのに、まだあんな力が使えるの？！

黒の中に光る目3つ。

殺気でギラついている。

鎚石はレギが放った火炎で次々と落ちていったが、また次の鎚石が
来る。

そんな攻防が続いた。

鎚石の量は徐々に減ってきているが、レギの火炎も少しずつ勢いが
無くなってきた。

小さな体で私を持ち上げながら次々と火炎を使うのは、さすがのレ
ギにも負担がかかるのだろう。

まさしく『お荷物』の私。

魔力全部使つと、こんなになっちゃうなんて……情けない……

また、鑛石が私達へと放たれた。
けど、今度は全てを塞ぎ切れなかったみたいで、幾つかの鑛石が火炎をすり抜けてレギの羽と体、私の服を掴んでいた足にビシビシつとあたってしまった。

私の左腕と右足にも石が当たる。

鋭い痛みを感じた瞬間、レギと私は地面に落ちていった。

力の入らない体では受身もとれず、ドシンとそのまま地表に打ち付けられる。

「う…ううう…レギ…レギ…？」

レギは私から1mくらい離れたところにいて、ぐったりとしていた。

「レギ?!レギイッ、しっかりして!!レギ!!」

叫び声は、山頂の空気に吞まれて消えた。

第14話へ出逢った瞬間に惹かれたのは……（前書き）

途中で視点が変わります。

前半、主人公視点。後半、第3者視点（説明チックな話です）

第14話　出逢った瞬間に惹かれたのは…

辺りはすっかり日が暮れて、もうじき星も見えそう。ここは山頂なので、さぞかし星空が綺麗だろう。

でも今の私はレギのことしか頭になくて、なんとかレギに近づくために必死に体を動かそうとしても、全く体が言うことをきいてくれない。

「くっ…」

落下時に打った肩にズキッと痛みが走った。

魔力を使い切ってしまったから、亜空間道具袋も出せず回復液も使えないよ…。

怪物が再び私の方へ鎚石を放った。

石の数は数個ほどしかなかったが、今の私には避けることすら出来ない。

もう、ダメなのかな…

私は自業自得だけど…レギは違う

私が興味本位でこんな所に来なければレギだってこんな目にあわずにすんだのに…

ホントにごめんね…謝ってすむ話じゃないよね…

レギへの申し訳なさに涙がにじんだ。

すると――

鎧石がピタツと止まって粉々になり、砂のようにサラサラと崩れていった。

えっ???!!

目の前で起こったことが理解できなくて目を見開いた時、膜みたいなものが私とレギの周りに発生したと思ったら、怪物と私の間に銀色の光が一筋走った。

えええっ???!!

銀色の光……だと思ったものの正体は、高速で駆けて来た銀の動物だった。

後姿しか見えないけど、磨きぬいたプラチナのように光沢のある銀の毛、どつしりと骨太な四本の足、モフモフの尻尾。体長2m以上はありそうな大きな犬っぽい動物。

黒焦げになっても襲ってくる怪物に、銀の大犬は燦し銀のように鈍く光る霧のようなものを放つと、霧が怪物を包んだ。

シューウウウ　と音がして、霧がなくなったと思ったら、怪物が石化しちゃった。

……え?ウソ……。なにがどーなってるの??

えーと、今の石化はこの銀色クンがやったんだよね……マジ?!

銀色クンは石化した怪物に向かって、なおも臨戦態勢で上体を更に低くし、獣が敵を威嚇するような唸り声を発したままジっとしている。

時間にしたら10秒もたっていないだろう、急に怪物は鎧石のように崩れて砂になり、サラサラと風に吹かれて散っちゃった…

これは一体どーゆーこと??助かった…ってことかな?

もしかして、結界っぽかった膜はこの銀色クンが施してくれたのかな?

もう膜は消えてるけど。

すると、銀色クンが振り返って私を見た。

あ……

ドクンっ

心音が大きく一つ跳ねた後

呼吸も、血の流れも、思考回路も、空気の流れも、全てが停止した気がした

その瞳と初めて視線が重なった時

一瞬とも、永遠とも感じた

銀色クンは犬ではなくて、紫の瞳をした大きな狼だったのだ。
星空を背に影をつくる、雄雄しき銀狼。

そのアメジストのような美しい紫の瞳に何故だか無条件に惹きこまれた。

その瞳をもっと近くで見つめたいよ…

でも、体が動かないの…

もっと…もっと、そのアメジストの輝きを見ていたい。

でも、意識が遠のくの…

怪物から助かった安堵で、張り詰めていた緊張がなくなった私は、銀狼へと手を伸ばそうとして…そのまま気を失ってしまった……

紫の目に銀の毛をもつ狼、それは魔獣の上級魔〔銀狼族〕である。
別名、西の銀魔ともいう。

この銀狼が山頂に来たのは偶然ではない。

実は、この銀狼こそがギルドから来た冒険者なのだ。

彼は自分が銀狼族であることを頑なに秘密にして、ずっと人間として生きてきた。

何故なら――

彼は『生まれていない存在』なので、銀狼族の里で生きて行くのはおろか、他者に銀狼族だと知られる訳にもいかなかったのである。

20年前の土の緑月、銀狼族の族長は妻の出産を前にひどく落ち着きをなくしていた。

ウロウロと埒の前をうろつき、時が過ぎるのを待つ。

やがて、待ち望んでいた時が訪れ、ようやく我が仔を見れると妻のもとへ駆け寄ったのだが…族長は驚きのあまり、しばし呼吸を忘れた。

仔は雄の三つ仔であつたのだ。

銀狼族の強さはほとんど血統で左右するので、銀狼族で一番の強さを誇る族長の仔が誕生することは一族にとって大変喜ばしいことであつた。

しかし、何事にも例外があるように、誕生を喜ばれない場合もあるのだ。

かつて、長の夫婦に双仔が誕生した。

強い2つの力是对立を招き、銀狼族は同士討ちを始めてしまい数が激減してしまったことがあるのだ。

それ以来、双仔は不吉なものとして扱われた。

もし長の仔が双仔ならば下の仔は亡き者になると決められたのだが、ずっと双仔は誕生しなかった。

だが…双仔どころ三つ仔が生まれたのだ。

下の仔は亡き者にする。これは一族の決まりだ。

分かつてはいるが、族長夫妻は生まれたばかりの我が仔達の命を奪うことなんて、とうてい出来なかった。

だが、下の仔達の存在を一族の者が知れば、どのみち命を狙われる。自分達の手元には置けない。

族長夫妻は悩んだ末、縁故にしている信頼ある精霊に、秘密裏に下の仔達を託すことにしたのだった。

幼き銀狼達を託されたのは、風の精霊・蒼嵐族族長セラシア。

彼は随分高齢であつたが、かつて銀狼の族長に命を救ってもらったことがあり、自分の寿命が尽きる前に大恩が返せると、躊躇うことなく仔達を引き受けた。

セラシアは幼き銀狼の将来を考え、高齢で先が見えている自分よりもこの仔達にふさわしい養い親を探そうと思ひ至る。

この銀狼の出生を秘密にできて、なおかつ心根が良く戦い方も教えられる者を…

セラシアが養い親を探している間、秘密裏に銀狼の族長から連絡がきた。

三ツ仔の長子の名前を「ジウオン」にしたと、下の仔達の事は何もしてやれないけど、名前だけでも決まったら教えて欲しいと…

それから間もなく銀狼の族長はセラシアからの手紙を受け取った。二番目の仔は「ゼウオン」、三番目の仔は「ソウオン」と名づけたこと、セラシア自身は高齢で先が短いから仔の出生の秘密を守る信用ある養い親を探していること、あまり連絡をとると何かの拍子に下の仔達の存在が明るみにでてしまうかもしれないので、養い親が見つかったらゼウオンとソウオンの情報は一切伝えるつもりはないこと、そのような内容が丁寧な文字で書かれていた。

その手紙は銀狼の族長しか読めないように魔法がかかっていたため、族長以外の者に読まれる心配はない。

族長は手紙を捨てることはせずに大事にしまい、セラシアに返信の手紙と共に二つの紫色の指輪を送った。

紫色の指輪はお守りになるのでゼウオンとソウオンに持たせてほしいこと、セラシアには感謝してもしつくせないほど、ありがたく思っていること、どうか長生きして欲しいと願っていること、そし

てこの便りを最後にする、といった内容だった。

ゼウオンとソウオンが物心付く前に養い親が決まった。

ゼウオンは、東の地「青の民」の屈強な魔戦士のもとへ。

ソウオンは、南の地「火の精霊」の、とある一族のもとへ。

同じ日に生を受けた三つの命は、魔物・人間・精霊という、それぞれ異なる三種族のもと、異なる地で育っていくことになったのだった。

第14話へ出逢った瞬間に惹かれたのは……（後書き）

やっと登場！

この銀狼さんが主人公の恋人役になります。

ここまではある程度あらすじを考えていたのですが、これからどうやってラブラブまでもっていかうかと思案中です（^^;）
今後とも『薙刀女の異世界物語』をよろしく願います。

第15話 銀狼の身の上話 (前書き)

今回は銀狼サイドのお話です。

第15話　銀狼の身の上話

澄み渡るように晴れた空を彷彿とさせる青の髪。鋭く光る藍の眼。身のこなしは一分の隙もなく、鍛え上げられた身体からも屈強な戦士だと分かる男。

彼の名はヴァルバリド。

妻子のない37歳の中年であるが、かつては東の地「青の民」の王国インブルディーゴの將軍まで務めた一流の魔戦士であった。

とある事件で汚名を着せられた彼は、無実の罪を自ら受け入れ王国追放の憂き目にあった悲劇の元將軍。

インブルディーゴを離れた彼は、その後ギルドに登録し冒険者として各地を渡り歩いて生きてきた。

彼は必要以上に目立ちたくは無かったので2ツ星クラスの依頼を細々とこなしていたのだが、ギルドの中には過去のヴァルバリドを、彼の強さを覚えている者もいて、一緒に5ツ星の依頼をしようと持ちかけられることも度々あった。もちろん全て断ってきたのだが。

そんな彼、魔戦士ヴァルバリドは召還契約をしている精霊から

「長がヴァルに内緒の頼みごとがあるって言ってたわ。明日、水の2刻にアタクシ達の住処にきてくださいな」

そう言われた時、頼みごとの検討が全くつかず、かなり戸惑っていた。

長と言えば蒼嵐族の族長のことだろう…

精霊の族長なんて会おうと思ってもなかなか会えるものではないのに、向こうからヴァルバリドに用があると…

しかも「内緒の頼みごと」だと？

ヴァルバリドは嫌な予感を感じつつも、蒼嵐族の族長の言伝を無下にするわけにもいかず、いささか重い足取りで「瑠璃の谷」へと赴いた。

精霊「蒼嵐族」族長セラシアは、まだ歩き始めたばかりの幼い魔獣の仔をヴァルバリドに手渡した。

「と、いうわけだ。この仔を育てて欲しい」

ヴァルバリド、しばし固まる。

……

たつぷり5分は固まっていたヴァルバリドだが、ようやく己の手に渡された銀狼を見て、これが現実だと理解した。

彼はすぐには心を決められず3日間悩んだが、結局は託された仔ゼウオンを育てる決心をしたのだった。

ヴァルバリドはゼウオンに対し、師匠が弟子にするように厳しく、時には父が子にするように甘やかし、己の持てる全てを教え込んでいった。

幼少の頃からゼウオンには戦いの才があり、剣も魔法もかなりの実力をつけていき、8歳の頃にはそれなりに戦力として扱える腕前になった。

ゼウオンが分別のつく年頃である10歳になった時。

ヴァルバリドから「大事な話がある。」と、自分の出生についての話を聞いた。

ゼウオンは取り乱しもせず、怒りも悲しみもなかった。

ああ、やっぱりな……

そんな冷めた感情だけがあった。

人間として生活しているが自分は狼にもなれるし、人間では使えない能力もある。

しかも銀狼だと周りに知られてはならないと、言葉も話せない時からなんとなく感じていた。

ヴァルバリド以外の人がいる時には青髪模造髪を着けること、魔物特有の気配や匂いを消し去る効果がある胸飾りを肌身離さず付けること、この2つを物心ついた時から厳命されていたから、むしろハッキリと理由がわかってスッキリした気分だったし、今更真実を知ったからといって「そっか……まあ、俺は今まで通りでいいんだよな」としか思えない。

自分には敬愛する養父のヴァルバリドがいてくれるし、今の生活に何の不満もなかった。

だから、実の両親からのお守りだと言われて紫の指輪を渡されても、いまいち有り難味が無かったし、他の兄弟のことも気にならなかった。

そして更に5年がたった。

ゼウオンがヴァルバリドに託されて15年。病魔がヴァルバリドを襲った。

ゼウオンは献身的に看病したが、ついにヴァルバリドは還らぬ人となってしまった。

ヴァルバリドは息を引き取る半刻前、ゼウオンに最期の言葉を残した。

「身勝手な願いで済まないが…おまえがインブルディーゴに行くことがあれば…前王のご側室ルキア様に…伝えてほしい…『ヴァルは…貴女様だけの…戦士です』と…」

それはゼウオンが初めてみる、恋する男の顔をした養父だった。

「な、に言っただよ！俺に頼むんじゃないで父さんが元気になっ
て自分で言えよ！俺は…俺は伝ええないからな！そーゆーのは自分で
…元気になつて…早く元気になれよ！！」

込み上げてくる涙を拭いもせずにゼウオンは養父に叫んだ。

ヴァルバリドは小刻みに震える大きな手で俯くゼウオンの頭を撫でる撫でると、かすかに微笑んだ。

「ゼウオン…おまえは、俺の誇りだ…自分を…確りと持てよ…い
ずれおまえにも…唯一無二の…想い人が…現れるだろう…その時は
…何事にも…囚われず…自分の心に忠実に…な。」

…俺と同じ轍をふむなよ。我がいとし子よ。

ゼウオンの願いも空しく、それから程なくしてヴァルバリドは息を引き取った。

ヴァルバリドを手厚く葬ったゼウオンは、真っ先にインブルディーゴに赴いた。

もちろん養父の遺言を実現させるために来たのだが、それは不可能なことだった。

何故ならヴァルバリドが息を引き取った同日、奇しくも前王の側室ルキアもまた、ヴァルバリドと同じ病でこの世を去っていたのだ。養父と前王の側室…二人の間になにがあつたのかはゼウオンに分かるわけが無い。

だが、『想い人が現れたら自分の心に忠実に』その言葉は養父の過去を示唆している気がしてならなかった。

今まで恋愛感情なんて感じたことないが…俺にも唯一無二の存在が現れるだろうか…

もしも出会えたら、その時は…

インブルディーゴの城下町の一角で、満点の星空を見上げながら、ゼウオンはまだ見ぬ未来の恋人を思った。

それから更に5年。

20歳になったゼウオンは相変わらずギルドの依頼をこなして生計をたてていた。

かつては西の地は避けていたのだが、そもそも銀狼族はあまり里から出ない一族で、その里も奥深い森にあるから必要以上に警戒することもないと、今では普通に西の地での依頼もこなしていた。

しばらくのんびり暮らしていても大丈夫なくらい蓄えは貯まっていたので、ギルドの報奨金よりも依頼内容に着目するようになっていた。

その日ゼウオンはヌーエンに来ていた。

大都市ヌーエンは西の地「緑の民」の王国グリンジアスと同じくらい栄えていて活気があるので、当然ギルドの規模も大きいし扱っている依頼数も多い。

ふらりとギルドの中へ入ったゼウオンは、そのまま真っ直ぐ依頼書が所狭しと貼られているボードに向かい、依頼を物色し始めた。そして、とある依頼書に着目する。

依頼種類：怪物討伐

推奨ランク：3ツ星～5ツ星

依頼内容：コルエン村の裏山に怪物が住み着いているらしく、裏山の山頂に生息するグシの花が採取できなくて非常に困っているので早急に退治してもらいたい。山頂に向かうと地震や地割れが発生するのだが、それも怪物の仕業と思われる。

報奨金：大金貨3枚

地震に地割れ…地の精霊？では無くて怪物の仕業、か。ふむ、引き受けても悪くはなさそうだ。

ゼウオンはその依頼書をボードから剥すと、依頼引き受けカウンタ―へ進んだ。

「登録ナンバー7463の者だが。」

「はい、えー…『主光の色は？』」

「『東と西と青と黒』」

「はい、合言葉確認とれました。魔戦士のゼウオンさんですね。ヌーエンのギルドへようこそ。今日はこういった依頼をお受けになりますか？」

「これを頼む」

「承知いたしました。手続きをいたしますので少々お待ちください」

そうしてゼウオンはギルドから伝達石と依頼受理書を受け取ると、
コルエンの村へと馬を走らせたのだった。

数日後、主光と副光が水平線に姿を隠そうとする頃、ゼウオンはコ
ルエンの村に到着した。

コルエンの村の入り口付近の木に、一頭の馬が繋がられている。

伝達用の早馬か？だが飼い葉や水桶が置いてあるし…

この村は例の花が採取できなくなってから旅人は来ていないって聞
いたのだからな。

まあ俺には関係ないか

ゼウオンはその馬とは少し離れた別の木に自分の馬を繋げると、コ
ルエンの村に足を踏み入れたのだった。

村長の屋敷はすぐにわかったので真っ直ぐに歩いていくと、門扉の
前に村長夫妻と思しき中年の夫婦が不安げな顔をしてウロウロして
いたが、ゼウオンの姿をみると駆け寄ってきた。

「あつ、兄さん今度こそギルドの冒険者様だね！わざわざ、こんな
ところに来てくれてありがたいよ、あのさ、到着したばかりで誠に
申し訳ないが、ちょっと裏山を見てきてくれないかい？わたしや、
あの子が心配で心配で…」

いきなり何を焦って言っているんだ、このオバサン。

困惑げなゼウオンの表情を察したのだろう、村長が妻の言葉に補足をつける。

「実はね、今日の正光頃に魔鳥づれの少女がきたんだが……」

ゼウオンは村長から事のあらましを聞くと、ため息をついた。

正直、面倒くさいと思ったが、一応この村長夫婦は依頼主であり、何よりそんな不安げな顔をずっとさせとくのも居心地が悪いので、仕方なく裏山へと向かったのだった。

どうせ明日来る所なんだしな。

それにしても魔鳥づれの少女って、変なヤツだな。

道は一本だから迷うことは無いし、おおかた道草くってんだろ。見つけたら嫌味の一つでも言ってやるか……

そんなことを考えながら、ゼウオンは裏山へと早足で歩いていった。山の麓までの道すがら、注意して見ていたが人影は無かったので、少女とやらはまだ山中にいるのだろう。

山中を無心で進んでいると、突然、山の上の方で何か光った……
と思ったら

ズガアアアアアン

「グアアアアツツ……」

物凄い衝撃音と、不気味な咆哮が聞こえた。

！！！！

今のは、一体なんだ？何がおきている？！

凄まじくも異質な魔力…

もしかして、山頂で怪物と魔鳥づれの少女が戦っているのか？！

とにかく山頂へ急ごう。人型より獣型の方がスピードが速いな。

ゼウオンは身に着けていたものを全て亜空間に入れてから滅多にならない銀狼姿になり、一気に駆けつけたのだった。

第15話 銀狼の身の上話 (後書き)

次話からラブ要素が加わる予定です！

予定は未定で決定ではないですが！

いやいや、もうそろそろ恋バナいれないと作者が物足りないです(笑)

第16話、目が覚めたらイケメンがいました（前書き）

前半は第三者視点、後半は主人公視点に戻ります。

第16話　目が覚めたらイケメンがいました

山頂にたどり着いたゼウオンが見たものは

地面に倒れている少女と魔鳥、黒焦げの怪物だった……

少女も魔鳥も、そして黒焦げの怪物も、まだ生命力を感じるものの、三者とも相当の痛手を負っているようだ。

魔鳥は気絶しているらしく、動かない。

そして少女は、魔鳥に近づこうと動かないらしい体を何とかしようと懸命にもがいているようだった。

「レギ?!レギィッ、しっかりして!!レギ!!」

少女の悲痛な叫び

そんな彼女の声を聞き、いじらしい姿を見た時。

ゼウオンは、それまで思っていた『面倒くさい』とか『嫌味言ってるのか』とかの感情は一切無くなった。

かわりに到来した感情は

彼女を守りたい。助けたい。

その時、怪物から、なにか小さい石矢のようなものが放たれた。

マズイ！！

ゼウオンはとつさに銀狼族の力を使ってしまった。

紫の瞳に力を込めて鑛石を睨み、その動きを止めると更に力を加えて塵にした。

西の銀魔の特殊能力の一つ『石化帰塵』

対象物を石化、粉々に粉碎、砂のように塵にして大地に帰化させるといった力。

銀狼族の能力の使い方や抑え方は幼少時にセラシアから学んだが、生涯使うことなど無いと思っていたのに……

でも、たとえ己の秘密が露見することになってしまっても、あの少女は死なせてはならない、と。何故かゼウオンはそう思ったのだ。

それからすぐさま結界を少女と魔鳥に張り、自身は怪物の前に飛び出した。

背後から少女の視線を感じる

ゼウオンは少女の視線が自分に向けられていることが不思議と嬉しかった。

黒焦げの怪物は巨大な体躯だったので、石眼力ではなくて石化霧を吐いて攻撃した。

怪物は霧を振り払う力は残っていなかったようで、まんまと固まる。そして、石化した怪物を一思いに粉碎し、後ろを振り向いた。

少女と視線が絡み合う。

その瞬間

ドクンッ

心音が大きく一つ跳ねた後

呼吸も、血の流れも、思考回路も、空気の流れも、全てが停止した気がした

その瞳と初めて視線が重なった時

一瞬とも、永遠とも感じた

星明りに照らされた少女は、黒髪に藍の瞳をしていた。

大きな瞳に少し小ぶりな鼻、ふっくらとした唇がバランスよく顔におさまっている。

あまり見かけない顔立ちながらも美しく、見る者を惹きつける容姿だ。

彼女の黒曜石のような艶やかな黒髪がゆれる

彼女の花の蕾のように愛らしい唇が微かに開く

彼女のサファイアのような美しい藍色の瞳が彼を見る

そのサファイアの輝きを、ずっと、こちらに向けていたい

彼女がゼウオンへと手を伸ばしかけて……力尽きたようにパタッと、その華奢な手を地につけた。

!!!

その時彼は奈落の底に落とされたような、深い負の衝撃を受けた。

すぐさま少女のもとへ駆け寄り、彼女の体に顔を摺り寄せ耳を押し付け鼓動の音を確認した。

トク…トク…トク…

生きている。

ゼウオンは心底安堵した。

そして、少し離れていた所に倒れていた魔鳥に近寄り、無事を確認する。

少女と魔鳥が意識を戻す前に人型に戻ると、亜空間道具袋から身に着けていたものと応急手当の医療道具をだし、衣服と模造髪を身に着けてから少女と魔鳥に手当てを施したのだった。

少しすると魔鳥が意識を取り戻し、ゼウオンを見て驚いた。

「あれ？…どうなったんだ…って、アンタ誰？人間…？」

ゼウオンは自分がギルドからきた冒険者であること、村長に頼まれてここまで駆けつけたところから今に至るまでを簡潔に説明した。

「そか…アンタのおかげでオイラもユリーナも助かったのか。あり

がとな」

「いや、もともと怪物退治は俺の仕事だったからな。…彼女はユリーナっていうのか…」

ユリーナ、とゼウオンは再度低く呟き、まだ意識を取り戻していない彼女を見る。

その視線は少し熱を孕んでいた。

「ああ、そうだよ。オイラはレギってんだ。アンタは？」

「ゼウオンだ」

「そか、よろしくゼウオ……っ！痛い！」

飛ばうとして少し羽を動かそうとした時、レギに激痛が走ったのだ。

「まだ動かない方がいいぞ。薬を塗ったから血は止まってるが、体内まで回復していない。レギ……だったか、その色は朱焰族か？南の金魔が人間と召還契約したのか？」

レギはおとなしく羽を閉じると再び体から力を抜き、ゼウオンに答える。

「ま、普通そう思うよね。けど、召還契約なんてしてないんだな。オイラはしても構わないって言ったんだけどユリーナに断られたんだ」

「え？まさか？！」

驚くゼウオンに、レギは自分とユリーナの出会い、今に至るまでを簡潔に話した。

といっても、全てを見境無くゼウオンに話した訳ではない。

ユリーナが異世界から来たこと、恋人を探していること、ギルガを

（結果的に）倒したこと、などはあえて伏せておき、あくまで自分との関わりの範囲内での話に留めた。

「召還は嫌か…友達って…確かに珍しいな。」

ゼウオンはそう言いながら、このレギという朱焰族は彼女のことをかなり気に入っているんだなと実感した。

それから再び亜空間道具袋から薬草と煎じる道具をだすと、手際よく薬湯をつくりレギへと差し出した。

「それだけ喋ることができれば、もう充分回復してそうだな。これを飲んで、しばらく眠ったら怪我也治るだろう。」

「へへへ、薬草湯かあ。それって調合に専門知識が必要なんだろう？薬師になれるだろうに、わざわざ危険な冒険者してるん？」

「まあな。色々と世界を見てまわりたいんだ。（放浪してた方が一箇所に留まるより正体バレにくいだろうし）」

「なるほど。世界を見たいってのはオイラと同じじゃん。ぐふふっ」

そう言っただけは素直にその薬湯の器に嘴を入れ、ゼウオンにお礼を言っただけ、そのまま目を閉じて眠ったようだった。

昔の夢を見ていた

6歳の私が泣いている

ああ、そうだ、お母さんが死んじゃったんだ…

脳の病気だったらしく、パート先で突然倒れて。
お父さんと私が病院に着く前に天国に行っちゃった。

お父さんは商社に勤めていて海外に行っていることが多かったから、お祖母ちゃんの家にお世話になることになって。
お母さんに二度と会えなくて、お父さんにもなかなか会えなくて、とっても悲しくて辛かったけど、私が泣きそうになるとお祖母ちゃんも泣きそうになっちゃうから、頑張って明るく振る舞うようにしていたんだ。

ある日、仏壇に手を合わせていたお祖母ちゃんが私をみると、ポツリと言った。

「百合奈、『想念』って言葉を知っている？」

「そーねん？ううん、知らな〜い。」

「こうなつて欲しいなっと思うことを、心の中で強く願うのよ。具体的にイメージして、ずっと強く心の中で願うの。そうするとね、それがホントになるんだよ」

「？？お祖母ちゃんの言ってること、よくわかんない……」

「ああ、ごめんね。百合奈には難しかったかな？」

その時お祖母ちゃんが何を言いたかったかなんて分からなかったけど『想念』って言葉だけは覚えていた。

10歳の時。

算数のテストがあつたけど、私は半分くらいしか解けなくて悔しかった。

だから、台所にいたお祖母ちゃんに八つ当たりしちゃった。

「お祖母ちゃんっ、『想念』なんて嘘だよ！だって算数100点取

れますようにって願ったのに、全然駄目だったもん！」

するとお祖母ちゃんは困ったように笑った。

「百合奈、『想念』っていうのは魔法のランプじゃないんだよ。自分で自分の願いを実現させる『信念』なんだよ」

「…意味わかんない……」

「百合奈は算数で100点とりたかったんでしょう？そのために努力はしたかな？」

「…努力……うう」

何か言い返したくって、でも何て言っていていいか分からない私にお祖母ちゃんは続けた。

「ただ願うだけじゃなくて、そうなるように努力もしなくちゃ。強く願って一生懸命努力すれば、きっと夢がかなうよ」

「ホント？」

なんだか嘘臭いな～とは思ったけど。

- - 願い続けて努力すれば夢はかなう - -

その言葉はいつまでも私の中に在り続けた。

私は、恋愛がしたかった。恋人が欲しかった。結婚がしたかった。でも、それはただの布石
願い事の根本は、ただひとつ

- - 幸せになりたい - -

いきなり死んじゃったお母さん

高校1年の時に死んじゃったお祖母ちゃん

再婚してから遠のいちゃったお父さん

家族を失うのは辛くて悲しい

それでも、私は一緒に生きていく人が欲しかった

願い続けていれば、出会えるのかしら…私のたった一人に…

満点の星空

輝く銀

煌く紫

あれは……

ミントのような香りが鼻腔を刺激し、私は夢から覚めた。

目に入っただのは

満天の星空

青の髪

紫の瞳

精悍な顔立ちの美丈夫

カ、カッコイイ…イケメンだわ…こんなイケメンがいるなんて…

私はまだ、夢を見ているのかしら…

意識はまだぼんやりするけど、私は彼から目が離せなかった。

第16話〽目が覚めたらイケメンがいました〽（後書き）

次、次こそは！

ラブい雰囲気になります！

今日で休日も終わりなので、今日中にあと2話くらいアップしたいです。

第17話 初めての口付けはミントの味でした (前書き)

R15になるんでしょうか？

後半、ゼウオン視点になります。

第17話　初めての口付けはミントの味でした

「気が付いたか。怪我の具合はどうだ？」

こっちの視線に気づいたのか、イケメンさんに声をかけられた。低めで艶のある声を初めて聞いて、ドキッと心臓が跳ねる。

「……あ……私……痛っ」

「……、無理に起き上がるなっ、傷口にさわるぞ」

左腕について起き上がろうとしたんだけど、怪我の痛みに耐え切れず、そのまますぐに地面に崩れてしまったよ。あうあうっ。

イケメンさんは、すぐに私の左腕を軽くとり傷口を見てくれる。

うわゝ、この人、近くで見るとマジ美形！

スツと通った鼻筋に少し薄めの形良い唇。傷口を見ているため、伏し目がちになっている紫の目は、何か……色っぽいデスよゝゝっ

青髪だから東の民なのかな？目は藍色じゃないけど、系統的には紫もアリなのかも。

それにしても、この紫の瞳……あの銀狼みたい。

無条件で惹きこまれちゃう……

私が彼に見蕩れていると、彼がふいに顔をあげた。

「傷口は開いてないな……良かった。傷薬も塗ってあるし、もう出血はしないだろうが、しばらくはそのまま静かにしていないと。」

「あ……ありが、うっ、ごほんっ、ごほんっ」

声を出そうとしたけど掠れて話せないうえ、咳き込むのさえダルイ…

「無理に話さなくていい。この薬湯、飲めるか？」

そう言っただけで彼は私の背中に手を添えて少し上体を起こしてくれた後、ミントの香りがする緑茶っぽいものがはいった器を差し出してくれる。

声がないので、目にお礼の気持ちを込めて彼を見つめると、なんだか少し赤くなったようだけど…気のせいかな？

器を受け取ろうと、手を伸ばしたんだけど力が入らず器が持てないっ。

あうう…どうしよう。

せっかくイケメンさんが用意してくれたのに！頑張れ私！

こちらの様子を察してくれたのか、彼は器を私の口元まで持つてきて飲ませようとしてくれた。

なんて気が利く方なんですよ～！

ミント味が口の中に広がる。が、しかし！飲み込むことができず、口の端から薬湯が零れちゃったよう。

えええ？！嚥下不可なほど疲れてる私？！

意識はしっかりしているんだけど…体は全く動かない。

全魔力一気放出して実はかなり危険だったとか…？

ああ、零しちゃって申し訳ないな…

そんなことを思っていると、彼はちよつと視線を彷徨わせた後、薬湯を自分の口に含み、そのまま私の顔に、その整った顔を寄せてきた。

あ……

私はなんの抵抗も感じず、ただ、その綺麗な紫の瞳を見つめてた。お互いの息を感じられるほど至近距離になった時、ごく自然にそつと目を閉じて――

唇が、重なった

少し冷たい薄めの彼の唇。柔らかい感触。

彼の舌が私の口を開き、そのまま薬湯を私の口内に少しずつ流し込む。

こくん、と飲み込むと、薬湯が体内に染み渡った。

彼がそつと顔を離したので、ゆっくりと目を開けると。

そこには私を見つめているアメジストの煌き。

イケメンさんの端正な顔が、少し赤くなっている。

ああ、頬が熱いよ…ドキドキしちゃう…

初対面の、名前も知らない男性なのにっ

どうして何の抵抗も無く、さも当たり前のように受け入れちゃってるの??

なんでこんなに胸が高鳴るの???

自分で自分がワカラナイ

でもでも！きつと私、今、うるうるの目で彼を見ているんだろうな…ってことは恥ずかしながら分かってしまっんですよっ。あああうっ。

そんな私の心中を知ってか知らずか、ふいに彼は視線を外すと再び薬湯を含み、またしても口移しで飲ませてくれようとするし。んでもって、これまたフツーに受けてる私。

結局、器に入っていた薬湯は全部彼の唇経由で飲ませてもらったのだった。

「ありがとう…」

ようやく声がでると、彼にお礼を言った。

薬湯のおかげなのか、だいぶダルさは無くなったものの自力で起き上がるにはちよい辛い。

彼は薬湯が入っていた器を傍らに置くと、なんと私の体を引き寄せてくれるではないか！

うつ、ちよつと、これはっ

嬉しいかも。

でもでも、いくらなんでもマズイよね？

「まだ、体に力が入らないだろう」

はい。おっしゃるとーり力が入りません。半分は貴方のせいな気がしますケド。

ま、いつか。この際、ご好意に甘えちゃえ。てへ。

遠慮なく彼の胸に凭れ掛かる形になる。

ときどきどき…

「あれだけの大技魔法を放てば、しばらく体が動かないだろうな」

その彼の言葉を聞いて、ハッと我にかえる。ドキドキしてる場合じゃないじゃん！

「あつ、レギ！…あの、魔鳥がいまませんでしたか？」

「大丈夫だ。そこに居る。先程しつかりと自分で薬湯も飲みきったし、大分回復している。今は眠っているが、心配はない。」

「ああ…良かった…ほんとに良かったあ…」

スピスピと眠るレギを見ると、安心して思わず涙ぐんじやった。レギが無事で本当に良かった！良かったよう…

「ユリーナ…って名前なんだって？」

ドキン。

急に美声で名前を呼ばれたから、また心臓が跳ねちゃった。

「あ、はい。あの…どうして私の名前を？」

「レギに聞いた。俺はゼウオンだ」

「ゼウオンさん…」

「ゼウオンでいい。『さん』はいらない」

「あ、はい」

ゼウオン…彼の名を心の中で呟くと、また胸がドキドキする。もう、さっきから私の心臓忙しいよう。

「あの…ゼウオン？つかぬことを聞いてもいい？」

「なんだ？」

「ゼウオンって、その…もしかして、狼だったりする？」

尋ねながら私は改めてジツと彼の瞳を見た。

何度見ても、このアメジストのような神秘的な輝きをしている瞳は、怪物を倒してくれた狼によく似ている。いや、似ているというより、まったく同じに感じる。

あの狼が上級魔で、人型になったら、ちょうど彼のようになるのか
なっと思っただけど…でも、あの狼は銀の毛皮だったから、青髪
の彼とは違うのかな？

それにしても、この瞳は同じな気がするんだよね。

すると、彼の体が俄かに緊張した。

私を緩く包んでいた彼のたくましい腕に力が入り、左腕の傷口に触れる。

「痛っ」

「あ、すまない…」

あ、あれ？なんだか、柔らかかったゼウオンの雰囲気が厳しくなっ
ちゃってるーっ

えと、聞いちゃいけなかったのかな？オロオロ…

そのまま黙ってしまったゼウオンを不安げに見ていると、彼はフツ
と一息吐いた。

「忘れてくれ」

困ったような、苦しそうな表情のゼウオン。

んゝ、これは何か事情があるんだろうな。

「わかったわ。私は狼なんて見なかった。怪物にやられて気を失っ
て、気づいたらゼウオンが倒してくれていたのね。改めて、ありが

とう。あなたが来てくれなかったら私もレギもやられていたわ。でも、どうして此処へ来たの？」

「……聞かないのか？」

「え？どうして此処に来たの？って聞いたよ？」

「いや、そうじゃなくて……」

「私がこの山頂で見たのは、レギと、三つ頭の大きな怪物と、貴方だけだよ。」

ゼウオンの雰囲気柔らかいものに戻った。

狼のことは無かったことにする、狼のことは一切他言しないよって
いう私の意志が伝わったのかな。

誰だって言いたくないことの二つや三つ、あるよね。

それを無理に聞いたり、口外したりするほど、私は無神経じゃない
よ。

「で、ゼウオンはどうして此処に来たの？」

「あの怪物退治は、俺の仕事だったんだ。だから来た。」

えっ、マジっすか？！ビツクリ。

じゃ、ギルドから来るっていった冒険者とやらは、ゼウオンのこ
と？

驚く私に彼はコルエンの村長夫妻に様子を見てきて欲しいと頼まれ
たこと、レギと会話をしたことなんかを話してくれた。

「あちゃー、村長さんたちには大分心配させちゃったな……悪いこ
としちゃった。すぐ戻れたらいいんだけど……私、体がこんなだし……」

うなだれる私の頭を、ゼウオンが優しくなでてくれる。
なぐさめてくれてるのかな……ときどきとき……

「村長には、俺達の無事と怪物退治の完了を、ギルドの伝達石を使って伝えてある。気に病むことは無い。ユリーナとレギが回復するまで、ここでゆっくりしよう」

「ありがとう。ゼウオンには何から何までお世話になりっぱなしで体が元通りになったら、是非お礼させてね」

「礼はいらない。むしろ、俺の方こそ礼を言うべきかもな。」

「え？どして？」

「あの怪物は予想以上にヤバかった。ヤツは地のガードを張っていて、かなりの強敵だったってレギに聞いたんだ。予定通り俺が一人で相手していたら…やられていたかもしれない」

「……嘘。」

「ホント。ユリーナが放った異質な魔法の波動は俺も感じた。あんなに凄まじい魔法をくらってもヤツは攻撃してきていたほどだ。…助けられたのは俺の方だ。」

「え…と、じゃあ、おあいこ？」

小首をかしげてゼウオンを見ると、彼はちょっと困ったような顔をして、横をむいてしまった。なんで耳が赤いのかしら？

なんだか眠たくなってきちゃったな…うとうとする…

レギも薬湯飲んで眠ったっていつてたし、あの薬湯って催眠効果もあるのかな…それとも夜だから眠いのかな…

私は次第に頭がぼんやりしてきてしまい、ゼウオンに凭れたまま、眠ってしまった。

うつらうつらしてきたユリーナは、そのまま俺に凭れて小さく寝息を立て始めた。

――抱きしめたい

そんな衝動にかられる。

この柔らかな身体を思い切り抱きしめて、しつとりと艶やかな黒髪を梳き、滑らかな頬に触れ、白く細長い華奢な首に唇を寄せて――

待て待て俺。

彼女は怪我をしているのに、しかも動くことすら儘ならない状態なのに。

何を考えてるんだっ。

第一、出会って間もない少女のような彼女に対してこんなこと考えるなんてっ。

でも…

こうして彼女に触れていると、身も心も暖かくなる。

さっき、薬湯を口移しで飲ませたのは自分の欲望も混じっていたと、自覚はしている。

薬湯が彼女の口の端から零れるの見た時、ドキっとして…つい、そのまま口移ししてしまったんだ。

拒むかと思いきや、彼女はすんなりと受け入れてくれた。

多分、意識を取り戻したばかりで、正常な判断ができていなかったんだろうな。

唇を離して彼女を見た時、正直押し倒してしまいたくなった。

あの潤んだ瞳は反則だろ！

なんとか自分を抑えたが。なんだってあんな眼差しをするんだ、ユリーナは。

薬湯を飲ませ終わった後も、なんだかユリーナと離れがたくて、まだ体が動かないだろうとか尤もらしい言い訳をして、彼女を引き寄

せた。

ユリーナの体温を感じながら、じんわりとこみあげてくる感情に浸っている

「ゼウオンって、その…もしかして、狼だったりする？」

ユリーナの言葉に、冷水を浴びたように気持ちが冷えた。

そうだった、俺は…拙いことをしてしまったんだ。

あの時は夢中だったけど、ユリーナはしっかりと銀狼の俺を見ている。

セラシアとヴァルバリド亡き今、俺が銀狼族だと知るものはいない。

秘密を守るには…ユリーナの息の根を止めることだ。

いや、そんなことは絶対できねえ！

ユリーナを殺すくらいなら、いつそのこと……。

……え。今、俺、なんて思った？

自分よりも、この出会ったばかりの少女の方が大切なのか？

そんな馬鹿な…

自分で自分に驚いていると、ユリーナがサファイアのような瞳を不安げに揺らして俺を見ていた。フツと一息つく。

「忘れてくれ」

それしか言えない。

説明するわけにはいかない、だが、当然「どうして？」と聞いてく

るだろう。

どう答えればいいんだろうか？

だけどユリーナは予想に反して何も聞かず、ただ「わかった」と言っただの。

狼なんて見なかったよ、と言。

誰にも言わないと言外に伝えてくれた。

かなり驚いたが、嬉しかった。

ユリーナの優しさが俺の心を掻き立てる。

その時、何故か俺は父さんの最期の言葉を思い出していた。

・ ・ ・ いずれおまえにも ・ ・ ・ 唯一無二の ・ ・ ・ 想い人が ・ ・ ・ 現れるだろう ・ ・ ・

第17話、初めての口付けはミントの味でした（後書き）

ゼウオン暴走（笑）

今後も暴走する予定です。

ワケありな出生の彼、本性はエロ！（対主人公限定）

心も体も狼なゼウオンを温かく見守ってやってください。

第18話 下山はドキドキ 村人さん総出のお出迎えでした

話し声が聞こえてくる

「美味かったあ。こんな実が北の地にはあるんだ、オイラ知らなかったなあ」

「あまり他の地には出回ってないからな」

「ヌーエンに売ってればなあ、そしたらユリーナに買ってもらえるのに」

何の話？今のはレギの声だね…？

「…ん…レギ？」

私の声は寝起き独特の掠れた声だった。

起き上がってキヨロキヨロと辺りを見回すと、いつの間にか、空が白み始めてる。

夜明け間近みたい。

「ああ、起きたのか。体の調子はどうだ？」

ゼウオンが私の方へ振り向き、声をかけてくれた。

「もう大分平気みたい。右足が少し痛む程度かな。ね、今、何か話してなかった？」

「ゼウオンにさ、グクコの実が好物なんだって言ったら、味が似てる実なら持つてるって言って貰ったんだよ。それが美味くて」。

でも、北の地にしか無いんだってさ。ちえ」

キミはグクコの実中毒なんですかい?! レギさんよっ

「……はあ、レギ。すっかり元気みたいで私嬉しいわ……」

「ま、ね。ユリーナも回復して良かったな」

レギはパタパタとこちらへ飛んできて肩にとまった。

そんな私達をゼウオンは苦笑しながら見ていて、なんだか気恥ずかしいかも。

日が昇り、下山するときにゼウオンが背を向けて私の前で屈むと

「足、まだ痛むだろう。おぶされ」

いやいやいやつ、それは出来ないツスよ!

だって、そんな、ゼウオンにくっ付けるのは嬉しいけど、心臓がもたないし!

絶対ドキドキいっちゃうし! 背中越しにそんなのバレたら恥ずかしいじゃん!

「だ、大丈夫よう。心配しなくても、もう歩けるよ?!」

「いいから。せつかく治りかけてるのに無理して歩いても足の怪我が悪化する。ほら、早く」

そういつて、せかすゼウオン。

「う……う……」

「おぶさるのと、担ぎ上げられるのと、どっちがいいんだ?」

きゃーっ、担がれるのは勘弁です！

「おぶさる方がいいです…よろしくお願いします…」

ためらいながらも私はゼウオンの肩に手をかけた。

広い肩幅、広い背中。首も腕も、遅い。

腰は引き締まっていて、長い足も筋肉に覆われているのが服越しにでも分かる。

帯剣してる長剣は重量感があって、私なんか2、3振りしか出来ないだろうな。

ゼウオンの風貌は、紛れも無く一流剣士なんだってことを物語っている。

そういえば…私をおぶってたら怪物が襲ってきたときゼウオン戦えないじゃん。

それはマズイでしょ！

「ゼウオン、私やつぱ自分で歩くよ！」

慌てて遅い背中から降りようとしたけど、降ろしてもらえなかった。

「どうしたんだ、急に」

「だって、怪物襲ってきたらゼウオン剣抜けないじゃない。」

「ああ、そんな心配しなくても、怪物はあまり居ないさ。もし、襲われたらレギもいるしな」

「え？レギ？山火事になっちゃうじゃん！！」

レギの火炎って結構強烈でしょ？！

あんなのここで巻き散らかされたら、火事間違いなんでしょう、っ

て思ったのに。

レギは羽をパタパタさせて大笑い。
ゼウオンも肩を震わせて忍び笑い。

「ちょっと、なによ、二人とも？」

なんで笑われるのよう？！

意味が分からなくて頬を膨らませたら。

「だあって、ユリーナが頓珍漢なこと言うからさ、オイラの火炎は朱焰族の能力なんだから魔法と似たようなもん。狙った対象物だけにしか効かないって、ぐふふふつ」

あ、そか。なるほど。

「山火事って…くつくつく…」

ゼウオンまで。ヒドイ…。

「もう、そんなに笑わなくってもいいじゃないっ」

「あー、悪い。つい、な」

ゼウオンが首を回して私を見る。

ちょうど、彼を覗き込もうとしていた私は、至近距離で紫の瞳とバツチリ目があっちゃった。

ドキッ。

咄嗟に俯いて顔を見られないように彼の肩におでこを乗せる。

ううゝ顔が熱い…今、私、絶対真っ赤だ。レギの瞳に負けないくらい赤いかも。

このドキドキがゼウオンにバレないといいな…はう。

そのまま怪物と遭遇することもなく、彼の背に身を任せて山を下りた。

山とコルエン村とを繋ぐ道が見える所まで下山すると、なんと村人達が集まっていたよ。

昨日、ギルドから任務完了の知らせを受けた村長さんが村人にも伝えただった。

村長夫妻は私達を見ると駆け寄ってきてくれたので、私はゼウオンに下ろしてもらい、心配させてしまったことのお詫びをした。

ゼウオンは先程採っておいだグシの花を村長さんに渡して、山頂でのことを話しはじめると、騒いでいた村人さん達が静聴し始めた。

話を聞き終わった村人さん達は一様に驚いた顔をしてた。

裏山の怪物がグシの花を喰い漁り、力をつけているとは聞いていたものの、そんなに強力な怪物だったのか…と驚愕を隠せない感じだったけど、これからは今まで通りグシの花を採取できると知って大喜び。

死活問題だったんだから、その喜びようは凄かったよ。

こんなに喜んで感謝してもらえるなら、命掛けで戦ったかいがあったってmondだね。

本当は命なんて掛ける予定はなかったんだケド。あはは。

実は戦利品として、私もグシの花を根っこごと幾つか頂戴して亜空間にいれてあるの。

村人さん達の専売特許品かもしれないけど、これぐらいは良いよね。てへへ。

山から村までの道のりも結局ゼウオンにおぶってもらった。

村人さんたちも居るのでメチャ恥しかったけど、足を怪我している

のは事実だからゼウオンに甘えちゃったの。

彼の背中越しから伝わる温もりは、私を甘く切ない気持ちにさせる。面倒見が良くてイケメンで。戦っているところは見たことないけど、出で立ちや雰囲気から、相当な手練だと分かる。

こんなイイ男は女性がほつとかないだろうな……。私みたいな変わり者の小娘なんて、相手にしてもらえないかも。

そもそも彼には恋人いるかもしれない……。…。

おぶってくれてるのは、単に純粋な親切心からだけだろうしさ。ゼウオンはギルドの任務を終えたんだから、たぶんここでお別れになっちゃう。

あ、なんか落ち込んできた……。

もうっ、こんなこと考えるのはやめよう。暗くなってもいいことないよね！

今は、これからのことだけを考えよう、うん。

元気になったらヌーエンに行くんだ。

ヌーエンは大都市だっていうから、ギルドに登録する前に、ちょっと観光でもしちゃうかな。

レギにグクコの実を買ってあげて。ついでにいっぱい食べ歩きしちやおっと。(別名・ヤケ食い)

色々なお店を見てまわって、いっぱいお買物もするんだ。

そんなことを考えていたら、コルエンの村に着いていた。

私はゼウオンにお礼を言っと、村長さんの奥さんが用意してくれた部屋で早々に休ませてもらった。

もう一晩ぐっすり眠れば怪我も魔力も全快するだろう。

まだ日が高い時間だったが、私はベッドにもぐり眠りについたので

した。

ヘアグ生活50日目

スッキリとした目覚めだった。やっぱりベッドは快眠できるよね。
うーん、と伸びをすると、レギも目が覚めたみたい。

「おはよう、レギ」

「おはよう、調子はどう？ ユリーナ」

「バッチリよん」

びよん、とベッドから降りて身支度を整えると、亜空間から薙刀を
だす。

「まだ夜明け前だね。レギ、朝練するから、お願いね」

「ええ〜?! 大丈夫なのかよ〜?」

「大〜丈夫よ! それにどれだけ体が動くか試さないかね〜」

「了解。裏山へ行く道の途中に手頃な場所があったな。そこまで
行こうか」

うん、と頷きレギと共に村長さんの屋敷を出た。

一通り薙刀の型をこなすと、いつも通り「風」の魔力を薙刀と自分
にかける。

「ユリーナ、石、何個?」

「手始めに6個」

レギが上げた石を切る。
スパパパスパスパ

「お、ユリーナ腕上がってるじゃ〜ん」

「そお？なんか、あの怪物とのことを思うと、私まだまだなっ

て」

「ん〜…アイツは例外級だったけど…ま、いいや。次は？」

「んじゃ、倍の12個」

「よしてきた」

再びレギが石を上げる

垂直に落ちてくる石の位置を見極め、地面を蹴り、薙刀を振るう。

一振り - - 石が4個両断

手首を反しもう一振り - - 石が5個両断

残り3個は突きで粉碎

12個の石は全て中った。

だけど、まだまだ。

もっと、もっと強くならなきゃ…あんな思いをしないように…

!!!!

何かが後方右側から飛んできたので、躊躇い無く薙刀を振るう。

スパッ

切ったものは、柔らかいボールのようなものだった。
なに、これ？

「お見事」

この声は…ゼウオン？！

「ゼウオン？！どうしてここへ？」

彼は微笑みながら姿を現した。

朝っぱらから無駄にカッコイイな～うう。

「俺が借りてる部屋の窓からユリーナとレギが出かけるのが見えたんだ。明け方にどこに行くんだと思って。体はすっかり良いみたいだな。良かった。」

「うん。おかげさまで。昨日は色々ありがとう。ん～…なんか変なところ見られちゃったな～…恥ずかしいよ…」

「恥ずかしい？どうして？」

「だって…私、まだまだ未熟者だから…薙刀も魔法も、もつと鍛錬しなきゃギルドの依頼はこなせないよね？」

そう言うと、ゼウオンはジッと私を見た。

思わず俯く。

だって、ゼウオンが私を見つめてるだけでもドキドキなのに、一流剣士の彼に私の未熟な薙刀を見られて、恥ずかしいよう…

はああ、とゼウオンはため息をついた。うつうつ…

「ユリーナ。オマエは強い。」

え？今なんて？

聞き間違いかと思って顔を上げてゼウオンを見る。

「世辞でも何でもない。正直あれだけの魔法がつかえるのに武器も扱うとは思わなかった」

まいったな…とゼウオンが呟く。

「え…本当？私、ギルドに登録してもやっていけるかな？」

「ああ、充分だ。俺はガキの頃からギルドで稼いできたから、色々な登録者を知ってる。ユリーナより力の無いヤツだつて2ツ星や3ツ星の依頼をこなしてるぜ」

そつかあ、私、なんとかなりそうなんだね！良かった、嬉しい！思わず満面の笑顔になる。

すると、何故かゼウオンがそっぽ向いちゃった。

「ゼウオン？どうしたの？」

「いや…なんでもない…」

訝しげにゼウオンを見ていると、レギが近くに飛んできた。

「ゼウオン、あんまりユリーナをおだてるなよ。朝練しなくなっちゃった」

「何言ってるの？レギったら。朝練はするわよ。慢心は己を駄目にするって分かってるもの」

レギと軽口叩いていると、ゼウオンがちょっと真面目な顔をしてこちらを向いた。

「なあ、ユリーナ？」

「なあに？ゼウオン」

「その武器、ちよつと見せてもらえるか？」

「どうぞ。薙刀っていうの。」

薙刀ってそんなに無いみたいだしね。物珍しいのかも。

「槍とは違うのか。独特な刃なんだな」

薙刀を手に取り繁々と見るゼウオン。

「うん、剣より軽いし、柄が長いから守備範囲を広くとれるの」
「なるほどな」なあ、ユリーナ。レギ。」

呼ばれた私達は「なあに？」とゼウオンを見る。

「俺と組まないか？」

「……え？」

オレト クマナイカ

それって…スカウトですか？！

えーと、今は薙刀の話をして、その前は私でもギルドでやっていける腕があるって言うてくれて…組むってことは、ゼウオンとギルドの依頼をこなすってこと…よね？

私が逡巡していると、深く考える様子もないレギがサラリと答える。

「別にユリーナと一緒にだったらオイラいいよ。あ、北の地に行くことがあったら、また昨日の実をくれよ」

うおい！レギさんよ！

「はははっ、わかった。ライの実、気に入ったんだな。ユリーナは構わないか？」

どうしよう…ゼウオンと一緒にいたいとは思っけど…

「あの、どうして私達と組もうと思ったの？」

背の高いゼウオンを見上げるように見つめる。

私の身長は163cmだから小さくはないと思うんだけど、ゼウオンとは頭1つくらい差があるから、彼は180cm以上はあるんじゃないかな。

「ユリーナもレギも俺には無い能力がある。5年前、父が死んでから今までずっと一人で依頼をこなしてきたんだが…今回の件で思ってたんだ。仲間がいた方がいい。」

今までゼウオンって一人で依頼受けていたんだ…お父さん亡くなっているなんて…

私もお母さんが亡くなって悲しかったけど、お祖母ちゃんもいてくれたし、友達もいた。

でもゼウオンは5年間（ヘアグ時間だから地球だと約10年間かな）ずっと一人だったんだ…

でも、私達に「組もう」って言うてくれたってことは、この短期間で実力や人柄を多少なりとも信用してくれたってことよね？

どうしよう、なんかとっても嬉しいな。

「分かったわ。私、足手まといにならないように頑張るね。これからどうぞよろしく願います！」

師匠に弟子入りする新人のごとく、私は勢いよくゼウオンに頭を下げた。

「ああ、こちらこそ宜しくな。」

そういつてゼウオンは手を差し出してくれたので、私は笑顔で握手した。

レギが私達の握手してる手の上に乗って「よろしく」と言ってくれる。

気づけば、もう、すっかり日が昇っていた。

私達三人はコルエンの村へと戻るべく、揃って歩き出したのでした。

第18話 下山はドキドキ 村人さん総出のお出迎えでした (後書き)

主人公はゼウオンの行為をただの親切だと思っ
てますが、実は下心
満載だったりして (笑)

レギは素知らぬフリして内心で笑って
ます。

主人公がそれに気づくのはまだ
先のこと (笑)

第19話 大都市ヌーエンに到着しました

翌朝

村人さん達に見送られ、私達はコルエンの村を発った。

昨日はコルエン村の中でゆっくりと過ごしたので、気力・体力バツ
チリv

軽快に馬を走らせながら、ヌーエンまでの道を進む私達。

ゼウオンが言うには、途中で通る森の中には怪物が多く出現するけど、それ以外の場所ではそんなにいなかったたので順調にいけば5日くらいでヌーエンに到着出来る、とのこと。

確かに怪物にはあまり遭遇しない。

その方が助かるんだけど、シブグリールを発つてすぐのエンカウント率は何だったんだ？

正光になったので、進行を止めて昼食休憩をとることになった。

本日のランチはテリヤキ風に焼いたお肉と葉物野菜をパンに挟んだものと、クラムチャウダー風のスープ（シチューもどきのアレنجジだったりする）それと、マンゴスチンっぽい果物。これ、好みの味の果物だからいっぱい買っちゃったんだ。

ゼウオンは好き嫌いは無いらしいので私と同じものを、レギには細かく切ったテリヤキ肉と燻製肉。

あ、コルエンにはグクコの実は売ってなかったんだよね。ヌーエンでいっぱい買うことを約束させられちゃったよ…。

テリヤキサンドもどきを一口食べたゼウオンが一瞬とまった。

あ、どうしよう、テリヤキ味って万人受けすると思ったけど彼の口には合わなかったのかな…って不安になってたら

「うまい」

と、一言。

「ホント？」

「ああ、これ凄く美味しいな。街の飲食店のものより美味しいよ」

そう言って笑顔でテリヤキサンドもどきをバクバクたいらげるゼウオン。

ああ〜っ、嬉しすぎる！料理得意で良かった〜。

ヘアグに醤油の味がする調味料（ソルゾイとかいう名前だったかな？）があつて良かった〜。

「ユリーナの作る餌って珍しいもんばっかだけど、全部美味しいよな〜。珍しい物好きなオイラには最高〜」

レギも一応（？）褒めてくれたけど「餌って言わないで〜食事って言つてよ〜」って笑いながら言い返した。

こうやって誰かと一緒に食事をするのは楽しいな。

自分が作った料理を美味しいって言ってもらえるのって嬉しいな。

今夜の夕食は何にしよう？

昼食を終えたばかりなのに、頭はもう夕食のメニューを考えていたのですた。

道中、たまに遭遇する怪物はゼウオンとレギが倒してくれたので、私はほとんど戦わずにすんじゃってるの。

ゼウオンは思ってた通り凄腕の剣士で、その剣さばきは隙が無く、流れるように怪物を倒す。

しかも魔法も使えるし。

確かにこれだけ強かったら、今まで一人でやってきけていても問題なかったのかもしれない。

組まないかって言ってくれたのはゼウオンだけど、仲間にしてもらえてラッキーなのは私の方だよ。

でも、いつ解散を言い渡されるかなんて分からないんだから、役に立つように頑張ろう！

そんな調子で私達はヌーエンへと進んで行き、コルエンの村を出発してから5日、とうとう目的の大都市に到着したのでありました。

ヘアグ生活56日目　夕暮れ前

「うわあ…大きな街」

初めて目の当たりにする大都市にただただ唖然。

レンガでできた3階建てくらいの建物が軒を連ね、道は石畳で舗装されている。

沢山の人々や動物（魔物とか精霊なのか、ペットとか家畜なのか、よく分かんない）が行き交い、活気にあふれている。さながら中世ヨーロッパのような街並みだ。

こういった大都市近くでは外に馬を繋げておくと盗まれる可能性が高いというので、馬の手綱を引きながら街を歩く。（街中は騎乗禁止が常識らしい）

何の迷いもなくゼウオンがスタスタと歩いていくので、それに付いて行くと、ナイフ・フォーク・ベッドの絵が描いてある看板を掲げた大きな建物の前まで来ていた。

「今日はこの宿で休もう。部屋と厩舎の手続きをしてくるから、レギとユリーナはここで待っていてくれ」

こくん、と頷く。

ここ、宿屋だったんだね。いわれてみるとホテルみたいにも見える。

「ね、レギ。ヌーエンって大きな所だね。さすが大都市」

「だな。オイラも上空からしか見たことがなかったけどな」

「え？！そうなの？私、レギも街とか色々行っていて、お店とかにも詳しいのかと思ってたよ」

「んなワケないじゃ〜ん。オイラ基本的に下に降りないし。地形とか、常識とかなら分かるけど」

そうだったんだ。

言われてみれば魔鳥はあんまり人間とは共存生活しないんだっただけ。完全に勘違いしてたわ。

私とレギだけだったら、宿どころか肝心なギルドさえも見つけられず迷子になっていたかも……

ゼウオンが私達を仲間にしてくれて、本当に良かったよ〜。

しみじみと自分の幸運をかみ締めていると、複数の視線を感じた。なんだか、私、見られてる？

宿屋に到着するまではゼウオンの背中と馬の手綱しか見てなくて気づかなかったけど、魔鳥（しかも金魔）と一緒に黒髪藍目は目立っていたかも…

「ねえ、キミい。どこから来たの？」

いきなり、声をかけられた。

なんだかニヤニヤしてチャラそうな若い男の人達。

「……お答えする気はありません」

無表情で言い放つ。こういった無意味な質問には答えたくない。私の冷めた態度にレギも反応したのか、男達を金ルビーの瞳でギツと睨んでくれる。

その睨みに一瞬怯んだ態度をみせたけど、男達はすぐにニヤニヤ顔に戻って私との距離を詰めて来た。顔と顔の間は20cmもない。

「キミ、ホント可愛いねえ。」

男達は無遠慮に私の全身をジロジロ見てくる。

…気持ち悪い。サクッとヤッとくか。

無表情を保ちつつ手に魔力を込めた時

「俺のツレに何の用だ？」

頭上から、凍てついた声がした。

「ゼウオン！」

振り向くと、無表情ながら殺気満載のゼウオンがいた。

えーと、なんだか怪物と戦っている時よりオソロシイかもしれない……
そう思ったのは私だけじゃないみたいで、殺気を向けられた男達は、
しどろもどろに何か言い訳じみたことをボソボソ言っ、足早に去
って行った。

男達の後姿を睨みながら「全く……油断ならねえな……」と呟くゼウオ
ン。

「あの、ありがとう。ゼウオンが来てくれなかったら、あの人達に
電撃くらわせるところだったわ」

痴漢撃退グッズのスタンガンをイメージして魔力を込めていたんだ
けど、ゼウオンが来てくれたから余計な魔力を使わずにすんだよ。

「デングキって？」

「あ、「雷」の魔法のこと。コルエンの裏山山頂の怪物にドカン
と放った魔法よ。」

笑顔で答えると、何故かゼウオンは困った顔をした。

「……ユリーナ……あれを街中で人に放つつもりだったのか？」

「うん。でも威力は抑えるつもりだったけど？」

「（マジかよ?!）あれは異質な魔法だから、あまり人前では使わ
ない方がいいぞ。」

そっというもののかな？

確かに魔法は誰でも使えるわけじゃないみたいだし、異質な魔法っ
ていうのは知れない方が良くのかも。

「うん。わかった。よほどの緊急時以外では使わないようにするね」

そう言うときゼウオンはホツとした表情になった。

「是非そうしてくれ。だが、レギも居たのに声かけるヤローがいるなんて…宿屋の前じゃなかったら　を××してシメてやったのに」

ん？今、サラツと怖い発言したような…いやいや、きっと気ノセイ、気ノセイだよ。うん。

「とにかく部屋はとつたから。馬はあつちの厩舎な。」

何事もなかったようにサクサクつと私達を誘導するので、今の台詞については完全に聞こえなかったフリしたけどゼウオンがチャラ男達を追い払ってくれたのは紛れもない事実。

仲間になった私達が厄介ごとに巻き込まれそうだったから助けてくれたに過ぎないんだろうけど。

なんか嬉しいゾ。うふふつ。

内心ニヤケながら、彼の後についていったのでした。

ゼウオンがとってくれた部屋は、廊下からの入口が一つだけ入って見ると更にドアがあつて、2つ部屋に分かれていた。

部屋の中に部屋がある。

どうやらこの宿はギルド登録者ご用達の宿みたいで、私達みたいに仲間連れでギルドの依頼を受ける冒険者達がこういったタイプの部屋を使うのだそう。

部屋の中は、簡素なベットと書き物机に椅子しかないビジネスホテルのシングル部屋のようだった。

庶民の私には無駄に広い部屋よりも、こういったシンプルな部屋の

方が落ち着くな。

「な、ユリーナ、市場行かないの？グクコの実は？」

あ、そうだった。外はだんだん薄暗くなってきた。寛いでないで買い物に行かないと。

「そうね、約束は守るわ。でも…市場って何処にあると思う？私達、絶対迷子になると思わない？」

「場所さえ分かれば迷わないけど。ここはゼウオンに道案内を頼んだ方がいいよな」

市場には当然たくさんの方がいるだろう。

さっきみたいな目にあうのは御免なので、シプグールの防具屋のおじさんからオマケでいただいた青紫のローブを亜空間からだと、頭からスッポリとかぶって部屋を出た。

隣の部屋のドアをノックすると、ゼウオンはすぐに顔をだしてくれて、市場への道案内をお願いしたら二つ返事で引き受けてくれた。助かります。

「食品市はここから少し離れた場所にあるんだ。一時間ほど歩くが構わないか？」

「もちろん、平気よ。ゼウオンの時間を使わせちゃってゴメンね」

ゼウオンは優しく微笑むと「気にするな。」と言ってくれた。

イケメンの笑顔は心臓に悪いです…。

赤らむ顔をローブの影で隠しつつ、私達は夕闇の街へと歩き出したのでした。

第20話　手をつないでもらって有頂天になりました（前書き）

視点が主人公　ゼウオン　主人公になります。
心情描写メインです。

第20話　手をつないでもらって有頂天になりました

この世界は主光と副光2つの太陽があるので、完全に日が沈むまでは割りと明るい。

大勢の人や動物が行き交う街は喧騒に包まれている。

そんな中、食品市へと向かって10分くらい歩いたところで。

「ヌーエンって、どーしてこんなに人がいるんだ？オイラちょっと窮屈だよ。上に行く。」

レギが私の肩から離れて空へと飛んでいった。あーらら。確かにこれだけの人混みの中では、レギも居心地悪いでしょう。さつき、人とすれ違った時も少しぶつかっちゃったみたいだね。

「あー、レギ行っちゃったね。」

「ま、気持ちは分かるがな。」

私とゼウオンは顔を見合わせて苦笑い。

ヌーエンは大都市だけあって人口密度も高く、今は時間帯的にも家路につく人や夕食材料を求めている買い物客とか、とにかく人が多い。ゼウオンと逸れたら迷子決定だわ。気をつけなくちゃ。

と、思っていたのに、人の流れで視界が少し遮られてワタワタと焦る。

「あ、ゼウオン、待って。」

咄嗟に彼の服を掴んでしまったら、ゼウオンが立ち止まってくれる。

「あうつ、服、掴んじやってごめんね、逸れたくなくて。迷子になったら困るう……」

「いや、俺の方こそ、すまん。」

そう言いながら、彼は服を掴んでいた私の手をとると、そのまま握ってくれて

「こうすれば逸れないだろ。迷子防止」

って、手をつないだまま歩き出した。

ええええ〜っ、これ、夢じゃないよね?!…夢じゃないよ!

今、私、確かに彼の固めで大きな手に引かれて歩いてる!

これって、もしかして、ラブラブな二人が手を?いで街デートってなシチュエーション?!

きゃ〜〜っ (舞い上がりすぎ)

ゼウオンと少しの間とはいえデートっぽい雰囲気味わえるなんて! 神様、仏様、監視者様、ありがとうっ。ヘアグ生活万歳! (浮かれすぎ)

さっきのチャラ男達は気持ち悪いだけで、近寄るなっ (怒) って思ってたけど。

ゼウオンには近寄って欲しい。物理的距離も精神的にも近寄りたい。

彼は…おそらく、あの銀狼と深い係わりがあって。でも、それを知

られてはいけない何か深い事情があるみたいだけど。

もちろん私から事情を聞こうとは思わないけど、もし彼が話してくれたら喜んで聞くし、受け入れたいと思う。

例えばゼウオンがああ銀狼だって言われたとしても、きっと私は受け入れる。

レギには『恋人は人間がいい』とか言っちゃったけど、あんな銀狼だけは特別なんだよね。

ゼウオンと銀狼。両者にときめいちゃう私はもしかして気が多い？

ゼウオンと銀狼が同一人物だったらしいのになあ。

チラッと彼を見上げてみる。下から見てもカッコイイ。

惹かれてやまない紫の瞳、少し薄めの唇。

はっ、そーいえば！

口移しで薬湯飲ませてもらったのって、あれって、キキキ…キスって言う？

唇を重ねたのはゼウオンが初めてだけど、あれは…キスにカウントできない、かな…。

彼にとってはただの緊急措置みたいなもんだろうしいく…。くすん。

それでも、あの時のことを思い返すだけで胸がキュッてなる。

山頂からコルエンの村まで、おぶってくれた時の背中広さ

よろしく、と言って握手してくれた時の手の大きさ

私の作った食事を美味しいと食べてくれた時の笑顔

怪物と戦っているときの鋭い眼差しも、眠っている時に伏せられた

睫の長さも

そして何より、アメジストのような瞳が

私を惹きつける。

彼の全てに、存在そのものに、心が震える。

でも

こんなに彼でいっぱいなのに、たぶん彼は私をただの仲間だとか
思っていない。

いくらゼウオンを想っても…しがない小娘の、しかも異世界人って
いうワケありな私なんて…受け入れてもらえないだろうな。

今はただ一緒にいたいと思うけど、彼がもう仲間は要らないと言い
出したら…私は彼から離れなければならないのかな…。

恋愛って幸せなことばかりじゃないな

恋愛って結構辛いな

それでも、私はやっぱり幸せだよ

惹かれてやまない相手の近くにいられるんだから

ユリーナと手を繋いで食市場までの道を歩く。

「逸れたくない」と彼女が言ったのを幸いに、迷子防止という口実
のもと公然と彼女の手を繋いだ。

このままずっと、離したくない

彼女の手は小さく柔らかい。

こんなに可愛らしい手をしているのに、ナギナタという武器を振る
い強力な魔法を放つ。

魔戦士としての彼女は凜としていて、頼もしい。
でも、普段の彼女は拗ねたり笑ったりと表情豊かで、ついつい目で追ってしまう。

少し変わった発言をしたり（オモシロ発言が多い。たいてい笑ってしまう）

今まで食べたことのない食事を作ってくれたり（でも味は全部美味しい）

そんな意外性も彼女の魅力となって俺を惹きつける。

意外といえど…彼女は少女のように愛らしい容姿なのに、体は立派に大人の女性だ。

コルエンの山頂から下りるときに彼女をおぶったのは、足の怪我を気遣ったのもあるけど彼女に触れていたかったという気持ちもあったんだ。

戸惑いながらも俺の背に身をあずけてくれた彼女。

…ヤバイ。胸が背中にあたってる。

ユリーナの胸、大きいな…これは予想外だ…

なるべく背中と下半身を意識しないようにして下山したってことは俺だけの秘密。

初めてユリーナを見た時から、俺は彼女に惹かれている。

今まで女に興味はなかったのに、彼女だけは特別だ。何故、こんなにも魅せられるのか自分でも分からない。

だが、あの声を聞き、サファイアのような瞳を見た瞬間、心を捕らわれてしまった。

更に彼女を知るにつれ、この想いは日に日に強くなっていく。

でも

彼女は人間で、俺は魔獣だ。

異種族間の恋愛や婚姻はあるが、事例は少ない。

異種族間では子を生ずることが非常に難しいから、実際には生涯添い遂げるのが困難なのだ。

俺が男としてユリーナを想っていると分かったら、彼女はどのようなだろうか？

魔獣の、しかも出生がいわく付きの俺なんか受け入れてくれないだろう…

だったら、この想いを抑えて今はただの仲間としてそばに居た方が
良い。

俺は心の中で、そつとため息をついた。

食市場に到着した私とゼウオンは、手を？いだまま市場内を歩いていた。

食市場はかなり広くて、お店もたくさんあつて、色々と目移りしちゃう！

せわしくなくキョロキョロする私に「ショーがないなあ」と苦笑いをするゼウオン。

だって、シプグリールの市場よりも広くって、食材の種類も豊富なんだもんっ

料理好きの私にはパラダイスですよ、この市場！

でも、うかうかしていたら、グクコの実を買う前にお店が閉まつち

やうかも。それはマズイ。

急ぎ足でグクコの実を扱っているお店へと向かい、到着するやいなや

「グクコの実、あるだけ全部くれ」

いきなりゼウオンの買占め発言です！

啞然として彼を見るお店のおじちゃんと私。

「にいさん、あるだけってーと、麻袋2袋はあるから…小金貨1枚分はあるけど…そんなに大量にいるのかい？」

おそるおそるといったカンジでおじちゃんが言うけど、ゼウオンは涼しい顔で懷から皮の小袋を取り出し、小金貨を差し出す。

「うっ、あぁっと、まいどありっ」

おじちゃんは信じられないといった顔で麻袋1袋を私達の前に置き、それから奥に行って更にもう1袋を持ってきた。

ゼウオンは、これまた涼しい顔で袋2つを右肩に乗せ、左手を私の右手と繋いで颯爽と歩き出す。

「ちょ、ちよつと待って。」

立ち止まってくれたゼウオンの顔と肩の麻袋を交互に見ながら、困惑する私。

「ん？どうした？」

「どうしたって…どうしてそんなに大量に…って言うか私が買うべきなのに、ゼウオンに買ってもらっちゃったら申し訳なさすぎでし

よ？」

「そんなことないだろ？これはレギ用なんだから。仲間のものを買うのは当然だし、何回も買いに来るよりも、まとめて買った方が効率的だしさ。ユリーナの亜空間に入れておけば問題なし」

そう言つて微笑む彼は…どれだけ私の心臓を壊すんですかつ、と苦情を言いたいくらいにカツコイイ。麻袋担いでいてもカツコイイ。なんだかこのまま納得していいのかな、と思つたけど。小金貨渡しても受け取ってくれないんだろうなあ…。

「う、ん。ありがとう、ゼウオン」

彼の好意に甘えてしまふことにしちゃいました。近々何らかの形でお返ししよう。

「ね、亜空間は市場内では出さない方がいいんだよね？麻袋、重くない？」

「これくらい大したことないさ。」

「そつかゝ、凄いね。私だったらすぐに根をあげちゃうなあゝ。亜空間道具袋が使えなかったら旅できないかも。」

「世の中、空間魔法を使えない者の方が圧倒的に多いんだぞ？」

「ううゝ、そうなんだけどさゝ。」

メルーロさんも「亜空間を道具袋にする魔法は大変便利だけど、使い手は多くないんです」って言つてたつけ。

「でも、ゼウオンも亜空間に色々荷物仕舞つてるよねゝ。剣とかお金とかは亜空間に入れないの？」

「ああ。ユリーナは亜空間からの物の出し入れがかなり素早いから問題ないが、俺は少し時間がかかるんだ。敵を認識してから剣を取

り出していたら遅れをとつちまう。金もな、物を買ったびに魔力使うのはもったいないし、人前で簡単に魔法は使わない方がいい。ヘンなやつに見られて面倒ごとに巻き込まれる可能性だってあるんだ」

「そうなんだあ。」

「ま、ここみたいな大都市だとスリも多いからな。盗難防止にも亜空間は便利だから、時と場合によるな」

「ふう〜ん、なるほどね。私ももっと注意深く行動しなくちゃ」

こんな風に手を繋いでお話ししながら歩くのは、じんわりと幸せを感じる。

会話の内容に色気はないけど、他愛のないおしゃべりでも充分嬉しいの。

ずっと一緒にいたいな…

食市場を抜けて裏路地に入ると、人通りが途切れた時を見計らって亜空間を出しグクコの実の麻袋をポイと放った。

ちょうどタイミング良くレギが空から降りて来たので、グクコの実を大量購入したと伝えると、朱金に輝く羽をパタパタさせて大喜び。

「すっかり暗くなっちまったな。夕餉時か…」

「私、食べ歩きしてみたい！」

「え〜…、オイラ人混みは勘弁…」

「俺はこの辺りで食っていつでも宿に戻っても、どっちでも良い」

「じゃあ、ジャンケンで決めよう！」

こういう時は公平にジャンケンだよな。

「「じゃんけん??」」

ゼウオンとレギが見事にハモった。

「あれ？ジャンケンって知らない？（ヘアグには無いのかな？）」
「知らない」

お二人さん、またハモりましたね。気が合ってますねえ。

「ジャンケンって言うのはね、これがグーで、これがチョキで、これがパー。それでね……」

サラッとジャンケンのやり方を教えると「画期的なこと知っているんだな、ユリーナは」と感心されちゃったんですケド。
でも、レギは鳥なのでグー・チョキ・パーが出来ないことに気づく。私ってばマヌケ。

レギの代わりにゼウオンが私とジャンケン3回勝負をし、結局そのまま宿に戻るようになったのでした。

ええ、負けましたとも。別に悔しくなんかないんだからねっ。

食べ歩きは出来なかったけど、宿屋の食堂で食べた食事も美味しかったので、すっかりゴキゲン。

お部屋に入ると3分シャワーもどきで体をキレイにして着替える。宿屋の共同浴場は手狭だし、お湯に浸かれるわけでもないので利用しないことにしたの。

サッパリとしてベッドにIN。

今日はゼウオンと手を繋いで歩いて嬉しかったな。

ヌーエンに到着するまでは野宿だったから、眠るときも近くに彼の姿があった。

でも、今夜はいない。それが当たり前なんだけど…

ベッドで手足を伸ばして寝れる嬉しさよりも、彼の姿が見えないこととの寂しさの方が強いなんて、重症かなあ。

間を隔てている部屋の壁一枚が、強固な結界のように思えてしまう。朝になれば会えるのに……。朝が待ち遠しいな。

早く眠りにつきたくて、布団をかぶってすぐに目を閉じたのでした。

第20話　手をつないでもらって有頂天になりました（後書き）

第21話 冒険者ギルドに行きました（前書き）

友人A「第15話でゼウオンが見てた依頼書『魔物討伐』になつてたよ。さむこの話の世界観って『怪物』がモンスターの位置づけなんしょ？」

さむこ「え、マジ？すぐ直しとく」

と、言うわけで『怪物討伐』に訂正させていただきました。

今後も何かと間違いがあるかもしれませんが、温かく見守っていただけると嬉しいです。（^^;）

第21話　冒険者ギルドに行きました

ヘアグ生活57日目

いつも通り、夜明け前に起床して身支度を整えた。空は白み始めていて、今日もいい天気になりそう。

ヘアグには4つの季節の呼び名があるけど気候の変化はそんなにたいたことなくて、ヘアグ全域年中同じような気温（体感20　前後くらいかな）らしいので、日本みたいに四季折々の風情といったものは無い。

雪が降るのも地面が凍るのも標高が高めの山くらいで、平野部では雪景色なんて在り得ないみたい。当然スノボやスケートも存在しない世界なの。

「この辺りに朝練できる場所ってあるのかなあ？」

胸のあたりまで伸びた髪を皮ひもで1本に結いながらレギに聞いてみると「上から見たカンジでは無さそう」とのこと。

少し考えて、結局この宿の屋上で薙刀の型だけをすることに。

レギには部屋に残ってもらい、もしゼウオンが来たら私は屋上に行っている伝えてもらうよう頼んで、屋上に向かった。

朝の澄んだ空気を深く吸い込み、軽くストレッチをして体をほぐすと、薙刀を構え無心で振るう。

ふう、スッキリ！

一通り型が終わると薙刀を亜空間にしまって、屋上の端まで近寄りヌーエンの街並みを眺めた。

この宿屋は周辺の建物の中では一番高く、坂道の上にあるので周りの景色が良く見える。

ここはヘアグという異世界なんだけど、この街はテレビで見たイタリアのフィレンツェのように綺麗な街並み。

徐々に朝日の光に照らされて明るくなっていく大都市の風景にしばし見入っていると、屋上の扉が開く音がして、ゼウオンとレギが顔を見せた。

「おはよう、ユリーナ」

爽やかな笑顔で挨拶してくれるゼウオンは、本日もス・テ・キ。

おはよう、と挨拶を返すとゼウオンとレギは私の方へ来て、一緒にヌーエンの街並みを見る。

「ヌーエンってキレイな街並みね」

「そっかなあゝ、オイラはグリンジアスの方が良い風景だと思うけど」

「もう、レギは私がシプグルールから出なかったって知ってるでしょゝ？他の街、知らないものゝ」

レギは各地をフラフラしてたから、色々な街を知っているんだね。上空からだけみたいだけど。

「そういえばコルエンの村長が言っていたな、ユリーナはシプグルールから来たって。生まれは大陸外の島なんだって？」

さりげないゼウオンの問いかけに、ギクッ。

ゼウオンに嘘つきだと思われたくないけど、村長さんに話したヘアグ用の経歴を訂正するのは、村長さんに嘘をついたと思われるだろうし…

羊緑族の族長さんは私が異世界人であることは口外しないと言ってくれたので、私がヘアグに来た経緯を知っているのは族長さんと第一番隊4人衆とミリー、それとレギだけ。

レギも私の経緯は他言しないと言ってくれているから、私が許可しない限りゼウオンにも話さないだろうな。

私は異世界から来ました」と教えたら、ゼウオンはどういった反応をするんだろうか…？

どうしよう…言つべきか、言わざるべきか……

考え込んで黙ってしまった私の頭に、ゼウオンの大きな手のひらが乗せられた。

「え？ゼウオン…？」

驚いて彼を見ると、柔らかな微笑みをしてくれている。

「何か事情があるみたいだし、言いづらいなら無理に言わなくてもいいさ。」

そう言つて、優しく頭を撫でてくれる。

「出身がどこだろうと、ユリーナはユリーナじゃ〜ん。」

レギ…私が異世界人だと知っていても、こうして仲良くしてくれて初めて会った時から今も変わらず一緒にいてくれる。

「…ありがとう、レギ。ゼウオン」

何だか胸がいつぱいになっちゃったよ。二人に出会えて、本当に良かった。

さてさて。

冒険者になるためにヌーエンまで来たんだから、早速ギルドに登録しにいかなくちゃ。

ゼウオンと一緒にギルドの依頼をこなすとしても、やっぱりメンバー登録は必要みたいだしね。

レギと一緒に目立つし面倒なことになりそうだからと、私とゼウオンの2人でギルドに向うことに。

そしてついに来ましたヌーエンの冒険者ギルド！

3階立ての建物なんだけど、地下もあるんだって。

ギルドは大勢の人（魔物や精霊含む）が訪れるので、飲食スペースや歓談スペース、稽古スペースに武器防具や道具の販売スペースまであるらしいの。

きつとすごい賑わいなんだろうなあ。わくわく。

ゼウオンに続いて入ってみると、そこは――閑散としてました。あれれ？ちょっと拍子抜けなんですケド。

「ねえ、ゼウオン。ここホントにギルド？やけにガランとしてない？」

「ん？まだ風の刻だからだろ？土の刻になれば報奨金を受け取りにきたり酒を飲みに来たりするヤツラで騒々しくなるぞ？」

「そうなんだ。時間帯によって違うのね」

ギルド内を真っ直ぐ進むと、沢山の紙が掲示されてる大きなボードがあった。

これが『依頼書版』ってやつね！

依頼書版は依頼内容ごとに分けられている。

『討伐・捕縛系』『護衛・警備系』『狩猟・採取系』『その他雑用』の4種類。

一番上に掲示されているのが5ツ星依頼で一番難しくて一番報奨金が高いもの。

一番下に掲示されているのが1ツ星依頼で一番簡単で一番報奨金も低いもの。

ギルドランクは

1ツ星が『駆け出し』2ツ星が『中堅』3ツ星が『上級』4ツ星が『達人』5ツ星が『神技』

なんだって。

星のランクを上げるには昇格試験に合格しなきゃいけないらしいんだけど、結構難しいらしくて皆さん1ツ星、よくて2ツ星止まりになっちゃうみたい。

ちなみにゼウオンは4ツ星なんだって。スゴっ

「じゃ、俺はコルエン裏山の依頼完了報告と報奨金受け取りにいつてくるな。新規登録は上の階だ。俺のほうが早く済むはずだから談話スペースで適当に待ってる。頑張れよ、ユリーナ」

「あ、うん」

って、何を頑張るんだろう??
ま、いつか。

ゼウオン待たせたら悪いから、さっさと手続きしに行こうと。

「あの、ギルドに登録したいのですが」

「はい。では、こちらの書類に必要事項をお書きください。書き終わりましたら、一番下の欄に署名をお願いします。」

渡された書類に名前や特技をへアグ共通語で記入し署名すると、書類を受付の人に返した。

その書類を見ながら、何やら作業をする受付のオニーサン。

「お名前はユリーナさんですね。魔戦士ということですが力を試させていただきますので地下の闘技場へお進みください。」

え？何か試されるの？？まさか怪物と戦ったりとかしたりする？？？ただ書類を書けば終了！ってワケじゃないんだあゝゝつ。

だから「頑張れよ」って言われたのね……。

おそろおそろ地下への階段を下りると、そこは意外に広さのある円形の広間で、周囲は長椅子に囲まれている。なんだかミニサッカー場みたい。

すぐにオニーサンが来たが、よくみると先ほどの受付の人とは違う人だった。

オニーサン2号は私をチラリと見て

「では、今から怪物と戦っていたきます。」

「（やっぱり戦闘か）わかりました。あの、もし怪物を倒せなかったら冒険者にはなれないんですか？」

「いえ、そんなことはありません。ですが魔戦士というのは希少なので本当かどうか確かめさせてもらっただけです。もし戦況が危うそうになったら、こちらから止めに入ります。」

なんだ、そーゆーことね。

ホントに魔法が使えて戦えるかどうか見ただけなんだ。

ふう、と一呼吸して気を取り直すと、亜空間から薙刀をだす。

「いいですよ。いつでもどうぞ」

オニーサン2号は空間魔法と薙刀にちよつと驚いた表情を見せたけど、すぐに元通りになつて私から離れた。

いつも通り「風」と「重力」の魔法をかけて身構えると、何やら空中に魔方阵のようなものが浮かんで、そこから尻尾の生えた蜘蛛っぽい怪物が3匹お出ましになりました。

ほえ、これって召還魔法なのかな？さっきのオニーサン2号が出したのかな？

おつとつと、ポケつとしてないで倒さなくっちゃ。

怪物に攻撃する手順はコルエン裏山の時と同じパターン。「吹雪」で足止め、間合いをつめて薙刀を振る。

つて、あれれ？

薙刀を振ろうとした時、蜘蛛もどきはすでに倒れちゃってた。もしかして「吹雪」だけでやられてくれちゃいましたかね？

チヨンチヨン

薙刀の刃の先っぽで突いてみたけど反応なし。

「あの、これで良いですか？」

オニーサン2号へ向き返ると、何故か口をあんぐりさせている。
ん？変だったのかな？

「あの…もしもし？」

もう一度オニーサン2号に声をかけると、彼はハツとしたように私を見た。

「はっ、あ、はい。結構です。では、登録手続きをとります。1階でお待ちください。」

どうやら無事に冒険者になれそうだわ。良かった、良かった。

そして待つこと約10分。

名前を呼ばれたので、登録カウンターへと向かう。

「魔戦士ユリーナさん。登録番号は22698になります。あなたの合言葉は『主の魔物は』『竜鳥獣魚』になります。ギルドの規則や罰則などの詳細はこちらの冊子に書いてありますので、依頼を引き受ける前に一通り目を通して下さい。そしてこちらが冒険者ギル

ド登録者証になります。紛失されますと罰金として大金貨1枚いただきますのでご注意ください。」

そういつてオニーサンさんは1cmくらいの厚みのある冊子と、キヤッシュカードサイズのチェーン付きカードをくれた。

カードには 名前：ユリーナ、職業：魔戦士、ギルドランク：1ツ星 と、浮かび上がるような文字で記されている。

チェーン付きなのは、紛失や盗難を防ぐために身に着けられるようにっていうギルド側の配慮みたい。

これで晴れて私も冒険者！自立へ向けて1歩踏み出したってカンジね。

ギルガの褒賞金大金貨1000枚のうち10枚は自立資金として使うことにして（半分の5枚はブーツ代で消えた）残り990枚は無いものとして大切に亜空間にしまっている。

シプグルールでたくさんお買物をしたから、所持金残高は大金貨2枚と小金貨1枚と大銀貨3枚に中銅貨と小銅貨が数枚。

昨日のグクコの実もそうなんだけど、宿代もゼウオンが払ってくれているんだよね。

彼は私が大金を所持してるなんて知らないから、冒険者としてある程度稼げるようになるまで立て替えてくれるつもりみたい。

宿代くらい持つてるからちゃんと払わせてくって言ったんだけど、

「出世払いでな」なんて笑ってスルーされちゃったし。

たくさん依頼をこなして稼いで、早くゼウオンにお金を返すのだ！

第22話 初仕事は片付けと掃除+草取りでした (前書き)

今回も途中で視点が変わります。

主人公 第3者 主人公 になります。

第22話 初仕事は片付けと掃除+草取りでした

談話スペースに行くと、椅子に座って何か考え事でもしているかのようなゼウオンの姿があった。

こうして少し離れた所から見ても、やっぱりイケメンだね。

でも、今のゼウオンは何ていうか、凍えそうなほど冷たいオーラを放っていて、かなり近寄りがたい雰囲気…。ちよつと怖いかも。

どうしよう、彼に気づいてもらうのを待つてようかな…なんて思っていたら、あっさりと私に気づくゼウオン。

彼は凍えるオーラから柔らかオーラになると、いつもの胸がドキドキする笑顔を向けてくれた。

「終わったか？」

「うん。お待たせしましたあ。無事、登録できたよ。待っていてくれて、ありがとう」

「別にいいさ。そうだ、これはユリーナとレギの分だ」

ゼウオンから小袋を渡されたので中をみると、大金貨が2枚入っている。

「え？なにこの大金」

「だからユリーナとレギの分。コルエン裏山の怪物の報奨金って大金貨3枚だったんだ。あの怪物はユリーナとレギが退治したようなもんだからさ」

「いやいやいや、受け取れないよ！」

「なんで？あ、3枚全部渡すべきか」

「違うから！」

ちよつとしたやり取りの後、結局お金はお返ししました。
ゼウオンはイマイチ納得しきれてないみたいだけど、じゃあ宿代や
グクコの実代にしてって言うってお返しすることに成功。
一度きちんとお金のルールを決めるべきだなあ。

「ところでこれからどうしよう？私とゼウオンじゃギルドランクが
随分違うけど、同じ依頼ってできるの？」

「大丈夫だ。俺が受ける依頼をユリーナが補佐するって形になるけ
ど問題はない。だが…ちよつと薬のことで指名依頼がきてたから、
そっちをやらなきゃならないんだ」

「薬？」

「ああ。今回は多めに調合しなきゃならないから3、4日はかかる
な」

ふう、とため息をつくゼウオン。

薬って何だろう？コルエン裏山で飲ませてもらった薬湯のことかな？
そういえばメルローさんのヘアグ常識ブックに何か書いてあったよ
うな…ってことは、きつと常識的なことだね。後で読み返してみ
ようっと。

「じゃ、私、その間はヌーエン中できる1ツ星ランクの依頼を受
けてるね」

「そつか。わかった。俺は基本的に宿屋の部屋に籠ってるから何か
あったらすぐ言えよ？」

「うん！」

談話スペースから依頼書版に移動して見てみると、1ツ星の依頼つ
て結構たくさんある。

『その他雑用』に至っては半分以上が1ツ星だし。

又ーエン内で出来て時間もたいしてかからなさそうな依頼に絞って物色し『物置の片付け・掃除』というのを受けることに。

依頼引き受けカウンターに行つて手続きをしてもらい、伝達石と依頼受理書と簡単な地図を受け取つてギルドから出た。

今日の火の2刻くらいに依頼者さんのところに行けば良いとのことなので、まだ時間に余裕があるなあ。

宿屋までの道をゼウオンと歩いていると、上からレギが降りて来てストンと私の肩に着地。

「ユリーナ、ギルドどうだった？」

「ちゃんと登録できたわよ。早速依頼受けちゃった。物置の片付けするの」

「片付け？ゼウオンもか？」

「いや、俺は別口の仕事があるんだ。まとまった量の薬を調合しなきゃならなくてな」

「ふん、そつか。んじゃ、しばらくは別行動なんだな」

宿屋についた時は正光1刻前だったので、ちよつと早めに昼食をとつて、火の刻になるまではお部屋でのんびりすることに。

ゼウオンは早くも引き籠もり生活に突入です。

「ねえレギ。ゼウオンが調合する薬つてどんなのかな？」

「さあ？オイラにもわかんないな。東の地の薬学は結構謎だらけだし」

「そうなの？」

「ユリーナさあ、シプグリームで治療液とか回復液なんか買ったじやん？あれらとゼウオンが作る薬湯はさ、また別モンなんだよ」

「……ゴメン。よくわかんない。説明お願い」

レギのざつくばらんな説明によると。

治療液や回復液なんかは、癒しの魔力が込められた水が原材料になっていて、効果は「浅く・広く」一般大衆向けに大量生産されているもの。

主に北の地でつくられているんだけど「水」の癒し魔法が使えるなら割と簡単に作ることは可能で、私にも出来るみたい。

でもそれを実際に作って売るとなると商売権とかややこしいことになるから、「黒の民」の専売特許になってるってのが実情らしい。

一方ゼウオンが作ったあの薬湯は、動植物に含まれている自然の成分を掛け合わせて作るものらしい。複雑な専門知識が必要不可欠なので、東の地にいる限られた者達にしか扱えないとのこと。

効果は「深く・狭く」発症原因や症状を見極めて調合するから、少量生産になってしまっただって。

うーん。つまりイメージ的には治療液とかはドラッグストアで販売されている薬で、薬湯みたいなのはお医者さんが処方する薬ってカ
ンジかな？

ゼウオンって剣や魔法だけじゃなくて薬学知識もあるなんて、タダモノじゃないよね？！一体ナニモノなの？！（マモノです）

「ゼウオンって凄いのねえ」

「うん。オイラも前さー、なんで薬師じゃなくて危険な冒険者やってんのか？って聞いたんだけどー、色々と世界を巡りたいんだってさ」

「そうなんだ。世界を巡る、かあ…」

世界一周って憬れてたなあ。大学が夏休みになったらバックパッキングしたかったんだよねー。

ゼウオンとレギと一緒にヘアグ全土を旅できたらいいな。

宿屋の部屋に入ったゼウオンは簡素な椅子に腰掛けると、ふう、と一息ついた。

コルエン村の報奨金を受け取りにいった時に指名依頼がきていると聞いて、そういえば時期的にそろそろだったな、と思い至った。

この季節――土の季節――は、東の地と南の地の地境で毒蠍が大量繁殖するのだ。

旅人や付近の村の住民達は毎年この蠍の毒に悩まされていて、薬師が作る解毒薬を待ち望んでいる。

今年は特に蠍が多いらしく、いつもより解毒薬の注文数が多い。

「さて、やるか」

ゼウオンは亜空間から作業台と必要な道具一式、それと薬草を入れている大きめの箱を取り出した。

作業台に今回使うものを並べると、一冊の古い本と手記帳を取り出す。

古い本は、かつて東の地で使われていた古代文字で書かれている薬草書で、養父ヴァルバルドから受け継いだもの。

手記帳は、ヴァルバルドに監修してもらいながらゼウオン自ら勉強して書きしたためたオリジナルの薬学帳なのだ。

毎年作っている解毒薬とはいえ、一応確認しないとな。

ふと、部屋の壁を見る。

ユリーナの初依頼は物置の片づけ、か。

討伐系の依頼を受けたがる冒険者が圧倒的に多いのに、魔戦士が物置の片付けしにくるなんて依頼者が驚くだろうな。

微かに口の端をあげたゼウオンは、薬草書に目を通し始めた。

火の刻になったので、少し早いけど依頼者さんのところに行くことにした。

道に迷って遅刻とかシャレにならないしね。

「じゃ、オイラ空からユリーナの仕事ぶりを観察しよう」と。ぐふふっ

高みの見物ってことですかね？レギさんよ。別にいいケドね。

ドア越しただけ一応ゼウオンに「いつてきます」と声をかけると、わざわざ部屋からでてきてくれて「気をつけてな」って微笑んでくれた。

はうう、その微笑みで依頼3件はイけます。

無事に約束時間前に到着した私を出迎えてくれた依頼者さんは、お婆さんでした。

お爺さんと二人で暮らしているんだけど、物置の片付けと掃除は体力を使うので老夫婦には大変だからとギルドに依頼したんだって。お爺さんは今、お出かけしてるみたい。

「あれまあ、ギルドの冒険者つてのは力自慢の男ばかりかと思っただけどねえ。お嬢さんみたいな若い女の子もいるの？頼みたい仕事は力仕事なんだよ…どうしましょう…」

「大丈夫ですよ！こうみえても体力には自信あるんです。あ、こちらが依頼受理書と私のギルド登録証です」

お婆さんは登録証を見ると、とても驚いた顔をした。なんで？

「お嬢さん、魔戦士なのかい？本当に??」

「はい。本当ですよ。なので魔法を使つて片付けることも可能ですのでおまかせ下さい」

「……ああ、それじゃ頼むよ（魔法を片付けにつかうなんて聞いたことないよ）」

案内された物置小屋は20畳くらいの広さで、あちこちに古ぼけた箱とか紐で括られた本とか布袋なんかが散らばっていた。

「床にあるもの全部を、あの壁にある棚に置いて床掃除してもらいたいんだよ。掃除道具はあそこにあるものを使っておくれ。土の刻になるまでに終わりそうかね？」

「はい。大丈夫です」

「じゃあ、よろしく頼むね。」

さあてつと。やりますか。

魔法を使えるってことは知られているので、遠慮せずにバンバン使っちゃえ。

床に置いてある荷物を「重力」で軽減化したあと「風」で棚まで運ぶ。

物が無くなった床に向かい「ダイソの掃除機」と呟いて「風」を

発生させてみると、イメージ通り、驚きの集塵力ですよ！

魔法を発動させる時に一言呟いたほうが、より鮮明なイメージが出来るなあ。

それから「水」で床をキレイに洗い流して水分蒸発させたら依頼完了。

丁度いいタイミングで依頼主のジルお婆さんがご登場。

「ユリーナちゃん、言い忘れてたんだけど左隅の箱は……って、えええ？！」

「あ、ジルさん。終わりました。左隅の箱がどうかしたんですか？」

「……あー、いやね、あの箱は特別に重いから運ぶときは声かけてって言おうと思ったんだけど……なんていうか…魔戦士つてのは凄いいもんだねえ…」

「一応、確認していただけますか？」

「床もピカピカじゃないか！これだけでもらえたら充分だよ！」

「そうですか。良かったです。あの、まだ時間あるので他に手伝えることがあればしますよ？」

「え？いいのかい？それじゃ庭の草取りをお願いできるかい？」

「はい、わかりました」

そんなわけで今度はジルさんのお宅の庭で草むしりをすることに。

魔法を使わずに地道に作業していると、上からキラキラしてるのが降りてきた、と思ったらレギでした。

「あれ、物置の片付けじゃなかったっけ？」

庭の柵に止まったレギは小首を傾げて聞いてきた。

「片付けは魔法を使ったからもう終わったの。今は草取り中よ」

「草取りなんて依頼なかったじゃ〜ん？」

「そうだけど時間あるしね。せっかくだから他も手伝おうかなって」
「ふ〜ん。あ、誰か来た。じゃ、また来る〜」

レギが飛び立っていったのと入れ替わるようにジルお婆さんが木のトレーを持って顔をみせた。

「ユリーナちゃん、一息ついてお茶にしてちょうだい」

「あ、ありがとうございます」

ジルお婆さんが用意してくれたお茶は、砂糖入りの麦茶みたいな味がして美味しかった。

お茶請けのお菓子はマドレーヌっぽい焼き菓子で、こちらも美味しかったんだけど、お茶もお菓子も甘いから塩気のあるものが欲しいな〜なんて内心思っちゃった。

羊緑族の族長さん、早くポテトチップ広めてくれないかなあ。

順調に草取りも終わり、今は火の4刻過ぎ。

ジルお婆さんから依頼完了のサインが書かれた受理書を受け取ると、そのままギルドに向かった。

依頼完了報告をして、その後で報奨金を渡されたんだけど、なんか多くない？

提示されてた金額は中銀貨2枚だったのに、何回数えても3枚だ。

「あの、報奨金が違います…中銀貨1枚多いです」

「いえ。依頼主さんから追加報酬と書かれていたので3枚であつてますよ」

「あ、そうなんですか？…わかりました」

どうやらジルお婆さんが草取りの分を上乗せしてくれたみたい。

ありがたく受け取ることにいたしましょう。

さて、これからどうしようかな？

新しい依頼を受けるには中途半端な時間だし、せっかく大都市ヌーエンにいるんだから散策でもしようかな。ギルド周辺なら迷子にならないだろうしね。

ギルドから出た私は意気揚々と街中を歩き出したのでした。

第22話 初仕事は片付けと掃除＋草取りでした（後書き）

砂糖入り麦茶、結構イケます。

作者の友人は好んでガムシロップをいれたりしてます（笑）

第23話とんでもない事に巻き込まれてしまったかもしれません（前書き）

今回の視点は

第三者 主人公 第三者 です。

第23話とんでもない事に巻き込まれてしまったかもしれない

「今日の御前会議でも平行線だったそうではないか」

贅を尽くした部屋の中、女の冷たい視線が跪いている3人の男達を射抜く。

女は手にしている豪華な扇子を握り締め、一流職人の彫刻が施されたテーブルの端に振り下ろした。

バンッ

扇子が拉げる。

「もう土の季節になってしまったではないか。主神の大祭がある故、この土の青月中には王太子を決めねばならぬというのに…陛下はなにを愚図ついておりますか」

「陛下は平民どもの声を気にかけておられて、我々貴族達の進言に二の足を踏んでお…黙れ!!」

男の声は感情を露わにした女の怒声で遮られた。

「も、申し訳ありません。王妃様」

「全く忌々しい!側室風情の薄汚い出のくせに!殺してやりたい!」

「王妃様っ、それは、それだけはいけませんぞ!」

「わかっておるわ。あやつが死ぬと色々と弊害が出てくる……あやつの魔力さえなければ問題ないものを…何か手はないものだろうか」

「ハフィスリード殿下はすでに守護精と契約してますし、魔力が更

に上がることはあれど下がることはないかと……」

「それもわかっておるっ、だがこのままでは王太子はシリルリードではなく……憎きハフィスリードになってしまっやもしれん！それだけは避けねば……！」

重い空気が王妃の私室を包む。その中で跪いていた男の1人が口を開いた。

「恐れながら王妃様。私めに考えがございます」

「ほう、申してみよ」

「はっ。ハフィスリード殿下の守護精が宿る指輪を奪って魔力を落すのです」

王妃は方眉を上げて、男に蔑んだ視線を送る。

「何を言い出すかと思えば。確かに守護輪が無ければハフィスリードの魔力はシリルリードに劣るやもしれんが、あやつが常に身に着けておるものをどうやって奪う？それに上手いこと強奪できても、あやつと守護精は繋がっておるのだ。すぐに発見されるのが関の山じゃ」

「……『闇の帝団』を使いましょう。指輪を奪えたらすぐにハフィスリード殿下の魔力は落ちたと民衆に噂を流すのです。王太子が決まる今月の間だけ殿下のお手になればいいのですから、なんとかするのではないのでしょうか？」

「ほう、『闇の帝団』とはのう。……失敗は許されぬぞ？」

「もちろんでございます。『闇の帝団』にはすぐさま連絡できます」
「そうか。あいわかった。そなたの手腕に期待しているぞ。ほほほほっ」

久々に王妃は笑った。

その目に宿るものは、己の強い欲望。権力への強い執着。

――王太子になるのは、我が子第1王子シリルリードなのだ。側室ごときが生んだ第2王子のハフィスリードなど認めん――

西の地で最も繁栄している国「緑の民」の王国グリーンジアスの王城内、王妃メリシエルアの私室は高慢な笑い声に包まれた。

ヘアグ生活60日目

今日も『その他雑用』の依頼を請け負って、元気に働いております。物置片付けに始まり、屋台の売り子（怪我しちゃったコの代理）、建築現場の資材運び（魔法つかっちゃった）、お屋敷の花壇作成（ガーデニングみたいで楽しかった）と、他にも色々こなしましたよ。上手く時間を調整すれば、1日で3件くらい受けられるの。

ギルドで稼いだお金は全部で小金貨3枚ぶんくらい。結構頑張ったのよ。

魔戦士で『その他雑用』を受ける冒険者はなかなかいないらしく、髪と目の組み合わせが珍しいこともあって、たった3日間で私はすっかりヌーエンのギルドで有名になってしまったらしい。

一度ギルド内でゴリマツチョの人達に絡まれたけど、「重力」で動けなくして薙刀で耳を切り落とす素振りをしたら平伏されてしまいました。

ちよつと過激だったかなって思ったんだけど、効果的に周りを牽制したかったの。てへっ。

その日の夜にゼウオンとレギに「ちよつと絡まれたの」って何気

なく言ったら、レギは楽しげに笑ってたけどゼウオンが：

「そいつらの顔覚えてるか？薬作りが終わったら闇討ちしてきてやるよ。なに、遠慮するな、ちょこつと　　を　　するだけさ」

って笑顔で言うんだもんつ。コワっ、ゼウオン様コワイですっ

さてさて

今、私がいる場所は、小屋根付きの掲示板が立ち並ぶ広場。

通称『情報広場』

一番目立つ中央の掲示板には、人間の国王や貴族、魔物や精霊の族長といったお偉いさん方のお布令や、ヌーエン地域近辺で出現した怪物の情報などが貼られている。

その中央の掲示板の左右には長い掲示板があって「グリーンジアス王国新王太子、今月中にも決定か？城下町住民はこう語る！」とか「ペットを探しています」とか「飲み食い処」緑の宝石亭「開店！ヌーエン南区、チヨル広場前」だとか、様々な情報（？）が掲示されていて、なかなか面白い。

風の刻に依頼を1件完了させた私は、ギルドに完了報告に行ったついでに次の依頼を受けた。

でも今から依頼者さんのところに行くには時間が早いんだよね。かといって宿屋で寛ぐ時間はないし。

食品市に行って食材や調味料を物色しようかとも思っただけで、これは時間をかけてじっくりしたいから止めたの。

で、結局こうして『情報広場』で時間を潰してるのよ。情報って結構大切だから、一挙両得だよな。

――『助けて』

か細い、子供の声がした。

え？今の何？空耳かな？

周囲を見回してみるけど、掲示板を見ている人と立ち話をしている人がいるだけで、それらしき子供の姿はない。

『誰か…助けて…主の…もとへ…還して』

やっぱり聞こえる。空耳ではないみたい。

声がする方角に意識を集中してみると、どうやら右側から聞こえてくるようだ。

耳を澄ましながら右にゆっくり移動すると、私がいた位置から5mくらい離れた場所で掲示板を眺めていた男性から『助けて』と声がした。

えーと…。なんでこんな顔も覆うほどスッポリとローブを被った不審者もどきの男性から子供のヘルプコールがするんですか?!
男性は一人だし、子供なんて周囲にはいないのに、何故??

不審者もどきの男性、不審男さんをじっと見ていたら

「何か…御用ですか？」

やけに警戒したような声音で尋ねられた。

なんだかビクビクしているようだし…

はっ、もしかや子供を誘拐して、そのローブに隠してる?!この不審男は誘拐犯か?!

「失礼ですが…貴方から助けを求める子供の声がした気がしまして
……」(単刀直入すぎ)

そこまで言ったら、途端にガツと肩を掴まれた。

痛いじゃないの、何すんのよっ

キツと睨むと、やけに真剣な目をしている不審男。

「貴女は守護精の声がわかるのですね?」

はい?守護精って何ですか?と問う間もなく、不審男は私の手をとると、有無を言わず何か小さくて硬い物を握らせてきた。

「私は殺されます。通りすがりの貴女にお願いするのは大変心苦しいですか、どうかこの指輪をグリーンジラス王国第2王子ハフィスリード殿下に渡して下さい。決して他人にこれを見せないように。お願いします!」

早口に捲くし立て、痛いくらい真剣に私の手を握り締めた不審男は、私が呼び止める間もなく踵を返し、足早に人々の隙間をすり抜け『情報広場』から去っていった。

ポカーン

今の、一体なんだったんだ??

ワケもわからず掌を見てみると……そこにあっしたのは豪華な指輪。

1cmくらいの太めの幅で、厚みも5mmくらいある。

土台は金、複雑な模様が彫られていて所々に翡翠かフローライトのように透明度のあまり無い緑宝石が散りばめられている。

中央には、見たこともないほど光り輝いている大きなエメラルド。

……

なんじゃこりゃ~~~~っっ!!

あの不審男、誘拐犯じゃなくて泥棒? いやいや、もしやこれは受け取った身代金とか?!

おおおおおまわりさんに届けよう!

あつと、おまわりさんじゃなくてヌーエン自警団か。

とりあえず落ち着け私! スーハースーハー。 よし、冷静に考えよう。

状況? 今、掌にはかなりの値打ちと思われる指輪がある。

状況? この指輪は全身ローブの不審な男に突然渡された。

状況? 不審男はこの指輪を渡す時「守護精」とか「殺される」とか「グリンジアスの王子に渡せ」とか言っていた。

ん?

もう一度、不審男の言った言葉を思い返してみようかな。

えーと、うーんと、まあ、その、つまりですね。

「自分は殺されるからこの指輪をグリンジアスの第2王子に渡してくれ」

ってなこと言ってたよね? 確かに言っていましたよね??

……

なんじゃこの状況……っつ！

思いつきり厄介そうな面倒ごとに巻き込まれちゃったんじゃないの？！

し・か・も

この西の地で一番の大国グリンジアスの王族絡みかいっ

そういえばさっき掲示板にグリンジアスの王太子がどーとかこーとか掲示されてたような……考えたくない……。

私はしがない小娘です。ギルドで雑用ばかりこなして小金稼いでいる庶民なんです。

やんごとなき方々の事情に庶民を巻き込まないでいただきたい。マジで。

さて。自分の置かれた状況を理解したところでこの指輪をどうするか？

選択？ 不審男の頼み通りグリンジアスまで行って第2王子に届ける

選択？ このまま落し物として自警団に届ける

選択？ ギルドに配達物として依頼を出す

選択？ とりあえず保留にしてゼウオンとレギに相談する

選択？ 見なかったことにしてその辺にポイ捨てる

選択？ 売っ払う

うーん、？と？は人道的によろしくないでしょう……。あの人は不審だったけど、目が真剣だったし。

となると……？だけど、これから依頼者さんのところに行くんだよね。

なので？を選択しましょう。あんまり長く持っていたくない代物だけど、仕方ないわ。

羽織っていた青紫のローブの中で小さく亜空間を出すと、ポンッと指輪を入れる。

そしてそのまま依頼者さんのところへ歩き出したのでした。

「あの女の素性を調べ上げな。王国騎士の方はあのままジェイが始末するはずだ。私はこのまま女を見張る」

「承知」

「ふん…空間魔法か…ただの女じゃなさそうだね」

足音をたてず、気配すら感じさせない足取りで、焦げ茶のローブを纏った女は青紫のローブを纏った娘を追跡したのだった。

第23話とんでもない事に巻き込まれてしまったかもしれません（後書き）

お話のストックがなくなってしまったので、毎日の更新が出来なくなりそうです。週に3〜4話くらいのペースで更新したいと思います。

これからも『薙刀女の異世界物語』をよろしくお願いいたします。

第24話、危険な方達に攫われてしまったようです（前書き）

今回も視点が ゼウオン 主人公 第3者 ゼウオン と変わります。

第24話　危険な方達に攫われてしまったようです

「この依頼書の依頼品を持ってきた。急ぎみたいだからギルド内転移装置を使って送ってくれないか？装置使用料は依頼者が支払う」
「かしこまりました。手続きをとりますので少々お待ちください」

やっと思毒薬全てを作り終わった。

ユリーナはまだ仕事だ。今日も雑用の依頼を受けているのだろう。レギは上空で眺めているんだろうな。

レギがヌーエンでユリーナと着かず離れずの距離をとっているのは、金魔の自分と一緒にいるとユリーナが悪目立ちしてしまうということと、1人立ちを望んでいるユリーナの邪魔にならないように思っているからだ。

朝の鍛錬をするのも、積極的に怪物と戦わせるのも、全てはユリーナが自立できる実力を身に付けさせるため。

コルエンからヌーエンまでの道中、寝袋で眠っているユリーナを見ながらレギとかわした会話を思い返す。

「ユリーナってさあ、本当に世間知らずで、ほっとけないよね」。
御人好しだし、頓珍漢なところあるし、単純だし、突っ走るところあるけど。変な偏見もってないし、真っ直ぐだし、ぶっちゃけ一緒に居て楽しいから、このままずっと一緒にいいかなって思っちゃうんだよね。ゼウオンはどうなんだ？」

「……俺もずっと一緒に居たいと思ってるさ」

「そっか、そっか、ぐふふふっ」

「……なんだよ？変か？」

「べ〜つ〜にい。それよりゼウオンさあ、ユリーナにも戦闘させなきゃダメじゃ〜ん。ユリーナに経験積ませないと〜」

「それは、そうなんだろうけど。つい体が動いちゃうんだ。条件反射だから仕方ねえだろ?」

「ふ〜ん、まあ、いつか。ぐふふっ」

こうして改めて会話を思い出すと、レギは俺をからかっていたのか?と、少々気恥ずかしくなる。

根は良いヤツなんだけどな…まったく。

今は火の3刻過ぎか…土の刻過ぎにはユリーナも宿屋に戻ってくるだろう。

そついえば食べ歩きしたがっていたな。今夜は食屋台通りに連れていこうか?

でもまたレギが嫌がるか。グクコの実を多めに渡せばあつさり了解しそうな気もするがな。

ユリーナのこと単純とか言って、レギも結構単純だと思うぞ。

俺としてはユリーナの手料理を食いたところだが、食屋台を目の前にして喜ぶであろう彼女の笑顔も見たい。

「おまたせしました」

ギルド職員から声をかけられたのでカウンターへと向うと、いつもの紙と報奨金の入った小箱が用意してある。

金額を確認して自分の皮袋に入れると、報奨金受け取り欄にサインをしながら、さり気なくユリーナの事を聞いてみた。

「そついえば小耳に挟んだんだが。先日、黒髪藍目の新人冒険者が

絡まれたみたいだな。」

「ああ！あれは見物でしたよ。ちょっとしたイザコザはしょっちゅうありますけど、ギルド職員3年やってあんなにアツサリと片がつくのを見たのは初めてでした。あの女のコは今やヌーエンのギルドでは有名人ですよ！」

「有名なのか？」

「ええ。あのコに絡んだのって4、5年は冒険者やってる2ツ星の人たちだったんですが。駆け出しが中堅を、しかも可愛い少女のようなコが力自慢の戦士達を、驚く速さでアツサリ平伏させたってことで話題騒然なんですよ。あのコそれだけの实力があるのに受ける依頼は全部『その他雑用』なもんだから、冒険者達の注目の的でした。毎日1人でギルドに来るから色々なチームに誘われているみたいですが、全て断っているようです。なんでも仲間がいるらしいのですが、その仲間とやらを見かけたことはないんですよ。おそらく只の断り文句なんでしょうけど。そういえば冒険者としてではなくて個人的な誘いをかける人もいるようですが、そちらはギルド内ではわからないことですね。あつと、職務中なのにベラベラしゃべって失礼しました」

「いや、問題ない。じゃ、用は済んだから行くとするか」

「はい。ありがとうございます。今後ともヌーエンのギルドをよろしく願います」

なんてこった。俺が薬作りで引き籠もっている間に、ユリーナはかなり有名になっちゃったようだ。

明日からは彼女と一緒にギルドに行つて、俺が仲間なんだと周囲に知らしめなければ。

常に彼女と共に行動して、近寄る男どもは叩き潰すつ。

そう決意すると、俺はギルドを出て宿屋に向つたのだった。

主光と副光が空からゆっくりと沈み、ヌーエンの街が黄昏どきをむかえた頃。

るるるんるるるん、るるるん

ギルドから宿屋までの道のりを、スキップしそなくらいルンルン気分です歩いていきます。

だって、ゼウオンがね、薬作りが終わったから今夜は食屋台通りつとそこに連れて行ってくれるんだって。（って、レギが言いに来てくれた）

ウキウキしながら2刻前にレギと交わした会話を振り返る。

「よ、ユリーナ。真面目に働いてるじゃん」

「あ、レギ。またタイミングよく私が一人になった時に来るねえ。もしかして見張っているとか？」

「ま、それはどうでもいいじゃん。それよりさ、ユリーナが喜びそうなこと教えに来たんだぞ」

「喜ぶこと？何よ？」

「ぐっふっふっふ、ゼウオンがさ、薬作り終わったから今夜は食屋台通りに案内してくれるってさ。ユリーナ食べ歩きしたがってたじや〜ん。良かったな」

「え、ホント？嬉しい！仕事早く終わらせるように頑張る！！でもレギって人がたくさんいるところ苦手でしょ？」

「ま〜ね〜。だからオイラは適当に上空でフラフラしてるよ」

「え、いいの？」

「うん。せっかくヌーエンにいるんだしゼウオンと楽しんできなよ。オイラのことは気にしないでいいからさ」（ゼウオンにグクコの実たくさん貰うし。ぐふっ）」

「レギ…本当に良い人、じゃない、良い魔物だね！ありがとう！」

「いいってことよ」（上空から2人を観察するし。ぐふふっ）」

「あ、そうだ。レギに相談したいことがあるの。後でゼウオンにも言おうと思ってるんだけど、さつき『情報広場』に寄った時、なんだか厄介ごとに巻き込まれたみたいでね」

「厄介ごと？なんだそれ？」

「今まだ仕事中だから。落ち着いて話したいから後で話させてね」

「ふうん……ユリーナさあ、気をつけるよ？」

「え？もちろん。失敗しないように気をつけながら仕事してるよ？」

「あ…、うん。仕事もだけど、宿屋に戻るまでは特に隙を見せないようにしろよ！じゃ、オイラもう行くな」

うん。思い返すと、あの時のレギはなんだかいつもの調子じゃなくて真剣モードだったなあ。

私ってそんなに隙だらけのおっちょこちょいに見えるのかしら？

この3日間依頼で失敗したことないんだけど…。ま、いつか。

それはそうと、食屋台通りってどんなところかしら？縁日に屋台が並ぶようなカンジのところなのかな？

夜、意中のカレと、屋台が並ぶところを2人で歩く。

それって、もしかして、ラブラブな2人がお祭りデートってなシチュエーション？！

きゃ~~~~っ　嬉しすぎるう~~~~！

完っ壁に舞い上がっていた私はすっかり失念してた。

レギが、いつものおちゃらけ口調じゃなくて真剣に話すときは、相應の意味があるってこと。

「あ、痛っ。何？」

急に腕がチクツとしたと思ったら。

横路地から誰かの腕が伸びてきて、引きずり込まれてしまった。

状況を判断する間もなく、首の後ろを殴られる。

でも、心身強化のおかげか気を失わずにすんだらしい。

私、奇襲された？！

そう思った瞬間に足元が微かに光って、何故か地面に足が潜りこんでいく。

「やつ、なにこれ？！」

「〔空間〕と〔土〕の複合魔法『地中転移』よ。私の手刀で気絶しないなんて、たいしたもんね」

「え?! 誰?!」

「ふふっ、後で答えてあげる」

必死で這い上がるうとしたけど、高速で底なし沼に吞まれるかのよ
うに体が沈んでいく。

魔法でなんとかできないかと咄嗟に「水」の結界を張ろうとしたけ
ど間に合わず……

真つ暗闇に包まれた私は、そのまま意識を失った。

とある街の、とある屋敷。

最高級のソファに腰掛けている壮年の男が、片手に持っていた酒グ
ラスをテーブルに置いた。

「ご苦労だったな、リズ。あの女は朱焰族の魔鳥と接触したらしい
からな。早急に捕らえたのは良い判断だ。よくやった。」

リズ、と呼ばれた女は、下げた頭を上げることなく口を開く。

「もったいないお言葉です。シュオイ様。――薬が効いているうち
に身ぐるみ剥いで調べ上げましたが召還印はどこにも刻まれていま
ませんでした。金銀魔の刻印は特に目立ちますので、見落とすはずは
ございません」

「そうか。妙だな……。まあ、いい。召還契約していないのであれば
居場所を探られることもなからう。あの女は今、どうしてる？」

「封魔牢に閉じ込めてあります。――亜空間から例の指輪を出させ
ますか？」

「いや、そのままにしておけ。迂闊に出せば第2王子に気づかれる

だろう。――指輪が亜空間に入れられたのは好都合だったな。あの指輪は破壊不可の神具だが……あの女を殺せば永遠に亜空間の中だ」

「では、すぐに殺りますか？」

「いや。グリンジアスの貴族どもは自分の目で指輪を確かめなければ納得しないだろう。あの女を消せば証拠がなくなる。土の赤月になるまでは、このまま封魔牢に閉じこめておけ。王太子が決まったら、あの女は貴族に引き渡す」

「かしこまりました」

壮年の男は再び酒グラスをとると、中身を一気に呷った。

「……黒髪藍目、顔も体も上物だ。たつぷりと追加報酬をとれそうだな。くくくく」

宿屋の屋上から夕暮れ時の街並みを眺めた。あの日の朝と変わらないう街並み。

ユリーナとレギと一緒に、この屋上から街並みを眺めて以来、俺はヌーエンが好きになった。

今までヘアグ全土を旅してきたが、何処に行っても何も感じなかった。

特に父さんが亡くなって自分一人で生きてきた5年間は、何かに追われるように、誰かから逃げるように、一箇所に留まろうとせず、点々と各地を巡っていた。

こんな風にゆつくりと景色を眺めることも、それを美しいと感じることもなかったのに。

ユリーナと出逢って、俺は心が豊かになったようだ。

朝日が昇る景色を爽やかな笑顔で眺め、夕日が沈む風景を少し愁いを帯びた瞳でうつとりと見る彼女。

ヌーエンの街並みを初めて見た時に感嘆の声を上げ、食市場では幼子のようにはいしゃいだ彼女。

ユリーナが見せる表情の全てが、俺の気持ちを揺さぶる。

ふと空を見上げたら、レギがこちらに向かって飛んでくるのが見えた。

レギは屋上の塀に止まるなり、焦った声で言った。

「ゼウオン、大変だ！ユリーナが消えちゃった！！」

は？何を言っているんだ、レギは。

「消えた？転移か？ユリーナの使える空間魔法は亜空間だけじゃないのか？」

「そう、亜空間だけ。ってそうじゃなくて！いいかゼウオン、落ち着いてオイラの話聞いてくれ！」

いつになく真剣なレギの様子に、只ならぬものを感じた。

ユリーナの身に何があったんだ？！

「わかった。話してくれ」

レギは朱焰族特有の赤く輝く目を数回瞬かせると、真剣な声色で話し始めた。

「オイラ火の5刻くらいにユリーナと話をしたんだ。ゼウオンが食

屋台通りに連れてくつて言ったらスゲー喜んで。その後で妙なこ
と言ったんだ」

「妙なこと？」

「――『情報広場』に寄った時、なんだか厄介ごとに巻き込まれた
みたい――って。――落ち着いて話したいから後で話す――って。
その時にオイラさ、ユリーナの後方からピリつとした気配を感じた
んだ。なんだか気になったから、すぐに上空に飛んでユリーナの周
りを探ったんだけど、それらしき者は誰もいなかった。その後もユ
リーナはいつも通りの調子で雑用仕事してて。土の刻になってすぐ
くらいの時に、ユリーナがギルドからこの宿屋方面に向かって歩い
ていたのは見てるんだ。ちょっと、目を離したただけなのに、姿が見
当たらないんだよっ」

……

手足の先が冷えていく。

体が強張り、頭が真っ白になりそうだ。

落ち着け、冷静になれ、そう自分に言い聞かせても、今にも叫びだ
しそうになる。

駄目だ！！

こんな状態では正しい判断ができなくなる

レギの話を、客観的に、多角的に、落ち着いて分析するんだ！

「ゼウオン、とりあえずオイラもう1度空からヌーエン全部を見て
みる」

「わかった。俺も探す」

ユリーナ、何処に居るんだ？どうか、どうか無事でいてくれ！！

焦る心を無理やり抑え、俺は宿屋を飛び出したのだった。

第25話　グリンジァス王国の裏事情とは

遠くに小さな女の子がいる。必死になって叫んでいるみたい。どうしたの？聞こえないな……今、そっちに行くからね……

手を伸ばして近づこうとすると、女の子も私の方へと向ってくる。

『ようやく、ようやく気づいていただけたんですね！』

女の子は歓喜溢れる表情で私に飛びついてきた。

うわー、可愛いコ！

フワフワとウェーブしてる栗色の髪、キラキラと光るエメラルドグリーンのかなかな瞳。お人形さんみたい！

『ワタクシは守護精ミスミীগ。グリンジァス王国第2王子ハフイスリード様と契約しています。ミীগとお呼び下さい』

容姿も声も幼い子供のようなのに、口調はしっかりとしている。

「ご丁寧にも。私はユリーナです。（今更、百合奈という気はない）あの、ミীগ？」

『なんですよ？』

「ミীগは守護精とやらなんですよ？どうして私に話しかけてきたの？」

『どうしても何も…ユリーナさんの魔力で形成した亜空間にいるからですわ。この空間はユリーナさんの意識に繋がってますのね。ワ

タクシずつと呼びかけていましたの。ようやく気づいていただけましたわ』

ん？今のミーグの言葉はおかしいよね？

だって、私、こんな可愛い守護精さんを亜空間に入れちゃったりなんかしてないよ？

「あの……、私、貴女を亜空間になんて入れてないと思うんだけど……亜空間には無機物しか入らないと思うし……」

『何言ってるの？アレフ殿からワタクシを託されてすぐに亜空間に入れましたでしょ？』

……ばーどうん？？

私、子供を託された覚えはないよ？しかもアレフ殿って誰ですか？

無言の私に、ミーグは確認するように言葉を続ける。

『ですから。アレフ殿はあの時ワタクシの声を聞くことの出来たユリーナさんに、ワタクシを主あるじの元へ届けるようお願いしてたではありませんか』

……もしかして、いや、まさか！

「ミーグって、あのゴージャスな指輪なの？！」

『え？！お気づきでなかったんですか？！』

心底驚いた、といったカンジのミーグ。

そういえばミーグの声、『情報広場』で聞こえた助けを求める子供の声と同じかも……

「ゴ、ゴメンっ、知らなかったとは言え亜空間なんかに入れちゃって…。じゃあ、ホントにミーグは指輪なのね？」

『まあ、そのようなものですわね。正確にはワタクシ自身が指輪というわけではないですが』

「どういうこと？」

『ワタクシ、グリーンジァス王国の国宝神具（大地の指輪）、（守護の指輪）とか簡略的に（守護輪）ともいわれている指輪…つまり先程ユリーナさんがゴージャスと言った指輪に宿る守護精なんです。

主が指輪を着けてくだされば、指輪から姿を現すことができますわ^{あるじ}』

へえ〜、めっちゃ高価そうな指輪だとは思ってたけど、まさかグリーンジァスの国宝だとはね〜。

え？国宝？？お国のお宝？？？

「えええええ〜っつ！ここ国宝？！何であんな不審男が国宝持つて『情報広場』うろついていたの？！ってゆーか、通りすがりの小娘に国宝渡しちゃダメじゃんっつ！！」

ミーグが耳塞いじゃうほど大絶叫した私は、悪くないと思う。だって、大国グリーンジァスの国宝だよ？！アリエナイ……

更に追い討ちをかけるかのように、ミーグの仰天発言は続く。

『不審男って、もしかしてアレフ殿のことですか？彼は不審人物なんかではありませんわよ？ハフィスリード様の近衛騎士隊の副隊長ですよ？』

……ぱーどん？？？（part2）

私、大国の王子殿下をお守りする近衛騎士副隊長様を不審者呼ばわりしてたのね……

無知ってオソロシイ

「それは失礼しました…。でも、どうしてグリンジアスの副隊長さんが国宝持ってヌーエンにいたの？」

すると、ミーグは悔しそうな、悲しそうな顔をして俯いた。

『少し長くなりますが…聞いてください』

そう言って、ミーグはグリンジアスで何があったのかを語ってくれた。

西の地「緑の民」の王国グリンジアスが西の地で最も繁栄しているのは、国民の魔力の高さにある。

グリンジアス国内においては魔力の強さが重要であり、王家の世継ぎも、貴族の跡継ぎも、生まれた順番ではなく魔力の強さを重視しているのだ。

グリンジアス王家の者が10歳になる時、「大地の指輪」を身につけて主神「土の神」に祈りを捧げる儀式がある。

「緑の民」に「土の神」のご加護がありますように
グリンジアス王国に永久の繁栄を

今から8年前

ハフィスリード・ロム・デュ・グリンジアスは10歳の誕生日を迎えた。

慣例に従い、ハフィスリードもまた儀式を行ったのだが、彼が祈りを捧げ終わった直後、それは起こった。

ハフィスリードが着けていた「大地の指輪」が光り輝き、幼い少女が現れたのだ。

『お初にお目にかかります。我が主^{あそい}』

儀式を行っていた神殿は波を打ったように静まり返った。誰もが皆、事態を理解できていなかったのだ。

静寂は、ハフィスリードの幼い声で破られる。

「キミは、誰？」

『ワタクシは「大地の指輪」に宿る守護精マイスミーグ。ミーグとお呼びください。主よ、御身のお名は？』

栗色の髪に緑宝石のような目をした少女は、その幼き外見から発したとは思えぬほど落ち着いた口調で話す。

「……僕、あ、いや、私はハフィスリード。グリーンジ阿斯現王太子ティルアリードの第2子、ハフィスリード・ロム・デュ・グリーンジ阿斯」

『承知いたしました。我、守護精マイスミーグはハフィスリード・ロム・デュ・グリーンジ阿斯を主とし、お仕えすることを主神「土の神」に誓います』

マイスミーグが宣誓し、その姿が指輪へと消えた時。

金翠のオーラがハフィスリードを包み込み、やがて消えた。

周囲はようやく我に返り、目のあたりにした出来事に歓声をあげた

のだった。

それから月日は流れ、今から2ヶ月前、火の緑月。

グリンジアス王国第18代国王エリユグリードが崩御した。

王太子ティルアリードが第19代国王に即位。新王太子には2人の王子が擁立される。

1人は第1王子。メリシエル王妃の子、シリルリード王子殿下。

メリシエルアはグリンジアス王国屈指の大貴族ディアバルダイン伯爵家の令嬢であり、王宮内の貴族達を掌握している。

故に貴族達はこぞってシリルリードを推しているのだ。

もう1人は第2王子。側室エディリアの子、ハフィスリード王子殿下。

ハフィスリードは10歳の時の儀式以来、格段と魔力が強くなったのだが驕り高ぶることはなかった。

常に国民を思いやり、臣下を労る。自身も勤勉な努力家であり、国民からの支持は絶大だ。

次期王太子を指名し決定できるのは国王陛下ただ1人。

王太子を指名したならば、たとえ国王自身でも決定を覆すことはできない。

月が替わっても、季節が替わっても、今だ王太子は決まっていない。

現時点では、守護精と契約していて国内最強の魔力を持つハフィスリードが王太子になると思われる。

魔力を重要視している国柄なので、そう思われるのが当然なのだ。

土の季節になると、西の地は平素よりも活気づく。

「土の神」を主神と仰ぐこの地では、土の緑月に各地で主神に感謝を捧げ祝う大祭が開かれるのだ。

むろん、グリーンジラス王国でも毎年盛大な祭りが催されるのだが、王太子が空位のまま最大にして最重要の行事ともいえる主神の大祭を行うわけにはいかない。

準備期間を考慮すると、どんなに遅くても土の赤月になる頃には王太子を決めなければならないのだ。

なんとしてもシリルリードを王太子にしたい王妃と貴族達は、差し迫る時期と世論に焦っていた。

その結果、ハフィスリードの力の源「大地の指輪」を裏組織「闇の帝団」に奪わせるという強硬手段に出たのだ。

「闇の帝団」は貴族たちの手引きにより、密かにハフィスリードと接触した。

指輪を渡さなければグリーンジラス国内の街や村を1つづつ壊滅させていくと脅す。

「我々のことはご存知のはずですよね？殿下。村の1つや2つ消すなんて造作ないんですよ？」

ロープで隠された顔からは表情を窺い知る事は出来なかったが、その声色は愉悦を含んでいた。

「……わかった」

ハフィスリードは意を決して指から「大地の指輪」を外そうとしたが、フードの男に制止された。

「受け渡しはヌーエンでもらおうか」

「ヌーエンだと？」

「左様。今ここで受け取るのは我々にとって何かと危険なのでね。殿下の権力が行使できない所で受け取りたいんですよ。持つてくる者は1人だけ。共は認めませんよ？ヌーエンに到着したら我々の方から接触しますので。ああ、この事を公にしたら村や街が消えると思ってくださいね。くくくく」

男は殊更楽しそうに言い放つと、闇の中へ消えた。

ハフィスリードは男の消えた空間を、怒りを滾らせた目で睨みつけ、歯をかみ締めて口惜しさに耐えた。

指輪の受け渡しはハフィスリードの近衛隊副隊長アレフに任された。アレフはヌーエンに到着すると、「闇の帝団」の接触に備えて気を張り巡らせていた。

指輪を持って来たら自分は用無しだ。すぐに消されるやもしれん…

人目につきやすい所では「闇の帝団」もあからさまには襲ってこないと思つたアレフは、『情報広場』に向かった。

このまま、守護輪が「闇の帝団」に渡つてしまえば、シリルリード殿下が王太子となられ…王妃様が実権を握ることになるだろう…そうなれば我がグリーンジアス王国の平和は崩れ去ってしまう。

なんとか、なんとかならないだろうか…主神よ、どうかご加護を…！

掲示板の前に立ちながら主神に祈っていると、自分に向けられている視線を感じた。

視線に敵意は感じられない。でも、もしかしたら「闇の帝団」かも

しない…

アレフは視線を向けてくる者を見た。

そこにいたのは「闇の帝団」とは思えぬほど澄んだ瞳を持つ、青紫のローブを被った少女だった。

サファイアのような藍の瞳をもつ美少女。その瞳が、アレフを怪しげに見つめている。

「青の民」かと思ったが、ローブからこぼれる髪は黒曜石のように艶やかな黒。

「黒の民」なのか「青の民」なのかは分からないが、かなりの魔力を有していることはアレフにも分かった。しかも、少女は守護精の声が聞こえるのだ。

これは　主神の、「土の神」の導きなのか…

アレフは瞬時に決断すると少女に指輪を託し、自分は囃となるべく『情報広場』から離れたのだった。

すでに「闇の帝団」に見張られているとは気づかずに

『　と、いうわけなのです。』

ミীগから語られる話を真剣に聞いていた私は、背中からイヤな汗をかきまわっていた。

厄介事どころじゃないじゃん！！これ、何のドッキリよ？！

事情はだいたい分ったけど、コトがデカ過ぎて色々についていけないよっ！！

指輪が国宝とか。指輪に守護精がいるとか。不審男が近衛騎士副隊長とか。

そんなことよりも！

ただ、ミーグの声が聞こえた、たったそれだけのことで、私をこんなオオゴトに引きずり込んだアレフとやらに、怒りを感じる。

そして、こんな事態を引き起こした張本人の王妃と貴族達に腹が立つてしょうがない！！

「闇の帝団」にもムカツク！！

この怒りを誰にぶつけたらいいの？

……

……

……うっん、ダメダメ！！怒ったところで状態は変わらないわ！

今は怒りのやり場を探すんじゃないくて、自分の身の振り方を考えなくちゃっ。

ゼウオンとレギも心配してくれてるだろうから、一刻も早く戻らなくちゃっ。

私を「地中転移」させたのは、多分、いや、きっと「闇の帝団」とかいっ犯罪組織の一員だ。

あの時、奇襲されたのはギルガを倒したってことがバレたから？なんて思ったけど、全っ然違う。的外れ。

王子様を平気で脅す「闇の帝団」とやらは、かなりヤバイ組織なのだろう。

……

そんなヤツラに捕まったってコトは……もしかして私、明日をも知

れぬ身って立場なんですか？？

いーやーだーっっ！！

アレフさん。ご自分は殺されると断言していたアレフさん。お亡くなりになっっているかもしれないませんが、真面目に貴方をお恨みいたしますよ？

内心で怒り狂ったり焦ったりしていると、ミーグが再び口を開いた。

『ユリーナさん、今ワタクシはユリーナさんの精神体の中でお話していますので、ユリーナさんのお体は眠っている状態です。目覚めましたらワタクシを亜空間から出していただけますか？』

おっと。今、私は眠っているんだね。

じゃあ、今聞いたことは夢ってことに出来ないかな？……出来ないんだろうな。はあ。

「うん。もちろん。すぐに亜空間から出すね」

目覚めたら夢オチでした。って展開を願いながらも、半ば諦め気味でため息を吐いたのでした。

第25話『ゲリンジアス王国の裏事情とは』（後書き）

ツッコミどころを見つけても、どうか大目にみてやってください。

第26話『夢オチではありませんでした』（前書き）

視点が ゼウオン 主人公 第3者へゼウオン 与 変わります。

第26話　夢オチではありませんでした

おかしい。これだけ探しているのに、何の痕跡も無いなんて。

『情報広場』周辺で、ギルド内で、宿屋までの道のりで。拳句の果てにはユリーナが今日の依頼を請け負った依頼者のところまで。思いつく限りの場所全てで聞き込みをし、探し回ったのだが、土の刻以降でユリーナの姿を見かけたという話は一切出なかった。

滴り落ちてきた汗を無造作に拭い、もう何度目になるかわからないほど往復した道を歩く。

ギルドから宿屋までの道は光源石が埋めこまれているので、何か落ちていても比較的気づきやすい。

わずかな手がかりを探して凝りもせず、この道を歩いていると、レギがこちらに向かって飛んでくるのが見えた。

今はもう水の刻になっていて人通りも僅かなためか、レギは躊躇うことなく真っ直ぐに降りてくる。

「ゼウオン、どうだ？」

「ダメだ」

「そっか……。やっぱり召還契約してもらえば良かったんだな…そしたら直ぐに居場所がわかるのに…」

ここまでしたら、もう普通に探したところで彼女は見つからないだろう。

こうなったら…アイツのところに行ってみるか。

土の季節になったから、今はヌーエンにいるはずだ。不幸中の幸い、

だな。

「レギ、先に宿屋に戻っていてくれないか？」

項垂れていたレギが、顔をあげる。

俺の雰囲気を感じてくれたのか、特に何も聞くことなく「わかった」といって宿屋へと飛んでいった。

飛んでいくレギを見送った後、俺は歓楽域の方へと早足で向かったのだった。

目が覚めたら、牢屋っぽいところにいました。

……はあ、と寝起きなのに欠伸じゃなくて溜息を吐く私。

あゝ…やっぱり夢オチじゃないのね。これ、確実に捕まっちゃってる状態だよな。

ハッキリと意識が覚醒すると、自分の姿にビックリ！

「なにこれー？！私の服は？！大金貨5枚もしたブーツも無ーー
ーいつっ」

今の私、ボロ布1枚を頭からズボつと被せられただけ。裸足だし。これ、「闇の帝団」とかいうヤツラの仕業だと思うんだけど…男の人がやったのかな？

うきゃーーっつ、冗談じゃない！！

なんかされたようではないみたいだけど、それでも体を見られたか
もしれないと思うと、憤りと恥ずかしさが緋い交ぜになる。

酷いつ、乙女の名譽を返せ！服返せ！！大金貨5枚ブーツ返せええ
！！！！

とりあえず、亜空間から例の指輪と新しい着替えを出そう。

怒りが覚めやらぬまま、「空間」の魔力で亜空間を出そうとした、
んだけど……

何故か、亜空間が出てこない。

あれ？おかしいな、もう1度。 やっぱダメだ。何度やつて
も出てこない。

「おかしいなあ。どうして亜空間出ないの〜？」

「ここが封魔牢だからよ」

ボソッと呟いた言葉に、思いがけず返事が返ってきた。
ビクッとして辺りを見回すと。

鉄格子越しに 冷たい目をした緑の髪の女が立っていた。

大都市ヌーエンの東南部にある歓楽域は、一攫千金を狙う者や一時
の快樂を求める者達が集う。

酒場や賭博場、娼館などが立ち並ぶ歓楽域の夜は、激しく呼び込みをする男達や媚びる様に体を摺り寄せてくる女達、それに応える客達で賑わっていた。

その中を、苛立っているかのような足取りで、早足に通り抜ける男がいた。

その男は、歓楽域には似つかわしくない鋭い殺気を放ち、誰をも近寄らせない。

男の足取りに迷いはなく、目的地に向かって真っ直ぐに進む。

男 - ゼウオンは、とある酒場の前まで来ると、無造作に店の入り口扉を開けて中に入った。

「いらっしやいませ。ご注文は？」

カウンターに座ると、酒場の店主が注文を取りにくる。

「リメ酒を1つ。それと…ソドブは居るか？」

ソドブ、と言う名が出た時、店主の片眉がピクリと動いた。

「お客さん…誰の事を言っているんですか？ウチにはそのような店員はいませんよ？」

「瞬耳のソドブ」に用がある。今は土の季節だ。ヌーエンにいるはずだが」

店主が無言でカウンターテーブルにリメ酒を置いた。

ゼウオンは酒グラスを手に取ると、中身を飲むことはせずに店主を見据える。

「…今はいません。あと1刻ほどしたら顔を出すでしょう」

「わかった。ちょっと急ぎなんだな。このまま待たせてもらおう」

グラスの中のリメ酒を一気に半分ほど飲むと、ゼウオンは目を閉じて物思いに耽った。

1 刻後

「なんでえ、ヴァルの倅^{せがれ}じゃねえか。随分と無沙汰にしてんじゃねえか。元気そうだな」

ソドブはゼウオンの顔を見るなり、口角をあげて声をかけてきた。

「まあな。今日は「瞬耳のソドブ」に用がある」

「ほう……そりやまた珍しいこった」

ソドブはゼウオンを探るように見ていたが、店主の方へと顔を向け、顎をしゃくった。

店主が頷くと、ゼウオンを促し地下階段へと向かう。

2人は薄汚れた小部屋に入ると、光源石をテーブルの上において向かい合わせで椅子に座った。

ゼウオンが無言で懷から皮袋出し、その中から硬貨を取り出した。小金貨、大銀貨、中銀貨、小銀貨、大銅貨、それぞれ1枚づつをテーブルに並べる。

「世間話もなしにイキナリかよ？…まあ、いい。何が聞きたい？」

「今日の正光頃、『情報広場』で俺の仲間が厄介ごとに巻き込まれ、

土の刻に姿を消した。仲間の名前はユリーナ。黒髪藍目の女魔戦士で、4日前に冒険者ギルドに登録した。彼女の行方を捜している。手がかりになりそうな情報、全てを買おう」

ソドブは考え込むように天井を見詰めていたが、やがて視線をテーブルに移すと、小金貨を手にとった。

5ツ星クラスの情報になるのか？！

内心の驚きは表情にださぬまま、ゼウオンは残った硬貨4枚を皮袋にしまった。

「ユリーナって女とオメエと一緒に行動してるってことは知ってるよ。あと、南の金魔もいるだろ？」

「……ああ。（さすがソドブだな）」

「ユリーナか。そいつ、こっちの業界じゃ今、注目されてんぜ？」

ゼウオンが訝しげな視線を向けると、ソドブはヒョイと肩をすくめた。

「豪商魔の羊緑族族長とな、縁故みたいじゃねえか。ユリーナは、あの天災クラスの怪物ギルガが倒された時期にシプグリアルに現れたらしい。ま、このへんの話は今回関係ないだろう。今日の正光に『情報広場』、か……」

ソドブは、手にしていた小金貨でトントンとテーブルを4回叩いた。

追加料が必要か。小金貨の手持ち枚数はそんなに無いな…。

ゼウオンは小金貨4枚と同額になる大金貨1枚を出して、テーブル

に置いた。

するとソドブは、今度は大金貨で3回テーブルを叩く。

「…随分と取るじゃねえか？」

「それだけのモンってことさ」

「情報の価値が満たなかつたら金返してもらうぞ？」

「むろん、構わないさ。自分の商品価値を誤るほど耄碌してはいない」

ゼウオンは亜空間から丈夫な皮袋を取り出し、その袋の中から大金貨を3枚テーブルに置いた。

「今日の正光1刻前頃、このヌーエンに「緑の民」の男が来た。ソイツはグリーンジアス王国ハフィスリード殿下付きの近衛騎士アレフ。「大地の指輪」を持っていた。そいつがな、ほんの僅かな間だが『情報広場』で青紫のローブを纏った黒髪藍目の女と接触したらしい」

ユリーナは厄介ごとに巻き込まれたみたいと言っていた。

それは…指輪を持っていたという騎士のことなのか？！

「……それ、ガセじゃねえだろうな？ユリーナは国宝ドロに掴まったのか？！」

ゼウオンの表情は冷静にみえたが、声の強張りや目の焦りは隠しきれていない。

「国宝ドロって、おめえ、そりゃ性急だ」

カカカツと笑うソドブに一瞥をくれると、ゼウオンは視線で話の続きを促した。

ソドブは笑いを収めると、真剣な顔つきになって身を乗り出し、一言。

「〔闇の帝団〕絡みだ」

〔闇の帝団〕だと?! 西の地最凶の犯罪集団じゃねえかつ

ゼウオンの射抜くような視線を、そのまま真摯に受け止めるソドブ。小部屋に沈黙が流れる。

「……さすが、大金貨3、いや4枚の5ツ星情報だな。詳細は?」

「グリンジアスの王太子争いは知っているな? 第1王子側のやつらが〔闇の帝団〕を使った」

「なるほど…そうか」

〔闇の帝団〕が人質をとるなり破壊工作をするなりで第2王子を脅し、守護輪を要求。

その受け渡しをグリンジアス国外の大都市ヌーエンにしたってところだな。

聡いゼウオンはすぐに状況を理解した。

「だが何故アレフとやらはユリーナと接触したんだ? 彼女は何も知らないはずだ」

「残念ながら、それは分からね。分っていることは、正光1刻後に〔闇の帝団〕のヤツがユリーナ自身の情報を集めていたこと、騎士アレフが〔闇の帝団〕に捕らえられたこと。〔闇の帝団〕はすでに転移していてヌーエンには居ないってことだ」

「……ユリーナは〔闇の帝団〕に攫われたのか?」

ソドブは乗り出していた体をおこし、腕を組んで思案した。
そして、おもむろに口を開く。

「今日の情報をこれだけ持っているのは、ちょっと別件で「闇の帝団」を探っていたからなんだが……。これはあくまで推測なんだがな、ユリーナも騎士アレフも「闇の帝団」の根城に掴まっている可能性が高い」

「根拠は？」

「2人とも魔力が高いからだ。利用価値がある。ヤツラは吸える汁は吸い取ってから殺^やる主義だ。」

「ヤツラの根城は何処にある？」

ゼウオンのその問いに、ソドブは口をつぐんで押し黙った。

ゼウオンが視線で促しても答えようとはしない。

場所を掴んでいないのか？ いや、そうなら知らないとはハッキリ言うはずだ。

最凶の裏組織「闇の帝団」の本拠地だ。大金貨4枚程度じゃ教えられない、か。

ゼウオンは出しっぱなしにしておいた皮袋をドンっとテーブルに置いた。

「大金貨50枚入っている。足りないなら上乘せする。場所は何処だ？」

それでもなお、ソドブは黙ったままだった。

「頼む、教えてくれ」

「……おめえ、本気なんだな。……いいだろう」

そう言つてソドブは、大金貨の入った皮袋をゼウオンの方へ押しや
った。

訝しげなゼウオンに、挑発的な笑みを浮かべると。

「金はいらねえ。「自白薬」を5人分だ」

「なんだつて…?」

「「自白薬」だ。ヴァルがな、生前言つてたぜ。『息子は俺より薬
師の才能がある』つてな。作れねえとは言わせないぜ?」

「…あれは、禁薬だ」

「充ゝ分、わかつてるさ。配分を微量でも違えると、廃人や狂人にな
った拳句に死んじまうつてんだろ? だからこそ、おめえに頼むの
さ。情報提供者を殺す気はないんでね」

どれ位の時が流れたのか。

逡巡していたゼウオンが、顔をあげてソドブを見た。

「わかった。2日あれば用意できる」

「よし。2日後の水の3刻に、またここに来てくれ。こちらにも更に
詳しい情報があがったら提供する」

ユリーナ…

相手が「闇の帝団」だろうとグリーンジラス王国だろうと、関係ない。
必ず探し出して取り戻す!

ゼウオンの紫の瞳には、強い決意が表れていた。

第27話 判明した居場所 (前書き)

視点が 主人公 第3者へゼウオン 主人公 第3者へゼウオン
になります。

第27話 判明した居場所

冷たい目をした緑の髪の女は、鉄格子の前まで来ると酷く冷酷な一瞥を投げてきた。

「ようやく目が覚めたのね。なかなか起きないから薬の量を間違えたかと思ったわ」

この声は、聞き覚えがある。

私を「地中転移」とやらで引きずり込んだヤツだ！

「一体何なのよ?!これ、誘拐じゃないの?!自己紹介と状況説明しなさいよ!!」

女の視線に怯むことなく、私は怒りにまかせて声を荒げた。

「うるさい女ね。誘拐だから何なの?必要だから攫った。それだけのこと。アンタ、南の金魔とどんな関係なの?調べ上げたけどアンタの体に召還印は無かった」

コイツっ…自己紹介も状況説明もする気ないんだな。

南の金魔っていうのはレギのことか…どうして知っているのだろう?でもこの調子じゃ、聞いたところで答えてはもらえなさそうね。

とりあえず私の体を調べたってコトは、この女が私をこんな格好にしたんだな。

男の人じゃなくて良かったけど、ム力つくことに変わりはないよ!

それよりも気になるのは「召還印」ってヤツ。

でも、ここで「召還印」てのは何ですか？って聞くのは、常識知らないみたいで（実際知らないケド）よろしくないだろう。

黙り込む私に、冷酷女はチツと舌打ちをする。

「素直に答える気は無いってこと？生意気な女ね。拷問して吐かせたいところだけど…アンタの体に傷をつけるわけにはいかないからね」

冷酷女はそのまま踵を返して立ち去ろうとした。

「ちよつ、待ちなさいよ！状況説明くらいしてよ？！」

「状況を知ったところでアンタはこの「封魔牢」からは出られないんだよ。土の赤月までおとなしくしてな」

冷酷女は殊更冷たい視線で私をチラツと見た後、そのまま去ってしまった。

土の赤月まで…それって、もしかして王太子問題と関係アリ？

ミーグに相談したいけど、亜空間が出せないんだから聞けないなあ。もう1度眠ったら会えるかもしれないけど、全然眠くならない。

ミーグ、お話できないかなあ…

- - 『ユリーナさん』

ん？今、ミーグの声が聞こえたような気が…

- - 『ユリーナさん、ワタクシを呼んでくださいましたか？』

頭の中に響くようなカンジでミーグの声がする。

「ミーグ？あれ？なんで？」

- - 『ユリーナさんがワタクシに意識を向けて語りかけてくださったので、繋がることができたのです。』

「そうなの？良かったあ！亜空間使えないから指輪出せなくて困ってたんだ。でもミーグとお話できて助かるよ」

- - 『意識してくだされば念話できますわ』

念話かあ。ミーグとお話するイメージをして、心の中で語りかければいいのか？

- - 「ミーグ、私の声、届いてる？」

- - 『はい、ユリーナさん』

ミーグの返事が返ってきたので、念話成功ってことね。

早速、土の赤月までのことを相談しようと思ったたら、ミーグの方から質問される。

- - 『ユリーナさんの魔力量は充分あるようですが、ワタクシを出すことが出来ないのは何故なのでしょう？』

- - 「なんかね、私、今、封魔牢つてところに閉じ込められているの。魔法使おうと思ってても出来ないの…」

- - 『封魔牢？そんなものがあるのは危険指定者収容所とか限られた所になりますよね？あ、でも「闇の帝団」の本拠地なら、あつてもおかしくないですね…困りましたわ』

- - 「じゃあ、やっぱり私「闇の帝団」に囚われているってのは確実なのね。ね、本拠地つてのはヌーエンにあるのかな？それとも…別の場所に転移させられちゃってるのかな？」

- - 『どうでしょうか？「闇の帝団」は各地に拠点があると言われているですが、本拠地の場所は知らなくて…』

- - 「そう……ところでミーグ、今しがた「闇の帝団」らしき女にさ、土の赤月までおとなしくしてろって言われたの。それって、グリンジアスの王太子が決まるまで監禁決定ってことかな？」

- - 『そうだと思います…』

- - 「うーん、マズイね。あ、そうだ！第2王子様はさ、ミーグと繋がっているんでしょ？この場所察知して助けに来てくれないかな？」

- - 『亜空間内にいるワタクシを察知することは主でもできませんわ』

ありや。指輪を亜空間に入れたのは大失敗だったみたい。

亜空間から指輪を出せれば何とかなるかもしれないのに、この牢に監禁されている限り無理だし…

自分がどのくらい眠っていたのか分からないけど、「地中転移」させられたのは土の青月20日のこと。ヘアグでは1ヶ月が44日から、2、3日経過していたとしても土の赤月まで、あと20日ある。

その間に何とか脱出方法をみつけなきゃ！！

拳を握り締めて決意し、私はくまなく牢内を調べ始めたのでした。

「約束のモノだ」

「おう。確認させてもらっ。ちよっと待ってろ」

ゼウオンが持つて来た薬を受け取ったソドブは、薬を持つてしばらく姿を消していたが、やがて戻ってくると。

「ちよいと試させてもらったぜ。良質な薬だな。さすがだ」

「……ヤツラの場所は？」

「カカカツ、そう焦るな。新たな情報が手に入ったんだ。追加料はとらねえからさ、まあ、座って聞きな」

ゼウオンが座ると、ソドブもドカツと腰を下ろして身を乗り出す。

「〔大地の指輪〕はユリーナが亜空間に入れちまったままらしいぜ」

「……ユリーナが指輪を?!」

「そう。どうやら『情報広場』でアレフに渡されたらしい。何故アレフがそんなことしたかは知らんがな」

「……それで？」

「ユリーナもアレフも〔闇の帝団〕の本拠地にある封魔牢に監禁されている。これは、内部に潜り込んでるヤツの情報だから確かだぜ」
「彼女は無事なのか？」

「そういつこつた。少なくとも土の赤月まではな」

「土の赤月まで？」

「正確には王太子が決まるまでは、だな。その後ユリーナとアレフがどうなるかまでは掴んでいない」

とりあえず今はまだ無事なんだな。…ユリーナ。

だが、悠長なことは言ってられない。明日、急に王太子が決まってしまう可能性だってあるのだ。

「それで本題の〔闇の帝団〕本部なんだが…場所はわかってる中に入れねえぜ？」

「何故だ？」

「地のガードがかかっているからだ。ヤツラは優秀で強力な魔法士を何人も囲い込んでいる。」

地のガード。守護に長けた「土」の魔法の中でも最高峰の絶対防御魔法。

そんなものを使えるほどの魔法士がいるってことか。
だが、それでも。

「行ってみないとわかんねえだろ。早く場所を教えろ」

「カカカツ、決めたらとことんな性格は変わらねえみてえだな。つとにヴァルに似てやがる。……ニアルースだ。グリーンジラス王都から南西に早馬で2日ほど行ったところにある街だ。その街の上流階級域、北東にある1番大きな屋敷。そこに「闇の帝団」元締のシユオイがいる。」

ニアルースか。ここヌーエンから馬を飛ばして5日つてところだな。5日間のうちに王子が決まる可能性は低いが急ぐに越したことはない。

ガタンつと椅子が倒れそうなほど勢いよく立ち上がったゼウオンを、ソドブが「おい」と引き止めた。

「何だ？ソドブ」

「おめえよ、そんなにユリーナって女が大事なのか？ガキの頃から妙に冷めてて生意気で、ヴァル以外には懐こうとしなかったのによ、随分変わったじゃねえか？」

「……もう、行く」

振り返りもせず去っていったゼウオンを、座ったまま興味深げに見送ったソドブがボソリと呟いた。

「ルキア様が捕まった時のヴァルみたいだな…死ぬなよ、ゼウオン」

この牢、おかしい。

広さは6畳くらいあるのに、移動できるのは牢の中心から半径1mくらい。

先に行こうとすると、なんだかゴムのように弾力のある見えない障害物が在るみたいで、全然進めない。

これじゃ調べようがないよ…。薙刀の（得物不要の）型もできないし…。

おかしいといえば、ここに入れられてからお腹が空かない。おトイレに行きたいとも思わない。寝ようと思えば眠れるけど、眠たいとも思わない。

それなりに時間が経ってるはずなのに、食欲も排泄欲も睡眠欲もないなんて、かなりオカシイよ！

…「ミীগ、ここヘンだよ。私、お腹空かないし眠くならないの」

…『封魔牢全体を「空間」で固定化してるのでしょうね。ユリーナさんの亜空間と同じ原理ですわ』

確かに亜空間道具袋に入れた食材は入れた時のままだけど、じゃあ今の私は時間が止まっている状態ってことかな。

…「監禁されて、どのくらいの時間が経ったんだろうね？」

…『ワタクシにもわかりませんわ…主はどうなっているのでしょ

うか…』

- - 「そういえばミーグはどうして第2王子様と契約したの？今までも誰かと契約したりした？」

- - 『今までも仕えていた主は居りましたが、ここ200年ばかりは居ませんでした。ハフィスリード様が初めてワタクシの器を身に着けたとき、この方にお仕えするよう天命が下りましたの』

- - 「に、にひやくねん？！ミーグって何歳なの？！」

- - 『さあ？ワタクシ自身もわかりません。ですがワタクシの初めての主はグリンジアス王国を建国した方でしたわ』

わああ。とっても愛らしい幼い女の子は、とっても長生きしてるのね…。

守護精というからには根本的に生命体からして違うんだろうケド。驚きましたよ。

時々ミーグと会話をしながら、何も出来ずに時間が過ぎる。

このままでは「闇の帝団」の思い通りになってしまおうと分かっている、何も出来ない。

ゼウオン…レギ…今、どうしてる？

私が居なくなつて、探してくれているのかな？それとも、あきらめられちゃったかな…。

「闇の帝団」に捕まる直前まで、とっても幸せだったのに。

ゼウオンと一緒に、食屋台通りに行くはずだったのに…

会いたい。

あのアメジストのような紫の瞳を、見たい。

惹かれてやまない紫の瞳を思い浮かべながら、私は膝を抱えて蹲っ

た。

青髪の男を乗せた馬が土煙を上げて駆けていく。その後ろを、金朱の魔鳥が追従する。

「ゼウオン、その速度じゃ馬がもたないんじゃないん？」

「定期的に回復液を与えるから平気だ」

「……鬼畜」

「何か言ったか？レギ」

「いんや。この調子ならニアルースには5日かかんないじゃん？
しっかし「闇の帝団」かあ。オイラク々に本気で暴れちゃうぞ？
ぐふふっ」

ゼウオンは苦笑して馬の手綱を握り直した。

ユリーナ、すぐに行くからな！

ゼウオンとレギは一路ニアルースに向かって疾走したのであった。

第27話〽判明した居場所〽（後書き）

次話から更新が不定期になります。

第28話 明かされた正体（前書き）

視点が 第3者へシユオイ 第3者へゼウオン&レギ 主人公
と変わります。

第28話　明かされた正体

「緑の民」の国グリンジアス王国の王都に最も近い街ニアルース。この街は大きな街道沿いにあるため、王都に向かう商人や王都から旅立った冒険者などの足休めに適した立地にある。

宿屋や酒場、旅に必要なものを売る露店が立ち並ぶ街だ。だが、上流階級域になると街並みは一変、高級感漂う屋敷が立ち並んでいる。

その上流階級域の北東には、侵入者を阻むかのような広大な森が広がり、森の中心には有力貴族にも勝る立派な屋敷がある。

屋敷の当主であり、裏組織「闇の帝団」元帥シュオイは、手にしていたインク筆（万年筆のような筆記用具）を、机の隅に置いてある筆立てに収めた。

「こざかしいネズミが…何処で飼われているヤツだ？」

シュオイの呟きが聞こえたかのように、扉を叩く音がある。

この叩き方は、ジェイか。

「入れ」

「失礼いたします」

足音も立てずに滑らかな動作でジェイが入室する。

「どこのネズミだ？」

「やはりお気づきでしたか。グリーンジアスの諜報員です。：おそろく第2王子の関係かと」

「ふん：魔力は保有しているんだろ？いつも通り「人造怪物」にしておけ。先日取り逃がしたネズミはどうだ？」

「申し訳ありません。逃げられました。ですが十中八九「瞬耳」の子飼いかと」

「わかった。下がれ」

「はっ、失礼致します」

まったく煩わしい…

ここ最近、この屋敷に忍び込もうとする馬鹿なネズミが増えた。ハフィスリードの差し金か。この場所を突き止めたのは、流石と言っておこうか。

だからこそハフィスリードに王太子、延いては国王になってもうっては困るのだ。

一度どこかの農村でも壊滅させて、再度脅しをかけておくか。丁度性能を試してみたい「人造怪物」もいるしな。

シュオイは、書き物机から離れると窓際に立ち、屋敷を囲む深い森を眺めた。

市井にも、ハフィスリードが守護精に見放されたとの噂が流れている。

もうすぐだな。

残忍な笑みを浮かべたシュオイは、しばし森を見ながら思考に耽った。

その森から、屋敷を見詰める2対の目。

1対はアメジストのような紫。もう1対は金箔を雜ぜたルビーのよ
うな金緋。

「オイラてつきり屋敷全体に地のガードをかけているかと思っただけどなあゝ、部分的とはね。3、4…地下も入れると7箇所はあるかな。これ、どーすんだ？」

レギがチラツと隣を伺い見ると、ゼウオンは眉間に皺を寄せて何やら考えていた。

屋敷を見つめながら熟考している様は気軽に話しかける雰囲気ではない。

刻一刻と時間が過ぎたが、レギはゼウオンが何かしら方法を考えていると思い、ゼウオンが発言するのを黙って待っていた。

やがて、ゆつくりとゼウオンがレギへと向き直り、口を開いた。

「屋敷全体に地のガードをかけていたのなら、広範囲魔法特有の綻びを探って突破しようと思っていたが…要所ごとにガードしてるとはな。中には囷ガードもあるかもしれないが、いずれにせよ封魔牢にはガードがかかっているはずだ。これではガード自体を抹消しなければダメだな」

「だな。オイラもそう思う。でもさ、ゼウオン承知済みだと思うけど、オイラここじゃ「主神の加護」は使えないし、コルエン裏山の例の異質魔法はユリーナしか使えないじゃん。どうすんだ？」

どうする？と聞かれたゼウオンは、視線をレギから屋敷へと移し、

屋敷の中の封魔牢にいるであろうユリーナを想う。

そして、決意を固めた。

「俺が「主神の加護」を使う」

「主神の加護」とは、魔法ではなく「神技」とよばれるもの。己の魔力と引き換えに主神の力を己の身に宿らせる技であるが、この技は高質で大量の魔力が必要のため、扱える者は極僅か。

人間では「青の民」「緑の民」「赤の民」「黒の民」の王族、魔物では最上級魔といわれる金銀魔、精霊では精霊長や姫精霊といわれる最上位の精霊のみが扱うことが出来る技なのだ。

仮にゼウオンが「青の民」の王族だとしても、東の地でなければ「主神の加護」は使えない、と思ったレギは

「はああ…ゼウオンさあ、ユリーナの頓珍漢がうつったか？」

と、何気に酷いことを言ってみた。

その言葉に苦笑を返したゼウオンは、後頭部に手を回して着けていた額防具を外すと、何やら髪をいじっていた、が。

……

……

（（衝撃の事実発覚！などのスクープ映像で流れるBGMを思い浮かべて下さい））

「……！ゼツ、オウン？！その髪、どーなッてんだぁ……？！」

青髪の模造髪を手にとって佇む者の髪色は 銀色であった。

驚愕の色を隠せないでいるレギをよそに、ゼウオンは模造髪だけではなく身に着けていた防具や衣服を全て脱いで亜空間にしまった。（ユリーナが居たら赤面悲鳴モノだが、レギだからノーリアクション）

未だ茫然自失のレギの前で、更にポーズンとする出来事が起こった。

一瞬、淡い光に包まれたゼウオンは 銀狼になっていた。

「レギ」

銀狼に名を呼ばれハッと我に返ったレギは、金ルビーの瞳を数回瞬かせて目前にいる者を凝視した。

「ゼウオン…だよな？その姿、は。西の銀魔…なのか？」

恐る恐ると言ったカンジで質問したレギに「ああ、そうだ」と、開

き直ったかのようなアツサリした返事が返ってくる。

「俺が人間として生きてきたのには理由ワケがあるんだが…それは後で話す。今はユリーナを助け出すことが先だ」

「……わかった」

物分りのいいレギの態度を有難く思いながら、ゼウオンは目を閉じて己の魔力を捻出し始めた。

「『我、西の地は魔獣銀狼族ゼウオン、わが身の魔力を以って主神「土の神」に希こいねがう。偉大なる主神の御力を、このゼウオンに宿らせ給え』」

ゼウオンが祈言を紡ぎ終えた。

一拍後

銀狼は、緑に輝くオーラに包まれた。

「やった…ホントに…」

レギの弦きは、気高き銀狼の咆哮によって掻き消される。

ウウオオオオオーン……

その咆哮は、森に、屋敷の中に、響き渡り――地のガード諸共あらゆる結界を打ち消した。

「これだけ分り易く行動すれば、バレバレだな。レギは陽動を徹底してくれ。俺は封魔牢を、ユリーナを探し出す！」

「了解！ いっちょハデにやっちゃうよ～～」

西の地最凶の犯罪組織の本拠地に殴りこみ同然で乗り込むというのに、レギは妙に楽しそうだ。
その姿は、聊か気負いすぎていたゼウオンに落ち着きを取り戻させた。

「頼りにしてるぜ、レギ」

「まっかせといて～。そっちも必ずユリーナを連れ戻してくれよ？」
「もちろんだ」

西の銀魔と南の金魔は視線を合わせて頷くと、屋敷に突撃したのであった。

「いったあゝい」

牢の床に頭突きしちゃったよ……ううゝ痛い。

今しがたまで私、ビリー ブートキャンプやってました。えへ。だって、ずっと蹲ってジツとしてると、どんどんネガティブになっちゃうから体を動かして気分転換しようと思ったの。

行動範囲半径1m以内で、何か体を動かせないかなって考えて思いついたのが、以前ブレイクしたコレ。

詳しいやり方なんて覚えてないから、適当にキックとかパンチしてただけなんだけどね。

拳句の果てには、見えない壁のような障害物が弾力性あるってのをいいことに、その障壁をサンドバック代わりにしてパンチやキックをお見舞いしてたんだよね。

ストレス発散とばかりにドカドカとやっていたら、急に障壁が消えちゃったみたいで、まさに力いっぱいパンチをしようとしていた私は、その勢いのまま、前のめりに突っ伏しちゃったってワケ。

勢い良すぎて普通だったら気絶してたかも。心身強化、万歳！

でも何故急に障壁が無くなったのだろうか？

- - 「ミーグ、聞こえる？」

- - 『はい。なんででしょう？ユリーナさん』

- - 「あのね、さっきまであった、見えない障壁が急になくなったの」

そう言いながら、さっきまで通れなかった所を進み、手の届かなかった鉄格子を握ってみた。

- - 『もしかしたら封魔牢の結界が解けたのかもしれないわつ、ユリーナさん、試しにワタクシを出してみて下さいませ！』

「あ、うんっ」

半信半疑ながらも、試しにやってみた。すると…

亜空間が出現したではありませんか！

私の掌に件のゴージャス指輪くたんが光り輝いている。

『やりましたわねユリーナさんつ。理由はわかりませんが今なら魔法が使えます！封魔牢の結界が戻る前に脱出しましょう！』

「うん！！」

ミーグの言葉に力強く頷き、早速鉄格子をぶち壊そうとして、ハッと気づく。

「その前に着替え！！」

亜空間から服一式と、シブグリールの修行時に履いていた靴を出して、素早く身に着けた。

「よし！逃げよう！！」

『あ、ユリーナさん。ワタクシの器はグリンジアス王家の方以外は指に填める事ができないので、お召し物の中に仕舞っていただけますか？、亜空間の中はご遠慮したいのです…』

「さすがにもう亜空間に入れようとは思わないよ。でも途中で落としちゃったら大変だし…。そうだ、紐に通して首にかけるとかでも良い？」

『はい。結構ですわ』

亜空間から革紐（髪を括る用の紐）を出すと指輪を通して、ネックレスよろしく首に下げた。

そして、薙刀も出すと「風」の魔力を込め、某有名怪盗ルパ 3世の石川五 門さんの戦闘シーンを強くイメージ。鉄格子に向かって身構える。

「『斬鉄刀!』」(ダ ソン掃除機以来、一言呟くようになった)
スパツ……ガランガラン……

切った…… 支えを無くした鉄棒が床に転がった……

「あらら……我ながら「風」の薙刀の威力にビックリだわ……」

まさか一振りでイケるとはね。それとも鉄格子の強度が弱かったのかな?

もともと牢から出られないような障壁があっただから、硬質な鉄を使ってなかったのかも。ラッキーv

それはそうと、薙刀どうしようかな?

いつまた魔法が使えなくなるかわからないから、このまま持っていきたいところだけど、万一ブーツみたいに没収(?)されたら非常に困る。特注品だし。

それに柄が長いから逃げるときには邪魔になりそう。

うん、ここは亜空間にしまっておこう。

私は薙刀をしまうと、「闇の帝団」から逃れるべく牢から脱走したのであった。

第28話　明かされた正体（後書き）

第13話でレギが言った「主神の加護」
ようやく説明できました（^^;）

第29話〜再会〜（前書き）

視点が 第3者へシユオイ 第3者へレギ 主人公 と変わります。

後半に残酷描写が有ります。苦手な方はご注意ください。

第29話　再会

深夜――水の2刻を少し過ぎた時

「闇の帝団」元帥シュオイは、獣の遠吠えが聞こえた気がして目が覚めた。

裏の世界で生きる者は周囲の変化に敏感で、眠っている間でも気を張ることが日常化している。

壮年とは思えないほど素早く寝所から抜け出たシュオイは、テーブルに置いてある光源石箱を開こうとして――止めた。

ガードが消えている。何故だ？

最初に思い浮かべた者は、グリンジアス王国第2王子ハフィスリード。

ハフィスリードは「緑の民」の王族だけあって、守護輪が無くとも魔力はそれなりに強大だ。

その気になれば単身でここまで乗り込み、「主神の加護」などの「神技」を発動させて奇襲をかけてくることも可能なのだ。

が、しかし。それは、ありえない。

王妃と貴族達がハフィスリードの行動に目を光らせている以上、身動きがとれないはず。

わずか数秒でここまで考えたシュオイは、ふと気づく。

確か獣の遠吠えがしたな……。ということは……魔獣か？！

ガードを消滅させることが可能な魔獣なんて、金魔の「金虎族」か銀魔の「銀狼族」だけだ。

だが、我等「闇の帝団」と西の金銀魔との接点は何も無い。どうなっているのだ？

「誰か」

飽くまでシュオイは冷徹な威厳ある声色で部下を呼ぶ。数秒後、彼の右腕ともいえる部下のリズが姿を現した。

「状況を説明しろ」

「……………」

「どうしたのだ？リズ」

リズが言葉を発しようと口を開いた、その瞬間。

ドガアアアーンツッ！！

屋敷を震わすほどの轟音が響いた。

「今のは？」

問うシュオイの表情は平素と変わらない。

リズは自分のボスの精神力に恐れ入りながら、答えた。

「朱焰族の者が単身、こちらに向かつて来るのを確認致しました。今の衝撃音も、その者の仕業と思われます」

「朱焰族だと？あの小娘絡みか？」

「おそらくは。それ以外に思い当たる節がありません」

「だが、いかに金魔といえど、ここは西の地。ガードを消すことなどできぬだろう？」

「おっしゃる通りなのですが…」

そう言つて言葉を濁したリズは、いつも通りの無表情ながら目が若干揺れている。少なからず動揺しているのだろう。

「もうよい。リズ、お前はジェイを連れて封魔牢へ行け。小娘を逃がしてはならんぞ。それから「人造怪物」を放出しようガルバンに伝える。」

「闇の帝団」に真っ向から突入してきた者に敬意を表して、我等の力をみせてやるでしょうか」

「はっ、かしこまりました」

リズが出て行くと、シュオイは羽織っていたガウンを脱ぎ捨て戦闘服に着替えた。

再び　…ズガアアンツツ…　どこかが破壊されたような音が響く。

「くつくつく…面白い。久方ぶりに血が騒ぎおる」

音がした方向を見ながら、シュオイは不敵な笑みを浮かべた。

まさかゼウオンが西の銀魔とはね

ゼウオンが人型から獣型に変わる一部始終を見ていたにも関わらず、レギは未だに信じ切れない思いを抱えていた。

が、しかし。

自分の目の前で起きた事実を信じようが信じまいが、今、優先すべきはユリーナを助け出すことだ。

銀狼族は聴覚、嗅覚共に優れている。探知力だけでいえば朱焰族よりも上だ。

ましてや今のゼウオンは「主神の加護」を得ていて、全能力が格段に上がっている状態。

必ずやユリーナを探し出すだろう。

そうでなくても、ゼウオンはユリーナのことツガイ番同然に想っているし。ぐふふつ。

オイラは派手に暴れて奴等の気を引くことに専念しようっと。

「『焰火球』」(メラゾマ)

パカッと開いたレギの嘴から高密度の紅蓮玉が吐き出され、屋敷の西側の屋根に直撃した。

ドガアアアーンッッ!!

闇に包まれた森に、屋根の一部が破壊された音が響き渡った。
レギは少し場所を変え、再び体制を整えると。

「もういつちよ」『焰火球』」

ズガアアンツツ

屋敷の壁の一部に激突した火球は、焦げた風穴を作った。

ヒュン・・・ヒュン・・・ヒュンツ

暗闇の地表から上空に向かい、マジックアロー魔矢が放たれた。
それは、レギ目掛けて真っ直ぐに力強く飛んでくる。

「おっ、さっすが「闇の帝団」、反応早いじゃん」

面白そうに目を細めたレギの嘴から、火炎が放たれる。
マジックアロー魔矢は目標者に到達する前に、激しい火炎に包まれ地に落ちた。
レギの眼下には、弓を構える人間数人と異形の怪物が8体。

なんだ？見たことない怪物：妙な魔力してんな～：気になるけど、
ここは足止めた方が無難じゃん？

レギの瞳が、金箔を塗したルビーの色から完全な金色に変化した。

「『幻乱焰』」（メダパ + マヌ サ）

金色の瞳が妖しく光る。

人間達と8体の怪物の周辺が、あたかも陽炎が発生したかのように

歪んだ。その数秒後、幻覚に囚われた彼等は同士討ちをし始める。どや顔で眼下を眺めていたレギは「んじゃ、お次」とばかりに、その場から飛び去ったのであった。

封魔牢から逃げ出した私は、足音を立てないように気をつけながら慎重に歩を進めていた。

さっき、ズドンとかドガンとかの爆音が聞こえた気がしたから、ホントは「風」と「重力」の魔力で超スピード化して走って逃げたいとこなんだけど、いかんせん状況が不明だし、何処かに見張りとかいたり罠が仕掛けられたりしてたら…と、思うと迂闊に突っ走れない。

牢の中も、今進んでいる道も、レンガみたいなもので出来ているから、自然要塞とかじゃなくて人工的建築物の中にいるってことが分かる。

湿っぽい空気とカビっぽい匂いがするから、たぶん地下なんだろうな。

でも、壁に小さめの光源石が埋め込まれているみたいで、真っ暗くてわけでもない。

明るくは無いけど一応周囲が見えるから、自分の光源石は亜空間に仕舞いつ放しにしてある。

…「ねえミীগ、誰かが潜んでいたりしたら分かる？」

声を出さずに念話でミーグに語りかける。

- - 『ええ。分かりますわ。今のところ敵意は感じとれませんが…なんだか奇妙な気配が渦巻いているカンジはしますの』

- - 「奇妙な気配？なにそれ？」

- - 『ワタクシにもそれが何者なのかは判別できないのですが…今のところはそのまま進んでもらって大丈夫です』

- - 「……そう、わかった」

何だか釈然としないまま道を進むと、行き止まりになってしまった。封魔牢からここまで1本道だったのに、なんで？

- - 「どうしよう?!ミーグ」

- - 『この壁の先から微かに魔力を感じますよ?』

- - 「ええ?敵かな?」

- - 『どうでしょうか…。いずれにせよ、このままでは脱出できませんから、その壁をお調べいただいた方がよろしいかと』

ミーグの言葉に頷き、正面の壁をじっくり見たけど、何も無い。うゝむ、なにか仕掛けがあるのかな？

- - 「何も無いみたい。もしかして指紋とか網膜確認のセンサーがあつて一致しないと進めないとか?」

- - 『せんさあ?って何ですか、ユリーナさん』

あつ、しまった。この世界ではセンサーなんて存在しないんだつた。それに、こんな苔が生えたような石壁にそんなモンあるわけないか。

- - 「なんでもないよゝあははつ。もういつそ、この壁壊しちゃおうか?」

そう言いながら壁をドンッと叩いたら……壁が回転扉みたいにクルッと回ったよ！

――『やりましたわ！さすがユリーナさん！』

まさか、こんな古典的な仕掛けだったとはね……orz

気を取り直して、薄暗い地下道を歩く。

ところどころに壁を真四角に刳り貫いたような牢らしき箇所があつて、ここは所謂「地下牢」ってヤツなんだなと認識した。

幾つか分かれ道があつたり、先程のように回転壁になっていたりした所もあつたけど、私が行き詰る度にミীগが『こちらだと思ひます』と誘導してくれたので、迷うことなく上り階段を見つけた。

階段を上った先は、またしても同じような光景。牢が並ぶカビ臭い道を黙々と進む。

――『ね、ミীগ。おかしいと思わない？こんなに牢があるのに、どうして誰もいないのかしら？捕らわれている人っていないのかな？』

先程から疑問に思っていたんだよね。

此処に至るまで、牢と思しき所は20箇所以上あつたのに、完全に無人なのだ。

――『ええ。確かに変ですわ。其処此処の牢で、妙な気配の残滓はありますのに……』

――『残滓？さっきまでは全部の牢に誰かいたってこと？』

・ ・ 『おそらくは。ですが、人間のようで怪物のような…今まで感じたことのない気配ですの』

人間のようで怪物のような気配？一体何が牢にいたのだろうか？

考えても分らない。でも、何だかイヤな予感がする。

イヤな予感ってさ、的中しちゃうこと多いんだよね…なんて思ったところで状況は変わらないので、今は逃げ切ることだけに集中しよう。

・ ・ 『あ、ユリーナさん。少々お待ちを』

・ ・ 『どうしたの？ミীগ』

呼び止められたので、立ち止まると『ワタクシの知る気配が…』と
呟くミীগ。

・ ・ 『ユリーナさん。この先左側を少しいった所に「緑の民」がいるようです。とても脆弱な気配ですので…おそらくは捕らわれた方かと』

う。一刻も早く脱出したい時に、そんな情報は教えて欲しくなかったかも。

ここでスルーして逃げたら、私、人でなし確定ですよ…。

ミীগの知り合いらしき人が捕まっているとなれば、無視なんてできません。

少し進むと、Ｔ字路になっていたので左側へ行く。

2、3分歩いたところで、牢に人が繋がれているのが見て取れた。

亜空間から薙刀を取り出し「風」の魔力を込めたら鉄格子に向かっ

て「『斬鉄刀』!!」

つい、声を出しちゃいました。

横倒しになった元鉄格子を跨いで、繋がれている人の近くに歩み寄った私は、息を呑んだ。

そこにいたのは、正視に耐えられないほど痛めつけられた戦士らしき男性。

顔の右側は血にまみれ、髪に固まった血がこびり付いている。

衣服はボロボロで、あちこちの皮膚が、鞭で打たれたように蚯蚓腫れしていた。

何かの毒にでもやられたのだろうか、首筋に斑点ができている。

そして――腕と足の関節が、逆方向に曲がっていた……

「ひ……酷い……」

血の気が引く思いで、立ち尽くしていると。

『アレフ殿?! しっかりなさってください!!』

え…アレフさ、ん?

繋がれている人の痛々しい顔に、思わず目を背けたくなるけど、自分を叱咤して彼の顔を良く見てみる。

彼は意識が無いのか、目は閉じられていたけど、この顔は確かに『情報広場』で私に指輪を握らせた人だ。

1分にも満たない出会いだったけど、印象が強かったので覚えてる。

「アレフさん……」

思わぬ再会に、私は戸惑いを隠せなかった……

第29話 再会 (後書き)

ドラクエをご存知ない方、レギの攻撃がイマイチ分りにくいかもしれません、読み流してください(^^;)

第30話　生きること諦めないで下さい

「アレフさん……」

ミーグからの話で事情が分かってから、心の隅でモヤモヤと割り切れない気持ちがあった。

あの時、時間つぶしを『情報広場』でしなければ

あの時、アレフさんに話しかけなければ

あの時、アレフさんが私に指輪を握らせなければ

私は「闇の帝国」に捕まったりしなかったのに……
ゼウオンとレギから離されることもなかったのに……

「くたら」「くれば」と、変えられない過去を悔やんでも現状が変わるワケじゃない。

こんな非建設的なことと思ってみても意味ないって分かっていても、どうしても自分の行動への悔恨と、アレフさんへの怨恨が拭いきれなかった。

でも、この男の人がアレフさんだと認識した瞬間、浮かんだのは恨み言なんかじゃなかった。

無事でいてもらいたいと思う。

グリーンジアスに帰還して、第2王子様のもとに戻って欲しいと思う。

助けたい

そう、強く思った。

アレフさんのすぐ側まで近寄り呼吸を確かめると、弱弱しいが確かに息遣いが聞こえる。

生きてる！！良かった……

まずはアレフさんを拘束している太い紐を、亜空間から出したナイフで切って、彼の体を「重力」で軽くしてから、ゆっくりと横たえた。

それから色々な薬液と布と桶を取り出し、「水」の魔力で桶に水を満たす。

水に浸した布を絞って、血とかで汚れている部分を丁寧に拭いていた。

薬液を塗るにしても、表面の汚れを取らなきゃね。

一番血が付着している顔面右側を拭いている時「うう……」と微かに呻き声がしたので、彼の顔を覗き込むと。

アレフさんは薄っすらと目を開いた。

「アレフさんっ、気がつきましたか?!」

彼は意識がハッキリしないらしく、焦点の合わない視線で私を見ていたが、やがて2、3度瞬きをする。

「貴女は…もしやヌーエンの『情報広場』の…」

「はい。ユリーナといえます。アレフさんのお立場やグリーンジアス王国の事情などはミーグに、指輪の守護精ミスミーグに聞きました。今、手当てをしますね」

再びアレフさんの顔を拭きにかかると、彼はジッと私の首から下げたままの指輪を見詰めていた。

「…それは…守護輪？」

「あ、はい。そうです。ミーグがここにアレフさんがいるって教えてくれたんですよ」

「……ユリーナ殿？」

「なんですか？」

「私のことは捨て置いて、早くお逃げください。そして守護輪をハフィスリッド「イヤです」

アレフさんの弱弱い声を遮り、キツパリと否定してやった。
捨て置くななんて出来るわけないじゃない。

「このままじゃアレフさん「闇の帝団」に殺されちゃいますよ？自分だけ逃げるなんて出来ません」

だけど、アレフさんは意思の強そうな目を真っ直ぐに向けてきて。

「今の私は…ただの足手まといです。殺される覚悟は出ていますので、どうか早くお逃げください。…貴女には…ユリーナ殿には…謝りきれないほど多大なご迷惑を…国の大事に巻き込んでしまい…何もして差し上げられないまま死ぬのは心苦しいですが、どうか…」

「イヤです」

再度、ハッキリ否定の言葉をアレフさんに言い放つと、キッと彼を睨んだ。

「生きることを放棄するのは止めてください」

感情が込み上げてきて、思わず涙が溢れそうになる。

でも、拳をグツと握って涙を抑えると、そのまま思ったことを口にした。

「私、正直アレフさんのこと少し恨んでました。なんでこんなことに巻き込んだの？って。

でも、今は心から助かって欲しいと思ってます。

グリンジアスには第2王子様や、他にもアレフさんの帰還を待っている人がいるんでしょう？

殺される覚悟が出来るとか、何も出来ないまま死ぬとか、そんな風に自分の命に見切りをつけて欲しくありません。

……生きることを、諦めないで下さい」

そのまま少しの間、お互いの意思をぶつけ合うように見詰め合っていた、が。

先に視線を逸らしたのは、私だった。

手にしていた布に視線をずらすと、チャプッと桶に布を浸して、再びアレフさんの汚れを拭き取りにかかる。

アレフさんは、もう何も言わずに黙ってされるがままになっていた。

汚れを拭い終わり、今度は傷薬液を手に取り丁寧に塗っていく。そういえば……と、疑問に思っていたことを思い出した。

「アレフさんは、どうして私にこの指輪を渡したのですか？ずっと、お聞きしたかったんです」

正直に答えてよって思いを込めて彼の目を見詰め、真面目な口調で尋ねてみた。

彼は私の視線を真摯に受け止め、『情報広場』の時と同じように真剣な目をして、言った。

「主神が導いてくださったと、守護精のお声が聞こえる貴女を…救世主だと思っただんです」

はい？ 救世主？？？ 誰が？？？ 私が？！

思わぬ答えに、目が点状態になっていると、アレフさんが弱弱しい声で続きを話す。

「守護輪が〔闇の帝国〕に渡り…シリルリード様が立太子なされたら…我がグリンジアス王国は西の地統一という大それた野望をお持ちの王妃様に支配され…西の地は多くの血が流れることになる…」

「え？！西の地統一？！ミীগ本当？」

『そうですね、ユリーナさん。しかも王妃様に付いている貴族達も同じです』

王妃ってグリンジアス王国だけじゃなくって、西の地全部を狙っているのか。

ってことは、シプグリールだって平和なままじゃいられなくなっちゃうってことかな。

それは何としても回避したい。

むむう、と眉間に皺を寄せた私に、アレフさんが「あれ？」といっ

た視線を向けてきた。

「ユリーナ殿？…守護精が何かおっしゃったのですか？」

「あ、ううん。王妃様ってとんでもない方なのね。でも、アレフさんも私を救世主だなんて勘違いも甚だしいですよ？私はただ…ちょっとだけ人と違う特殊能力があるってだけの、ただの小娘なんですから」

「特殊能力…ですか？」

『監視者』から与えられた「意思疎通能力」なんです…なんて言えないから、曖昧に笑みを浮かべて誤魔化すと、再びアレフさんの顔や体に傷薬液を慎重に塗っていった。

お次は解毒薬を首周りに塗っていく。効果があるかどうかイマイチ不明だけど、何もしないよりは良いだろう。

「かたじけない…」

申し訳なさそうに言うアレフさんに「私がしたいだけですから」と笑って答えた。

「さてと。あとは、腕と足ですね。こればかりは薬液では治せないし…ねえ、ミーグは治療術って使える？」

『残念ながらワタクシは守護精ですので、使える術も守護系のものばかりでして…お役にたてそうにないです。ですが、ユリーナさんは「水」の癒し魔力をお持ちですので、アレフ殿の腕と足を治して差し上げられるのでは？』

「え？そっか。今まであんまり魔法で怪我とか治したことなかったけど…やってみる」

私はアレフさんの右足の間接が元通りになるイメージを描きながら、彼の右足に自分の手を当て「水」の魔力を注ぎ込んだ。

すると……アレフさんの右足が治ったのだ。

「やった！治った〜っ」

これは、かなり嬉しい！

「水」の魔力って生活的なことばかりに使っていたけど、認識を改めなきゃね〜。

それから左足、両腕と治して、仕上げとばかりに体力回復液も使った。

完全復活、とまではいなくても、かなり状態の良くなったアレフさんは私に騎士の礼をとってくれた。

「本当に、ユリーナ殿にはなんてお礼を言ったらいいのか……」

「お礼なんて、いいですよ。あ、そうだ。では1つお願いしてもいいですか？」

「なんなりと」

「実は、私、ここに連れて来られる前まで身に着けていたものの全部盗られちゃったんです。衣服はそんなに惜しくないですが、ブーツがですね、とっても軽くて素早さもあがる魔防具でして大金貨5枚もしたんです。あと、魔力を増幅させるブレスレットも着けていたのに、無くなっています。アレフさんが無事グリーンジアスに帰還なされたら、ブーツとブレスレット買ってください（笑）」

冗談半分で言ってみると「え、そんなものでは足りないです」と驚きの反応。

大金貨5枚って、結構大金だね？そんなもの扱いしちゃんですか

…アレフさんってお金持ちなのかな。

「グリーンジアスに戻りましたら幾重にもお詫びとお礼を致します」

「（うーん、冗談だったんだけど、ま、いっか）とりあえず、今は早く此処から逃げましょう」

「御意」

しばらくアレフさんと一緒に黙々と地下道を進んでいたけど、ふと思った。

「あの、指輪はアレフさんにお返しした方がいいですか？」

『ワタクシはユリーナさんがいいですわ。せつかくお話ができるんですもの』

アレフさんの返事を聞く前に、ミーグから「待った」がかかったよ。

ミーグの声が聞こえないアレフさんは

「出来ましたらこのままユリーナ殿にお持ちいただきたいところですが、これ以上ご迷惑をお掛けするのも申し訳ないですし…」

と、少し困ったカンジで眉を下げた。

「あ、アレフさん、やっぱりこのまま私が持たせていただきますね。ミーグも会話相手が欲しいみたいなので」

「え？会話相手、ですか？…はあ、承知しました。では、お願いいたします」

「ええ。お預かりします。もう乗りかかった船ですしね、何が何でも指輪を死守して第2王子様に王太子になっていただきましょうね！」

ニコつと笑ってアレフさんに宣言すると、彼も「そうですね」と笑い返してくれた。

おおう、笑うとカッコイイではないですか、アレフさん。
ま、ゼウオンの笑顔には及びませんけどね。

ゼウオン、レギ、待っていてくれるかな。

今、私がいる場所は西の地でさえないかもしれないけど、必ずヌーエンに戻るから。

ギルドの伝言板とか、メルローさんの転移紙使って伝言頼むとかして、何とか連絡とるから。

だから、無事に再会できたら。また、仲間として受け入れて欲しいな。

ゼウオンとレギの事を思いながら薄暗い地下牢道を進んでいると、ミーグの声が『お待ちください』とストップをかけたので、立ち止まった。

「どうしましたか、ユリーナ殿」

急に止まった私に、アレフさんが気遣うように声をかけてくれる。

「あ、ミーグが待ってって…どうしたの？ミーグ」

『邪気のある魔力を感じまして…』

ミーグの言葉をそのままアレフさんに伝え、亜空間から薙刀と、以前買ったまま使っていない短剣を出してアレフさんに差し出した。

「アレフさん、もし誰かが襲ってきたら使ってください。たいした威

力は期待できませんが、丸腰よりは良いかと」

「ありがたい。お借りします。ところで、その武器は？ ユリーナ殿は魔法士ではないのですか？」

「これは薙刀といいます。私、魔戦士ですよ？ まだ駆け出しですけどね」

更にアレフさんが何かを言い募ろうとした時

『誰かきますわ！ 気をつけてください！！』

ミーグが叫んだ。

すぐさま薙刀を構え「風」と「重力」の魔力で戦闘態勢を形成する。私の動きにアレフさんも敏感に反応し、短剣を構えた。

流石グリンジアスの副隊長、本調子ではないはずなのに威圧感スゲーです。

湿っぽくカビ臭い地下道の床に、魔方陣のような円形の模様が浮かび上がった、と思ったら。

私をこんなところまで連れ込み、身包み剥ぎやがったアノ冷酷女が、相変わらずの冷たい顔で立っていた。

第31話 負けるわけにはいきません

冷酷女は、仮面でもつけてんの？って言いたくなるくらい変わらない表情で「ジエイ」と呟いた。

すると、またまた先程と同じような魔方陣が床に浮かび上がり、如何にも暗殺者ですってカンジの、目つきの鋭い男が現れた。

これ、召喚魔法？それとも「空間」の転移なのかな？

よくわからないけど、この2人は確実に「闇の帝団」であって、つまり、敵。

敵2人の出方を伺いながら薙刀を握る手に力を込めると、冷酷女はアレフさんに一瞥をくれた後、私に問いかけてきた。

「こんな所まで逃げていたのは予想外だったけど…何故そこに王国騎士が居るのかしらね？」

「……素直に答えると思う？」

アレフさんにあんな大怪我負わせたり、私を攫ったり、他にもたくさん酷い事してる「闇の帝団」には、何も答えたくない。

「とことん生意気な女ね。あら、指輪があるじゃない。なら遠慮なくアンタを始末できるわ」

始末、と言う言葉に反応してか、アレフさんが私を庇うように一歩

前に踏み出す。

冷酷女は相変わらず無表情のままアレフさんをチラ見して、それからジェイとかいう暗殺男の方を向くと、軽く顎をしゃくった。

ジェイは無言で頷くと、細身の剣を鞘から抜き、そのままの流れで切り掛かって来た。

ガキイイツ

ジェイの剣を、アレフさんが短剣で受け止めた。

アレフさんは剣を受け止めた直後、ジェイの足に蹴りをくらわそうとしたけど、寸でのとこでかわされてしまった。

素早く身をかわしたジェイは、体勢を整えると再度アレフさんへ攻撃を仕掛けてくる。

その一方で、いつの間にか冷酷女の手には数本の長針状の投武器が用意されていて、勢いよく私の方へと放ってきた。

早っ！ コルエン裏山の怪物が放った鎚石と同じくらいのスピードだよっ。

咄嗟に「水」の結界を張り、薙刀を振るって長針を弾き落としたところでチラッとアレフさんの方を見る。

ジェイと交戦中だったアレフさんも一瞬私に視線を寄越したけど、すぐにまたジェイとの戦いに集中し出した。

目が合ったのは僅かな時間だったけど、それでもアレフさんは私がそれなりに戦えると理解したみたい。

差し当たり、ジェイはアレフさんが相手してるので、私の相手は冷

酷女だけってことね。

冷酷女も、アレフさんのことは見向きもせずに私の動きに注視している。

互いの距離を測りあい、攻撃を仕掛けるタイミングを計っていると。

『主神「土の神」よ！偉大なる守護のお力を与え給え！！』

いきなり、いつもより厳かなミーグの声がした。

すると、その声に反応したかのようにゴージャス指輪が光り始め、その光が円形に膨張していき――私と、アレフさんを包み込んだのだ。

「〔守りの加護〕？！バ、バカなっ…何故ハフィスリード以外の者に守護精が手を貸す？！」

驚愕の表情になった冷酷女が、紐に通されたままのゴージャス指輪を見ながら叫んだ。

おおっと、この女も表情崩すことあるんだね。仮面疑惑は消えました。

「『このお2方がご無事でないと主のもとに帰れないからですわ。そんなことも分からないなんて、随分なおバカさんですこと。〔闇の帝団〕も高が知れますわね』……だ、そうです」

ミーグの言葉をそのままストレートに言っと、冷酷女はこめかみをピクピクさせながら般若のような表情になった。

あれれ？この女、意外に表情豊かかも。

「こ、この生意気女！ただ殺すだけじゃ気がすまないっ。徹底的に甚振ってから殺^やってやる！！私を愚弄した事、後悔するのねっ」

怒り心頭といった顔で手に何十本もの長針を構え、瞬時に放つてきた冷酷女。

「ち、違っ。わわ私が言ったんじゃなくてミーグが、守護精が言っただんたっばあーっ！！」

大慌てで薙刀を振るって、長針ラッシュをやり過^すしながら否定したけど、冷酷女の手が休まることはない。

この女、どんだけ長針持つてんのーっ？！

長針の猛攻は全く衰えず、とうとう数本の長針を弾き損^こなってしまった。

シマツタ！「水」の結界で防ぎきれる？！

一瞬、ヒヤっとした時

先程ミーグが施してくれたらしい「守りの加護」とやらの光が、長針を弾いた。

おおっ、スゴイ！！
自動^{オート}光の盾ってカンジだわっ。

「リス様、落ちついて下さい。こんな女の挑発に乗ってはいけません」

いつの間にか、アレフさんと交戦中だったジェイとやらが冷酷女の近くに来ていて、冷静な声を発した。

そうか、この冷酷女はリズって名前なのね。それにしても私は別に挑発なんかしてないんですケド。

作戦として挑発発言したって誤解されたのかしら？

リズとジェイは隙無く身構えたままボソボソと話を始めた。

これは所謂、作戦会議ってヤツ？

ならば早々に邪魔した方が良さだろうと思い、ブリザドマンの攻撃をイメージしながら「水」と「風」の魔力を手に込める。

「『凍える吹雪』」

イメージ通りの吹雪が、話し合い中の2人目掛けて襲い掛かる。

え？話し合い中に攻撃するのは卑怯？いえいえ、これは立派な戦略というものデス。

アレフさんだって「吹雪」を打ち消すのに隙を見せたジェイに切り込みかかってますしね。

私の方も冷酷女、基^{もと}、リズに一撃をくらわそうと間合いを詰めた時。

アレフさんとジェイが淡い光に包まれて……消えてしまった。

え？ ほわっつ、はっぶん??

突如2人が消えたことに戸惑いつつも、リズには内心の動揺を悟られたくなくて、念話でミーグに話しかける。

- - 「ミーグ、あの2人はどうなったの？」

- - 『どうやらジェイという者がワタクシの力の届かない所までアレフ殿を転移させたようですわ』

- - 「じゃ、アレフさんは「守りの加護」が無くなっちゃったってこと？」

- - 『ええ。ですが、アレフ殿は敏腕の王宮騎士です。1対1の戦いで遅れなどとりませんわ』

- - 「そっか。なら私も負けるわけにはいかないわね。この1対1の勝負、勝つ！」

ミーグと念話を交わしている間も、私とリズの攻防は続いている。雑刀の突きラッシュを避け続けたリズは、バックステップで距離を開けると、今度は魔法を放ってきた。

『ユリーナさんっ、足元にご注意を！！』

ミーグが叫んだと同時に、私がいたところの床がボコボコと柔らかくなっていく。

すぐさま「風」と「重力」で体を浮かせると、ボコツツと一際大きな音がして、ドロドロの巨大な手が現れた。

うきゃーっつ、なんじゃこりゃー？！ マドハド？！ 気持ちワル~~~~っつ

そのマドンドもどきは、意外にも素早い動作で私の足首を掴もうとした。

「『上昇気流』！！」

捕まっちゃタマラン、とばかりに更に上へと逃げると、そうするこ

とを見越していたかのようにリズの手から泥状の弾が私めがけて勢いよく放たれた。

ハッと気づいた時には、既に泥弾は目の前まで迫っていた。――ヤバッ

焦る私に、『平気ですわ』と力強く言い切るミーグ。

その言葉通り、泥弾は自動光の盾によって弾き返された。

わおっ、「守りの加護」って物理攻撃だけじゃなくって今みたいな魔法っぽい攻撃にも効果があるんだ！　ミーグ凄い！！

「チッ、『腐泥弾』もダメか…っ」

すっかり感情を頭にしたリズが、舌打ちをする。

舌打ちしたいのは私のほうだよ。さっさとケリつけて、とっとと逃げたい。

でも、「吹雪」も薙刀もたいしてダメージを与えられなかった…となるとアレしかないか。

リズからの攻撃はミーグの「守りの加護」が弾いてくれると信じて、私は手に魔力を込めることに専念し、「雷」を形成していった。

『！？　ユリーナさん、この魔力の質は一体…』

驚くミーグの声がしたけど、雷雲球形成のちに落雷のイメージをしている最中だったのでスルー。ゴメンね、ミーグ。

テニスボールくらいの雷雲球が出来上がったところで「『落雷！』」
と言いながらリズに向けて放った。

ヒュン……ピカッ……ドガアアンツ……

電撃をくらったリズが悲鳴を上げながら石床に倒れ付した。

致命傷ではないはずだけど、まだリズの体からは放電しているかのようにはちばちいつているので、当分は起き上がれないでしょう。

さ、今のうちに逃げようつと。

スタコラツサツサと先に進もうとした私に、ミীগから『お待ちを』と引き止められた。

……「何？ミীগ」

……『あの者はまだ息がありますよ？今のうちにトドメを刺しませんと』

……「……え……ト、ドメ？」

……『はい。当然のことではありませんか』

当然。トドメを刺す、つまり息の根を止めることは当然だと言いつ切るミীগ。

大罪人は生かせば更に犯罪を重ね、苦しむ人々が増えるだけ。だから、確実に存在を消す。

これがこの世界の常識。

ヘアグに来て数十日が経ち、私も大分この世界感覚に順応してきていると思っていた。

怪物との戦闘も今では問題ないし、警戒心を持って生きていけなくっちゃいけない世界なんだってことも分かっている。

でも……

石床に倒れたままのリズを見る。
ギョツと目を瞑って、考えた。

この女には散々なメにあわされた。「地中転移」とやらで誘拐され
たし、身包み剥がされたし、先程まで殺されかけたのだ。

今、私がここでリズの命を消さなければ、この女は今後何をしでか
すか分からない。

自分が狙われ、殺される可能性も高いのだ。

そうは思っても……

それでも……

やっぱり……私には、出来ない。

目を開くと、再び地下道を進み始める。

『ユリーナさん?!』

――「先を急ごう、ミーグ」

『……はい』

念話越しに私の気持ちも伝わったのだろうか、ミーグはもう言及し
てこようとはしなかった。

複雑な気持ちを抱えて地下道を進んでいくと、またまた階段が見え
た。

まだ地下牢道に続くのかな……なんて思いながらも上がっていくと、

今度は違った。

上がりきった先にあつたのは、3畳ほどの広さの、窓も扉も何も無い部屋で、床の中央には魔方陣が描かれている。

「ここ、出入り口が無いよ…。もしかして、この魔方陣がそうなのかな？」

『ええ。この床の陣は、到着先が固定されている転移陣のようですわ。おそらく上に乗るだけで発動しますわよ』

早速、中央の陣に乗ってみると陣が淡く光り、あのグニャ／＼な感覚がした。

うつ、気持ちワル…この感覚、まさしく「転移」だわ…

到着した先は、12畳くらいの広さの部屋だった。

この部屋の床にも魔方陣が描かれているんだけど、全部で4つある。

「これって、どの陣に乗るのがいいのかな？」

『さあ…困りましたわね…』

「う／＼ん、迷ってても埒明かないから一番手前のにしよう」と

えいつ、と飛び乗ると、またまたグニャ／＼な感覚。……何度経験しても慣れないな。はあ…。

グニャ／＼が薄らいできたと同時に、少し肌寒い風を感じた。

目を開けると、視界に入っただのは星明りに照らされた庭園らしき風

景。今は夜なのね。

よく見ると、私が居るこの庭園らしき場所は、立派なお屋敷風の建物に囲われている。

ここって、どこぞの貴族の中庭？！

「……どーなっちゃってんの？？」

久々に吸う外の空気を心地よく思いながらも、半ばボーゼンと歩き出す。

『ユリーナさん、気を緩めてはいけませんわ。ここは「闇の帝国」の本拠地ですよ』

「え！うそ？！こんな立派なお屋敷が、そうなの？！」

『ええ。良からぬ気配に満ちていますし、地下牢で感じた妙な気配を色濃く感じます。きっとここが本拠……地……！！ユリーナさん！！』

ミーグの声色が急に変わったと思った時、空中に淡く光る魔方陣が発生した。

あれ？なんだかギルドに登録しに行った時に地下闘技場で見た魔法陣に似ているな、なんて思ったら、陣から人が次々と現れた。

人……人じゃ、ないっ？！

星明りで露わになった彼らの姿は……ゾンビのような人型の怪物だったのだ。

第31話、負けるわけにはいきません（後書き）

ブリザ ドマン&マドハ ド=DQモンスターです。
ご存じない方、読み流してください（^^;）

第32話、退けない時も、あるんです（前書き）

前話に引き続き、戦闘描写があります。苦手な方はご注意ください。

第32話　退けない時も、あるんです

『主神「土の神」よ！偉大なる守護のお力を与え給え！！』

ゾンビの出現で呆気にとられた私に、ミーグが「守りの加護」を發動させてくれた。

すぐさま私も戦闘態勢をとり、薙刀を振るってゾンビ達に攻撃をする。

でも、ゾンビ達の体は粘着質で切りにくいっえ、切っても切ってもすぐに再生してしまう。

しかも多勢に無勢。

いくらミーグの「守りの加護」があっても、これじゃなかなか勝てないよっ。

さっきのリズとの戦いとかアレフさんの治療とかで結構魔力も消費しちゃったし、長期戦は絶対に避けなくちゃ！

ここは「雷」で一気に片付ける！！

私はゾンビ達の攻撃を交わしながら、なんとか間合いを広げると、ゾンビ達全員に落雷するイメージを浮かべながら急いで「雷」を形成して、放った。

「『分散して敵全員に落雷！！』」

テニスボール2個ぶんほどの雷雲球から放射状に雷が発生して、ゾ

ンビ達に落雷する。

ゾンビ達は「グアアアッ」とか「グオオオッ」とか、気味の悪い声をあげて地面に倒れた。

静まり返った庭園に、夜風が吹く。

「……倒した？」

確認するようにポツリと呟いた私の言葉に、応える者がいた。

「いや、人造怪物は倒れないのだよ」

「……誰?!」

突然響いた低い声に、驚いて後ろを振り向くと。

ロングコートのような羽織り着を風になびかせ、大きな戦斧バトルアックスを担いだ大柄な男の人と、白衣のような服を着た、研究者っぽい小柄の男の人がいた。

2人とも、顔や手に深い皺が刻まれているので、中年もしくは壮年だろう。

小柄な男はともかく、大柄の男は対峙しているだけで吞まれそうだ。それぐらい貫禄があり、相手を圧迫させる雰囲気がある。

大柄な男は、私を品定めするかのようにジックリ眺めてきたが、首から下げているゴージャス指輪に視線を止めた。

「……リズとジェイがしくじったのは「守りの加護」のせいかな。まさ

か守護精がハフィスリード以外の者に力を貸すとはな。今の奇抜な攻撃魔法といい、朱焰族のことといい…ただの小娘かと思いきや、とんだ食わせ者だったってことだな。…ガルバン！」

「お呼びですか、シュオイ様」

「人造怪物を復活させる」

「は、承知いたしました」

ガルバンと呼ばれた白衣男が、手に持っていた怪しげな魔道具らしき物に何やらブツブツと呟き始めた。

すると…地面に倒れていたゾンビ達が蠢いて、ムクリと起き上がったのだ！

「…！つ、なんで？！「雷」の威力が弱かったの？！」

狼狽する私を、シュオイと呼ばれた大柄男が不気味な笑みを浮かべ楽しげに見ている。

「ほう、先程の攻撃魔法は「カミナリ」と言うのか。実に興味深い。ここで殺してしまうのが惜しいくらいだよ。クククッ」

コイツっ…ヤなヤツ！

だけど、真っ先に倒すべきなのはガルバンっていう小柄男だ。

とりあえずガルバンが居なくなれば、ゾンビ達が復活することは無いだろう。

問題はガルバンの前にいる大柄男のシュオイってヤツだな。コイツはかなり強そうだけど、今の私にはミーグの「守りの加護」がある！！

標的をガルバンに絞って、疾風ダツシュで近づき薙刀を振るおうと

した。

でも……シュオイは甘くなかった。

ダッシュした私に、力強く戦斧を振り下ろして薙ぎ払ってくる。

「守りの加護」はまさに鉄壁の防御力で、戦斧の一撃を弾いてくれたのだが…薙ぎ払いまでは避けきれなかった。

ブンツツと振り払われた自分の体が、空中を舞っているのが分かる。

薙ぎ払われた腹部が痛い。

受身を取ることも出来ずに、私は庭園に置かれていた石像にドガン
つと直撃してしまった…。

「つう…」

『ユリーナさん！しっかりなさって！！ユリーナさんっ』

体中が痛い。

でも、骨は折れてなさそう…『監視者』はホント素晴らしい能力授けてくれたな。

「あれだけ盛大に落下して、意識があるのか。たいした小娘だ。面白い…面白いぞ、ククククッ」

シュオイがゆっくりと近づいてくる。

どうしようっ、どうしようっ！

やっぱり、シュオイは相当強い。ハッキリって得物で勝てるとは思えない。

可能性があるとしたら「雷」だけど…

「雷」は三種属複合魔法のせいなのか、威力はあるけど魔力消費が激しい。今の魔力で出来るのはピンポン球くらいの雷雲球だろうか。それ以上大きな球を形成すれば、きっとコルエン裏山の二の舞になっちゃう。

でも、逃げられないのだ。

僅かな可能性にかけて、気を失ってもいいから全魔力を使おう！
それしか勝てる道はない！！

覚悟を決めて、痛む体を奮い立たせ「雷」を形成しようとした時。

急に、ゾンビ達が石化した。

それからサラサラと砂状になり――風に吹かれて、消えた。

え…何が起こったの……？

これ、コルエン裏山の既視感？？
デジャヴュ

私が驚いて呆けていると、何やら彗星のようなものがシュオイとガルバンを襲った。

よく見ると、それは彗星ではなく、鈍く光る渦巻いた霧状の球体だった。

シュオイはヒラリと避けたが、球体をくらったガルバンは――な

んと石化してしまったのだ！

「…ガードや結界を消滅させたのは、アヤツか」

そんな眩きと共に、上を見上げるシュオイ。その視線を辿り、私もつられて上を見る。

3階建てくらいのお屋敷の屋根の上。
星空を背に、立っている者は。

まさか……

これは、奇跡？！

どうして…どうして、此処に居るの？

銀狼さん…

銀狼さんが、ヒラリと庭園に舞い降りて駆けて来る。

磨きぬいたようなプラチナのような銀の毛、骨太の足、モフモフの尻尾。

そして、アメジストのような紫の瞳。

まさしく、あの時の命の恩人（恩狼？）

でも、今はキラキラした緑のオーラを見に纏っているから、違う狼さん？

いや、やっぱり同じ狼さんだ。直感だけど、瞳が同じだって言い切れる。

「ユリーナ、無事か？！」

銀狼さんが私に言葉をかけた。

そのことも驚きだけど、もっと驚いたのは、銀狼さんの声。その声は、私が最も聞きたかった愛しい男性^{ひと}の声。

何故、ゼウオンの声なの…？ 何故、私の名前を知っているの？

動揺しまくる私を正気に返らせたのは、シュオイの憎憎しげな声だった。

「守護精や朱焰族だけでなく、銀狼族までとは……召喚契約さえしていない人間の小娘に味方するのは何故だ？」

私を庇うように前に立った銀狼さんは、上体を低くして僅かに牙を見せながらシュオイに向かい合った。

「何故、召喚契約していないと知っている？」

「知れたこと。召喚印があるかどうか、その小娘の体中を調べたからだ（部下が）」

「……体中だと？」

銀狼さんは、ゼウオンの声で「本当か？」と私に聞いてきた。

「うん。そうみたい。気を失っている間に身包み剥いで調べ上げたって言われたの（リズムに）」

「ユリーナを気絶させ…身包み剥いだ…だと…？」

銀狼さんは地底を這う様な唸り声をあげ、牙を剥き出しにする。

殺気が、殺気が物凄いです！

自分に向けられているワケじゃないのに竦み上がりそうデス！！
なんかよく分からないけど、銀狼さんは毛を逆立てて怒っている。

「ジジイ…テメエ、ユリーナの裸を見やがって（俺だって見たことないのにつ）…八つ裂きにしてやるっっ」

「は??？」

思いがけずハモってしまった私とシュオイ。

そんな私達の反応を気にかけることなく、銀狼さんはグルルウウツと威嚇するような音を出し、先程の霧状球体を何発もシュオイ目掛けて放った。

シュオイは何やら結界を張ったようだったけど、銀狼さんがウオオオンツと吼えると結界は消滅してしまう。

銀狼さんが放つ球体を、牙を、爪を、ただ避けるだけで防御に徹しているシュオイ。

「スゴイ…」

『本当に凄まじい力ですわね。あの銀魔は「主神の加護」を使っていない状態でも相当の実力がありそうですね！ユリーナさんのお仲間ですの?』

自然と口から洩れた呟きに、ミーグが賛同し、質問してきた。

「あ、うん。仲間…だと思う。確証はないけど…そうであって欲しいの。それよりミーグ、「主神の加護」って何？」

『え？「主神の加護」は言わずと知れた最高峰の神技ではありませんか？』

え？そうなんだ。そういえば何か前にレギが言っていたことがあったような…

あれ、何処でだったっけ？

思い出そうと考え込んでいると、「ユリーナ！！」と私を呼ぶゼウオンの声がした。

ハッと顔を上げると、目の前の地面から何かが現れそんな気配がする。

『あのシュオイとやらが良からぬ者を召喚したようですわ！ユリーナさん、ご注意ください！！』

あちこち痛む体を何とか起こそうとしていると、地面からボゴンッ
と現れたのは土巨人^{ゴレム}だった。

まだ完全に起き上がっていない私に、土巨人は腕を振り上げ叩き潰そうとしてくる。

ダメっ、逃げ切れない…

襲い来る衝撃を覚悟してギュッと目を瞑った。

でも……何も起こらない。

恐る恐る目を開けると。

そこには、土巨人の腕に深々と噛み付いている銀狼さんが、いた。その後方で、銀狼さん目掛けて戦斧を振りかざしながら近づくシュオイ。

「危ないツツ、逃げて!!」

悲鳴じみた声で叫ぶも、銀狼さんは土巨人から離れようとしなかった。

なんで?!……もしかして…銀狼さんが牙を抜いたら、私が土巨人に襲われるから??

私のせいで銀狼さんが傷つくなんて、絶対ヤダ!!

薙刀を杖代わりにして、気合と根性で立ち上がると、私は土巨人をすり抜けシュオイに向かって突進した。

『ユ、ユリーナさん?!何を…』

「銀狼さんが、…ゼウオンが私のせいで傷ついたら、私は自分が許せないっ」

シュオイがニヤリと笑う。その笑みは悪魔のようだ。

戦斧を大きく振りかぶるシュオイに、私も薙刀を構える。

力の差は歴然としていても、退けない時もあるのよ!!

戦斧と薙刀がぶつかり合おうとした刹那――上空から、声がした。

「ユリーナ、離れる――！」

咄嗟にバックステップでシュオイから少し離れて上を見上げると。
そこにいたのは、夜空に映える朱金の鳥。

「『焰火球』！」

火の玉が瞬時にシュオイを襲い、もう1つ放たれた火の球が土巨人を襲う。

シュオイは結界らしきものを張って火の球を弾いたが、土巨人の方は火柱となり、崩れ落ちた。

「レギ？！」

朱金の鳥は私の近くまで降りてくると、すぐに陽炎の結界を張ってくれた。

「レギ…ホントにレギなの？どうしてここに…」

「ん？助けに来たに決まってんじゃ〜ん。いきなり居なくなるからさ〜、オイラもゼウオンも心配したんだぜ？ま、お礼はグクコの実でいいよ。ぐふふっ」

「あはは、間違いなくレギね。…ありがとう…助けに来てくれて」「いいつてことよ。久々に大暴れできたし〜」

いつの間にか、銀狼さんも近くに来ていてレギに話しかけてきた。

「レギ！陽動は、平気か？」

「バッチリ」。当分、誰も来ないよ。ゼウオンとユリーナが屋外に居てくれて良かったよ。探す手間省けた。ぐふっ」

「悪いがこのままユリーナを守っててくれないか？アイツは俺が倒す！」

「そっか？手、貸そか？」

「いや、（ユリーナの裸を見やがったジジイは）俺だけでブチのめしたいんだ」

「ふん、わかった。気をつけるよ、ゼウオン」

銀狼さんは身を翻して、シュオイに攻撃をし始める。

戦況は、先程と同じだった。攻の銀狼、守のシュオイ。

明らかに銀狼さんが圧している。

その攻防を見ながら、私は堪りかねてレギに尋ねた。

「あの、レギ。ゼウオンって、その…もしかして…銀狼、だったりする？」

「うん」

アツケラカンと肯定されちゃったよ。

「え?!ホントに?いつ知ったの??私、全っ然知らなかったよ!」

矢継ぎ早にレギに迫ると「落ち着けよ」と諫められた。

「オイラも、ついさっき知ったばっか。なんかワケがあって、ずっと人間として生きてきたんだって。落ち着いたら話してくれるって

さ」

「そうなの…でも、なんで人型じゃなくて銀狼姿になったのかな？」

「〔主神の加護〕を使うためじゃ〜ん。魔物型じゃないと本来の魔物の力は発動しないから〜。」

「〔主神の加護〕……」

「そ。この屋敷にはさ、絶対防御の地のガードが張られていたんだよ〜。それをブチ破れるのは神技じゃないと無理だったからさ〜」

銀狼：ゼウオンとシュオイの戦いは、粗方勝負がついていた。

膝を突き、肩で息をしているシュオイに、ゼウオンが鈍く光る霧を吐く。

霧を振り払おうとするシュオイが、徐々に石化していった。

「『粉碎』！！」

ゼウオンの声と共に、石像となったシュオイは―――砕け散って、砂になり…消えた。

星明りに照らされた庭園に、静寂が訪れた。

第32話 退けない時も、あるんです（後書き）

やっと合流！

第33話 素性を話す決意をしました

人造怪物と呼ばれていたゾンビ達、白衣姿のガルバン、土巨人^{ゴーレム}、そして……シュオイ。

立派な建物に囲まれたこの庭園に次々と現れた敵は、全て消え去った。

痛む体を、なけなしの魔力で回復させると、銀狼姿のゼウオンが近くに寄ってきてくれた。

「ユリーナ、平気か？」

「……うん。……ゼウオン、なのね……？」

私は銀狼の視線に合わせるように膝をつき、ジッと紫の瞳を見た。

……この瞳だ。

無条件で惹き寄せられる、この紫。

狼の姿であっても、人間の姿であっても、この感情は、変わらない。

「……ああ。騙してたつもりは無いんだが……その……」

気まずそうに言い淀むゼウオンに、私はゆっくりと首を横に振った。

「騙されたなんて、ちっとも思っていないわ。むしろ、ゼウオンと銀

狼さんが同じなんだって分って嬉しいの」

「は?...嬉しい?？」

キョトンとする狼にクスツと微笑んで、改めてアメジストのような瞳をジツと見詰める。

無言で見入っていると、知らず涙が溢れてきた。

眦に溜まった涙が、頬を伝う。

「ユリーナ?!どうしたんだ?どこか痛むのか?？」

「違う...そうじゃなくて...私、ずっとずっと、銀狼さんに会いたかった。貴方に会いたかったの。」

コルエン裏山の山頂で...助けられて、ありがとって、言いたかったの。

今もまた、助けてくれて...どんなに感謝しても足りないくらいよ...

「...ゼウオン」

視界が涙でばやけちゃってるけど、それでも、溢れる気持ちを込めてお礼を言つと。

ぺろっ

涙を、狼のざらついた舌が舐め取った。

「オマエが無事で良かった...ユリーナ...」

呟くように言われた言葉は、本当に私を心配してたって分かるくらい彼の感情が込められていて。

胸の奥から込み上げてくるものを押さえることが出来ず、私はゼウ

オンに抱きついた。

急に誘拐されて封魔牢に閉じ込められた、怒りと不安。

巻き込まれたことが王太子問題という、重圧。

酷い姿で牢にいたアレフさんへ、自分が感じた思い。

「闇の帝団」の者との度重なる戦闘で晒された、命の危機。

過酷な状況の連続だった。

でも、ゼウオンとレギが助けに来てくれた。

しかもゼウオンは、今まで隠していた本来の姿になってまで、私を助けてくれたのだ。

命が救われたという安堵感、今まで溜め込んでいた負の感情、そして何よりゼウオンとレギが来てくれた嬉しさが、一気に爆発した。

涙が止まらない。止めようとしても、止まんない。

こんなに大泣きするのは、お祖母ちゃんが亡くなった時以来かも…。

「……うつつつ、うつく、…っ」

銀の毛に顔を埋めて、私は泣き続けた。

私が泣き止むまで、ゼウオンもレギもそのまま黙っていてくれた。段々と嗚咽が収まり、そっと銀の毛から顔を離して、手の甲で頬の涙を拭う。

「ゴメンね……イイ歳して、こんなに泣いちゃって恥ずかしい…」
てへつと照れ笑いすると、ゼウオンが優しい目をして額を擦り付けてくれる。

銀の毛の感触が、気持ちいい。

「ま、ユリーナも散々なメにあっただろうし、とにかく生きてくれて良かったよ。んじゃ、とっととズラかろうぜ」

レギの言葉に頷き、あつ、とアレフさんのことを思い出した。

「あ、もしかしたらアレフさんが私を探してくれているかもしれないわ」

「アレフさんって？」

「グリーンジラス王国第2王子様の近衛騎士さんなの。途中まで一緒だったんだけど、戦闘中にアレフさん敵に転移させられちゃって…」

「探した方がいいのか？」

「うゝん。でも、ここ、かなり広いよね。いつまでもいるのは危険だろうし…。もしアレフさんが脱出せずに私をずっと探してたら悪いかんって思っただけで、何処探せばいいんだろ？」

『ユリーナさん、アレフ殿が転移させられた場所はこの本拠地から離れた所ですわよ？ですから朱焰族の方の言つとおり、ここから早く逃げましょう！』

「え？そうなの？もゝミীগったら早く言つてよ。じゃ、逃げよう！」

ゼウオンとレギへと向き直ると、何故か不思議顔。

「あれ？どしたの？」

「……どしたのって、ユリーナがおかしな独り言言うからじゃ〜ん」
「へ？……あつ、そっか。ミーグの声って普通は聞こえないのよね。独り言じゃなくって、指輪の守護精マイルスミーグとお話してたのよ。ミーグがね、アレフさんが転移させられた所はこの敷地外だって教えてくれたの。だから早く逃げ……あつ！」

そうだ、ミーグも一緒に一部始終を見て、私達の会話を聞いているんだ。

そのことに気づきハッとした。

- - 「あの、ミーグ。お願いがあるの」

- - 『なんででしょうか？』

念話で話しかけたからか、ミーグも念話で返してくれる。

- - 「ゼウオンが銀狼ってこと、誰にも言わないで欲しいの。彼は人間として生きてきたの。銀狼だってことは知られたくないことなのよ」

以前一度だけ、ゼウオンって銀狼なの？って尋ねた時のことを思い出す。

あの時の彼は気まずげだった。忘れてくれ、と言われた。

本来の姿を隠してたってことは、銀狼だって知られたくないに違いない。

- - 『……ワタクシ……主^{あるじ}には隠し事が出来ないんです』

- - 「えっ？！……じゃあ、知られてしまうの……？」

- - 『主には、お伝えすることになるでしょう……。ですが、主は秘密を他言するような方ではありませんわ。ワタクシが保証致します』

「ホント？なら、第2王子様だけには知られてしまっけど、他には洩れないってことね？」

「はい。お約束いたします」

そっか。とりあえず、安心していいみたい。

「ユリーナ？急に黙り込んで、どうしたんだ？」

「あ、ゼウオン。えーと、お話したいことがあるんだけど、とりあえず、ここから逃げるのが先決よね？」

「そうそう、こんなとこ長居するとこじゃないし、さっさと離れよう」

「そうだな。話をするには此処は不適切だ。ユリーナ、俺の背に乗れよ」

そう言っで、私が跨りやすいように上体を低くしてくれる狼のゼウオン。

「ほえ？だつて、私が乗っちゃったらゼウオン走りにくいでしょ？ちゃんと一人で走れるよ？」

「いいから。乗ってもらった方が断然早く移動できる」

うっ。そう言われると断れない。

殆ど魔力がないから疾風ダッシュはできないしね。

「ハイ…お言葉に甘えます…」

おそるおそる狼に跨ると「しっかり？まってるよ」と言っやいなや駆け出す銀狼ゼウオン。

出窓や窓枠を足掛りに、ゼウオンは華麗に建物の屋根まで跳躍する

と、屋根づたいに走り出す。

振り落とされないように夢中でしがみ付いて、ギュッと目を閉じた。

フワッと落下するような浮遊感を感じた後は、顔に向かい風がビュンビュン直撃しっぱなし。

どのくらいのスピードで走っているのか分からないけど、これは馬より速いよっ

しばらくすると、顔にあたっていた風圧が緩んで、馬の軽い駆け足程度の速度まで落ちた。

そうつと目をあけると、そこは木々の生い茂る場所。どうやら森の中にいるようだ。

辺りは暗いけど、ゼウオンが纏っている緑のオーラが仄かに光っているお陰か、半径1mくらいなら見ることが出来る。

「ここは？」

「ニアルースの西側にある森だ。真夜中だから誰にも見られずに済んだな。「闇の帝国」の追っ手もないし、そろそろ大丈夫か」

ゼウオンの背から地面に降りると、レギが怪物避けの結界を張ってくれる。

ゼウオンに促されるまま、地面から剥き出しになっている大木の根に腰かけると、隣にゼウオンがお座りし、近くの木の子にレギが止まった。

「ユリーナ、ずっと気になっていたんだが…首から下げているのは「大地の指輪」なのか？」

「うん。アレフさんに渡されたの」

「…そうか。（ソドブの情報通りだな）先程、守護精と話したって

言ってたが、そんなこと出来るのか？」

ゼウオンの問いにコクつと首肯する。

そして、ミーグも私達の行動や会話を見聞きしていること、他言して欲しくない内容は第2王子様以外には洩らさないと約束してくれたことを告げた。

「それでね、何故私がミーグと話せるかっていうと…実は、私には特殊な能力ちからがあるからなの」

「特殊な、チカラ？」

鸚鵡返しに呟いたゼウオンに頷き、私は決心した。

「意思疎通能力」のことを含めて、全てをゼウオンに話そう、と。

ヌーエンに到着した翌朝に、宿屋の屋上でゼウオンに出身地を尋ねられたときから、私が異世界人だって知ったら彼はどうするんだろうって、心の隅で引っかかってた。

私って異端な存在だし、ギルガを墜としたという良いか悪いか分らない複雑な事情も抱えている。

もしかしたら、受け入れてもらえないかもしれないけど…それでもやっぱり、ゼウオンには自分を偽りたくないって思う。

偽の経歴なんかじゃなく、真実の私を知ってもらいたい。

あの朝は躊躇っちゃったけど…私は、ゼウオンに対して正直に誠実でありたい。

チラッとレギを見ると、私が話そうとしているのを察しているみたいで、励ますように1回頷いてくれた。

「ゼウオン。聞いて欲しいことがあるの。」

真面目な顔つきで、真剣にゼウオンの紫の瞳を見ると、ゼウオンも何かを感じ取ってくれたのか、真摯に私を見つめ返す。

「私ね…ヘアグとは違う世界の人間なの」

夜が明けていない暗い森の中。風が木々を揺らす音が、やけに耳につく。

しばし固まったゼウオンは、ようやく口を開くと「…理解できないんだが」と、戸惑った表情で呟いた。

狼姿になっても不思議と表情がわかるものなのね、なんて思っつまう。

『ユリーナさん…ワタクシもゼウオンさんと同じく、理解できてませんの…違う世界って、あるんですか？』

ミーグも、困惑気な声で聞いてくる。

冷静に話そうと自分に言い聞かせ、すうつと一呼吸すると、私は自分の経緯を全て語った。

前の世界で事故死したこと。

気づいたら真っ白な空間にいて、『監視者』に「意思疎通能力」と「心身強化能力」を授けられてヘアグに来たこと。

その時、全くの偶然でギルガの急所に落下して、褒賞金の大金貨1000枚を受け取ったこと。

羊緑族の族長さんにお世話になる代わりに、異世界の知識（主に料理）を教えたこと。

魔法訓練の最中にレギに出会い、レギは私が異世界人だと承知済みなこと。

コルエンの村長さんに話した経歴は、面倒事回避のために羊緑族族長さんと捏造したものであること。

「だから…ミীগと会話出来るのは「意思疎通能力」があるからなの…。実は、コルエン裏山の怪物の声も、聞こえたのよ…」

ゼウオンが今、どんな表情をしているか知るのが怖くて、俯きながら話を続ける。

「私…異世界人で、髪と目の色の組み合わせが変わっていて…魔法も異質なものの作っちゃうし、「意思疎通能力」で普通なら聞こえない声も聞こえるし…随分な変わり者だよ…。おまけに、ギルガの件でならず者に狙われる可能性もあるし…。私の存在って、世間に敬遠されちゃうかもしれないけど…でも、ゼウオンには隠し事したくなくて…」

彼に、自分を否定されるのは怖い。でも、自分という人間を偽ることはできない。

私は項垂れながらギユツと目を瞑った。

すると…狼のゼウオンが、私の頬をぺろつと舐めてくれたのだ。

「…え？……ゼウオン…？」

思わず顔を上げると、優しい表情をして私を見ている。

「合点がいった」

ずっと黙って話を聞いてくれたゼウオンが、ようやく言葉を口にした。

あんな身の上話をした後なのに、いつもと変わらない優しい彼の瞳。その瞳を見て、緊張がスツと抜けて体が軽くなる。

それにしても、合点がいったって、どういうことなのかな？

物問いたげな顔でもしてたのだろうか、ゼウオンが言葉を続けた。

「ユリーナは色々と思議なところがあるなって思ってたんだ。その理由がわかって合点がいったんだ。」

「不思議？」

「そう、その髪と目の組み合わせや異質な魔法とか、珍しい料理とか、変わった発言とか、さ」

「…不思議…珍しい…変わった…かあ」

そっか、やっぱりゼウオンも私は変な女だと思ってたんだね…

つい、目をそらしてしまう。

「ユリーナ、誤解するなよ。俺はその不思議なところも魅力の一つだと思ってるんだからな」

え？今、魅力って言った？？

驚いて、また彼を見ると。

先ほどの優しい表情とは少し違う、照れたような表情をしていた。

「ユリーナはユリーナだろ？どんな能力があるうと、どんな素性であろうと、大事なのは本質だ。」

「ゼウオン…そう言ってくれるのは凄く嬉しいけど…でも、私みたいな変わり者が仲間になったら、迷惑かけちゃうかも…」

「……仲間にいたら迷惑するのは…むしろ俺だ」

「え？…なんで？」

キョトンとすると、今まで木の枝から動かず黙っていたレギが飛んできて私の膝に止まり、ゼウオンに金ルビーの瞳を向けた。

「迷惑になるってのは、ゼウオンが人間として生きてきた理由と、関係アリ？」

そう言われたゼウオンは、ゆっくりと頷いた。

少し視線を彷徨わせた後、意を決したかのように私とレギを見る。

「俺は、同族に…銀狼族に存在を知られたら……殺されるんだ」

思いもかけない衝撃過ぎる告白に、私もレギもすぐには反応出来なかった。

ゼウオンの顔は真剣で、嘘や冗談なんかじゃないってことは判る。判るんだけど――

脳が、彼の言葉を拒否する。体が、強張る。

暗闇の森が、徐々に薄闇へと変っていった。夜明けが、近づいていた。

第33話 素性を話す決意をしました（後書き）

素性の明かし合い

先攻はユリーナ。次話は後攻ゼウオンです。

第34話　離れたくないんです

「俺は、同族に…銀狼族に存在を知られたら……殺されるんだ」

その言葉に、私は呼吸も忘れるかと思うほど固まってしまったが、レギは違った。

しばしの静寂の後、口を開いたのはレギだった。

「オイラさ、ゼウオンって破族された「里無し魔」なのかと思っただけど、どうやら違うみたいだな。「里捨て魔」だろうと「里無し魔」だろうと、普通は生まれ里に関わらなければ抹消されることは無いじゃん？殺されるってことは、かなりの事情があるってことか」

「まあ、な」

フツと苦笑するゼウオン。

「俺は「里捨て魔」でも「里無し魔」ですら、ない。存在が、無いんだ」

それから彼は、どこか達観したかのような口調で自分の身の上を淡々と語り始めた。

銀狼族の族長に双子が生まれたことから起こった、過去の悲劇。その悲劇を繰り返さぬために定められた、銀狼族の掟。

自分は族長の仔であり、三つ仔の中仔であること。

実の両親が掟を破って、同族に知られないように風の精霊の族長に自分と弟を託したこと。

風の精霊長の計らいにより、自分は「青の民」の魔戦士ヴァルバリドに育てられたこと。

銀狼族だと知られないよう、幼い時から模造髪と消魔匂の胸飾りを着けていること。

ゼウオンから語られる内容は驚きの連続だったけど、私もレギも真剣に彼の話に聞き入っていた。

けれども――

「もし、同族に知られることがあったら、ユリーナやレギを巻き込んでしまつかもしれない……だから、いずれは離れようと思っていたんだ」

そう言われた時、私は弾けたように反応した。

「離れる、の？」

思わず聞き返してしまうと、ゼウオンは表情を歪めて地面に視線を落とした。

離れるということを否定しないゼウオンに、心が急速冷凍されたみたいに瞬時に凍りつく。

「私は、イヤ。ゼウオンにどんな事情があろうと、離れたくないっ」

強く言い切ると、彼は視線をこちらに戻した。

「私自身、さつき話した通り色々厄介な事情を抱えているけど…それでもゼウオンが許容してくれるなら、ずっと一緒にいたいって思ってる。ゼウオンは？…離れたい、の？」

真っ直ぐ彼を見詰めて自分の気持ちを言うと、また視線を逸らされた。

「…俺のせいでユリーナとレギが狙われることになったら…耐えられそうにないんだ」

「だから、お別れするつもりなの？！私はその方が耐えられないよっ…！」

感情が昂り、叫ぶような声色になってしまった私に、ゼウオンは辛そうな表情を向けた。

彼にそんな表情させたくない。でも、気持ちが抑えられないよっ。

「一緒にいたいのに、ゼウオンの側にいたいのに！……大切な存在がいなくなっちゃうのは、もうイヤ…」

鼻がツンっとしてきて、目に涙が浮かんできた。

さつき庭園で散々泣いたのに、また泣くなんて情けないっ。

ここで泣いたらゼウオンもレギも困っちゃうに決まってる！

零れ落ちそうになる涙を懸命にこらえ、無理やりニコッと笑う。

「私、狙われても平気よ！どうせギルガ関係で狙われるかもしれないだしね！だから狙われ者同士仲良くしょ？それにゼウオン今まで大丈夫だったんだから、これからもきつと大丈夫よ！それでも銀狼族に知られちゃったら、その時は返り討ちにしちゃおうよ！」

返り討ちしちやおう発言に、啞然とするゼウオン。面白そうに目を細めるレギ。

「あ、でも銀狼族って皆ゼウオン並みに強いのかな……。うーん、「雷」効くかな？」

真面目に銀狼族撃退方法を考えていると「ぐふふっふっ」とレギの笑い声がした。

「銀魔一族を返り討ちって、フツ―は考えないし。やっぱユリーナは面白いな」

「え？襲われたらやり返さなきゃって言ったの、レギでしょ？シプグリールから旅立つときに、そう言われたよ？」

「いや、ユリーナ。レギが言いたかったことと、俺の事情とでは意味合いが違うんだが……」

「そんなことないでしょ？ゼウオンの命を奪おうとするヤツは、何者であっても私の敵。だから倒す。今は全然戦力にならないかもだけど、更に鍛錬を重ねて強くなるように努力するわ！」

「……………」

固まるゼウオン。一層楽しそうに「ぐっふっふっ」と笑うレギ。

「いいじゃん、いいじゃん。ユリーナとゼウオンの仲間やってれば、ずっと退屈しなさそう。ぐふっ」

レギは笑いながら私の膝から肩にパタパタと移動すると、真面目な顔つきになってゼウオンと向き合った。

「あのさ、ゼウオン。銀狼族に限らず金銀魔ってのは殆ど自里から出ないじゃん？しかも金魔のオイラでさえゼウオンが銀魔だって気づかなかつたんだぜ？ゼウオンの気持ちもわかるけどさ、だからって仲間やめるほどのことでもないじゃん。ユリーナの言う通り、今まで平気だったんだから今後も平気だよ。」

「……レギ」

「そうよ！大丈夫よ、ゼウオン。それとも…私みたいなヘンテコ女の仲間はイヤ、とか？」

「そんなわけないだろ！」

今度は即座に否定してくれた。

「なら、これから一緒に居よ？」

ゼウオンは少しの間、何かを考えているようだったけど、やがてコクンと頷いてくれた。

その仕草がメチャクチャ可愛くて、こんなに大きな狼だっていうのにワシャワシャと撫で回したくなっちゃった。

「改めて、よろしくね。ゼウオン、レギ」

コルエンでは、ゼウオンが「よろしく」と言って手を差し出してくれた。

今度は私から手を差し出す。

「……ユリーナ、レギ。…ありがとっ……よろしく」

ちゃん、と私の手に前足をのせる銀狼くん。

カワイイ。カワイ過ぎます、狼ゼウオン。

人型の時はウツトリするくらいカツコイイのに、魔物型の時はカワイイなんて、反則よっつっ。

カツコ可愛いゼウオン、どこまで私をメロメロにさせるのですか？！

内心で悶えモエてると、レギが私達の手に乗って「2度目のヨロシクだな」と言った。

森の木々の隙間から朝日が射してくる。もう、夜が明けたみたい。なんだかコルエンの時みたいだなって思ったら、クスッと笑みが洩れたのでした。

「そうだ、ユリーナ。人型に戻る前に召喚契約しておきたいんだが、構わないか？」

ゼウオンが何かを思いついたように、突然そんなことを言い出した。

「え？急にどうしたの？」

「ユリーナは召喚って好きじゃないらしいけど…召喚魔になれば離れていてもオマエの居場所が判るし、オマエも俺の居場所が判るようになる。」

「ええ？そっなの？！」

「ああ。たとえ離れていても互いが何処にいるかがわかるし、呼び出せばすぐに会えるってやつだ」

「そっかー！！召喚って身勝手なカンジがして敬遠してたけど、居場所がわかるなんて…そんなスゴイ特典があったんだ！」

スゴイ、スゴイと興奮する私を、ゼウオンは少し驚いた目で見て、レギにボソボソと話かけた。

「なあ…ユリーナに召喚のこと詳しく説明してなかったのか？」

「まあね。別に一緒にいれば必要ないかと思ってたし…。ま、今回の件は正直意表をつかれたよ」

「それで？どうやって契約するの？」

「ユリーナの血を、ほんの少し俺にくれるだけでいい。」

「へえ…そうなの。わかったわ」

返事をする、ちよびつと回復した魔力で亜空間を出現させ、ナイフを取り出し指先を少し切った。指先から鮮血が滲む。

「これで良い？」と、そのままゼウオンに指を差し出した。

「ああ、すまないな…オマエの体に傷などつけさせたくは無かったのだが…」

「これくらい全く問題ないよ？すぐ治るしね」

ゼウオンは指先にプツクリと膨らんだ血を、ペロつと舐めた。狼の彼の舌は、大きくて長く、少しザラザラしている。

私の血を舐めたゼウオンが瞳を閉じて、数秒すると……夜明け前に消滅した「主神の加護」とはまた違う色味の緑のオーラが彼を取

り囲むように渦巻いた。

瞳を開けた彼は、私を見つめながらへアグ共通語ではない言葉で話し出した。

『我、西の地は魔獣銀狼族ゼウオン、我に証の血を与えし人間ユリーナの呼びかけに応えること、主神〔地の神〕に宣誓す』

すると、左腕の上腕が熱くなった。

「ユリーナ、今、召喚契約の証が腕に刻まれたはずだ」

確かめるべく、肩越しから服の中を覗いて、今しがた熱くなった上腕部分を見ると。

5cmくらいの、狼を模ったような紋章みたいな模様が浮かんでいた。

銀と紫が織り交ざっているような色をしていて、微かに輝いている。

「うわあゝゝ、なんかカツコイイ！」

自分の腕を繁々と見つめる私に、ゼウオンは召喚について教えてくれた。

「その印にオマエの魔力を込めると、発光しだして熱を帯びる。あまり少ない魔力だと発動しないが、多量な魔力を注ぐ必要もない。印が暖かくなったなと感じる程度まで魔力を込めたら、俺の名を呼べ。」

「うん、了解。なんだか、嬉しいな」

「俺もオマエの居場所がわかるから嬉しいぞ」

そんな事言われると、更に嬉しくなっちゃって、顔がニマニマしちゃう。

「んじゃ、次オイラと契約な。オイラもユリーナの居場所わかってたほうが良いし、もしオイラ達が分散することになっても、ユリーナがオイラとゼウオンを召喚したらすぐ集合できるじゃん？」

確かにレギの言うことは理に適っている。召喚って色々と便利なのね。

でも、ゼウオンと契約して、その上レギとまで契約できるのかな？

「ね、召喚契約って人数制限ないの？」

「ないよ、ただ、魔力量によつて限りはあるけどユリーナだったら6人はいけそうじゃん」

「あ、そうなんだ。良かった。えーと、血が必要なんだよね？」

指先を見ると、すでに血は止まっていたから、別の指先をちょこつと切る。

嘴をパカッとあけたレギの舌にチョンッと指先をのせて血をあたえると、レギは瞳を閉じて数秒間ジっとしていた。

すると、赤のオーラが渦巻きレギを取り囲んだ。

レギは金ルビーの瞳を開け、ヘアグ共通語でもなく、先程ゼウオンが話した言葉とも異なる言葉で話し出す。

『我、南の地は魔鳥朱焰族レギ、我に証の血を与えし人間ユリーナの呼びかけに応えること、主神「火の神」に宣誓す』

すると、今度は右腕の上腕が熱くなったので、再び服の中を覗いて熱くなった腕を確認した。

そこには、金色と朱色と橙色を織り交ぜたようなカンジの、鳥を模

った紋章が微かな光沢を帯びて浮かんでいた。

「きゃあ、これもキレイ〜〜！私の両腕、豪華に装飾されちゃった
〜〜」

芸術品並みに素晴らしい腕の紋章を食い入るように眺める。

これ、タトウーだったら結構売れるんじゃないかな〜。

「ぐふふふ〜、召喚印は装飾品じゃないって〜、ユリーナってホント面白いなあ」

「だあって、両方ともキラキラしててホント素敵なんだもの〜。あ、ねえ、二人同時に召喚することって出来るかな？」

「ああ、同時に印に魔力を込めれば出来るぞ。ただし魔力はそれなりに必要になつてしまふハズだがな」

例え離れてしまつても、私が召喚すればいつでも二人に会える。

そう思うと、なんだかとても安心感があつて、腕を見ながらニヤニヤしちゃう。

召喚契約つてGPSみたい。いや、すぐに呼び出せるんだからGPSより高機能だわ。

プレイヤーが無いみたいにも思えるけど、今回みたいに急に攫われちゃったりなんかした時には、とても役に立ちそう。

ま、そうそう誘拐なんてされないとと思うけどね。ってゆーか、されたくない。

「完全に夜が明けたな。この森は街道から外れてるから滅多なこと

では誰も来ないはずだが、そろそろ人型に戻るか」

そっか。万が一誰かに見られたらマズイものね。
でも、その前に。

「ね、ゼウオン。人型に戻る前にちよこつと毛皮、触って良い？」
「は？ああ、構わないが…」

やった！撫でたくて撫でたくて堪らなかったのよ。うふっ。

ふわり、と狼の首に両腕を絡ませ、銀の毛に頬を摺り寄せる。

「うわあゝ、さらっさらゝ、つやつつやゝ、もっふもふゝ、素敵ゝ
ゝ！」

私は恍惚として彼の銀毛を撫で続けた。

頭から背中を撫でた後、ゼウオンの許可をもらって内側の柔らかい毛も堪能する。

それはもう夢中で彼の全身をくまなく撫でまくった。（やりすぎ）

「おい…ユリーナ…」

熱心に触りまくる私にうるたえるゼウオン。

「ねねね、尻尾、尻尾も触りたいゝゝ！」

「……はあ…好きにしてくれ」（断れよゼウオンっ）

「ありがとおゝ、ああん、素敵ゝ、尻尾もモフモフゝうふふゝ」

「あのさ、そろそろ人型に……」

「あん、待って。あとちよつと、あともうちよつと！滅多に触れないんだから、触り溜めしとくのゝゝ」

「…ユリーナ…俺はオマエの愛玩動物ではないのだが……」
「わかってる、わかってるけど…」

わかってる、とか言いながら、胸のあたりの柔らかいプラチナの毛に頼ずりする私。

「ゼウオン…よく平気だなあ…オイラクすぐったくて撫でられるの駄目…」

実は、まだシプグリールにいる頃にレギの輝く金朱の羽毛を撫でさせて、頼んだことがあるんだけど、ちよつと撫でただけで「くすぐったい。」と逃げられちゃったことがあったんだよね。それからレギには触ってないんだけど、やっぱり覚えてんだ。

『ユリーナさん…そろそろ解放して差し上げませんとゼウオンさんがお気の毒ですわ…』

はっ！ミীগ。今まで存在を忘れそうなくらい静かだったのに、何故ここで発言？！（見かねたからに決まってる）

名残惜しかったけど、ゼウオンを撫でていた手をピタッと止めて、離れた。

確かに、いい加減にしないと彼にあきらめちゃうよね。（気付くの遅っ）

「ようやく気が済んだか？いっそ、このまま人型になってしまおうかと思っただぞ？」

いたずらっぽい表情をしたゼウオンがそんな事を言うものだから、思わず人型のゼウオンを撫で回している自分を想像してしまい……

ボンッ

一気に顔が真っ赤になる。

わ、わ、わ、私、痴女じゃん！！ 恥ずかしいーっ
でもでももっ、狼さんを撫でてたんだからセーフだよね？！
ヘンタイさんの仲間入りしてないよね？！

急に赤面した私を見て、ゼウオンとレギが楽しそうに笑ってましたとき。くすんっ。

第35話 甘い雰囲気戸惑ってしまった（前書き）

視点が 主人公 ゼウオン と変わります。

第35話　甘い雰囲気、戸惑ってしまいました

優しく頭を撫でてくれる、大きな手。

温かく包み込んでくれる、逞しい腕。

髪を掬い上げられ、ゆったりと梳くように弄ばれる。

気持ちいいな……

ずっと、この心地よい夢から目が覚めなければいいのに……

夢見心地のまま、温もりを与えてくれる存在に摺り寄ると、私を包む腕の力が増した。

……ん？　夢にしてはやけに感覚がリアルだな……

「ユリーナ……」と私を呼ぶ美声がしたので、ぼんやりと目を開ける。

「ゼウオン？……きゃっ」

今、私、木に寄りかかっているゼウオン（いつもの人型、青髪ve r・c）に抱きしめられている？！

自分の状態を理解した途端、眠気が吹き飛び、一気に覚醒。

どうして私、こんな状態で寝ちゃったの？！

えーと、確か……

召喚契約をした後、ミーグから聞いたグリーンジラス王国王子問題をゼウオンとレギに話して。

それからすぐにグリーンジラスの王都に行こうとしたんだけど、2人に止められたんだっただわ。

「闇の帝国」がどう出るか分からない今、下手に姿を現さない方が良く。それに第1王子側の者達の動向も分からないんだ。第2王子は守護輪が何処にあるかが分かるんだろ？ならば、ユリーナは指輪と共に身を隠して第2王子が接触してくるのを待つのが妥当だ」

「そうだよ。それにユリーナが今グリーンジラスに行ったら、王妃側のヤツラに捕まっちゃうかもしれないじゃん。国宝の指輪を盗んだって濡れ衣着せられて処刑だなんて言われちゃったら、どうすんだ？ここはゼウオンの言う通り、隠れてるのが無難じゃん」

「ユリーナさん、確かにゼウオンさんとレギさんの仰る通りですね。まだ幾ばくかの日数がありますし、ここはお隠れいただく方が宜しいかと」

「ミーグ…でも早く第2王子様に会いたいんでしょ？あんなに心配してたじゃない？」

「確かに一刻も早く主の元に還りたいという気持ちはありますが、ユリーナさん達を危険に晒すわけには参りませんわ。「闇の帝国」からワタクシを救って下さり、アレフ殿をも救って下さった恩を、仇で返すつもりはございません」

「そう…じゃあ、隠れることにするわ。幸い、亜空間にまだ食料とが残ってるし」

と、いうわけで。

私達はニアルースの西の森から更に西側にある山脈地帯に移動した。この辺りはグリンジアス国土とはいえ、全くの未開の地であり、誰も来ない。

それに、グリンジアス王都から4、5日あれば辿り着ける場所なので（森の手前まで馬、森の中と山中は徒歩になっちゃうけど）近すぎず遠すぎずで丁度良い。

とは言え、怪物や野生の動物は生息しているから気は抜けないんだけどね。

風の刻は黙々と森の中を歩き、正光に食事と休憩をとった後は、日が沈むまで山中を歩き進んだ。

「闇の帝団」との連続バトル後に1日中森や山を歩き続けたからクタクタになっちゃって。

疲れた〜とヘタっていたら、ゼウオンが疲労回復によく効くという薬湯を作ってくれたんだったわ。

それで薬湯を飲んだら眠くなっちゃって、ゼウオンの肩にもたれたまま寝てしまった、と。

「あ、ごめんねっ。私、寝ちゃったんだ」

慌ててゼウオンから体を離そうとしたけど、がっちりホールドされちゃった。

しかも、なんか耳とか首とか撫でてくるしっ。

「えと、もう大丈夫よ？薬湯のおかげで疲れも残ってないみたいだし」

「そうか、良かったな」

「う、うん。あの…だから離してくれて良いよ？」

赤面した顔を見られないように俯きながら身を擦ってみる。

だって、こんなに密着しているとドキドキが止まらないしつ。心臓に悪いよ、この状態。

それに、掠るような微妙な力加減で首筋とか耳の裏とか撫でてくる手からも逃れたい。

ゼウオンにそんなことされると、下腹部の奥に得体の知れない感覚が湧き起こって困るのようっ。

なのに。彼は一向に腕の力を緩めようとはせず

「離す必要ないだろ？離れたくないといったのはユリーナだ。俺もオマエを離したくないしな」

とか、のたまう始末。

あうっ。確かに言った。離れたくないと言ったのは認めます。でも！それとこれとは別モノよ！！

ゼウオンの腕のなかでアタフタしつつも、彼も私を「離したくない」とサラリと言ってくれたことに喜んでる自分がいる。

「うっつ…！ えと、じゃあ…撫でるのは止めて？」

「何故だ？オマエも散々俺を撫でただろ？」

あうあうっつ。確かに撫でた。狼ゼウオンの毛皮を撫でまくったのは認めます。

でも！それとこれとは別モノなんだってば！！

「ユリーナ…」

熱く吐息を吐くように名前を囁かれ、下腹部の奥にズクンと衝撃が起こった。

ゼウオンを見上げると、紫の瞳とバツチリ視線が合う。

私を見詰めるアメジストは、スマイルの砂糖漬けのように甘い。

ゼウオン、どうしちゃったのかな？ なんだか急に親密度が増したというか…

確かにお互い今まで黙っていた秘密を共有したもんだから親密にもなるだろうけど、これは何ていうか、仲間というより恋人のような…もちろんイヤじゃない。むしろ嬉しい。

でも、ゼウオンが私を異性として想ってくれているかなんて分からないし…これは只のスキンシップの一環なのかしら？

彼の態度を考えあぐねていると、首筋を撫でていた彼の手が私の頬を包み、親指で下唇の輪郭をなぞって来る。

端正な顔が、ゆっくりと近づいてきた。

「あ、ちょ、あのあの…」

「どうした？」

「あ、えーと、その、レギは？ いないの？」

「周辺の偵察にいったつきりだな。じき戻ってくるだろう」

「そっか…」

なんだか急に甘い雰囲気になったことにプチ混乱しちゃった私は、咄嗟に空気を変えようとしてしまった。

「あ、そうだ、ミーグ？ 第2王子様が近づいている気配とか、感じ

る？」

返答ナシ。あれ？もしかしてミーグ、寝てる？でも守護精って眠るのかな？

「ミーグ？」

もう一度、話しかけてみると。

『ワタクシは他人様ヒトサマの情事を見聞きするほど無粋ではありませんわ。何も見てません、何も聞いてません、見てない聞いてない、見てない聞いてない……』

ぶーっつっ、じょじょ情事って、何言っちゃってんの、この守護精はーっつ

「ミーグ？！ミーグってば、誰かが来る気配する？」

『はっ、ユリーナさん。もういいんですの？あ、いえ、失礼しました。主の気配でしたら、残念ながらしませんわ。怪物もいないようです』

「そう、良かったわ」

「ユリーナ、守護精は何だって？」

「あ、何の気配も感じないって。怪物もいないようだから、レギもすぐに戻ってくるかな？」

「そうだな。ユリーナ、もう少し眠るか？」

「うっん、レギが戻るまで起きてるわ」

それからしばらくゼウオンと他愛の無い話をしていたら、レギが戻ってきた。

「お疲れ様、レギ。わざわざ偵察ありがとね」

「別にいい。あのさ、ユリーナ、ゼウオン。ちよいと気になることがあったんだ。敵じゃないとは思っただけど、何かヘンなんだよ」

「ヘン？」

「ん、なんだか一定区域に結界が張られているようなカンジ？それがさ、〔地〕の力じゃなくて〔風〕の力なんだよな。ま、ほっとけばいいのかもしれないけど」

「そうか、こんなところに結界か。気になるな。だが敵意を感じないなら、あえてこちらから接触する必要はないだろう」

いまいち釈然としないけど、その区域には近づかないようにしようということになった。

その後は簡単な夕食をとって、3分シャワーをしてから寝袋に包まる。

野宿もだいたい慣れたもんだわと思いつつ、再び眠りについたら、
でした。

薬湯を飲んだユリーナは、眠たそうに目を瞬かせていた。

そつと肩を引き寄せると、そのまま俺に凭れ掛かって、静かに寝息を立て始める。

人間の、しかも女性であるユリーナにとって、ハイペースの山歩きは相当体に負担をかけただろう。

よくここまで彼女の体力がもったものだ后感心してしまう。

無防備に眠るユリーナを起こさぬよう緩く抱きしめ、その温もりに浸った。

愛しい彼女は確かに今、俺の腕の中にいる。

ヌーエンで突然いなくなってしまった彼女を捜し求めた7日間は、とてつもなく長く感じた。

自分の心をこれほどまでに掻き乱す存在は、今までいなかった。

自分は異世界から来たと言ったユリーナ。

冗談や作り話にしては突拍子すぎて、反って彼女の話に嘘はないと信じられた。

何より、彼女は「ゼウオンに隠し事はしたくない」と言ったのだ。自分を信じて秘密を打ち明けてくれた彼女を、益々愛しく思った。

その後、覚悟を決めて己の出自を明かしたのだが――彼女は信じられないことを言ってくれた。

「離れたくない」と「側にいたい」と、拳句の果てには「銀狼族を返り討ちにする」とまで言い出し、そのために更に強くなるとまで言ったのだ。

信じられなかった。

俺は抜群の聴力を誇る銀狼族のくせに、都合のいい空耳が聞こえたのかと、思わず己の耳を疑ってしまったくらい驚いた。

こんな俺を、受け入れてくれるのか？

存在が許されない俺の出自を知ったうえで尚、一緒にいてくれるというのか？

父さんがいなくなつて独りで過ごしてきた俺にとって、ユリーナとレギの存在は温かく、仲間がいることの良さを知ってしまった。

ユリーナが「これから一緒にいよう」と言ってくれた時、すぐにも同意したかった。

しかし、自分と共にいることで2人を余計な危険に晒してしまうかもしれない…。

2人と共にいたいという願望。2人に危険を背負わせてしまう罪悪感。

2つの感情の間で葛藤したが――

ユリーナの「どんな事情があろうと離れたくない」という言葉とレギの「仲間をやめるほどではない」という言葉と

2人の「今まで大丈夫だったんだから今後も大丈夫」という言葉が俺の罪悪感に対する免罪符になった。

すやすやと眠るユリーナが微かに身動き、縋るようにその柔らかな体を密着させてきた。

俺は反射的に彼女を抱きしめる腕に力を込め、艶やかな黒髪をゆつくりと梳いた。

「ユリーナ…」

彼女の名を口にすれば、心に愛しさが染み渡る。

今までは、魔獣の自分は人間の彼女にふさわしくない、と思っていた。

異種族の、しかも奇異な出自である俺は、彼女に受け入れられないだろう…

そんな気持ちが俺を消極的にさせていた。

だが、ユリーナは俺の正体を知った上で、共に在ることを望んでくれたのだ。

離れたくないと言ってもらえるほど、俺は仲間として彼女に大切にされているのだ。

嬉しい、なんて言葉では足りないくらいの喜びが、俺を満たした。

けど、ユリーナに関しては殊更欲張り俺は、彼女がツガイ――人間流に言えば生涯の伴侶か――になってくれることを切望してしまう。出自を明かした今、隠すことは何も無い。これからは、彼女への想いを押さえるのは止めよう。

ユリーナ…

危険に巻き込むことになってしまっても、オマエが俺の側にいたいと望んでくれるなら――もう、離しはしない。

ユリーナの瞳が、ゆっくりと開く。

目覚めた彼女は、眠ってしまったことを恥じ入るように身を振った。その仕草が、彼女の豊かな胸を強調する。

「ユリーナ…」

想いを込めて名を呼べば、潤んだ瞳で俺を見上げる彼女。

そのサファイアのような瞳に吸い込まれるように、愛らしい唇を求めたが。

レギが居ないことが気になったのか、彼女は俺の求めに応じてはく

れなかった。

拒否はされなかったから嫌がられてはいないと思うが、俺も些か性急だったかもしれないな。

軽く反省した俺は、その後は彼女と何気ない話をしながらレギが戻ってくるのを待った。

やがて戻ってきたレギは、「敵じゃないとは思っただけど、何かヘンなんだよ」と不可解な事を言った。

気にはなったが、今は「大地の指輪」を持つユリーナを守ることが重要だ。

なるべく、その区域には近づかないようにしよう。

寝袋の中で再び眠りについたユリーナの傍らに座り込み、俺も休息をとるべく目を閉じたのだった。

第35話　甘い雰囲気戸惑ってしまいました（後書き）

スマレの砂糖漬け＝ウィーン土産で有名なお菓子です。

お菓子というより、ただの砂糖の塊みたいな…（^^;）

紫色で甘いものを考えた時、ブルーベリーとかアケビとか、なんかイマイチ糖度不足なものしか思いつかなくて、結局スマレの砂糖漬けになってしまいました。

第36話 早朝はスパルタ特訓です (前書き)

視点が 主人公 第3者へレギ と変わります。

第36話　早朝はスパルタ特訓です

夜明け前。

空が白み始め、爽やかな朝の空気に包まれながら、私はゼウオンと真剣に打ち合っていた。

――強くなりたい。大切な存在と自分の身を守る実力が欲しい。金銀魔のゼウオンとレギにとっては私の力なんて微々たるものだろうけど、それでも仲間として足手まといにはなりたくない。――

そんな私の気持ちを汲んでくれたゼウオンとレギにより、早朝の訓練はスパルタ特訓と化した。

手始めに、私の実力を把握したいというゼウオンとガチ勝負することに。

「ユリーナ、まずは基礎能力を見たいから魔力を使わずに攻撃してみてください。本気でかかってこいよ？」

そう言う彼は、帯剣してはいるが抜刀する気配ナシ。だからと言って見縊られている、とは思わない。

だってゼウオンは、魔物の力を一切使わなくても4ツ星ランクの魔戦士だし。

彼の強さは、コルエンからヌーエンまでの道中で目の当たりにしているから、もちろん本気でやりますとも。

私は構えをとり、目に力を入れてゼウオンを見た。魔力無しで薙刀を振るうのは久々な気がする。

「つやあ！」

一振り、手首を返して更に振るったが、簡単にかわされてしまう。重心を落として構え直し、踏み込みを深くして振るう。その振るった反動の遠心力を生かして、また振るう。

私は真剣にゼウオンに攻撃をしたけど、全く掠りもしない。

彼が刃をサツとかわして私の背後に回ったので、振り向きざまに腰を落として薙刀を振るった。

その攻撃すら軽やかに跳んで避けた彼は、そのまま薙刀の刃の上にトンつと着地し、更に跳ぶと空中で体を捻り一回転し、ストつと着地した。

ゼウオン凄い！！ その身軽さ、某国の雑技団みたいだよつ。だけど、ただの一度も掠りさえしないなんて、くやしいなあ。くううつ。

私の心中を知ってか知らずか、ゼウオンは「なるほど…」と、なにやら一人で納得している。

「ユリーナの攻撃はだいたい分かった。じゃあ、次は俺の攻撃を受けてみてくれ。もちろん、魔法は使用禁止な」

彼が掌を上に向け、5秒ほどたつと亜空間が出来て、その手に剣が握られていた。

「これは訓練刀だ。刃は潰してあるが、当たり所が悪かったら大怪我しちまうから気を抜くなよ？」

訓練刀を2、3振りして、私に向き合うゼウオン。

「……はいっ。よろしく願います！」

なんだか、お祖母ちゃんと薙刀の稽古をしていた頃のような感覚。師匠である祖母と真剣に対峙した時の、あの心地よい緊張感。

「じゃ、いくぞ」

ゼウオンが向かってきた。――速いつ、けど、ちゃんとその動きはわかる。

寄せ付けないように薙刀を水平に振るうも、彼は合間をぬって間合いを詰めてきた。

かるうじて剣先をかわし、反撃に出ようとするも、私の動きなんてお見通しと言わんばかりに彼には見事に隙が無い。

グンッと訓練刀の刀身がのびてきて、咄嗟に柄で受け止めてしまった。

力で押しても駄目だ。私じゃゼウオンの力に到底かなうはずがないもの…

すぐに訓練刀の勢いに任せて受け流す。後はもう受け流しの連続。ガキンッと訓練刀を受けたまま、彼を見ると少し口元があがっている。

――さあ、どうする？ 紫の瞳が悪戯っぽく、問いかけてくる。

むむう、素直に降参するのは悔しい…負けるもんか！

柄を下に向けて剣先から逃れると、私も身を屈めて、足払いを掛けるように彼の足元で薙刀を振るった。

当然、彼はそんなものに引つ掛からないで、軽やかに跳躍して足払いをかわす。

彼が跳躍した僅かな隙に自分の体を反転させて向きを変え、そのまま攻撃をしかけるも、これまたアツサリとかわされる。

ゼウオンって後ろに目がついてんの？！

私の攻撃を全て鮮やかにかわしきった彼は、「上出来だ」と呟き、剣を下ろした。

はあはあ、と軽く息切れしている私とは違って、何の呼吸の乱れもないゼウオン。

「じゃ、次はいつも通り魔力を使った戦い方な。」

「ハアハア…はいつ、お願いします！」

少し呼吸を整えて、「風」「重力」の魔力を込めてから、彼を真剣に見た。

「……よし。いつでも来いつ」

勢いよく一直線に向かい薙刀を振るうも、やっぱりゼウオンには掠りもしない。

けど、めげずに間髪いれず次の攻撃を繰り出す。

ひゅ、ひゅ、と薙刀が空を切る。

でも、魔力ナシの時とは違って、彼を追い詰めているような手ごたえアリ。

よし、裏技使っちゃえ！

それは、薙刀を振るった時に瞬間的に魔力を強める、といった技。速度と鋭さが一瞬だけ上がるから、こちらの攻撃の速さを予想してくるような相手には効果的。

この緻密な魔力コントロールは、シプグリールでレギが訓練してくれたんだ。

キイーンっ

薙刀の刃が、訓練刀で止められた。

およ？ゼウオンが剣を使ったよ、やったね私。 瞬間的魔力強化は効き目アリ？

密かに心の中でニマっとしたけど、攻撃の手を緩めることなく次の一振り。

キイーン・・・また受け止められた。

力では勝負にならないんだから、受けをとられたら引くしかない。ここは突きで勝負よ！

私はサツと後退すると、構えを変えた。それに対応するかのように、彼も剣を構え直し、顔つきを変える。

ゼウオンはダーツの的か？と勘違いしちゃうほど勢いよく次々に突きを繰り出す。

今度は魔力込みの攻撃なのに、それでも当たらない。

やっぱり、彼は凄いいんだ。

こうして、刃を交えてみると改めて彼の強さを実感してしまう。

すると、突然ゼウオンが後方に引いた。

「やっぱりユリーナは強いな。魔力が加わると一段と凄みが増す。瞬間的に魔力強めるなんて、そんな事なかなかできるもんじゃないぞ。我流で鍛錬したのか？」

剣は下ろさずに、そう聞いてくるゼウオン。

「ううん。魔力の調整や抑制はレギが教えてくれたの。私の場合はこうやって使うと効率的だからって。」

ゼウオンは私達を見ていたレギの方へと向き、フツと笑みを零した。

「レギは目の付け所が良いな。よくここまでユリーナを訓練したもんだ」

「ぐふふふ。ま、ね。ユリーナはもともと筋が良いし飲み込みも早いから、特訓し甲斐があったんだよ。」

「確かに筋が良いな。じゃあ、そろそろ俺も攻撃を加えるか。」

ゼウオンは訓練刀をクルクルと数回廻すと、先程とは違う型で構えた。

気迫というか…オーラというか…彼を纏う雰囲気が変わったのを肌で感じる。

やっぱり凄い。分かってはいたけど今までは手加減してくれていたんだ。

先手必勝とばかりに私から攻撃をしかけるも、カキンッと音を響かせて、薙刀の刃が訓練刀の刃に受け止められた。

すぐに間合いをとるべく後退しようとしたが、ゼウオンはそれを許してくれない。

受け止めた薙刀を剣で押し上げるようにして払いのけ、シュツと目にも留まらぬ速さで、潰れた刃を私の首筋にピタッとあてるようにして寸止めた。

「……参りました」

素直に敗北を認めると、彼はフツと微笑み、スツと訓練刀を下ろして亜空間にしまった。

同じように私も薙刀を亜空間に戻す。

「ゼウオンってホント強いね。私のこと強いなんて言ってくれたけど、あれ、お世辞でしょ？」

ちょっと拗ねながらチラリと彼を見ると、なんだか微苦笑している。

「俺は世辞なんて言わないって以前にも言っただろ？ 強いと思ってるから、そう言っただけだ。」

「えゝ、でも、こつも歯が立たないなんてねゝゝ。ちょっと自信喪失ゝゝ。もつと特訓しなきゃ！」

「あんな、ユリーナ。その心意気はいいことだがゝゝ。オマエほど緻密な魔力制御を出来るやつなんて殆どいない。武器の扱いだって、しっかりと基礎を押さえてるし、自分の長所と短所も把握してる。ちゃんと自信持っていんだぞ？」

「そお？ゝゝでもやっぱり私、ゼウオンには全く敵わなかったしさゝゝ」

「オマエが俺に勝てない決定的な理由は、経験の差だ。」

「経、験ゝゝ？」

「そう。敵の気配を察する力、動きや攻撃パターンを先読みする力、そういった勘みたいな力は経験を積んで得られるものだ。オマエはつい最近までまともに戦ったことなかっただろ？俺はガキの頃から戦いの場にいた。踏んでる場数が違うんだ。これから更に実戦を積んでいけば、オマエはもつと強くなる。」

真摯な態度で、そう言ってくれるゼウオン。

こんな強い彼に私は実力を認められているんだ。すっごく嬉しい！
ばあつと顔を輝かせて満面の笑顔で彼を見る。

「ありがとう！私、もつと努力して強くなるねっ」

「……ああ。（俺もウカウカしてらんねえな）今朝の鍛錬はこれで終いにしよう」

「はい。お手合わせありがとうございました」

それから3人で朝食をとっていると、レギが浮かない表情をしていた。

「どしたのレギ？グクコの実、足りない？」

ヌーエンでゼウオンが買い占めてくれたおかげで、グクコの実に困ることは無い。

亜空間からグクコの実を出そうとしたら「そうじゃない」と止められた。

「昨夜の「風」の結界のこと。なんか気になるんだよね……」やっぱ

オイラもう一回見てくる」

「そうか？俺とユリーナも同行した方が良いか？」

「いんや。地上からだに行きにくい場所だから。ま、様子見してくるだけだし、正光には戻ってくる」

「レギだから大丈夫だとは思うけど、気をつけてね」

軽やかに飛んで言ったレギを見送った後、手早く食事の片づけを済ませる。

その後はゼウオンに元の世界の話をしたり、彼が今まで旅してきた体験などを聞いたりして過ごした。

レギは昨夜感知した結界の近くまで来ると、旋回しながら様子を伺った。

やっぱり、ヘンじゃん。この結界は攻撃系じゃなくて外敵から身を守るカンジすんだよな。

オイラ達狙いなら、こんな保身系の結界張る理由ないし、怪物つてわけでもない。山籠りでもしてるヤツがいんのか？

好奇心旺盛なレギは、結界を張る者の正体を確かめたくなった。

結界に触れれば、向こうが何らかの行動を起こすだろう。

わざわざこんな結界を張るくらいなんだから、好戦的とは思えない。こちらが攻撃的な態度をとらなければ大丈夫そうだ。

そう判断したレギは、結界に少しだけ侵入してみた。が、何も起こらなかった。

え??　なんでなんだ??

不思議に思っ、更に深く結界の中へと進んでみたけど、やはり何の変化もなかった。

これ、何かの罠か?? いや、そんなカンジは全くしないし。ってことはオイラを敵だと認識していないってことか? それにしても何の接触もないなんて、おかし過ぎじゃん。

レギは警戒を怠らず、結界の中心部までゆつくりと飛び進んで――
- 結界を張る者の正体を発見した。

岩壁の窪みに蹲る、小さな竜。

「...なんで、こんなところに魔竜がいるんだ??」

思わずレギが言葉を発すると、その小柄な魔竜はノロノロとした動作でレギを見た。

銀色の丸い大きな目。

艶々と光る鱗一枚一枚が美しい青のグラデーション。

鱗の根元部が深い藍色で、徐々に青から水色になっている。

「その色...、もしかして縹銀族??」

縹銀族は別名「東の銀魔」ともいわれている魔竜である。

元来、金銀魔というのは自里から離れることを良しとしない傾向にあるが、魔竜は特に保守的だという。

東の地に居る者でさえ、金銀魔竜の姿を見ることはあまり無いらし

いの、他地である西の地で遭遇するなんて考えられないことである。

レギは好奇心満々の呈で魔竜を観察した。珍しいものにはメがないのだ。

「ん？具合悪いのか？」

魔竜の銀の瞳には力がなく、なんだか苦しそうに見えた。

「怪物、じゃないのは分かってたけど…どうして、魔鳥がいるの？」

幼さが残る可愛い声で、魔竜がレギに問いかけた。
言葉を発するのも辛そうだ。

「なんだか随分辛そうじゃん。大丈夫か？怪物にやられた？」

「角が3本生えた大きな熊みたいな怪物に…追い払ったんだけど…段々苦しくなっちゃって…」

「角が生えた熊って、まさかホムグルズル？！あの怪物は爪に猛毒があるって聞いたけど…攻撃受けちゃったのか？」

小さな魔竜は微かに頷くと、目を閉じて弱弱しい声で独白し出した。

「アタシ…ここで死んじゃうのかな…。父様と母様の仇も討てずに…アタシにもっと攻撃能力があったら…もっと強かったら…怪物、物なんか…」

銀色の瞳がゆっくりと閉じられる。

「おいっ、しっかりしろよ?!おいってばっ」

魔竜はレギの呼びかけに応えず、ジッと蹲ったまま動かなくなった。

「これ、ヤバイじゃん?! ホムグルズルの毒…ゼウオンなら解毒薬を調合できるかも」

レギは自分とほぼ同じくらいの体格をした魔竜の翼を足で掴むと、自己最速スピードで仲間のもとへと飛んだのだった。

第37話 魔竜の身の上話（前書き）

視点が 魔竜 主人公 と変わります。

第37話 魔竜の身の上話

それは突然の宣告だった。

「イズラルバを縹銀族より破族、里から追放する」

アタシに能力の使い方ちからを教えてくれていた母様のもとに、無表情の族長様がやって来て、唐突にそう言ったの。

母様と族長様は、その場で何やら難しい話をして言い争っていた。幼竜だったアタシには詳しいことはわからなかったけど、どうやら重要な族長様のご命令に父様が逆らったらしい、ということは分かった。

それから数日後。

父様と母様とアタシは破族という烙印を押され、夜明け前に里を出た。

母様とアタシに何度も謝る父様に、母様はいつも優しく接してた。アタシも、父様は悪いことしたんじゃないって信じてる。

独りで里に残されるよりも、里を離れてでも父様と母様と一緒に良かったから、破族されたことは別に気にしてなかった。

破族された「里無し魔」がどんなに不名誉だろうと異端だろうと、全然へっちゃら。

だって、父様と母様も同じだもん。

このまま大好きな両親と一緒に幸せに過ごせると信じて疑わなかった。

――あの黒い怪物が、アタシ達を襲うまでは

父様よりも大きい黒の怪鳥。

ソイツはアタシ達を見るなり、赤黒い眼を不気味に光らせて襲いかかってきた。

「メイシエ、ルーシエを連れて逃げる！」

「アレはギルガよ?! イズだけで戦うのは無理よ! 私も戦うわ!!」

アタシを抱っこしたまま叫んだ母様を、父様は「大風波」で遠くに飛ばした。

「メイシエ、ルーシエ、必ず生きろ」

「イズ: イズラルバー!」

「父様ー!」

飛ばされながら母様の腕の中で見た光景は――空中で黒怪鳥と戦っている父様の姿だった。

風の力が緩やかになると、母様はアタシを地面に下ろして、アタシの頬をやさしくペロっと舐めた。

「ルーシエ、ここで待っててね。いい子にしてるのよ」

「?! 母様は?どこ行くの?」

「父様のところよ。大丈夫、すぐに父様と一緒にここに戻ってくるからね」

そう言つて母様は高速で飛んでいった。

すぐに追いかけようと思つたけど、母様はここで待つてと言つた。それに未成魔のアタシじゃ母様の飛行速度には追いつけない。

少しの間、その場でウロウロしてたけど、結局アタシは翼を広げて母様の飛んでいった方へと向かった。

そして、発見した両親は――もう、動いてはくれなかった。

「父様――っ、母様――っ」

呼びかけても、舌で舐めても、鱗を摺り寄せても、父様も母様も何も応えてくれない。

「うつうつ…うつうつ…」

目の前の現実を受け入れられなくて、ただ、ただ、泣いた。たくさん、たくさん泣いて。何日も何日も泣いた。

やがて枯れ果てたのか、もう涙が出なくなった頃。アタシは決めた。

――必ず、あの黒い怪鳥を倒して仇をとる――

アタシは両親を弔った後、各地を飛び回つて怪鳥を探した。

でも、仮にあの怪鳥に再び遭遇できたとしても、父様と母様がかなわなかった敵にアタシが勝てるわけない。

それにアタシの能力は未成熟だし、どちらかというと攻撃よりも補助や守備の方が得意なんだもの。

怪物から身を守ったり追い払ったりは出来るけど、仕留めることはまだ難しい。

だけど…到底無理と分かっているけど、敵討ちを諦めるわけにはいかない。

アイツへの復讐だけが、アタシの生きる目的なのだから。

それなのに、あの怪鳥よりも数段格下の怪物にやられちゃったアタシは何て情けないんだろう…。

このまま敵討ちも出来ずに死んじゃうのかな…？

あの怪鳥と戦うこともせずに死んじゃうなんて、死んでも死に切れない。

誰か、誰かお願い。アイツを倒して。

主神「風の神」よ、アタシの祈りをお聞き届け下さい…どうか、あの黒怪鳥に天誅を…

意識が暗闇に沈んでいく…

「おいつ、しっかりしろよ！」

その声に、アタシはピクリと反応した。…この声は、あの魔鳥？

同じ鳥形でも、あの黒怪鳥とは全然違うキレイな姿。赤に橙に、金。空と大地を金色に輝かせる、夕日のような羽。宝石のように煌く金と赤の眼。

金：金色。――もしかして、南の金魔〔朱焰族〕？

「東の銀魔が怪物の毒なんかに負けるなっ、気を確かに持てよ！」

アタシを励ますように呼びかける魔鳥の声。

その声に導かれるように、闇に落ちかけていた意識がゆつくりと浮上した。

「おっ、目が覚めたか？」

声がした方を見ると、金と赤のキレイな瞳がアタシを見詰めていた。

「あ、気づいたの？良かったあ」

「さすが銀魔竜だな。たいした生命力だ」

え？他にも誰がいるの？

魔鳥とは別の声がしたことに驚いて、痺れるような痛みに堪えながら少し首を動かすと。

そこには黒髪藍目の女のひと、青髪紫目の男のひとがいた。

女の人の目と男の人の髪…、この2人は東の地に縁の人間なの…？
アタシと同じ出身地なの？

どうして東の人間と南の魔鳥が一緒にいるの？

それに、ここは人里離れた山の中のはず。どうして彼等はこんなところにいるの？

考えるほどに疑問がわき上がり、アタシは警戒心を解すことが出来ずにいる。

すると、青髪の男の人が小振りの器をアタシの口元に差し出してきた。

「これは解毒薬だ。飲めるか？」

いきなり解毒薬だと言われても、素直に飲めるわけない。

無反応のアタシに、男の人は気を悪くした感じもなく、少し苦笑した。

「ホムグルズルにやられたんだろ？傷口から毒を吸い出して解毒薬を塗りこんだが、体内に回ってしまった毒は薬を服用しないと完全に解毒できないんだ」

解毒薬を塗りこんだ……ってことは、アタシを助けようとしてくれてるってこと？

確かに、この人たちからは敵意や悪意は全く感じない。むしろ、心配そうに気づかってくれているのが分かる。

でも、器の液体を飲んで本当に大丈夫なのかな？

心の中で迷って、なかなか器に口をつけれないでいると。

金魔鳥がすぐ傍まで飛んできて、器に嘴を入れたのだ。

「おい、レギ?!」

青髪の男の人に「レギ」と呼ばれた金魔鳥は、アタシを見た。

「ほら、これ飲んでもオイラ何ともないじゃ〜ん？そんな警戒しな

くつても平気だつてば」

おどけた物言いの中にも、アタシへの労わりを感じる。
レギという魔鳥の言葉と行動が、警戒心を消してくれた。

アタシは意を決して、器の中に入った薬液を飲もうと、おずおずと顔を近づけた。けど、体が上手く動かない。

すると・・・黒髪の女の人が、優しくアタシを抱き上げて膝の上に乗せたのだ。

え?! 人間が魔竜であるアタシに何の躊躇いもなく触れるの?

驚くアタシを気にもせず、女の方は薬の入った器を手にとると、アタシに飲ませようとしてくれた。

「どう? こうすれば飲めるかな? 」

その声色も、藍の瞳も、とても柔らかくて優しい。

女の人と接触しているとところから感じる温かさは、母様に包まれているみたいに心地よかった。

アタシは小さく頷き、器が空になるまで少しづつ薬を飲んだ。

飲み終わると、男の人が女の方の手から器を受け取り、アタシの方へと顔を向けた。

「よし。全部飲んだな。魔竜は回復力も強いから3刻ほどしたら体内の毒も解毒されるだろう」

「そうなんだ。さすがゼウオンね」

女の人は、敬愛に満ちた瞳で男の人を見る。

ゼウオンと呼ばれた男の人も、愛情溢れる眼差しを女の人に向けて微笑んだ。

なんだか父様と母様みたい。そっか、この2人はツガイ同士なのね。

「良かったね、もうすぐ元気になるって。あとちよっとの辛抱だからね」

アタシに優しく声をかけてきた女の人は、膝からアタシを下ろそうとはせずに慈しむ様にゆっくりと頭を撫でてきた。

魔竜を撫でる人間なんて、存在するんだ…。

撫でられるなんて思いも寄らなかったけど、全然抵抗を感じない。むしろ、母様に優しく舐めてもらっているみたいな安心感がある。

アタシは久しぶりに感じた安らぎに身をまかせて、ゆっくりと眠りに落ちていった。

「あら？寝ちゃったみたい」

膝に乗せたままの小さな竜は、スピスピと可愛い寝息をたてている。

「一時はどうなることかと思ったけど、命拾いしたみたいだな。」

ホムグルズルって西の怪物なのにさ、ゼウオン本当に解毒薬つくっちゃうなんて尊敬するよ」

「ははは、レギに尊敬されるなんて光栄だ。以前、偶々ホムグルズの解毒薬調合を依頼されたことがあったからな。それにしても、レギがこの魔竜を運んできた時は驚いたぞ？いきなり「ホムグルズの解毒薬って作れる?!」だもんな」

「私もビックリだったわ。だけど魔竜って東の地にいる魔物でしょ？どうしてこんなところにいるのかしら？レギみたいに故郷は飽きたとか？」

「そりゃ無いんじゃない？なんか両親の敵討ちとか言ってたし」

「へえ…なんだか複雑な事情抱えているのね…」

チビ竜ちゃんの艶々光る鱗を撫でながら、そういえばレギの両親ってどうしているのかなと思ったので、聞いてみる。

「ねえ、レギのご両親は？かれこれ1ヶ月は一緒にいてくれるけど故郷に顔出さなくても大丈夫？」

するとレギは、目をパチクリさせて小首を傾げた。

「ユリーナ、気づいてなかったのか？」

「え？何を？」

ゼウオンの問いかけに、今度は私がパチクリとしちゃう。

「あ…、そっか。（ユリーナは異世界人だったな）あんな、金銀

魔が長い間自里を離れてるってことは、一族から破族――仲間として認められない扱いのことだが――された「里無し魔」か、自ら里を離れた「里捨て魔」ってことになるんだ。故郷に戻ることは出来ない」

「ってこと。ちなみにオイラは「里捨て魔」。破族は――たぶん、されてない。別にされても良いけどな。あ、両親はとくに死んじゃってる」

えええつつ？！　そうだったんだ！私、悪いこと聞いちゃったのかな……

でも、ここでレギに謝るのは何か違う気がする。どういった言葉をかければいいのか……？

内心でオロオロしていると。

「んな気まずそうな顔すんなって。そーゆー顔されるだろうから今までオイラ自分のこと話さなかったんだよ。湿っぽい、苦手だし」

いつもと変わらない、あっけらかんとしたレギを見て、変に気に病むほうが失礼だと気づく。

「そつか。レギも色々あるのね。だけどレギが里を離れなかったら、こうして友達になれなかったんだよね。私にとっては「里捨て魔」歓迎だわ」

ニコッと笑ってレギを見ると、レギも「ぐふふっ」と笑った。

「だな。あのまま里にいるより、ユリーナやゼウオンという方がよ

つぽど楽しい。ぐふふふっ」

レギが「里捨て魔」っていう立場でも、大切な友達であり掛け替えの無い仲間であることに変わりはない。
レギはレギなんだし。

「ユリーナにとっては「里捨て魔」だろうと何だろうと大した問題では無いんだな」

微笑ましい、といった感じで私とレギを見るゼウオン。

「うん。だから何？って思っちゃう」

ゼウオンの言葉を肯定すると、何故かミীগから『感心致しますわ』と褒められた。

「里捨て魔」だとか「里無し魔」だとか、破族だとか掟だとか、魔物社会のルールってのも複雑なのね〜くらいにしか思えないだけなので、別に守護精に感心してもらう程のことでもないと思うんだけど…ま、いっか。

小さな魔竜ちゃんをナデナデしながら、私達はしばらくの間、歓談したのでした。

第38話　竜さんが仲間になりました（前書き）

視点が	主人公	魔竜 ^{ルシエ}	主人公	と変わります。
-----	-----	-------------------	-----	---------

第38話　竜さんが仲間になりました

魔竜ちゃんが眠って2刻半くらいが経ち、そろそろ正光になるうという頃。

調理器具をカチャカチャいわせながら昼食の準備をしていたら、視線を感じたので振り返ると。

魔竜ちゃんが大きな銀の瞳をパツチリ開けて、私を見上げていた。

「あ、起こしちゃった？うるさかったかな？ゴメンね」

魔竜ちゃんはフルフルと首を横に振り、ムツクリと起き上がった。クッション代わりに地面に敷いた布を繁々と見てから、再び私の方へ視線を向けてくる。

「具合はどう？もうすぐ正光だし食事しようと思うんだけど、魔竜って何を食べるの？」

「……人間が食べるものなら何でも食べられる……」

小さな声で答えてくれた。

か…かわいいっ！

このコ、姿だけじゃなくて声までカワイイよ！！

「お、回復したのか？ゼウオンの解毒薬が効いたんだな」
「もう良さそうだな。さすが銀魔竜だ」

魔竜ちゃんの声を聞いて、レギとゼウオンが近くに来た。

「あの…助けてくれて、ありがとう。アタシ、ルーシエといいます。東の地「縹銀族」……でした」

「…でした？」

「…破族された身なんです……」

でた。破族。またしても理解しにくい魔物社会用語が出ましたーっ

「アナタ方は、一体何者なんですか？どうして、アタシを助けてくれたの…？」

どこか怯えているような、警戒しているような魔竜ちゃん。

「ルーシエ、だっけ？オイラ、レギってんだ。見てのとおり南の地「朱焰族」じゃ〜ん。助けようと思ったのは……ん…、何となく？」

「おいおい。何となくでホムグルズルの解毒薬作らされたのか、俺は？」

笑いながらレギにツッコミを入れたゼウオンは、ルーシエと名乗った魔竜を見る。

「俺はゼウオン。レギに解毒薬作れって言われて、そうしただけだ。別に他意は無い。キミが魔竜だからといって利用しようとか、隷属させようとか一切思っていないから警戒しなくていい」

「私はユリーナよ。よろしくね、ルーシエ。それで…良かったらル

「シェのこと聞かせてもらえるかな？もちろん無理にとは言わないけど」

ルーシェは銀眼をパチパチと数回瞬かせると、伺うように私達をジツクリと見詰めてきた。

やがて「はい」と頷き、身の上を語ってくれた。

「……と、いうわけなんです。アタシ自身無謀な敵討ちとは分かっていても、でも、どうしても倒したくて……」

料理は後回しにして、ルーシェの話に聞き入っていた私の頭の中は、1つの疑問でいっぱいだった。

……ルーシェの仇である「大きな黒い怪鳥」……

これって……。もしかして……うーん、まさか、ねえ？

チラッとレギとゼウオンを見ると、2人は微妙な顔してルーシェと私の様子を伺っている。

「あのねルーシェ。その黒怪鳥って、ひょっとしてギルガ？」

「あ……よく覚えてないけど母様がそんな名で呼んでいたような……赤黒い眼をしてて、羽と尻尾の先端も赤黒かったの」

はい、ギルガ確定です。

「えーと、何ていうか…ルーシエの仇である怪鳥は1ヶ月以上前に収容所送りにされてるんだ。それからどうなったかは知らないけど…」

「始末されたに決まってる（じゃん）だろ」

レギ&ゼウオンのダブルツッコミ、くらいしました。

「収容所…始末された…？じゃあ、もうあの怪物はいないの…？
ホントに…？」

ルーシエの真剣な様子に、私も真面目に頷き答えた。

「いきなり言われても信じられないだろうけど、ギルガは確かに収容所に送られたのよ」

「………そ、う。…そうなの………」

茫然自失のルーシエ。

ずっと仇として追ってきた怪物が、すでに捕えられていたと知ったら、こうなっちゃうのも無理ないか。

「ね、ルーシエ。お腹すいてない？食事の用意をするから一緒に食べよう？」

場の雰囲気を変えようと、明るい口調でランチのお誘いをする。ルーシエは戸惑った表情をしていたけど上目使いで「アタシも…いいの？」とお伺いをたててきた。

くあつ、カワイイ！可愛過ぎるよ、このチビ竜ちゃん…！

意図的に上目使いしてるんじゃないだろうけど、私のハート鷲掴み！

「もちろん！こっちから言い出したんだから、遠慮しないで。すぐに仕度するわね！」

下ごしらえは終わっていたから、たいした時間もかからずに料理終了。

本日のランチはポトフもどきに、ポテトサラダもどき、あとはパンと果物。

ポトフもどきの具は、塊肉とジャガイモもどき（タロ芋とかいったつけ）、他にも数種類の根菜と黄色のキャベツみたいな野菜。

ウインナーが無いから塊肉を使っただけど、この世界に腸詰ってあるのかな…？

マヨネーズとケチャップはシブグリールで大量に作ったから、まだストックがある。

調味料と野菜や果物は余裕があるけど（レギが野菜とか食べないから）、肉類が少なくなってきた。

あと10日は大丈夫だろうけど、食材尽きたら…山菜を探したり野生動物狩ったりすることになるかな。ま、そうなる前に王子様が来てくれるでしょう。

「美味しい…」

深皿を器用に持ったルーシエは、私が作った料理を美味しそうに食べてくれた。

「人間で、いつもこんなに美味しいもの食べてるの？」

まゝっ、ルーシェったら何て嬉しいこと言ってくれるのかしら！

「そいつは肯定しかねるな。野宿や野営での食事はもっと味気ないものだ。いつも旨いもの作ってくれるユリーナがいて、俺達は幸運なことだ」

うきやゝっ、ゼウオンにそんな事言われると舞い上がったやうよゝゝ！

調子に乗って、もっと色々な料理をしたくなっちゃう。

あー、お米が欲しい。味噌が欲しい。醤油もどきはあるのに、どうしてヘアグには味噌がないのかしら？ 残念だわゝ…。

なごやかに昼食をとり、片付け物を済ませた頃には、ルーシェもすっかり元気になったみたいだった。
レギと一緒に空をクルクル飛んでいる。

やがて地面に降りてきたルーシェは、ペコッとお辞儀して「本当にありがとう」と再度お礼を述べてくれた。

「それで、あの、…アタシも一緒についていいですか？」

ルーシェの唐突な申し出に啞然とする私。ちょっと困ったカンジのゼウオン。

「アタシ〔里無し魔〕だし、両親もいないし…もう敵討ちすること出来ないから……アタシを助けてくれたアナタ方のお役に立ちたいって思っで。アタシ、まだ未成魔^{ちから}だけど能力はそれなりに使えるの。だから……仲間にしてもらえませんか？」

……困った。心情としては、もちろんルーシエを仲間になりたい。カワイイし。

でも、ゼウオンと私には公に出来ない事情がある。

ま、私の方はバレたらバレたで仕方ないって開き直れるけど、ゼウオンはそうもいかないよね。

ここで選べる選択肢は3つ。

選択？ ルーシエの仲間入りを断る。（断りたくないけど）

選択？ ゼウオンと私の事情を隠したまま、仲間にする。

選択？ 全てを話して、仲間にする。

私としては？が いいけど、ゼウオンとレギはどうなんだろう？

2人の様子を伺うと、レギはゼウオンを見ていた。つられて私も彼を見る。するとルーシエも同じようにゼウオンへ顔を向けた。

全員の視線の的になったゼウオンは、何やら考え込んでいたけど、徐にルーシエを見据える。

「……俺達には他言できない事情がある。それは命を狙われかねない程のことなんだ。もし、ルーシエが仲間になるなら、危険な厄介事を受け入れることと、秘密を守ってもらうことを約束してもらいたい。……どうだ？」

そう言われたルーシエは、迷いのない目でゼウオンを見詰め、それからレギと私を見た。

「『アナタ方の事情を受け入れ秘密を守ること、主神〔風の神〕に誓います』」

ルーシェがへアグ共通語ではない言葉で誓うと、何故かゼウオンとレギが驚いた。

「ぐふふつ、まさか真誓たてるなんてな」

「ああ、俺もちよつと驚いたが：ルーシェの誠意はよく分かった」

えーと、真誓ってナンデスカ？

なんかよく分からないけど、ルーシェは秘密を守ると約束してくれただから、仲間になったってことよね？

「ルーシェ、これからヨロシクね」

笑顔で手を差し出すと、ルーシェは嬉しそうな表情をして私の手にそつと触れてくる。

そこにゼウオンの手が重なり、更にレギが乗った。

「レギ、ゼウオン、ユリーナ、アタシを仲間にしてくれて、ありがとう」

ルーシェは初めて、笑顔を見せた。

アタシが真誓をたてた後、「他言できない事情」というのを教えてもらった。

解毒薬を作ってくれたゼウオンは、実は人間じゃなくて魔物だったの。しかも西の銀魔（銀狼族）族長の仔。

なのに、一族に存在を知られたら命を奪われるという事情を抱えていた。

優しく撫でてくれたユリーナは、ヘアグとは違う世界の人間なんだって。

「意思疎通能力」という特殊能力があつて、この山中にいる理由も、この能力が起因してるって教えてくれたの。

アタシを見つけて助けようとしてくれたレギは、「里捨て魔」だった。

「他言できない事情」はアタシの理解の範疇を飛び越えていて、ただただ驚くだけ。

驚きの連続の中でアタシが最もビックリしたのが、仇である黒怪鳥を倒したのがユリーナだったんだってこと。

「ホント偶然、ギルガの急所にドンと落ちちゃってね」。褒賞金もらえたのはラッキーかもしれないけど、ならず者に狙われるならアンラッキーかも。…ルーシエは、自分でギルガを倒したかった？」

アタシにそう尋ねてきたユリーナは、何だか申し訳なさそうな顔してる。

「ううん。アタシの力じゃアイツは倒せないって分かったの。だから、誰かやつつけてくださいって思つてて…まさかホントに倒されてるなんて…アタシの祈りが主神に届いたのかしら？ユリーナは、「風の神」の御使い様？」

「はああ？！神様の御使いって…ナイナイ、有りえないからっ、そんな大層な者じゃないよっっ」

ポカンとした後、大慌てで否定するユリーナ。
「ただアタシにとってはユリーナは女神様みたいに思えるの。」

未知なる世界に生まれて、4神とは異なる尊い存在であるだろう「監視者」から能力を授かつて、天災級のアノ怪物を倒してくれた。神様の化身だつて言われても、アタシは納得しちゃうな。

それを素直に言葉にして敬意を示すと、ユリーナは更にアタフタとして「違う違うっ」と言い続ける。

「私はただの人間だつてっつ。そんな尊敬とかされても困るしっつ。普通に仲良くしょ、ね？」

あまりにも必死なユリーナの様子に、アタシは何だか可笑しくなつて笑っちゃった。

「あんまり畏まる必要ないぞ、ルーシエ」

「そうそう。むしろユリーナには気安いくらいが丁度良いんだつて。ぐふふっ」

ゼウオンとレギの言葉に、アタシはコクンと首肯した。

・・・仲間にももらえて、本当に良かった…。

ルーシエが仲間になって5日が経った。未だグリンジアス第2王子

様からの接触は無い。

ルーシェが召喚契約してくれたので、私の右上腕には2つのキレイな召喚印が刻まれている。

金朱に光る鳥の紋の真下には、美しい青の縹色と磨きぬいた銀細工のような色を織り交ぜたような色合いの、竜を模った紋章。
金銀魔の召喚印ってのは、全部キラキラしてステキなのね。

ルーシェは早朝の訓練にも加わるようになり、私達はお互いの能力を把握しあいながら戦闘力向上に努めている。

朝食後には、ゼウオンの亜空間に仕舞いつ放しだったという「フィク」というボードゲームに興じる。

「フィク」はチェスみたいなゲームで、冒険者はもちろん、騎士や傭兵の間では出来るのが当たり前とされているゲームなんだって。武を競う「闘技大会」と並んで、知を競う「フィク大会」なるものが存在するほどメジャーなゲームらしいんだけど……私、知らなかったヨorz

この世界はボードゲームの種類が豊富で、オセロみたいなものとかもあるらしい。

でも、サイコロが無いからか双六は存在しないし、カードゲームもあまり無いみたい。

サイコロと双六版、トランプにUNOなんか作ったら大儲け出来るんじゃないかな。

作る気は今のところ無いけど、もし実行に移すなら、羊緑族の族長さんに相談した方が良さいかも。

羊緑族以外には「異世界の知識」を教えないで、とは言われてないけど、仮にゲーム作成を実現するとしたら一言告げといった方がいいと思うんだよね。不義理者にはなりたくないし。

正光に昼食をとった後は、皆で山中を散策。
遭遇する怪物を倒して換金できる部位があれば回収しつつ、食べられる物や、売却できる植物なんかを探す。

日没後に夕食をとって、土の3刻頃には就寝。

こんなカンジの山中生活パターンが確立しつつあった。

- - 「ね、ミーグ。第2王子様はいつになったら来るのかな？」

寝袋に潜りこんだ私は、念話でミーグに問いかけた。

- - 『^{あるじ}主はワタクシの居場所をご存知のハズですわ。来ようと思えば直ぐにでも「転移」で来れますが、あえてそうしないのは何か理由があるのでしょうか。いつまでもユリーナさん達に山中に居てもらうのは心苦しいですが、今はお待ちいただきたいのです』

- - 「山中暮らしなのは別に良いんだけどね、土の赤月まで余り日数が無いじゃない？大丈夫かなって思ってる…」

- - 『大丈夫ですわ。ワタクシは主を信じております』

力強く「信じている」と言ったミーグ。

なら、私も余計な心配するのは止めようと決め、そのまま眠りについたのです。

第39話　ようやくお返しできました

白み始めた空に、火炎竜巻が発生する。

「ううう…レギの火球、なかなか広がってくんないのーっ」

「ルーシエ、火球の中心に向けて、もっと拡散させるカンジで〔風〕を放てよ」

^{レギ}金魔鳥と^{ルーシエ}銀魔竜が空中で特訓している下で、私は^{ゼウオン}銀魔狼に鍛えてもらっていた。

「背後には刃を振るうより、柄の先端で突いた方が無駄がない。武器の特徴を生かすんだ」

「はいっ」

数度、打ち合う。

「敵の目線に惑わされるなっ。右を見たからといって右に動くとは限らないぞ！」

「つつ、はい！」

今朝もガッツリ特訓してもらいました。……早く強くなりたいデス。

その日の夜。

ゼウオンと私が各々の武器を手入れしている傍らで、レギとルーシエはオセロのようなボードゲームをしていた。

「うゝん……」

「どうした？ ユリーナ」

「んゝ、ゼウオンに柄の先端で突くようにって助言してもらったじゃない？ 薙刀もこれ一本しかないからさ、いつそ色々と改良しちゃうか、別の薙刀を作ってもらおうかなゝって」

「そうだな……予備の武器はあったほうがいいし、長所を変えたものを何本か作って、使い分けるのいいぞ。ヌーエンや他の街より、グリンジアス王都の方が腕の良い鍛冶職人がいるかもな。一段落したらギルドで聞いてみるか」

「うん！ ついでに他の装備品も欲しいなあ。あのブーツの代わりになる物とか（アレフさんとの話は無効になってるだろうし）他の魔防具なんk……『主？！』……うきゃっ！」

唐突にミーグが叫んだので、ビックリして大声出しちゃった。

私の声にも人もビックリして、こちらに顔を向けてきた。

「ユリーナ？ 一体どうした……！！！」

私に問いかけたゼウオンが、急に私の後ろの空間を凝視する。何かを警戒しているようだ。

レギとルーシエも、いつの間にかゲームを止めていてゼウオンと同じように空間を見つめていた。

私の後ろに何かあるの？

クルツと振り向くと、そこには淡い光が発生していた。

この光……「転移」?? そうですねミীগは『主』と叫んだ。まさか……

「第2王子様……?」

第2王子様、と私が口にしたことで、金銀魔3人の表情が変わる。その呟きを肯定するように、ミীগが感極まる声色で『ようやく来てくださった……』と言った。

淡い光が徐々に人型になる。

そして現れた人物は……まさしく「物語に出てくる白馬の王子様!」っていうフリーズを地で行くようなイケメンだった。

翡翠のような髪に琥珀のような瞳。肌は浅黒く、歯の白さを引き立てている。

その真珠のような歯をチラリと見せて、王子様は私に微笑んだ。

うおっ、カッコイイじゃないか王子様よう。

だけど、ゼウオンの笑顔の方がステキだな。王子様の笑顔は眼福になるけど、心臓ドキドキ警報は発令しないもの。

「貴女がユリーナさんですか? 事の次第はアレフに聞いています」

王子様、声もなかなか良いじゃないですか。ま、ゼウオンの美声には適いませんけどね。

って、そんなことよりも!

「アレフさん、無事に帰還されたんですね?!」

思わぬ朗報に笑顔になり、つい王子様へと近寄ろうとした時。

「おい、ユリーナっ」

若干焦りを含んだゼウオンの声がして、振り向くと。彼は地面に膝をついて王子様に礼をとっていた。

う！しまったーっ。相手は超大物なんだから、気安くしちゃダメなんだ！

この世界には「不敬罪」なんてものが当たり前のようにあるらしいから、私も立場を弁えなきゃいけないんだ！

ミーグと会話してきたためか、第2王子様に対しては畏まった感情が無かったけど、それじゃマズイ！

冷や汗かきながら、私もゼウオンの隣で膝を突いて礼をとった。
両腕を胸の前で交差させて頭を下げるのが、ヘアグ式の礼。
シプグルールで教わっというて、良かった〜。

「そう、畏まらずとも良いですよ」

王子様にそう言われたので、私達は顔を上げた。

「早速ですがユリーナさん、「大地の指輪」を」

「はい」

王子様に促され、紐から指輪を外して差し出した。

ようやく、ホンット〜にようやく持ち主に返せるのね！あゝ長かった！

『主、お待ちしております。ユリーナさん、本当にありがとうございました。』

ございました」

「うっん、お礼を言うのは私よ。ミーグの守りがなかったら、私「闇の帝団」にやられてたわ。色々、ありがとう」

『ユリーナさん…あんな状況に貶めてしまったのに、お礼を言ってくださるなんて…ワタクシ、ユリーナさんに出会えて良かったですわ』

「ユリーナさん、貴女はこの指輪、ミーグを救ってくださり、我が騎士アレフの命も助けてくださった。私からもお礼をいいます。 -

- 我が守護精ミスミーグよ。我が元に戻れ」

王子様がゴージャス指輪を左手の中指に差し込む。

すると、指輪から金と緑の粒子状の靄が止め処なく溢れ、王子様を包み込んだ。

しばらくの間、王子様はキラキラ輝く金緑のオーラに包まれたままだったが、やがてオーラが消えると、複雑な顔でゼウオンを見た。

「偉大なる「銀狼族」の長の実仔であるのに…何とも痛ましい運命ですね…」

ええええつつ?! なんでイキナリそんな事言えるの?

ゼウオンは完璧に人間化してるのに、王子様はアッサリ見抜いちやったの?!

むちゃくちや動揺する気持ちを必死に押し殺している私とは違い、ゼウオンは無表情のまま。

でも、内心ではどう思っているんだろう……。

「今、ミーグと記憶を共有したのです。正直……何事にも動じぬ自

信が有る私でさえも、驚いています…」

なるほど。そういえばミীগは第2王子様に隠し事できないっていつてたっけ。それは、こういうことだったんだね。

黙り込む私達に、王子様は言葉を続ける。

「貴方達とは色々と話をしたいので、今から私と共に王宮に来ていただきたい」

えっ？それは…いいのでしょうか？

こちらの戸惑いを察したのか、王子様は私達を安心させるように微笑んでくれた。

「私の私室に直接「転移」するから人目につくことはありません。ご心配は無用ですよ。では、参りましょうか」

心配無用とかいいながら問答無用ってカンジですね、王子様。

「転移」ってことは、あのグニャ〜ンに襲われるのか……あれ、気持ち悪いんだよね…はあ。

内心でため息を吐きつつ、私は気持ち悪さに耐えたのです。

磨きぬかれた大理石のテーブル。座り心地抜群のソファ。

ピロードのような光沢あるカーテンに、土足で誠に申し訳ありませんと土下座したくなるほど高級な絨毯。

さすが、大国グリンジアスの王子さま。私室のクセして豪華絢爛すぎでしょ！煌びやかさ、ツパネエですよ！！

シプグリールの羊緑族族長館も凄かったけど、ここは更に上をいくね！！

お部屋の豪華さに気圧され、わが身のみすばらしさに萎縮しまくрина私。

レギとルーシェは良いよね……。服なんか着てなくてもキラキラしてるから、この部屋に居ても見劣りしない。むしろ似合う。

そしてゼウオンも……丈夫さを重視した簡素な服を着ているのに、この部屋のゴージャスさに存在が負けてないのよ！

場違いなのは、私だけ？！……あううう。

私達の向かい側に腰を下ろした王子様は、私達が山中にいる間の出来事を順立てて語ってくれた。

「5日前、私が放っている諜報者から、「闇の帝団」がやけに静かだと……本拠地の「地のガード」も消滅していて、明らかに様子がおかしいと連絡が入ったのです。

ミーグの気配の動きから察するに、何かしらの大事が起こっているのだと確信していました。

……「闇の帝団」総帥シュオイをはじめ、団の主要人物のほとんどが行方知れずだとは聞き及んでいましたが……まさか、貴方達があのシュオイを消していたとは思いませんでした……」

5日前、つまりルーシェが仲間になって2日目、ハフィスリード王

子は諜報者から連絡を受けると、すぐさまニアルースに調査団を送った。

その動きに王妃達も敏感に反応して、王妃サイドの貴族達も秘密裏に「闇の帝団」を調べると同時に、ハフィスリード王子が送った調査団の妨害を仕掛けてきた。

「闇の帝団」の本拠地であるニアルースの屋敷に着いた調査団は、地のガードも無く敵襲も無い、まさに蛻^{もめけ}の力ラ状態の屋敷内をくまなく調べ上げた。

とはいっても、屋敷内にあった転移陣は全て発動しなかったため、完全に調べつくしたとはいいがたいのだが。

それでも、屋敷の最上階に位置する一番広い部屋の書棚には、「闇の帝団」が今まで行ってきた数々の依頼（全て犯罪）に関する書類が残されており、そこにはグリーンジラス王国のアシウルバルト伯爵との依頼契約書もあった。

依頼内容は、ハフィスリード王子から「大地の指輪」を奪うこと。シリルリード王子が王太子になるまで指輪を世に出さないということ。

この重要な書類を入手した調査団は、王妃達の放った刺客達の執拗な攻撃をなんとか避け切り、ハフィスリード王子に書類を手渡すことが出来たのだ。

この書類を証拠に、ハフィスリード王子は反撃に出た。

王妃と貴族達に言い逃れの隙を与えないよう、ハフィスリード王子は迅速に行動を起こし、鮮やかに王妃達を追い詰めた。

国王陛下の見守る御前査問会は、王妃と貴族が互いに罪を擦り合うという醜態を晒したものとなった。

そして、国王が下した判決は。

この陰謀に加担した貴族達は、身分剥奪。王妃は、生涯幽閉。

だが、王家の醜聞を避けるため、市井には「闇の帝団」が単独で「大地の指輪」強奪、王妃は病を患い休養する、と公表。

「査問会が終了し、ようやくこの件も決着がつけました。本来ならば、5日前にミーグの元へ「転移」して、ユリーナさんにも証人として査問会に出ていただきたかったところでしたが……、」

「えっ？！」

ギョギョっとして王子様に顔を向けると、何だか含み笑いをしている。

「ユリーナさんを巻き込んで、アレフは恨みを買ったそうですね。私まで貴女を巻き込んでしまったら大層恨まれてしまうでしょうから、貴女の実在は伏せることにしたんです。ふふふっ」

そう言っただけ王子様。

「え、あの、それは……今はアレフさんのこと恨んでないですよ？あ、でも、殿下のお心遣いには感謝いたします」

「ふふふっ、どういたしまして。ミーグと記憶共有してみて、改めて自分の判断が正しかったと思います。もちろん、人目につかぬよう隠れていた貴方達の判断も」

「はあ……ゼウオンとレギの言うことを聞いたって良かったです。あ

の時王都に出向いていたら、私は査問会に出ることになっていたのですね」

王都行きを止めてくれたゼウオンとレギに感謝だよ〜。

「そうそう、ユリーナさんがアレフに求めた品は近々ご用意しますよ。ブーツはアレフが用意しますが、腕輪は私が用意します」

「ええっ?! あ、あれは、その、軽い冗談でしてっ。お気になさらないでくださいい…」

「遠慮しないで下さい。もう準備させてしまってますしね。貴方達存在を公にできない以上、こんな形でしかお礼ができないことが心苦しくもあるのです」

「そんな、心苦しいだなんて思わないで下さいっ。ブーツとかも、お気持ちだけで充分ですし、図々しく戴くワケには…」

躊躇う私に、それまで黙って聞き手に回っていたゼウオンが口を開いた。

「ユリーナ、ハフィスリード殿下もこう仰ってるんだ。受け取らないほうが失礼だぞ」

そっか、確かに好意を拒否するって失礼かも…。そもそも私から言い出したんだし、ブーツもブレスレットも欲しい物だしね。

「では…ありがたく頂戴いたします」

「ええ、そうしてください。ユリーナさんは冒険者でしたね? 今、腕輪は作成中なので完成したらグリンジアスのギルドに届けておきます」

「作成中?! 既製品ではないのですか?」

「お礼の品なんですから、既製品などは送りませんよ。私が身に着

けるもの以上の物を贈らせてもらいます」

爽やかに微笑む王子様。 ってゆーか、王子様の物以上にイイ物って……身に余りますヨ。

「ところで、この件とは別なんですが……貴方達に相談事というか、提案があるのです」

笑顔から一変、真剣な顔つきになった王子様は、ゆっくりと私達全員を見渡す。

「先に言っておきますが、私の提案を断っていただいても、私はミীগが約束した通り、貴方達の素性は他言しません。秘密を漏らすと脅迫して言いなりにさせても、信用は得られませんからね」

「……我々の事情を理解し、漏洩せぬとの仰せ、感謝いたします。ですが、殿下は提案内容を伝える前から我々が断ることも想定されている。それは、つまり、断りたくなるような内容ということですか？」

ゼウオンが尋ねると、ちよつと首を傾げる王子様。

「断りたくなるような内容というよりは、私自身があらゆる結果を想定している、といったところでしょいか。――単刀直入に言います。私と協力関係になっていただきたい」

協力関係？！それってどういったことなのかな？？

「協力関係、ですか？……一介の冒険者である我々に、殿下のお力になれることなどあるのでしょうか？」

「もちろん。そうでなければこのような事は言いません」

「… 敢えて我々に協力をもちかけるのですから、それなりの理由があるということですか？」

「ええ。受けて頂けますか？」

「まずは理由をお聞かせ願えますか？」

ゼウオンと王子様は互いを観察するように見やっていた。

私とレギとルーシエは、ゼウオンに任せたといったカンジで、両者を見守る。

「強力な能力保持者を確保しておきたいと思うのは、王族として当然のことです」

王子様は、意味深な笑みをうかべて言い放った。

第40話　災い転じて福と成す、なのです

「強力な能力保持者を確保しておきたいと思うのは、王族として当然のことです」

この言葉の真意は何なのだろうか？

私達を部下にしたいってこと？兵士にしたいってこと？

訝しがる私とは違い、ゼウオンは冷静な表情で王子様と向き合っている。

「能力保持者の確保、ですか。……しかし、殿下は「主従関係」ではなく「協力関係」と仰いましたね？我々が殿下にお仕えするわけではなさそうですが、具体的にどのようなことをお求めなのですか？」

私の心中を読んだかのように、ゼウオンが王子様に問いかけた。

「魔戦士という存在は、何処でも重宝されます。しかも、ゼウオンさんは優秀な薬師でもあり、ユリーナさんは金銀魔と召喚契約しているばかりか治癒魔法の使い手でもある。

能力有る冒険者を懐柔しようとする権力者は数多くいますね。おそらく今までも多数の勧誘を受けてこられたと思いますが、貴方達の実力が知れ渡れば、そのような手合いは今後更に増加するでしょう」

そう言われてみれば、冒険者になって3日くらいしか経ってない時間でさえ、やたらとスカウトされたなあ。

つてことは、ゼウオンなんて今まで一体どれだけスカウトされてきたんだろう？

「まずは…ゼウオンさんとユリーナさん、そしてユリーナさんの召喚魔であるレギさんとルーシェさんの4者で、ギルドにチーム申請していただきたい。そして私と専属チーム契約をしてもらいたいです。」

とは言え、基本的に貴方達は自由です。他地に行かれても構いません。

しかし、私の許容できない不測の有事が起きた時は力を貸してもらいたい。

もちろん「協力関係」と言ったからには、私も貴方達に力を貸しますよ。何かお困りの時があれば、出来る限りの力添えをします。それに、私の名を出すまではしなくとも、とある国の王族と契約しているチームだと周知されれば、無用な手出しをしてくる輩は激減する筈です。……どうでしょうか？」

ここまで一気に話した王子様は、確認するように再び私達を見回した。

私としては、なかなかオイシイ提案だと思う。

だって、滅多に発生しなさそうな有事の時に協力するだけで王子様の力を貸してもらえし、煩わしい奴等も追っ払える。

もし、ゼウオンが銀狼族に存在を知れることがあっても、西の地最大の大国グリンジアスの王太子（まだ決まっていけないけど、もう確定でしょ）の威光で、すぐにゼウオンが消されるってことは免れるかもしれない。

「オイラはどつちでもいい」

「アタシも。人間達の難しい決め事は分からないから、ゼウオンとユリーナで決めて欲しいの」

「殿下のご提案は私達にとって有益だと思うけど、私よりもゼウオンの方が博識で世の中に精通してるから、判断はお任せするわ」

ゼウオンに丸投げデス。だって、実質的には彼がリーダーみたいなもんだし。

「……承知いたしました。殿下のご提案、謹んでお受けいたします」

ゼウオンが了承の返事をしたことにより、私達は大国グリンジアス王子殿下の後ろ盾を得ることとなった。

こうなると、結果的には今回の事件に巻き込まれて良かったのかも。「闇の帝団」に攫われなければ、ニアルース西の山に行くこともなく、ルーシエとも会えなかったわけだし、王子様という強力なコネをゲットすることもなかった。

まさに「災い転じて福となす」だね。終わりよければ、全て良し！なのです。

それから王子様は「しばし失礼する」と中座し、しばらくすると小箱と書簡筒を手にして戻ってきた。

小箱の中身は、黄褐色をした半球状の小粒な石。直径3mmくらいしかない。

王子様は小粒石に何やらブツブツ呟いて、魔力を注いだ。

その石をゼウオンと私に1つつつ差し出してきたので、手に取ってみる。

「これは伝達石を独自に改良したものです。主に我が国の諜報者が装着してるものでしてね、平面部を耳の後ろ側に当てて下さい」
言われたとおり右耳の裏に小粒石を当てると、ピタッと張り付いて取れなくなつた。

「この石を身に着けていれば、ヘアグ全土どこでも私と連絡をとることが可能です。

石に魔力が宿り温かくなつたら、石の表面を5回ほど指で軽く叩いて下さい。石を通して私からの言葉が伝わります。

そちらから私に連絡する時は、石の表面を7回ほど叩けば石が温かくなります。その後に言葉を発し、3回ほど叩けば、私が装着している石にそちらの言葉が伝わります」

ふむふむ。石が温かくなつたら5回トントン。

王子様に用がある時は7回トントンして、喋って、3回トントン、か。七五三と覚えておこう。

つてゆーか、これスゴイな。小型無線機も平伏モノではないかつ。

そして、書簡筒はギルドに宛てた書状とのこと。チーム申請する際に渡せばいいみたい。

そんなこんなで一通り話が済み、握手を交わした後、王子様が「転移」でグリーンジラス王都のギルド付近まで送ってくれたのだった。

冒険者ギルドは基本的に年中無休、いつでもオープンなコンビニ的機関。

とはいえ、今はもう夜も遅いし、あんまり人は居ないだろうななんて思いながらギルドの中に足を踏み入れると。

「おい、ネエちゃん！ドホー酒を小樽でくれー」

「その皿はそっちじゃねえ！オレツちが注文したんだぞっ」

「お客さん、喧嘩なら外でやって下さーい」

「わーっ、バカ！こんなところで脱ぐなー！！」

……予想に反して、たいそうな賑わいでございました。

良くも悪くも活気溢れる居酒屋状態となっている飲食スペース。

そちらはなるべく視界に入れないようにして、ゼウオンと共に総合案内カウンターへと向かった。

今からでも宿泊可能な宿と、オススメの鍛冶屋を教えてもらい、今度は登録カウンターへ足を運ぶ。

登録カウンターでのギルド職員さんとのやり取りはゼウオンにお任せしちゃう。

だって私よりゼウオンの方が手馴れているしネ。

このまま順調にチーム登録手続きは済ませられるかと思いきや、書簡筒の書類に目を通したギルド職員さんの顔色が一変。

「しよしよ少々お待ち下さいー」

職員さんは、なんだか慌てた様子でカウンターの奥へと引っ込むと、しばらくしてから先程よりは落ち着いた様子で戻ってきた。

「書簡の差出人があまりにも高貴な方だったので動揺してしまいまして、失礼しました。書簡は確かに正式なものと確認もとれましたし、したためられた内容通りの手筈を致します。まずはチームのランク決めの為の試験を受けていただきますので、2日後の風の3刻にまた来ていただけますか？」

「承知した」

つてことは、明日はのんびりできるのかな？せつかく西の地最大の都にいるんだから、観光してみたいなあ。

ヌーエンで出来ず終いだった食べ歩きとか、食市場で色々な食材を物色したりしてみたい。

あ、その前に紹介してもらった鍛冶屋さんに行つて薙刀を作つてもらわなきゃだね。

つて、1日だけではそんなに出来ないか。

王都つてとっても広いから、1ヶ月くらい滞在したいなあ。

ひとまず登録カウンターでの用は済んだので、お次は山の中で集めた物を換金すべく、物品買取カウンターへ。

ここでは、依頼以外で入手した物（素材となる怪物の部位、食材となる動植物、鋼材となる石など、なんでもOKらしい）を、その時の需要に応じて換金してくれる。

私には換金できる怪物の部位とかなんてチンプンカンプンだったけど、ゼウオンはしっかりと把握してたんだよね。やっぱ、冒険者キヤリアの違いですな。

ギルドを出ると、レギとルーシェが上空から降りてきた。

ふわり、とゼウオンの肩に止まったレギが「お疲れさ〜ん。どうな
った？」と声をかけてくる。

「宿を紹介してもらったから今夜は野宿せずに済むぞ。それからチ
ーム登録の件なんだが、2日後にランク試験を受けることになった」
「へえ〜、ランク試験ってオイラ達も参加すんのか？」

「ああ。ユリーナの召喚魔としてだが、レギとルーシェもチームの
一員になるからな。よろしく頼む」

「あいよ〜」「うん。なんかワクワクするの〜」

宿屋に向かう道すがらに、明日の予定なんかも決める。

明朝の特訓は無しになり（今のところ手頃な場所が思い当たらない
から）、朝から王都散策することになった。

宿屋に到着すると、ゼウオンがチャチャツと手続きをしてくれたの
で、直ぐにお部屋に直行した。

今回の宿屋もヌーエンの時と同じく、部屋の中に部屋がある様式で、
ゼウオン&レギで1部屋、私&ルーシェで1部屋を使うことに。

ルーシェは当然ながら宿屋なんて初めてで、ベット1つ使って良い
んだよって言ったら驚いた表情で布団の上を歩いたりしたけど、直
ぐに私の方へ飛んできた。

「なんだか落ち着かないの〜…」

「あらら。じゃ、私と一緒にこっちで寝る？」

「うんっ」

すぐさま頷いたルーシェは、私の枕元で丸くなった。

ルーシェってホント可愛いなあ。魔竜ってもっと怖ろしいイメージ

があつたけど、実物はこんなに愛くるしいのね。
もちろん、なかにはオソロシー魔竜もいるだろうけど。

久々のベットを堪能しつつ、私も眠りについたのでした。

翌日。

私はギルドで紹介された鍛冶屋さんに赴いていた。レギとルーシエも同行している。

「オイラ一緒だと目立つと思うんだけど、どうせチーム登録すんだしな」（ヌーエンの時みたいにオイラが目を離れた隙に、なんて失態はもうヤダし）」

「アタシ今まで都や街の中って行った事ないから色々見てみたいの」

というワケで、レギはゼウオンの肩にとまり、ルーシエは私の背中に張付いて肩ごしに顔を覗かせている。

レギもそうだけど、ルーシエもあんまり重さを感じないんだよね。解毒薬を飲ませるために抱っこした時は、それなりの重さがあつただけどなあ。

なんか能力ちからでも使っているのかも。

張付いているルーシエを覆うようなカンジで青紫ローブを羽織っているの、後ろからだともルーシエの姿は見えない。

とはいえ、レギだけでも充分好奇の視線に晒されているような……ま、別にいいけどね。

「お、ここだな」

剣の絵が描かれている看板を掲げた石造りの建物の前で立ち止まったゼウオンは、躊躇することなく木の扉を開けて中に入った。続いて私も足を踏み入れると、奥の方からカンカンと何かを叩いている音が聞こえてきた。

「いらっしやいま…せつ?!」

愛想良く声をかけてきた中年くらいのオバサンが、レギとルーシエを見てギョツつとする。

でも、それは一瞬のことで、ゼウオンの腰にある得物を見た途端、すぐに元の顔に戻った。

「どのようなものをお求めですか?当工房では、剣の修繕はもちろんのこと、弓や槍もお作りできますよ」

ニコニコとゼウオンに話しかけるオバサン。

「あ、いや。用があるのは俺ではないんだ」

え?つてな顔をしたオバサンに、私は無言で亜空間から薙刀をパツと取り出して、差し出した。

「これと同じ形状のものを新しく作って欲しいんです。刃をもうちょっと薄く、切れ味を上げて、柄の先端で突く場合も想定して作って下さい。それと、この武器に魔力を纏わせて戦うので、可能であれば武器自体に魔力を溜めておくことが出来るようにしてもらいた

いんです」

オバサンは呆けたように私を見詰め、それから手に取った薙刀を凝視する。

「……こりゃあ…初めて見るね。曲刀剣と槍を合わせたようだねえ…。なんて名なんだい？」

「薙刀といます。ですが耳慣れない名だと思いますので、曲刀槍とでも呼んで下さい」

「そうかい。いや、何か色々と驚いちゃったよ。えーと、これよりも刃を薄く、切れ味を良くしたもの、柄の先端も攻撃部に新規作成と。あ、あとは魔力の蓄積か。うーん、なかなか難しい注文だねえ…。ちよいとコレ借りてもいいかい？」

「ええ。どうぞ」

オバサンは薙刀を持ったまま何処かに行くと、赤ら顔の恰幅良い髭もじゃオジサンと共に戻ってきた。

「嬢ちゃんがコレの使い手かい？」

オジサンが手にしているのは私の薙刀だ。

「はい、そうです」

「ふむ。嬢ちゃん、利き手は右だね？」

「え、はい。そうです」

「ちよいと失礼するよ」

オジサンは私の右手をとると、掌と薙刀の柄を交互に見た。それから両腕を服の上からポンポンと軽く叩くと、足を見てくる。

「ふーむ…こいつあなかなか…：：：ちょいと、あそこの広い場所で少し型をとってもらえるか？魔力を纏わせるみたいだが、初めは魔力無しで、その後は魔力を使ったやり方を頼む」
「いいですよ」

私が快諾すると、ルーシエが気を利かせてくれたのか、青紫ローブを持ってパタパタとゼウオンの近くに飛んでいく。

オジサンから返された薙刀を軽く一振りすると、構えをとった。

いつもより簡略化した型をこなしたら、次は「風」と「重力」の魔力を込めて薙刀を振るう。

何故かポカンとしているオバサンと、真剣な表情のオジサン。

型が終わると、オジサンはしばらく難しい顔をしていたが、やがて私の方を見ると。

「ワシは回りくどい事が苦手だからハッキリ言っが…：：無理だ」

無理って…そんな…

新しい薙刀を入手する気満々な私に、オジサンはショックな言葉を言ったのだった。

第41話　嬉しい発見！パスタがありました

「ワシは回りくどい事が苦手だからハッキリ言うが・・・無理だ」

無理…って、それは薙刀を作ってもらえないってこと？

王都でも名の知れた腕利きの鍛冶職人さんってギルドで聞いたから、此処に来たのに。

ここでダメなら、何処に行けば作ってもらえるんだろう？

シヨボンとなってしまった私に、オジサンは少し相好を崩した。

「ま、今、嬢ちゃんが手にしているヤツよりはマシなものを作ることは出来るがな」

「え?!あの、どういうことですか?」

薙刀作れるなら、どうして無理なんて言っただろう?

オジサンは軽いため息を吐き、無理だと言った理由を説明してくれた。

曰く、私の希望通りの薙刀を新規作成するには、「鍛冶職人」とは別の「魔具職人」の技術が必要なんだそう。

オジサンも有る程度は魔武器を扱うことは出来るらしいが、私の戦闘スタイルに見合う物を作るのは難しいんだって。

加えて、オジサンの所では私の「風」の魔力と相性の良い材料が無いらしい。

「……わかりましたあ。でも、私はこれ1本しか武器を持ってないので、まったく同じモノで構いませんから新しく作ってもらえませんか？」

「わかった。全く同じ曲刀槍（？）なら、そうだな、形状は覚えたから5日あれば作れる。しっかし勿体ねえなあ、嬢ちゃんよ」

「勿体無いつて、何がですか？」

「さっきの型を見ただけでも、得物が実力に合ってねえってのが分かる。嬢ちゃんの力に見合うモノを作ってやれんのは残念だが、それでもソイツよりは良いモノに仕上げてやんよ」

「本当ですか？ありがとうございます！」

「ただな、今ウチにある素材の中でもそれなりのブツを使うことになるから、大金貨2枚くらいかかっちゃうが…良いか？」

大金貨2枚か…どうしよう…？

今の手持ち残金は大金貨2枚以上ある。ブーツやブレスレットは貰えるし、食材や宿代はゼウオンがチーム資金（コルエン裏山の報奨金&山中で採取して換金したお金）で払ってくれるから、一応払える金額だ。

ちよつと悩んだけど、思い切ってOKしちゃうことに。

「はい。わかりました。今、お支払いした方がいいですか？」

「いや、出来あがったモノを試してからでいい」

では5日後にまた来ます、と言い残し、鍛冶屋さんを後にした。

理想通りの薙刀は無理だったけど、今よりも優れた薙刀が手に入るんだから、ここに来た甲斐があったわ。

さて、お次は待望の食市場へGO!!

なんだか私の我俣に皆を付き合わせちゃってるみたいで申し訳ないな〜と思いつつも、3人とも気にした風でもなく、むしろなんだか楽しそうだから、まあいつか。

食市場は、とっても魅力的でございました。

もうね、さすが西の地最大の都ってだけあるね!

シブグリーンルやヌーエンの食市場も大規模だと思ったけど、ここはとにかく食材の種類が豊富なの!!

俄然テンションあがりますですヨ!5日間くらい時間をかけて物色したい〜。

目を輝かせながらキョロキョロしていると、とある食材に惹き寄せられた。

太さ5mmくらい、長さ30cmくらいのコレはっ。まさしくロングパスタではないですか〜!

やった〜!!

この世界にきてから、主食はずーとパンだった。別にパンも嫌いじゃないけど、いい加減飽きてたんだよね。

お米が無い以上、せめて麺類だけでもないものかと思ってたんだ。うどんや蕎麦なんかは無理でも、パンがあるなら同じ小麦粉系ということでパスタは在るかも、と期待してたの。

ああ、ようやく巡り合えたパスタちゃん。会いたかった〜!

トマトもどきやニンニクの香りがする食材はあるから、ボロネーゼ

にナポリタンにポモドーロにアラビアータ、ペペロンチーノとかは作れそう。

バジルに近い葉があればジェノベーゼなんかもいいなあ。カルボナーラも可能かも。

シーフード食材はあんまり見ないから、ペスカトーレやボンゴレは無理かな〜。

そうそう、醤油もどきを使って和風に仕上げるのもアリよね。スープスパにするのも良いし〜

頭の中でパスタ料理のレシピを思い描き、ニマニマしながらロングパスタを見詰める。

肩に魔竜のつけてニヤケ顔した黒髪女。その隣には、肩に魔鳥をのせた青髪男。

注目の的です。思いっきり見られています。周囲の視線、集中です。

でも気にしない。別に悪いことしてないんだから、堂々とすべし！

「なんだかユリーナ随分とゴキゲンじゃ〜ん？それって、そんなに旨いのか？」

「うふつ。レギ、いい質問だわ。この食材があれば料理の幅が広がるのよ！今、頭の中で思いついただけでも5種類は作れるわ」

「へえ〜。でもそんな長つちろいの、オイラは食べにくくてやだ〜」

それもそうか。せっかくだからレギにも食べてもらいたいしなあ。

マカロニのようなショートパスタだったら、レギも大丈夫かも。

売り物を見回すと、あったあった、ありましたよ〜。ペンネ状のシ

ショートパスタ、発見！

「ね、レギ。あれだったら食べれるんじゃない？」

「あゝ、あのくらいならイケる」

よっしゃ。ショートパスタならグラタンとかパスタサラダも作れるし、ロングとショート、両方買いだめ決定だね！

ルルン気分で次の出店へと向かおうとすると「買わないのか？」とゼウオンに聞かれた。

だって、これだけ広い食市場なら、パスタ扱っているお店は他にもたくさんあるだろうから、他の所の価格を見てから決めたほうがいい。

平均価格を知らないと、値切ったり、オマケ付けてって交渉もできないじゃん。

大量に買っただから、比較検討もせずに即買いなんて愚の骨頂！

そう力説すると、ゼウオンは微妙な顔して「そっか」と一言。

あれ？なんかマズかった？？シブグリアルでは値切り交渉OKだったけど、もしかして、この国では値切っちゃいけない決まりでもあるとか？？？

若干焦ってゼウオンに尋ねると、別にそんな決まりは無いとのこと。

「いや、何ていうか：ユリーナって成人したばかりのわりには金的事しっかりしてるよなって思っ^{カネ}て。（ホントにギルガの褒賞金受け取ったのか疑問だ…）」

「そうお？やっぱ、お金って大事だと思うし…ゼウオンは、価格交

渉するようなオンナは…嫌い？」

嫌いって言われちゃったら、どうしよう？

不安に駆られながら彼を見上げると、優しげな紫の瞳が私を見詰めてた。

「まさか。むしろ交渉するのは良い事だと思うぞ」

「ホント？…良かった」

ホツとしてニコつと微笑むと、ゼウオンの長い指が私の頬に触れ、優しく掠るように撫でてきた。

ドキッ。カァッ。途端に跳ねる心臓。赤くなる顔。

「大事に金を使うのは好ましいことだが、ヘンな遠慮はするなよ？」

「あ、うん。ありがとう…」

ゼウオンは甘さを含んだ瞳をして、赤面した私の頬を更に撫でる。

ここは食市場で、大勢の人がいるわけですし、大和撫子（？）の私としては大変恥ずかしいのですが、意中の殿方が自分に触れてくるのがイヤなワケもなく、もっとシテとかハシタナイことと思う自分がいて、そんな自分に益々羞恥が募るといいますか、なんかもう勘弁してくださいって言いたくなるワケですよ。（プチ混乱中）

「ユリーナ、お顔真つ赤なの。大丈夫？」

肩越しから覗き込むように私を見る、つぶらな銀の瞳のチビ竜ちゃん。

ニヤニヤといった形容がドンピシャな表情の魔鳥さん。

あうつ、そんな純真無垢な瞳で私を見ないでルーシェ〜つ。
ってゆーか、レギ！アンタ完全に面白がつてるでしょ！

「大丈夫よ、ルーシェ。なんでもないの。今度はあつちの方を見て
みたいな」

平常心平常心と心の中で言い聞かせて、殊更普通を装い、市場内を
見学する。

香辛料や調味料、果物に野菜に加工肉と、買いたいものは沢っ山あ
ったけど、今回は結局何も買わずじまい。

というのも、来月に開催される「土の神」の大祭にあわせて、王都
中で格安バザー期間が設けられるらしいの。所謂、激安セールです
よ！

前の世界にいた時、将来のために出来るだけ貯蓄していたから、お
洋服は年始のバーゲンか在庫処分セールで、食品はスーパーの見切
り品、たまに買うお惣菜は閉店時間間際のタイムセール半額品で購
入していた私。

格安バザーなんて聞いた日にゃ、今むざむざ買うわけにはいかな
いっしょ。

とは言え、今月中に王都を出立するなら、その限りではないんだけ
ど…。

いつまで王都に滞在するのか仲間3人に尋ねると、特に急ぐことも
無いし、私とルーシェは大祭を見たことがないから、来月末まで王
都に滞在しようかということになった。

やったね！

そうと決まれば宿屋の確保。

昨夜ギルドで紹介してもらった宿は、そこそこ値段も設備もサービスも良かったので、そのまま長期滞在手続きをとる。

来月になったら途端に商人や冒険者が押し寄せ、宿泊客が激増するらしいので、今のうちにキープしちやおうってワケ。

「あ、そうだ」

唐突に、何かを思い出したように声をあげたゼウオン。

「どしたの？」

「ギルドチームの登録名。皆に聞いてから決めようと思って、昨日書類に記入してないんだ。なんか良い名、あるか？」

「うーん、チーム名か……。なにがいいかな……」

なかなかコレって名前が思い浮かばないな……。なんて悩んでいると。

「ユリーナの武器の名ってなんだっけ？ナギラ……じゃなくって、ナギナワ、だっけ？」

レギがそんなことを聞いてきた。

「違うわよ、レギ。薙刀よ。 な ぎ な た 」

一字ずつ発音すると、「それぞれ！それでいいじゃん」とか言い出した。

「は？それでいいって……まさか、チーム名を薙刀にするってこと？

「！」

「おうよ！そのナギナタってのはユリーナだけが使ってる武器だから、ユリーナの代名詞みたいなもんじゃん？んでオイラ達はユリーナの召喚魔。ユリーナを介して皆が繋がってるから、丁度いいじゃん」

「うんうん。アタシ賛成」「俺もそれで良いぞ」

金銀魔達はマジだ。

マジでチーム名「ナギナタ」？！それって、どうよ？！

でも、イヤだとゴネても代わりのチーム名なんて思いつかないし、私を介して繋がっているってのは嬉しいし、この世界では「薙刀」っていうより「曲刀槍」っていう呼び名の方が浸透しそうだし……

ま、いつか。

「じゃあ……チーム名は「ナギナタ」で決まりね。リーダーはゼウオンがしてくれる？」

「え？俺？」

「ま、当然じゃん？経験浅いユリーナにや無理だし、そのユリーナの召喚魔であるオイラとルーシェは論外。ゼウオンしかないじゃん」

レギ、ナイス補足！

「うん……。ま、仕方ないか……わかった」

よし、リーダーはゼウオンに決定！よかった、よかった。

チーム名とリーダー決定のお祝い（？）に、その日の夕食は宿ではなくて、食市場で勧められたお店で夕食をすることになった。

そのお店は石造りのお洒落な店構えで、木のテーブルや椅子なんかも良いカンジ。

レギとルーシェを連れてるからか、他のお客さんや店員さんから驚きの視線で見られたけど、私も驚いた！

だってロングパスタの食べ方が全然違うんだもん！

イボイボ付きのミニトングのようなものにパスタを絡めて、ディッブ状のソース（？）につけて食べるんだよ。

他にも、細長くカットした味付き根菜を葉野菜に巻いて食べるだとか、スパイスのきいた肉料理なのに更にタレを付けるだとか、緑色したスープがパンプキンスープに良く似た味だとか……

全部美味しかったんだけど、なんか色々と衝撃的な食事だったよ……

夜風を心地よく感じながら、私はゼウオンと石畳の道をゆつたりと歩いている。

先程の飲食店で、つい話の流れで店員さんに「初めて王都に来たんです」って言ったら、是非行ってみてくださいとオススメ夜景スポットを教えてくれたので、行ってみることにしたの。

グリンジラス王都の道や建物には、薄緑に光る光源石が多めに詰め込まれていて、夜になると幻想的に光って、とてもキレイ。

レギが以前、ヌーエンよりグリンジラスの方がキレイだと言ってたけど、確かに夜景は一見の価値があると思う。

そんなレギはルーシェと共に夜空に飛んでいつちやったんだけどさ。空飛べるっていいよね。上から夜景が見れるんだもの。

私は魔力使っても、そんなに高く浮けないんだよね。…ちえ。

「今から行く所って、ゼウオン行った事ある？」

「いや、ないな。王都は何度か訪れたが観光じみた事はしなかったから」

「そうなんだ。明日ランク試験なのに付き合ってくれて、ありがとう」

ゼウオンは惚れ惚れしちゃうような微笑を浮かべて、手を差し出してきた。

引き寄せられるように、自然とその大きな手をとる。

頬が熱い。体が火照る。

これは、たくさん食べて代謝が良くなっているからだよ。ゼウオンと手を繋いでいるからじゃない、と思いたい。

さすが噂のスポットというか何というか、到着した目的地はカップルだらけでした。

こういうのって、国どころか世界を超えても共通してるのね。なんて思いながら夜景を堪能。

しばらくの間、淡く光る王都に見入っていたけど、なんだか隣から視線を感じたので仰ぎ見ると。

食市場でみせた、あの甘い瞳をしたゼウオンが、私をジッと見詰めていた。

ドキッ。カァッ。途端に跳ねる心臓。赤くなる顔。（本日2度目）

「……ユリーナ」

少し掠れた艶っぽい声で名前を呼ばれて、下腹部にナゾの感覚が沸き起こる。

絡めとられたかのように、魅惑的なアメジストから視線が外せなかった。

彼の大きな手が私の肩にかかる。

えっ？と思った時には、広く逞しい胸に、赤面した顔がくっついていた。

うきや~~~~っ、これって、もしかしくても抱きしめられてる？！

なんでこうなったのかサッパリわかんないけど、拒む、という選択肢は思い浮かばなかった。

でも、赤らむ顔は見られなくて、彼の胸に押し付けるようにして顔を隠すと、私の体をフワッと包んでいた筋肉質な腕に力が入り、ギュワッと拘束される。

ぐえっ、ぐるじいいーっ。

「つつ、ゼウオ、ン、苦しい……」
「！、あ、スマンっ、つい……」

フツと腕の力が緩み、ホツと息をつく。

「んもうつ、「つい……」って何よ？ 圧迫死するところだったじゃんっ」

ブクウツと脹れて抗議すると、彼は「悪かった……」と眉を下げて謝ってくれた。

「つい、加減できなくて……次からは気をつけるから」

え？！ 次からは……って、それってどーゆー意味なんでしょうかなんか？

なんか今後も抱きしめるの当然ってな台詞ですが……これは如何いかなものなのでしょうか？

あんな瞳をして、こんなことされると、ゼウオンも私と同じ気持ちだって期待しちゃうんですケド……

ここは思い切って彼の気持ちを聞いちゃう？ いやいや、その前に自分の気持ちを告げるべき？？

あーっ、どうしよう……？！

……

……

……… ま、いつか。

敢えて今、白黒つける必要もないし。

こうしてゼウオンと触れ合っていられるだけで幸せだしね。

頭に浮かんだ事はスルーして、私を包み込む彼の逞しい温もりに浸ったのでした。

第41話　嬉しい発見！パスタがありました（後書き）

主人公、以前「ずっと一緒にいたい」とか「離れたくない」とか「お別れするのは耐えられない」とか言って、盛大に告^{コタ}っちゃってること気づいてない…（^^;）

ゼウオンはゼウオンで、気持ちを全面的に態度にしてるし「俺も離したくない」と告げてるから、自分の想いは伝わっていると思うているんです。

そしてレギは、かみ合っている様でビミョーに合わない2人の状態を面白がっている、と（笑）

ちなみにルーシエは、最初から主人公とゼウオンはツガイ（恋人同士）だと思ってます。

第42話「ギルドチーム「ナギナタ」始動です」

一夜明けて、今日はギルドのランク試験の日。
指定時間である風の3刻5分前に冒険者ギルドに到着した。

夜の時間帯ほどではないにしろ、ギルド内にはそれなりに人がいて、やっぱりレギとルーシェは注目の的だった。

騒動になってしまうようなら、不可視効果のある「水」の結界（いつも3分シャワーで使ってるヤツ）を張ろうかと思っただけで、移動しながらだとイマイチ結界が安定しないし、コソコソしてるみたいで気分的に何かイヤなので、結局は張らないことにした。

真っすぐ登録カウンターへと向かうと、小柄なお爺さんがニコニコと近づいてくる。

「おはようさん。ワシは此处、冒険者ギルドのグリーンジラス王都支部で支部長をやっとるカベンツという。お前さん達は魔戦士ゼウオン、ユリーナ、そして召喚魔のレギ、ルーシェで間違いないかな？」

そうです、と肯定して、私達もそれぞれお爺さんに挨拶を返す。

にしてもカベンツって…Car、Benz、みたいな……支部長さんは高級車ジイサンと覚えよう。

って、そんなことは措^おいという。何故わざわざ支部長さんが私達を待ち構えていたのかしら？

そんな疑問を抱きつつ、応接室のような部屋へと通された私達は、支部長さんに勧められるがままに出されたお茶を啜る。

「…例の書簡はワシも目を通してもらった。あの方の専属チームになるなら、このギルドを拠点にするのかね？」

「どうでしょうか…今はまだ、腰を据える場所は決めておりません。あの方からも他地で活動するお許しは得ていますし、拠点を定めるのは各地を巡ってからでも良いと思っています」

落ち着いた口調で支部長さんに返答をするゼウオン。

「そうか。残念だのう。ギルド側としては実力ある冒険者には常任してもらいたいが…冒険者を留まらせる権限は無いからのう。」

おそらく、あの方もお前さん達が一箇所に留まる事を望んでないと察しておるのだろう。

じゃが、お前さん達が他者と契約なんかして自分と敵対関係になってしまう可能性だけは防いだということだな。あの方もなかなか抜け目が無いのう。――ところで」

支部長さんはお茶を一口啜ると、物腰の柔らかい雰囲気から一変、真面目な顔つきになる。

「急で悪いんだが、ランク試験後すぐに受けてもらいたい特別依頼があるんじゃない」

「……では、ランク試験後に詳細を聞かせてください」

「うむ。まずは試験だな。このまま地下闘技場へ行つとくれい」

応接室を出て地下闘技場に向う途中、ゼウオンに「特別依頼って何

「だろね？」と何気なく言うと、彼は眉間に皺を寄せた。

「支部長直々の依頼だから、よほどのことでもない限り断れないが……どうせ碌なもんじゃないさ。特別依頼だとか特別任務だとか特別命令だとか、とかく「特別」と名のつくものは要注意だ。こつちが魔戦士だからと無理難題ふっかけてくることがあるからな。

ま、今回は「依頼」だから、条件や報奨金の交渉ができる分だけ、まだマシだ。

特別ランク試験だとか、ギルド長の特別命令だとか言って強制的にやらされる場合だってあるからな」

「ええ?! そうなの?」

「まあな。だが冒険者は基本自由だ。あまりにも相手が強引な時は、二度とふざけた真似できないようにして他所に行けばいいんだ。そういう意味では魔戦士は良い職業だぞ。なんせ絶対数が圧倒的に少ないんだから、どこのギルドに行っても歓迎される」

「フツと何やら黒い笑みを浮かべるゼウオン。コワッ。

「一体、彼の過去に何があったのでしょうか?……なんか、聞かないほうが良い気がする。」

「とりあえず、魔戦士で良かった」とだけ思っところ、うん。

「ちよっぴり黒ゼウオンに慄きつつも、地下闘技場に到着。

「ランク試験って何するのかな」と思ったら、怪物集団さんと連続バトルだった。

「ニアルース西の山の怪物よりも弱い怪物だったし、レギとルーシエも参戦してるから、あっさりと勝って試験終了。30分もかかんない」

かった。
ランク試験って難しいって聞いてたけど、ちょっと拍子抜けしちゃったよ。

その後また応接室に逆戻り。

しばらく待っていると、支部長さんが職員さんと共にやってきた。

「いやはや、さすがだの。あの方が専属にと望まれるだけあるわい。チームランク試験を1刻以内で終わらせるなんて、当ギルド新記録じゃ!」

はあ…支部長さんにお褒め頂き光荣デス。

「早速ギルドチーム登録証を発行いたしますが、2日前に記入していただいた書類では登録チーム名が保留扱いになっていますので、今、ここに記入していただけますか?」

職員さんから差し出された書類にスラスラと記入するゼウオン。
これで正式にチーム「ナギナタ」になるのね。

……薙刀がチーム名って、やっぱヘン。いずれ慣れるのかしら……
はあ。

書類を確認した職員さんは、ゼウオンと私からギルド登録証を受け取ると一旦退室する。

職員さんがいない間、支部長さんが特別依頼について話し出した。

最近、グリンジアス王国と隣接するブランディウル王国との国境付近を通る主要街道に、3ツ星ランクくらいのなかなか手ごわい怪物が集団で出没するようになってしまったらしい。

本来なら、王国騎士団や国境警備隊といった両国の兵士達が討伐すべきなのだが、まあなんていいですか、「こつち来たらウチ、あつち行ったらアンタ」ってなカンジで、面倒ごと押し付け合戦みたいになっちゃってるんだとか。

街道を通る人々からしたら「どーでもいいから早くなんとかしてよ」ってことらしく（そりやそうだ）両国にしてみても人々が行き来出来なくなるのは困るので、ならば、中立の立場で柵しがらみのない冒険者に討伐してもらおうってことになったというのだ。

そして今、出没する怪物どもを掃討できる実力のある冒険者で手隙なのは、私達だけなんだって。

ちなみにその怪物達はツムカルゴとか呼ばれているらしい。手足の生えた巨大カタツムリのような怪物だ。

「報奨金は両国から大金貨15枚づつ、合計大金貨30枚になる」

「国境まで赴く依頼にしては少ない額ですね」

そうなの？！少ない額とかいうゼウオンにビックリ！

大金貨30枚も貰えるの？ラッキー！！とか思った私は世間知らず？

「ギルド転移装置の無料券を10回分つける。それと、この依頼は達成ポイントを通常の3倍にするぞい」

ギルド転移装置っていうものの存在は、ゼウオンに聞いてる。

ヘアグ全土にあるギルドを行き来できて、とっても便利なものらしい。依頼物はもちろん、人の移動も可能。

じつはこの転移装置、ギルドが開発したものらしく、ギルドだけが

保有しているもの。

国や貴族、大金持ちの商人なんかに売ってくれーって頼まれても断固拒否してるんだって。

門外不出の転移装置だけど、実は使用理由を申請して料金さえ払えば、冒険者だけでなく誰でも使わせてくれる。

とは言え使用料が高額なので、よほどのことが無い限り使用する人はいないんだとか。

それでも、いざという時にヘアグ全土どこでも行ける（ギルドがある所に限られるが）ワープ装置があるってのは便利だよな。乗り物の技術が発達しないワケが分かった気がしたよ。

そんなお高価^{たか}い転移装置を10回も無料で使わせてくれるなんて太っ腹じゃん。

そして依頼の達成ポイント3倍。

ギルドの依頼には、報奨金とは別に達成ポイントというものがある。冒険者は自分のランクに応じて定められた依頼達成ポイントを一定期間の間に獲得しなければならなくて（1ツ星ランク魔戦士の私は1ヶ月50ポイントだったかな）、もし獲得できなかったら罰金が発生してしまうのだ。

何故依頼達成ポイントなんかがあるのかというと。

ギルドは所在する街と国に「ギルド税」を支払っているの、冒険者は定住税や賃金税や関所などの通過料といった税金の支払義務がない。

そして「ギルド税」の出所はというと、当然のことながら依頼報奨金になるわけで、依頼書に記載されている報奨額は、あらかじめギルド税が差し引かれている額になっている。

ギルド側としては、ただ登録だけして稼いでくれない冒険者なんて

迷惑なだけってことで、依頼達成ポイント制度が導入されたそうなのかなと思ったら、そのままチームのポイントとして扱われるんだって。

私のポイントなんて微々たるものだけど、ゼウオンはたくさん貯めていたから（一体どれだけ依頼こなしてきたんだ？）あと5ヶ月は依頼を受けなくても罰金は発生しないんだけど、ポイントは貯めといった方がいい。

隣をみると、我らのリーダー様は何やら思案顔だ。

「……（転移装置を使えるなら国境までの移動費用や食費なんかは考えなくていいな。達成ポイント3倍までつけるってことは、よほど断られたくないのか？両国に恩を売りたいのか？どちらかの国に借りがあるのか？ホントに全くアテがないのか？。もしくは殿下と契約したってことで俺達の実力を試したいとでも思ってるのかもなまあ、いずれにせよ、これは引き受けるべきだろうな）

……わかりました。1つ、確認したいのですが」

「なんじゃな？」

「討伐対象はツムカルゴの集団ということですが、あの怪物の殻はまとまった金額と換金できますよね？それは我々がいただいても構いませんか？」

「ああ、もちろん。構わんよ」

「そうですか。――皆からは何かあるか？」

私もレギもルーシェも、特にナシってなカンジで首を横に振る。

「では、この依頼、正式にお引き受け致します」

「うむ。よろしく頼むぞい。両国の国境警備隊には連絡しておくの

でいう」

その時、コンコンとノック音がして、ギルド職員さんが入ってきた。チーム登録と登録証発行が済んだようだ。

職員さんから自分の登録証を受け取るゼウオンと私。

およ？私、魔戦士ランクが3ツ星になっちゃってる……！

ゼウオンは自分の登録証とは別に、チーム登録証というものも受け取っていて、私達にも「確認してくれ」と言ってみせてくれる。

《チーム名：ナギナタ チームランク：3ツ星

チーム登録者？ 氏名：ゼウオン 職業：魔戦士 ランク：4
ツ星（戦士ランク：5ツ星 魔法士ランク：3ツ星）

チーム登録者？ 氏名：ユリーナ 職業：魔戦士 ランク：3
ツ星（戦士ランク：2ツ星 魔法士ランク：4ツ星）

チーム登録者？ 氏名：レギ 魔鳥 朱焰族

チーム登録者？ 氏名：ルーシェ 魔竜 縹銀族 》

私、魔法使わなくても2ツ星ランクの実力あったんだ。ちょっと嬉しい。

にしてもゼウオンってば、戦士ランク5ツ星なんだつ。スゴッ。

「チームランクが3ツ星なのはじゃな、登録人数がかなり少ないってことと、魔戦士ユリーナのギルド実績があまりにも無さ過ぎるの

でな…いきなり4ツ星以上にはできんのじゃ」

うつ。私が足引つ張っちゃってるのかあ…。

シヨボンと肩を落すと、ルーシエが摺り寄ってくれる。なぐさめてくれるなんて、なんてイイ魔竜ちゃんなんだろう！

「それにしても、お前さんは未恐ろしい女魔戦士じゃな…」

「え？私のことですか？」

急に支部長さんに視線を向けられてタジっとなってしまう。

「ワシは長年ギルドに身を置いてきたが…戦士ランクよりも魔法士ランクの方が上位の魔戦士というのは、お前さんが初めてじゃ。」

「お前さん達と専属契約しとるあの方も、戦場に立てば魔戦士になるのじゃが…あの方のお力は知っとるかの？」

「いえ、知りません」

「……あの方の戦闘力は、金銀魔の族長や高位精霊の精霊長に匹敵する」

マジですかーっ？！スゴイ、第2王子様って、とんでもなくスゴいんじゃない！！

そんなでもって民衆から絶大な人気がある善政者で、オマケにイケメンなんて、そりゃあ夜伽希望者多数なのも当然だわ！

実はニアルース西の山中生活の際、ミーグと念話で第2王子様の夜事情を聞いちゃったのだ。

「あのさミーグ…他人様の情事を覗き見したりしないってさ…第2王子様の時は、その、どうしてるの？だって常に一緒なんだし

よ？もしかして王子様って…女性をシラナイとか？」

- - 『まさか。主に限らず王族の男性は、色香に惑わされぬよう、成人する前から夜伽の経験くらい多数積んでますわ。主が女性と褥を共にする時は、ワタクシ周囲に結界を張ってお守りしておりますの』

- - 「あ、そうなんだ…。って、経験多数?!」

- - 『ええ。もちろん御子を成さないよう薬は服用してらっしゃいますけど、それでも主と一夜を過ごしたいと望む女性は後を絶ちませんから。主には後も側室もいらっしゃらないので、また一段と女性達のアピールが激しくて。主もウンザリしてるようでして、ここ2、3年は後腐れの無い高級娼婦の方しか相手にしてませんわ』

- - 「……大変ね、王子様も」

ってな、話をしたのヨ。

「それほどの力があるあの方が専属契約を望む冒険者とは、どんな者なのかと思っておったのじゃが…まさか金銀魔を召喚出来る魔戦士とは…いやはや…」

はっ、いけないイケナイ。支部長さんの声で我に返る。

えーと、なんでしたっけ？金銀魔との召喚契約？それがどうかしたのでしょうか？

キョトンと小首を傾げると、ふう…と溜息を吐いてお茶を啜る支部長さん。つられて私もお茶を一口飲む。

「……南の金魔、東の銀魔と召喚契約しているということの凄さを自覚しとらんのかのう」

金銀魔との召喚契約って、そんなに物凄いことなのかな？

実は西の銀魔とも召喚契約してるんですね……絶対に口外しませんケド。

この世界に来て、そんなに日数が経ってないうちにレギと出会ってるし、羊緑族という中級魔獣の街でお世話になってたから、実は人間より魔物の方が馴染み深く感じちゃう。

だから、イマイチ魔物に対する世間一般の人達の間で感じてのが分かんない。

はっ！そういえば。

私って仲間は全員魔物で（ゼウオンは人間扱いだけど）親しくなったメルローさんやミリーも魔物。先日まで仲良くお喋りしていたミীগは守護精だし…

私、人間で親しい知り合いっていないじゃん！ ガーオンツツ……

あ、第2王子様とアレフさんは人間か。

だけど大国の王子様と、近衛副隊長様に対して友達ヅラはできない…。

……

……ま、いつか。私には大切な仲間がいてくれるもんね。

それに何よりゼウオンがいるもの。

こんなに大好きな彼と一緒にいられるなんて、私って本当に幸せ者だわ。

ゼウオンと出会った頃は、仲間はもう必要ないって言われたらどうしよう…とか思い悩んだもんだけど、今はチームになったんだし、そんな心配なくていいんだよね。うふっ。

今回の依頼は、チームになって初めての仕事。

皆に迷惑かけないよう、足手まといにならないよう、少しでも役に立つよう、頑張ろう！

おうっ！！

第42話「ギルドチーム「ナギナタ」始動です」(後書き)

ハフィスリード殿下は、日々のストレスを夜伽で発散させるタイプです(笑)

書き溜めせずに、ある程度の文字数になったら更新、といった形をとっていますので、辻褄が合わなかったり、色々ツツコミどころがあったりするかと思いますが、深く考えずに寛大なお心でスルーしてやってください(^^;)

行き当たりばったりな作品ですが、読んでくださる方がいると思うと大変励みになります。

お気に入り登録をしてくださった方、評価してくださった方、本当にありがとうございます！

第43話「ギルドチーム「ナギナタ」初仕事です」（前書き）

視点が 国境警備隊長 主人公 と変わります。

第43話「ギルドチーム「ナギナタ」初仕事です」

オレは、ブランディウル王国国境警備第6番隊隊長だ。

我が第6番隊は、この西の地で最大の大国グリンジラス王国との国境警備を任されている。

そしてオレ達は今、ツムカルゴの集団を挟んでグリンジラス王国の国境警備隊と向かい合っている。

憎き怪物どもは、丁度我が国と隣国を隔てている沼地のド真ん中に居やがるのだ。

このまま突き進んで戦うと、大国グリンジラスの領土に侵入してしまう。

それはマズイと判断し、こうして部下達と様子を見ているのだ。

……別に怯んでなんかないからな！

ツムカルゴが吐き飛ばしてくる粘酸液が怖いとか、このまま沼地に突っ込むと足をとられて身動きできなくなるとか、あのヌメヌメした体躯に吞まれたくないとか、そんなこと思っているワケじゃないぞっ、決して！

グリンジラス王国側も同じ事を思っているのか、あちら側の国境防護壁の裏側には明らかに警備兵がいる様子なのに、何の動きもない。

やはり今回も、自国の領土に怪物が侵入してきたなら追い払うといった形になるのか…。

そんな風に思いながらツムカルゴだらけの沼地を注視していると、
グリンジアス王国側から人影が現れた。

……あれは、誰だ？

まだ歳若い男女、その頭上を飛行する鳥と竜。

アレは……まさか？！いや、でも有り得んだろう！

「たつ隊長、ボクは幻でも見ているんでしょうか？何故か魔鳥と魔
竜が見えるんですが……」

「……安心しろ。オレにも見えてる」

「………はあ、そうですか」

驚き戸惑うオレ達など眼中に無いといった呈で、彼等は真つ直ぐ沼
地へと歩を進める。

怪物どもも気づいたのか、彼等の方へと襲い掛かっていった。

その途端、逸早く魔鳥が上空へと飛んだ。

「『幻乱焰』」

魔鳥は眼を金色に光らせ、何かを呟いた……と、思ったら、ツ
ムカルゴの周囲に陽炎が発生したのだ。

陽炎に囲われたツムカルゴたちは、何故かフラフラし始めたり、ワ
ケわからん行動をとり始める。

「『逆風波』」

今度は魔竜が沼地の地表に向けて「風」の力を放った。

微かに浮かび上がったツムカルゴ達は次の瞬間に引っくり返ってしまい、ヤツラの防御の要ともいえる殻が半分ほど沼地に沈んでしまふ。

「『水分蒸発』」

黒髪の女が「水」の魔法を放って、沼地を足場のいい場所に変えてしまった。

ツムカルゴ達は土に半分埋もれた形になる。

「レギ、範囲内から出たツムカルゴは殻ごと盛大に殺^ヤッてくれ（ニヤッ）」

「あいよ（ぐふっ）」

「ルーシエ、俺とユリーナに粘酸液対策の逆風結界を頼む」

「はあい」

「ユリーナ、あちら側を任せる。残りは俺が全^ヤ部殺る。ヤツラが完全に起き上がる前にカタをつけるぞ」

「了解っ」

黒髪の女と魔物たちに指示を出した青髪の男は、素早く抜刀すると鮮やかな剣さばきで流れ舞うようにツムカルゴ達の軟体部を切り刻み、ズバズバと仕留めていく。

「――強い。」

速さ、腕力、狙い所を的確につく判断力、身のこなし、全て一流だ。一目見て、こんなにも力量の差を感じさせられる戦士なんて、騎士団長以来だ…。

視線を移して黒髪の女を見る。

なんだ、あの女?! 魔力を身に纏って戦ってるのか? しかも見たこともない武器を危なげなく振るってやがる。

魔法士じゃなくて魔戦士なのかよ?! 女の魔戦士なんて、各国に2、3人程度しかいないレアな人材じゃねえか!

言葉も無く彼らの戦いぶりを見ると、ツムカルゴが1匹こちらに向かってきやがった。

我が国の領土に來た怪物は、我等が退治しなければ!

部下達に指示を出そうとした時、魔鳥がヒラリと飛んできた。

「『焔火球』」

ボウツと魔鳥から火の球が吐き出され、ツムカルゴに直撃する。

ブボオオオオオツツ

火柱があがり、ツムカルゴの軟体部は灰に、殻部は消炭になってしまった……

コエエエーっ (ガクガクブルブル)

「たたた隊長ああーっ、あああの魔鳥って、もしかや南の金魔ですかあーっ?!」

「そのようだな……」

「なななんだ、こんなところにいーっ?!」

「…わからん」

魔鳥は何事もなかったかのように、再び沼地（だった所）へと戻っていく。

そこはすでに、事切れたツムカルゴが散乱していた。

「ふう、仕留めそこなったヤツはもう無いか？」

「うん、怪物の気は感じないの」

「ね、ゼウオン、コイツらの殻ってどうやって剥がすの？」

「ここここに、こうやって切り込みを入れてだな。ここを持ってグツと引っぺがすと……ほら、取れただろ？」

「あ、ホントだ！面白い」

「さーてと、んじゃ殻を回収するか」

ヒュ〜ン・ードサツ（魔竜が「風」でツムカルゴを男女の近くに運ぶ）

ズブツ、ズザツズザツ（黒髪女が切り込みを入れる）

グイツ、ズルルーツ（青髪男が殻を引き剥がす）

ポオオオオオオ……（魔鳥が用無しの軟体部を焼き消す）

見事な連携だ……。

オレ達が啞然としている間にも、彼等は次々とツムカルゴを解体していく。

「よし、殻全部剥したな。10、20、30……54個か」

青髪男は掌を空中にかざした。するとなんと、亜空間が出現したではないか！

つてことは、このバカ強い男も魔戦士なのか？！男女揃って魔戦士なんて何の冗談なんだ？！

ツムカルゴ達の影も形もなくなったところで、グリーンジラス王国側

の国境防護壁から数人の兵士達が姿を現し、彼らのもとへと近づいていく。

その中には、あちらさんの国境警備隊長もいるではないか。

グリンジアスの隊長殿は彼等に労いの言葉をかけると、青髪の男が亜空間から取り出した紙に何かを書いた。

すると青髪の男は、その紙を持ったままこちらへと向かってくる。オレは部下数人と共に、防護壁から青髪の男の方へと歩み寄った。

「貴方がブランディウル王国国境警備隊長殿ですか？」

「いかにも」

「我々は冒険者ギルドよりツムカルゴ討伐の依頼を請け負ったチーム「ナギナタ」です。ご覧になられていたと思われませんが、対象物は全て排除致しましたので、こちらの依頼受理書にサインをお願いします」

「あ、ああ…」

そういえば我が国とグリンジアスとで、冒険者に討伐依頼をしたな…。

依頼を出したのは数日前だったハズなのに、こんな腕利きの冒険者チームがよく空いていたな…。まあ、助かったことに変りは無い。

グリンジアス王国側のサインの下に、自分の在籍する隊の名と自名をサインする。

青髪の男はオレのサインを確認すると「では、我々はこれで」と軽く一礼して颯爽と去って行った。

彼らの後姿をポカーンと見送っていると、唐突に黒髪の女が振り向いた。

さつきは魔法とかに呆気にとられて気づかなかったが、イケてるツラしてるじゃねえか。

黒髪の女はオレの視線に気づいた風でもなく、イキナリ「水」の魔法を放った。

すると、我が国と隣国との狭間が元通りの沼地に戻ったのだ。

……

……わざわざ戻してくんなくてもいいのに…魔力、勿体無え…

それにしても、青髪の男も整ったツラしてやがったな。

美男美女の魔戦士で、金銀魔がいるギルドチームなんて、かなり有名になりそうなもんなのに噂にも聞いたことねえし…もしかしたら新規のチームなのか？

……噂になるのは、これからかもしれないな。

「換金対象のツムカルゴの殻は全て無傷でしたので、1個につき小金貨1枚と中銀貨2枚で換金させていただきます。54個分で大金貨16枚、大銀貨1枚、中銀貨3枚となります」

うきゃー、あの巨大大金に大化けだよ！

今回の依頼報酬金とあわせると、大金貨46枚に大銀貨1枚、中銀貨3枚だ。

ちまちまと雑用仕事してたのが嘘のように、ガツポリ儲かつちやっ
たよ！

チーム万歳！ランクアップ万歳！！

チーム依頼で得た報奨金は、ゼウオン＆私が2割、レギ&ルーシエ
が1割、残り4割がチーム資金（主に宿代&食費）となる。

「オイラとルーシエは金なんて必要ないし、貰っても使い道ない
じゃん？でもゼウオンとユリーナは武器防具とか衣類とか日用品な
んかを買う必要があるんだから、報奨金は2人で分けてくれよ」
「アタシもそう思うの。だってお金の使い方すら分かんないもの」

レギとルーシエにそう言われたけど、いつか使うかもしれないし、
あつて困るものじゃないと納得してもらって、結局、人間2人は2
割、魔物2人は1割ということになったの。

レギとルーシエのお金は、私の亜空間に保管してある。

「転移装置が使用できたし、すぐにツムカルゴの集団を発見できた
から、半日たらずで依頼達成できたな。今は火の4刻半か……。これ
から依頼書版をチェックしたら、今日は適当に王都散策でもするか」

もちろん異存は無い。

うん、と首肯して、物品買取カウンターから依頼書版へと移動する。

依頼書版を眺めている間も、チラチラと伺い見るような視線を感じ
たり、あからさまにガン見されたりしたけど、話しかけたり絡んだ
りしてくる人はいなかった。

シプグリールに居る時は、レギとずっと一緒にいても大して遠巻きにされなかったし、ヌーエンではレギとあんまり一緒にいなかったから気づかなかったけど、金銀魔というのは人間にとって珍しいだけではなくて、畏怖対象にもなるようだ。

別にレギもルーシェも怖くなんかないのにね

当の金銀魔さん達も、他人の視線や態度は全く気にならないようだ。私としても、レギとルーシェがいるおかげでヘンに絡まれることが無いからラッキーってカンジ。

依頼書版をチェックし終わった私達はギルドを出ると、ブラブラと王都散策を楽しんだのでした。

「おう、嬢ちゃん、待ってたぜ」

木の扉を開けると、赤ら顔の髭モジャおじさん、もとい基、鍛冶屋の親方が気さくに声をかけてきた。

「曲刀槍は仕上がってんよ。ちょいと待ってな」

そう言って親方さんは奥へと引っ込むと、すぐに薙刀らしきものを手にして戻ってきた。

「先日見た嬢ちゃんの型はよ、両端槍ってカンジじゃねえから、柄の先端はボソニ鉋で覆うだけに止めておいた。柄自体にもミスル鉋を施してあるから、充分に受けもとれるぜ。刃にはミスル鉋とマラス鉋を錬金させたものを使ってあるから切れ味抜群だ」

新しい薙刀を受け取り、早速広いスペースを拝借して、少し振ってみる。

これ、いいな。私の手の大きさにしつくりと馴染む。

感触を確かめながら、簡単な型をこなしはじめた私は、知らずに口角が上がっていた。

「…素晴らしいですね。柄の太さも、重心のバランスもピッタリです」

ドヤ顔している親方さんに、笑顔を向ける。

それから亜空間からお財布代わりになっている皮袋をとりだし、大金貨2枚を支払った。

「あんた達、ギルドチーム「ナギナタ」だろ？これからも大いに賑わしてくれよな」

「「ナギナタ」って…知ってるんですか？」

「そりゃあよ、今、王都での話題といたら、1にハフィスリード様立太子式、2に主神の大祭、3にチーム「ナギナタ」ってくらい有名だぜ？」

マジっすかーっつっ?!

驚きを隠せない私とは違って、ゼウオンは「はあ…」と溜息を吐いただけ。

彼は、こうなることが分かっていたのかな。

鍛冶屋を後にしてポテポテと石畳の道を歩きながら「そんなに目立ってるのかな…」と何気なく呟くと。

「まあな。レギとルーシェだけではなくて、俺とユリーナが魔戦士だつてことも話題になってんだろ。どうせ名は広まっちまうと思っ
ていたんだ」

「そつか…。あの、その、決闘とか申し込まれちゃったりするの…？」

「俺とレギがいるから滅多に無いだろ。先日、レギにツムカルゴを派手に燃やしてもらったのは、決闘をしかけてこようとするバカ共避けの為でもあるんだ。それに、俺は今まで誰も寄せ付けてこなかった経歴があるから、無闇に絡んでくるヤツは現れないハズだ」

ツムカルゴに火球攻撃したのって、ワザとなの？！

ケンカふっかけてくるなら黒焦げにしちゃうゾ　ってアピール？！

それにゼウオンでは「誰も寄せ付けない」って、どうやってきたんだろう…？

なんだか、とてつもなくブラックな事のような気がする…以前当たり前のように「闇討ち」とか言ってたし。

私もナメられないように少々過激な事すべきなのかな？（ヌーエ
ンで耳切り落とす素振りしたことは忘れている）

「それより、俺達の仲間になりたがる奴等の方が煩わしいぞ。」

その言葉に、え？と顔を上げる。

「仲間になりたがる人なんて、いるの？」

「そりゃいるさ。3ツ星以上のチームに入って名を売りたい冒険者なんてワンサカいる。しかも俺達は4人しかいない。そのうちの2人は召喚魔だし、何処かのチームに入りたいヤツラには格好の的だな。まあ、ギルドには新たな仲間を加える気は今のところ無いとハッキリ伝えてあるから、そうそう言い寄ってこないだろうがな」

チームっていうのは、8人前後くらいで登録するのが一般的らしい。

ちなみに冒険者ギルドの3ツ星チームってのは大国の1騎士隊、4ツ星チームは1騎士団、5ツ星チームは1軍に匹敵するって認識なんだとか。

ま、私達はワケありだから、気軽に仲間を加えるってことは出来ないんだよね。

決闘対策も仲間対策もしてるなんて、ゼウオンは手際良いな〜と感心しちゃったよ。

只今の時刻は火の1刻。

美味しそうな匂いのする串焼き、焼きたてホカホカのパン、果物を摩り下ろした果実ジュースなんかを抱えて、ゴキゲンな私。

正光時に食屋台を回って、色々美味しくそうなものを買いだんだ。
ダ。

公園みたいな場所に移動して、早速串焼きを一口パクツ。

うん、おいし〜っ。

何かの香辛料と塩を擦り込んで焼いたお肉とタロ芋（じゃがいも）
を串に刺しただけのシンプルなものだけど、なかなか美味。

割り箸サイズの串焼きを頬張る私の膝の上では、ルーシエが両手で
ピンクの果物を持ってシヨリシヨリと噛り付いている。

レギは毎度お馴染みグクコの実。いっつも食べてて、よく飽きない
な〜。

パンと串焼きを食べ終わって、ゆっくりと果実ジュースを飲んでい
ると、一足早く食事を終えたゼウオンが串焼きの串を取りクル
クルと回し始めた。と思ったら。

ヒュンツ・・・いきなり勢いよく後ろに投げちゃったよ！

「ゼウオン?! ポイ捨てはダメだよっ」

ゼウオンが投げた串を拾うべく、ジュースのカップを傍らに置いて
立ち上がると・・・10mくらい離れた所に、串を手にした敵つい
オジサンが立っていた。

「... ったく、こんなものでも中り^{あた}や痛えんだぞ、ゼウオン」

え、誰? と、思った瞬間に、ゼウオンに肩を掴まれ体が反転。

私の顔は、筋肉質な彼の胸に押し付けられていた。

動揺する私の耳元に、ゼウオンが小声で囁く。

「アイツに顔を見せるな。表情で感情を読んできやがる」

どういうこと？あのオジサンはゼウオンの名前を知ってたから、知り合いなんだと思うけど、そんなに警戒する相手なのかな…？

「おいおい、イキナリ見せつけんじゃねえよ」

苦笑いしてそんなカンジのオジサンの声に、ゼウオンは無機質な声色で返した。

「こんなところまで自ら出張ってくるとはな……ソドブ」

第44話 情報操作 (前書き)

視点が 主人公 第3者へゼウオン 与 変わります。

第44話 情報操作

蔵ついオジサンはソドブさんっていうのね。やっぱりゼウオンの知り合いなんだ。

ゼウオンの服しか見えない状態の私は、2人の話す言葉を聞き漏らすまいと耳に意識を集中させた。

「なあに、ちよいと王都に野暮用があつたもんでな。ついでに巷で話題のギルドチーム「ナギナタ」に挨拶しておこうかと思つてな」

「それだけじゃないだろ？早く用件を言え。俺の性格、知つてんだろ？」

「カカカッ、相変わらずツレねなあ。ま、手っ取り早く言うとな――オメエに売つた情報のその後の情報が欲しい」

私の頭の中、???でいっぱいデス。売つた情報？その後って？なんのことだろう？

「ソドブ…時刻と場所を考えろよ」

溜息混じりのゼウオンに、オジサンは「カカカッ」と豪快に笑つた。

「ギルド内や宿で接触するよかマシだろ？――今夜、土の4刻に南西区のジョベンヌーノル劇場前。案内役の目印はいつも通りだ」

「王都での“場”を変えたのか？」

「おう。トンズラこくんじゃねえぞ？」

「するわけないだろ。アンタのしつこさは父さんからよく聞いて

いるからな。面倒ことはサッサと済ますさ」

「ヴアルのヤツめ…。しつこいんじゃないかって仕事熱心なんだってのじゃ、また夜にな。あ、これ返す」

何かがヒュンッと投げられた気配がして、ゼウオンがパシッと片手キャッチした、っぱい。

「投げ捨てはダメだぜ。なあ、ユリーナちゃん？」

からかい口調のオジサンに名前を呼ばれて、ビクうつと肩があがる。このオジサンとは初対面のハズだよな？なんで私の名前知ってんの？

思わず振り返りそうになったけど、ゼウオンに押さえ込まれる。

「用は済んだろ？早く行けよ」

「カカカッ、んじゃないあな」

私の後頭部を押さえていたゼウオンの手の力が緩まると、ガバッと彼の顔を見上げた。

「あのオジサン、誰？」

「旧知の情報屋だ。悪いヤツじゃないから（くえねえヤツだが）ユリーナが気にすることないさ」

躊躇いも無くサラッと返答してくれるゼウオン。

うーん、そう言われてもな…。

売った情報って何のかな？その後って、何なのかな？

でも、あんまり根掘り葉掘り聞くのも何か躊躇われるし…ゼウオン

が気にするなって言うんだから、変に詮索するのは止めた方がいいよね。

私は果実ジュースのカップを手に取り、残りを一気に飲み干すと、モヤつく気持ちに蓋をした。

光源石の灯りが届かないジヨベンヌーノル劇場前の隅の一角。

濃紺のローブで全身をスッポリと覆ったゼウオンは、完全に暗闇と同化していた。

今宵のジヨベンヌーノル劇場で上演されている演目は、婦女子に大好評の恋愛物語である。

人間の王子と土の精霊が異種族の壁を乗り越え、幾度の苦難を諸共せず、主神「土の神」の導きのもとに互いの愛を成就させる、といった内容だ。

生体自体が異なる種族での恋愛など、実際には滅多に成就しない。だからこそ、芝居や物語本では美化され人気を博すのだ。

暗闇に紛れているゼウオンは心中で溜息を吐いた。

- - - 俺は物語並みの生き方をしてるな…。

銀魔の族長の実仔でありながら、存在を許されない身。心底惚れ込んだ相手は、異種族である人間。しかも異世界出身とい

う、とんでもないオマケ付きだ。

だからといって、自分の想いを抑えるつもりなど毛頭無い。
養父ヴァルバリドも言っていた。『自分の心に忠実に』と。

ゼウオンは今まで何かとユリーナに触れてきたが、本気で拒絶されたことは1度たりとも無い。

魔物型の時ほどではないが、非常に優れている銀魔狼ゼウオンの嗅覚は、ユリーナが発する甘い匂いに気づいていた。

ゼウオンがユリーナに触れる度に、彼女から香りたつような甘い匂いを感じる。

互いの素性を明かして受け入れあった後は、匂いの甘さが濃くなった。

王都の食市場で頬を撫でた時、飲食店で薦められた夜景観賞場で抱きしめた時、ユリーナから感じた匂いはゼウオンの欲望を大いに刺激するほど甘美だった。

ゼウオン
雄を求める雌の匂い。

そんな危険な匂いを、彼女は自覚無しに彼に振り撒くのだ。

いつでも繁殖期並みにユリーナを欲しているゼウオンにとって、甘い匂いを感じる度に、本能と理性が闘ぎ合う。

以前は理性の方が勝っていた。だが、最近は本能を抑えるのが非常に困難で苦痛になってきている。

それでも今までユリーナを押し倒さずにいられたのは、異種族間では子が成し難いという事実があるからだ。

彼の複雑な生まれを鑑みるなら、子が出来ないというのは寧ろ好都合なのかもしれないが、彼女には出産育児という母としての喜びを与えることが出来ない。

だからゼウオンは、なけなしの理性を総動員してユリーナに手を出さずにいるのだ。

ジヨベンヌーノル劇場から人々が出てきた。どうやら芝居が終わったようだ。
たちまち、劇場前は人々でごった返す。

暗闇の中から、ゼウオンは眼光鋭く人々を観察した。

――あいつ、か。

目的の人物を見つけたゼウオンは、距離をあけて後をつけたのだった。

「今回の案内役は風変わりだったな」

「力力かつ、小娘だから驚いたか？だが侮ったら痛い目にあうぜ？」

「侮ってなんかいないさ。珍しいと思ったただけだ」

簡素なソファに腰掛けたゼウオンに、ソドブはリメ酒を差し出した。

「…俺は酒が入っても余計なお喋りはしないぜ？」

「わかってるさ。ただの喉湿しだ」

「喉が渴くほど話すような事は無いけどな。まあ、いい。せっかく

だから馳走になる」

ゼウオンはリメ酒のグラスを受け取ると、薬物などが混じっていないか匂いを嗅いで確認した。

「――よし、平気だな。自分が調合した自白薬入りの酒だったら洒落になんねえし。」

リメ酒を一口含み、味を確かめてから嚥下する。そして、徐に口を開いた。

「あの後……俺はすぐにヌーエンを発った。4日ほどでニアルースに到着したんだが、アンタの情報通り、屋敷には地のガードがかかっていた。しばらく様子を伺っていたら、急にガードが消滅したんだ。誰が消滅させたのかは分からないし、もしかしたら「闇の帝国」の罠かとも思ったんだが、レギ――南の金魔のことだ――にヤツラを引き付ける囿役になってもらって、俺は屋敷内に踏み込み封魔牢を探した。探している途中で、牢から逃げ出してきたユリーナに運良く遭遇できたから、俺達はそのまま屋敷から逃げた。その後はしばらくニアルース西の山中に身を隠してたのさ」

一気に話したゼウオンは、リメ酒のグラスに口をつける。

ソドブは胡乱気な表情でゼウオンを見ていたが「ガード消滅？ホントかよ？」と呟いた。

「そっちには「闇の帝国」内部に潜入しているヤツがいるんだろ？ソイツに確認すりゃいいじゃねえか」

相変わらずの無表情で、飄々と言い放つゼウオン。

「……たく、このガキは表情が無いから考えが読めないぜ。確認したくても、内部潜伏してたヤツが命からがら本拠地から逃げてきたもんだから、出来ねえんだよつ。だが、部下が本拠地から離れたなんてことゼウオンは知らないはず。裏をとられても構わないって言い切ってるんだから、嘘は吐いてねえのか？それにしても随分とタイミングよく地のガードが消滅したもんだ。どうなってやがる？」

ソドブが心中で考え込んでいる間、ゼウオンも考えていた。

「……屋敷内にいた者は「石化帰塵」で消滅させたから、俺の正体を知る者は誰１人いない。「石化帰塵」の塵は数時間経てば完全に無になるから証拠も残らないしな。ソドブの部下が屋敷内にいたとしたら……運が悪かったということだ。屋敷外にいたとしても、レギの姿しか見ていないハズだし……あとはここに来る前にハフィスリード殿下と打ち合わせた通りに話をもっていかなきゃ、だな。」

「地のガードが消えたなんて……出来すぎてねえか？」

唸るように呟いたソドブに、ゼウオンは態度も表情も変えることなく応える。

「そうは言っても実際にガードが消えたからこそ、俺達はユリーナを助けることが出来たんだ。この地の主神が俺の祈りをお聞き下さったのかもな」

「………… オメエが神に祈るなんて初耳だぜ……」

「別に俺は無神論者じゃねえからな。ユリーナの命が危うかったんだ。祈りもするさ」

「…………ゼウオン…あの女が絡むとホント人が変わるな。自白薬も作ってくれたし。地のガードが消滅してなかったら、オメエどうしてたんだ？」

「ガードの綻びを徹底的に探して、それでも突破口が見つからなかったら…生活支水脈に特別製の毒薬流し込んででも屋敷に隙を作るようにしてただろうな。だが、これをやると本拠地の屋敷の者どころか、ニアルース住民全員を毒殺しちまうから…一時的な神経麻痺薬に留めておいたかな」

「…………毒薬も麻痺薬も禁薬じゃねえのかよ？女1人助けるために禁薬調合すんのか？」

「愚問だな。自白薬だって禁薬だが調査してやっただろ？俺が目的のためならば何でもするヤツだって知ってるだろうが」

ハア…と息を吐いたソドブは、自分用に注いだリメ酒をグツと喉に流し込み、話を続ける。

「今現在…「闇の帝国」はグリーンジアスの特殊部隊によって、ほぼ壊滅状態らしい。特殊部隊の指揮をとっているのは第2王子だってことは掴んでるんだ。その第2王子は最近「守護輪」を取り戻したそうじゃねえか。ってことは第2王子はユリーナと接触したんだろ？」

「……………」

黙り込むゼウオン。

ここからは簡単に話してもらえないと分かったソドブは、交渉に持ち込もうとする。

「…大金貨10枚でどうだ？」

「俺は情報屋じゃねえから金を出されてもな^{カネ}。分かってると思うが俺に尋問や拷問は通用しないぜ？だからといってユリーナを狙おうなんて素振りでも見せたら――」

そこで言葉をきった無表情のゼウオンから、凍てつくような殺気が迸る。

新人冒険者ならば、同じ空間にいただけで蒼褪め腰を抜かしているであろう。

数々の修羅場を潜り抜けてきたソドブでさえ、背中に冷や汗が伝った。

「――俺の全てを使って容赦なく報復する」

紫の瞳に鋭い殺気をのせたまま、ゼウオンはソドブを見据えた。

ゼウオンの本気を感じ取ったソドブは、ユリーナに手を出すことの危険性を瞬時に悟る。

しかし、情報は欲しい。何とか聞き出せないものか…

ソドブが内心で聞き出し方法を画策していると、殺気を消したゼウオンが亜空間を出現させて、一枚の紙を取り出した。

その紙を受け取りザツと目を通したソドブは、眉間に皺を寄せた。

「薬の原材料か。また随分と多種類なこった。しかも全部、入手に手間取るもんじゃねえかよ」

「だからこそ、だ。すぐに手に入るものなら、自分で採取するなりギルドに依頼を出すなりしてるさ。――その紙に書いてあるもの

を全て用意すること、ユリーナに一切接触しないこと、それが条件だ」

「……ちつ、しゃーねえな。ケムフの角は流石に無理だ。それ以外のものなら6日あれば揃えられる。ユリーナには…オメエに釘刺されなくとも近づかねえよ。命は惜しいからな」

ソドブからの言質をとったゼウオンは、「風」の魔力で防音結界を張った。

「結界か？」

「念のためだ。今からする話はアンタ以外に聞かれるとマズいだな」

「ほう…ブツも渡してねえのに話してくれんのかよ？」

「情報は早く手に入れたいものなんだろう？アンタは約束を破ったりしないからな。その辺は信用している」

リメ酒を2口ほど飲んだゼウオンは、視線をゆっくりとソドブに向けた。

「これはまだ、この王都のギルド支部長と極少数の者にしか知られてないんだが…ギルドチーム「ナギナタ」はハフィスリード殿下と専属契約をしている」

ソドブの眉がピクリと動いた。が、言葉を発することなく目で話の続きを促した。

「これは俺の憶測なんだが…あの屋敷の地のガードを消滅させたのはハフィスリード殿下ではないか、と思っている」

「根拠は？」

「殿下がレギの能力を知っていたからだ。おそらく殿下は秘密裏に王宮からニアルースまで転移して…「主神の加護」が何かで地のガードを消滅させ、特殊部隊を屋敷内に潜入させたのではないかと睨んでいる。その際に屋敷外で陽動していたレギを見たんじゃないかと…。そして特殊部隊が屋敷内にいたヤツラを屠った後に騎士団を向わせて本拠地を掌握したのではないのかな？あいにく指輪を持ったユリーナは特殊部隊に見つかる前に俺達と共に逃げちゃったんだけだな」

「……オメエ達が殿下と専属契約した経緯は？」

「山中に潜伏している最中に、守護精の気配を察知した殿下が転移で現れたんだ。ユリーナは「大地の指輪」を持ったままだったからな。その時に守護輪は殿下に返したんだが…ユリーナがさ、何故自分が指輪を渡されたのかって尋ねたんだ」

「へえ？で、理由は何だったんだ？」

「単純な理由だったぜ？ユリーナから強い魔力を感じたから、だってさ」

「……それだけかよ？」

「ああ。お人よしなユリーナも流石に立腹しちゃってな、こんなことに巻き込んだ代償だって言って、殿下と王宮騎士アレフに魔防具

を要求したよ。はははっ」

「カカカッ、意外にちゃっかりしてんだな、ユリーナちゃんは……それで？」

「殿下に守護輪を渡した時にギルドにチーム登録して専属契約して欲しいって持ち掛けられたんだ。その時に、殿下はレギの能力を知っているかのような素振りをみせた。まあ、能力なんて知らなくても、金魔が強いなんてのは周知の事実だからな」

ふう、と一息吐いたゼウオンは、少し視線を泳がせると低めの声で話し出す。

「それともう1つ。これは、グリンジアス国内でも王族と一部の大貴族だけにしか知られてないことだが……王妃は病で静養してるんじゃない。幽閉されているんだ」

「……やっぱり、そうかよ。静養なんてヘンだと思ってたぜ。だが、あの王妃がよく幽閉なんて受け入れたな」

「ハフィスリード殿下が、あの屋敷から王妃と貴族達の罪状の証拠となる書類を持ち出したらしい」

「なんだと？」

「ただのチーム契約者である俺達には確かなことは言えないが……おそらく殿下は「闇の帝団」に関する情報の殆どを握っている」

しばらくの間、険しい表情をしたまま身動きせずにゼウオンを見ていたソドブは、やがて諦めた様に左右に首を振った。

「〔闇の帝国〕の情報はハフィスリード殿下でなければ分からない
ってことか？」

「端的に言つと、是だ」

「チツ。よりによってハフィスリード殿下かよ…」

ゼウオンはグラスに残っていたリメ酒を一気に空にすると、ソファ
から腰を上げた。

「俺が話せることは、こんなもんだ。6日後の土の5刻頃に此処に
来るから、それまでに原材料を揃えておけよ？」

「対価が情報の質と見合わねえ気もするが…のんじまった条件は守
るさ」

フツと口角を上げたゼウオンは「じゃあな」と一声かけて部屋から
出て行った。

ソドブと別れたゼウオンは、人気の無い公園まで来た所で歩みを止
めた。

〔風〕の防音結界を張り、耳の裏を指で軽く叩く。

…「殿下、ゼウオンです。情報屋との話が終わりました。粗方、
筋書き通りにいきました」

しばらく待たされるかと思っていたが、思いのほか早く伝達石が反応する。

- - 「ゼウオンさん、ご苦勞様です。…私が「闇の帝団」のあらゆる情報を握っていると裏から広まれば…国内の貴族はもちろん、各国との交渉や取引が有利に運べますからね。上手くいったみたいで良かったですよ」

- - 「我々も「闇の帝団」とは無関係を装えるので好都合です。しかし「闇の帝団」を壊滅させて、犯罪の物的証拠を握るのが殿下だと思わせるのは、暗殺者急増を促す結果になりそうですが」

- - 「私は暗殺者に狙われるのは慣れてますからね。むしろ暗殺者を差し向けて欲しいくらいですよ？捕えて首謀者を吐かせれば、馬鹿共が片付きますからね」

- - 「あちこちにあるヤツラの隠れ屋や残党は処分したんですか？」

- - 「主だったものは、ね。しかし小物はあえて泳がせてますよ。私の知らない大物が釣れるかもしれせんし」

- - 「なるほど。…殿下、もうすぐ立太子式ですね。我々もご尊顔を拝しに王宮前広場に行きますよ」

- - 「ふふふつ、私の顔が見たければ、いつでも王宮に来てくださって結構ですよ？　また何かあったら連絡下さい」

- - 「はい。ありがとうございます。では、失礼いたします」

耳の裏から指を離したゼウオンは、足早に宿屋へ戻ったのだった。

第44話 情報操作 (後書き)

ゼウオンがソドブに入手困難な物を要求したのは、情報に信憑性をもたせる狙いも含まれています。

ゼウオンとハフィ殿下、相互協力(相互利用し合い?)関係から、徐々に相互信頼も築きつつある、といった雰囲気伝わると良いのですが…(^^;)

第45話　眠れない夜

夜 - - 土の6刻過ぎ。

いつもならとくに寝ている時間なのに、私はちっとも眠れなかった。

書物屋で購入した魔法書をパラパラ捲ってみても、頭に内容が入ってこない。

ゼウオンは土の3刻過ぎに宿屋を出て行った。

「おそらく「闇の帝団」絡みの事を聞かれるが、大丈夫だ。 - - 今後「闇の帝団」に関する事は、誰に何を聞かれても知らぬ存ぜぬで通してくれ」

私達はゼウオンの言葉に了承の意を示して、ソドブさんとやらの所へ赴くゼウオンを見送ったんだけど……

私は本から手を離すと、そっと左の上腕に触れた。

何かの拍子に誰かに銀狼族の召喚印を見られたらマズイと思い、左上腕部には服の下にも常に薄地のアームバンドのようなものを着けている。

服と薄布越しからでも、彼の召喚印に触れると、ちゃんと繋がりがあるんだって思えて安心するの。

「ゼウオン…何時になったら帰ってくるのかな…」

ポツリと呟いた独り言に、ルーシェとボードゲームをしていたレギ

が顔を上げた。

「ユリーナさあ、もう寝たら？オイラ達は2、3日睡眠とらなくても平気だけど、人間は毎日寝ないと力が落ちるんじゃない？」

「うん……そうなんだけど、何か眠れない」

「へー、珍しつ。野外だろうと平気で寝てたのにな」

からかい口調のレギからプイッと顔を背けると、魔法書を亜空間にしまつてベットに横たわる。

「レギつてばー、ツガイと離れてたら眠れないものでしょ？ね、ユリーナ」

「ぐふふー、そっかー、そうだよな」

何か納得している様子のお2方。

「ルーシエ、ツガイって何？」

「え？ユリーナとゼウオンはツガイでしょ？」

お互いキョトンとする私とルーシエ。

「ルーシエ、人間の場合はツガイって言わないんじゃないん？」

ユリーナ、ツガイってのは交尾する相手のこと。人間の言い方だと『結婚相手』でいいのか？

でも『結婚相手』ってのは『伴侶』とか『夫』とか『妻』って呼ばれたりすんだろ？

それって正式にツガイを同族に知らせてから呼ばれる立場だから『結婚相手』じゃなくて『恋人』が適切？

あ、待てよ。人間の『結婚相手』や『恋人』って複数いたりする場合もある？ツガイってのはお互いだけだから、ちよつと違う

かな？」

レギ、説明ありがとう。

つて、ちょっと待て。『結婚相手』？『恋人』??

ビックリして、ガバッとベッドから身を起こす。

「ちょちょっと待って。誰と誰が恋人…ツガイだった？」

慌てふためく私を、面白そうな表情で見るレギと、不思議顔のルーシエ。

「だからゼウオンとユリーナ。どう見たってツガイじゃ～ん」

「うんうん。アタシも初めて会ったときからそう思ってたの」

どう見たって、て…。しかもルーシエは信じて疑っていない様子。

「待って。ちょっと待ってよ、どうしてそう思っの？」

勢いこんでレギへと迫る。私、軽く混乱しているかも。

「どうしても何も、2人ともあからさまだし～？ぶっちゃけ見てて面白い。ぐふふふ」

あからさま?!あからさまだったの私?!ってことは、ゼウオンも私の気持ちには気づいているのかも……。うきや～、恥ずかしい!

途端に顔が赤くなる。

「ぐふふふ、その反応もそう。ユリーナってばゼウオンの言動にいちいち顔赤くすんだろ？今まで何回顔赤らめたか、わかる？」
「わかんないっ！」

もうっ、恥ずかしすぎる！

まともにレギを見ていられなくて、枕に顔を埋めてしまった。
けれど、まだまだレギの攻撃（口撃？）は続く。

「オイラが最初に「およっ？」って思ったのは、コルエン裏山から村に戻る時かな。確信したのはヌーエンまで向かう道中」。すぐ赤くなるユリーナもだけど、ゼウオンも分かりやすいよね。何かとユリーナのこと触りたがるじゃん。あれ、匂い付け本能なんかな？消魔匂の飾り物つけてるから意味ないのにな」。

オイラはユリーナの友達だし、ツガイ候補対象外って認識されてるから良いけどさ、他の雄がユリーナに接触しようとする、ゼウオン眼つき変わるじゃん？ありや、ツガイの雌を他の雄から護る眼だね。独占欲丸出しだし？」

枕から顔をあげ、今にも笑い出しそうな表情のレギに「……護る眼、してくれてたの？」と小声で尋ねると、コクつと頷かれた。

……どうしよう……もしホントなら最高に嬉しい！

「あ……、ゼウオンとユリーナって、ツガイなんじゃないの？」

未だ不思議顔のルーシェに答えたのはレギだった。

「ツガイみたいなもんだけど、まだお互い自覚し合っていないだけ」

「そうなの？早く自覚すればいいのに」

「だよな。見てて面白いけどさ、そろそろちゃんとくつついても良いよな」

「ゼウオンとユリーナがちゃんとツガイになったらあ、蜜月は繁殖期になるの？」

「いんや。人間って繁殖期関係ないらしいし、ゼウオンも繁殖期じゃなくても平気なんじゃん？」

「そっかあ。そしたらアタシ達、何処行つてようか？ツガイが蜜月中の時って、2人きりにしないとダメなのよね？」

「そこら辺テキトーに飛び回ってればいいんじゃない？蜜月終わったらユリーナに召喚してもらえば良いし」

うおいつ、ちよつと待て、その金魔と銀魔！

さつきから勝手に話を進めるな！

蜜月だとか繁殖期だとか、なんかアヤシげな単語を連発しないでよつ。

「レギもルーシェもちよつと待つてよつ、ゼウオンと私はツガイだつて決まったワケじゃないのよ？！」

「今更、何言つてんだか」

「ユリーナはゼウオンとツガイにならないの？」

ルーシェの純粹な問いかけに、うつ、と言葉を詰まらせる。

なんかもう私の気持ちはバレバレみたいだし、段々開き直りつつあるんだけど…

「……私が望んでも…ゼウオンが同じ気持ちだなんて分からないもの…」

心に浮かんだ不安をそのまま口にすると、レギが「ぐふふっ」と大笑い。

ヒドイっ、こっちは真剣なのにい！

「なに笑ってんのよレギ！」

「だあってさ、どう見たって相思相愛ってやつじゃ〜ん。もう、まどろっこしいから〜さっさとゼウオンと交尾しちゃって〜」

「ぶっ、交尾って、何言っちゃってんの〜っ！ありえないから！」

「なんで？ツガイは交尾するのが普通だろ。今、繁殖期じゃないけど平気なんじゃん？」

「だ〜から〜！私とゼウオンはツガイじゃないし！…そりゃツガイになりたいけど…って、そうじゃなくて！あ〜も、何でこんな話になってるの？ツガイ云々の話は止めよっ。私、もう寝るね！」

熱いくらい顔が赤くなってるなって思いながら、もうこれ以上話すと益々恥ずかしくなるだけだから、話を無理矢理打ち切った。

「はいはい、んじゃオイラ達は隣の部屋に行ってるから〜、ゆっくり寝てくれよ〜」

「おやすみな〜」

ボードゲーム持参で部屋を移動するレギとルーシエに「おやすみ」と挨拶をして、ベッドに中に潜って目を閉じた。

……

……

それからしばらく経ったけど、やっぱり眠れない。ってゆーか、益々眠れなくなっちゃったじゃんよーっ。まだ心臓バクバクいってるしっ。

寝ることを諦めた私はベッドからムクリと起き上がると、亜空間からロープを出して羽織り、部屋から出て屋上に向かった。

この宿屋は真四角の大きな建物なので、屋上もなかなかの広さがある。

隅の方には、細い丸太を縄で括った背もたれの無い長椅子なんかも置かれていて、昼間はここでのんびりする宿泊者もいるらしい。

長椅子に座って、ボーッと夜空を見上げる。

この世界は月が無いけど、たくさん星が輝いているので、月明かりがある夜以上に明るく感じる。

ゼウオンと初めて出会ったコルエン裏山の山頂でも、星空がキレイだったな…

あの時、ピンチを救ってくれた銀狼さんに惹かれて…その後、人間だと思っていた彼にも惹かれて…同じ瞳だな…とは思ってたけど、ホントに同一人物だったなんて…

ゼウオンがどんな姿をしていても、私は彼に惹かれてしまうのかもしない。

誰かを好きになるのって、会話したり遊びに行ったりして一緒に過ごす時間を共有してから、人間性や価値観を分かり合って、それから恋愛に発展するものだと思ってた。

自分が一目惚れするなんて思わなかったし、そうだったとしても、一目惚れなんてすぐに気持ち冷めるものだと思ってたのに。なのに……冷めるどころか、益々想いが加速している。

条件的なことなんか関係なく、なんていうか、魂が彼を求めているみたいに感じちゃう。

レギとルーシエは、ゼウオンと私が恋人のようだと言ってくれた。
ホントに、そうなのかな？

ゼウオンの傍に居られるなら現状維持で良いとか思ってたけど、相思相愛に見えろとか言われると欲がでちゃう。

ゼウオンがどう思っているのか聞いてみたい。でも、私に恋愛感情なんて無いって言われたら、その後私は何事も無かったかのように彼に接することが出来るかな？

彼の気持ちを知りたい。でも、ハッキリさせるのが怖い。

知りたい、怖い… 聞きたい、聞きたくない……

あ~~~~っつ、もう！ウジウジするのは柄じゃない！！

ゼウオンと2人きりになる機会があったら、思い切って聞いちゃう！迷うな、私！

「よしっ！」

握り拳をつくって気合を入れると、長椅子から立ち上がった。と、同時に「考え事は終わったか？」と愛しい美声が聞こえてビックリ仰天！

「うきやあつっ！ゼウオン？！いつの間に？？」

屋上の扉に背をあずけていたゼウオンは此方に歩み寄りながら「四半刻（15分）前くらいから居たぞ？」と言う。

ウソ?! ってことは屋上に来てから四半刻以上経ってるってことだよね？

長椅子に腰掛けたゼウオンの隣に座り「今、何時くらいなの？」と尋ねると「水の2刻くらい」
との答え。

「え?! もう、そんな時間?」

驚きのあまり、つい声が大きくなってしまった私を、は? っといったカンジで見るゼウオン。

「もう… って、ユリーナ、何時頃から此処にいたんだ? 宿に戻ったらオマエの気配が部屋から感じないから、ちよつと心配したんだぞ?」

「あ、ゴメン… えつと、此処には水の1刻くらいに来たかな? そんなことより、四半刻も前に来てくれてたなら声掛けてくれれば良かったのに… 全然気づかなかった…」

「随分と考え込んでいるみたいだったから邪魔したら悪いと思ってさ。気配消して様子見てたんだ。 - - 何だか思いつめてるみたいだったか… 悩みでもあるのか?」

うつ。悩み、というか、考え事の元である張本人に心配されちゃったようっ。

「あ、う、その、えつと… 悩みというほどの事じゃないから、気にしないで」

「だが… やけに深刻そうだったし…」

「や、ホントに何でもないの。平気平気」

えへへ、と曖昧に笑って誤魔化す。

時間が経つのも忘れるほど、貴方の事を考えてました。
初めて会った時から好きなんです。

仲間としてではなくて、異性として好きなんです。

魔物型の貴方も人型の貴方も好きなんです。

つて、考えてたの。だなんて、言えるもんかーっ

数分前には彼に気持ちを聞こうって決心したばっかなのに、自分の
ヘタレ具合にガックリ。

自分の情けなさに頭垂れていると。

「……俺では頼りにならないのか？」

そんな呟きが聞こえた。

「っ、違っっ、そんなことない！」

ガバっと顔を上げて彼を見ると、寂しそうな傷ついたような痛々し
い表情をしていた。

そんな顔されると、切なさで心臓がギュッとなる。

ゼウオンにそんな表情させたくない。やっぱり、言おう。

「あのね、その…レギとルーシェに言われてね……」

顔が赤くなっていくのを感じながら、チラッとゼウオンを見る。

「何を言われたんだ？」

「……………ゼウオンと私はツガイに見えるって……」

小声になりながらも、思い切って言っちゃった。

ドキドキしながら、彼の反応を待つ…ほどもなく、間髪いれずに「ああ。そりゃそうだろうな」とか言うゼウオン。

……はい？

んなアツサリと「そうだろうな」って言われても。

「互いに想い合う雄雌はツガイだって認識されて当然だろ？…まあ、今はまだ違うけど」

……私は、彼のこの言葉をどう理解すれば良いのでしょうか？

互いに想い合う〓ゼウオンも私と同じ気持ちでいてくれて、しかも私の気持ちを知っている。

ツガイだって認識されて当然〓ゼウオンと私は相思相愛だと周知されている。

今はまだ違う〓今はツガイじゃないけど将来的にツガイになる。

このような解釈で正しいのでしょうか？

「あの…ゼウオン？」

「なんだ？」

「その…ゼウオンは私のことを異性として好きでいてくれてるって、自惚れても良いの？」

「は？何言ってるんだ？」

え？やっぱり違うの？

うわああーっ、どうしよう!？

何言ってるんだ…って、何言ってるんだって…って、ホントに何言ってるんでしょうね私っ。

「ああああの、ごめんなさいいい、今は忘れろ「今更だろ?」…へ?」

「自惚れるもなにも、実際そうだろうが。オマエもそうだろ?」

「ええ?!」

「違うのか?」

「……イエ、違わないデス」

これって、両想いになれたってことだよな? 嬉しさのあまり、感激するところだよな?

でも、なんか釈然としないんだけど…ゼウオン、アツサリしすぎじゃない? むむう…

心中複雑な状態でいると、ゼウオンが唐突にハッと何か思いついたような顔をした。

「ユリーナ、もしかして…ツガイのことで悩んだのか?」

「うん。まあ…(たった今、その悩みは解決したけどね)」

「そうか…(やっぱり彼女も異種族だって気にしてたんだな)…こればかりは、どうしようもない事なんだ。俺も心苦しく思っている…」

んん? どうしようもない? 心苦しい??

どうしようもなくはないよね? お互い好き合っているって、今さっ

き確認したばつかじゃん。
心苦しいって…なんで？

「どうして心苦しく思うの？」

「どうしてって…やはり俺達は（子が出来ないから）ツガイ本来の意味を成せないし…」

ツガイ本来の意味って何だろう？

あ、そういえばレギが「同族に知らせる」とか何とか言ってたなあ。ゼウオンは銀狼族に私を紹介するなんて出来っこないんだから、それで心苦しく思ってくれてるのね。

「そんなこと、私、気にしないから。だからヘンに後ろめたく思わないで」

得心のいった私は、ニツコリと笑ってゼウオンを見詰めながらハッキリと言った。

すると彼は、紫のキレイな瞳を見開き、私の両肩に手をのせた。

「ユリーナ…（子が出来なくても）いいのか？」

「うん。（銀狼族に紹介出来ないなんて）分かったことだもの。それこそ、今更だよ？」

「っ、ユリーナ」

ぎゅうつっ、と力強く抱きしめられて、ぐえっ、となる。

ゼウオンってば学習能力あるの?! 普段は頭イイのに、もうっ。

「だ、から…苦し…って」

「あ、スマン」

彼の腕の力が弱まると、自分の両手をそっと広く逞しい背中にまわした。

星空の下、私は彼の腕の中で両想いになった喜びをかみ締めたのでした。

第45話 眠れない夜 (後書き)

やっぱりビミョーにかみ合わないお2人さん(笑)

第46話 重なり合う想い (前書き)

R15です。初っ端からイチャコラしっ放しです。
糖度高めにつき、胸焼けにご注意下さい (笑)

第46話　重なり合う想い

どのくらい時間が経過したのだろうか。

長椅子に座りながら抱きしめあっていたゼウオンと私は、ゆっくりと互いの拘束を解いた。

「ユリーナ……」

「……ゼウオン」

愛しい者の名を呼び合い、対鏡のように互いの瞳に互いを映す。

ゼウオンの長い指が私の髪を優しく梳き、そのまま赤く火照った頬を撫でてきた。

彼の整った顔が目の前に来た時……私はそっと瞼を伏せた。

触れ合う唇。

何度か軽く掠るように触れ合うと、彼の舌先が私の下唇をなぞってきて、そのまま私の唇の合わせ目突き突いてくる。

無意識に口を微かに開くと、すぐに中に入ってきた。

彼の舌が私のそれを捕らえ、なぞるように絡められて軽く吸われる。

なにこれ……キスって、こんなにクラクラするものなの？

初めての感覚に戸惑いつつも、ただゼウオンが与えてくれる感触を受け入れる。

「ん…んんっ…」

鼻から抜けるように甘ったるい声が自分から発せられて、益々顔が赤くなる。

私の声に反応したかのように、深くなる口付け。

「…ん…んっ、んあっ」

息苦しくなってきた時、ようやくゼウオンが唇を開放してくれた。

はあはあ、と空気を吸い込み、そっと目を開けると。

熱を湛えたアメジストが、私を見詰めながら近づいてきた。

そのまま再び重なる唇。

今度は最初から、隙間を埋めるように深く重ねられた。

舐め取るように、吸い取るように、舌が絡められていく。

熱い…体が熱くて…お腹の下あたりが、きゅっうん…ってなる。

時々顔の角度を変えながら、私達はキスし続けていた。

やがて、ゼウオンが私の下唇をチュッと軽く吸って、ゆっくりと離れる。

「ユリーナ…オマエは俺のツガイであると、そう思ってた良いんだよね？」

ツガイって、恋人ってことだってレギが言ってたよね？
もちろん良いに決まってる。

コクンと頷くと、ゼウオンは蕩けるような微笑を浮かべて、私を包み込むように優しく抱きしめ直した。

「一応確認しておくが…ツガイってのは関係を解消したり、複数作ったりすることは出来ないんだぞ？」

えーと、それってつまり、別れたり浮気したりは出来ないってことよね…？

むしろ大歓迎だし。バッチコイ。

ゼウオンの広い胸に埋もれた頭をコクンと縦にふる。

「オマエは人間で…俺は魔獣だ。異種族間は子が出来にくい。ただでさえ俺は繁殖率の悪い銀狼族だから、子が出来る可能性は皆無に等しい。それでも、生涯俺と共にあると、それでも構わないと言ってくれるんだな？」

……
……ぱーどうん？

子が出来る可能性は皆無？って、え？そうなの？？
初耳なんですケド！

「私、ゼウオンとの赤ちゃん授かれないの？」

「え？さっきオマエ「分かったことだから今更」って言わなかったか？」

「え？それって、同族…銀狼族に紹介してもらえないのは分かっているって意味で言ったんだけど…」

「はああ？！そうなのか？……俺は…てっきり……」

ガクンと頂垂れたゼウオンは、私の肩に頭を乗せた。

なんだか、えらく打ちひしがれている様子なんだけど…。

狼耳とモフモフの尻尾がペタンと垂れ下がっている幻覚が見えるんですけど…。

カーワイーイ〜

って、そうじゃなくて。

まあ、よくよく考えてみれば、魔獣のゼウオンと人間の私の間では赤ちゃん出来ないってのは祖極当然だよな。

自分が妊娠して出産して、子供を育てていくっていう未来像は漠然とあったけど、その未来像に固執はしてない。

だって、いつか我が子は自分の手元を離れてしまうから、ずっと一緒に居られないんだよな…って思っちゃうんだ。

とは言え、子供を産んで育てるって、すっごく大変だけど特別な幸せも得られるのよ…ってバイト先の社員さんが言ってたし、出来ることならゼウオンとの子が欲しいって思う。

でも、不可能ならば仕方ない。

ゼウオンと私は、血の繋がった家族を作ることは出来ないっていうのは非常に残念だけど、今しがた彼は「生涯共にある」と言った。

それって、つまり、子供は無理でも彼はずっと一緒にいてくれるってことだよな？

「それでも、いいよ」

なぐさめる様に、ゼウオンの背中を軽くポンポンと叩く。

顔を上げた彼は、驚いた表情で私を凝視した。

「赤ちゃん授かれないのは仕方ないことだもの。赤ちゃんいなくて

も、ゼウオンはずっと私と一緒にいてくれるんでしょう?」

「それはもちろん、オマエから離れるなんて有り得ないが…」

「なら、いいの。ゼウオンがいてくれるなら、私は幸せ」

「ユリーナ…」

私の身体にまわされていたゼウオンの腕に力がこもり、覆い尽くすように強く抱きしめられる。ぐえっ。

だけど今回はすぐに腕の力が緩んだ。良かった。

「本当に、いいんだな? 俺のツガイになってくれるんだな?」

「うん。だけど…」

「けど?」

「ツガイという言い方より、恋人っていう言い方のほうが嬉しいデス…」

些細なことかもしれないけど、やっぱり、ねえ?

照れつつも、そんなことを口にする、ゼウオンは今まで見たことないほど嬉しそうに微笑んで、それから真摯な瞳を向けてきた。

「ユリーナ。俺の、生涯の恋人になってくれるか?」

「つつ、…はい」

嬉しくて嬉しくて、私はそのままゼウオンにギュウってしがみ付いた。

「ゼウオン…ずっと一緒にいてね?」

「もちろん。離しはしない…俺のユリーナ」

どうしよう、嬉しすぎる。

最愛の彼が、この先ずっと一緒にいてくれるなんて…夢オチなん

かじゃないよね？

感激に浸りながらゼウオンと抱きしめあっていたけど、私は徐に心の内を吐露し始めた。

「あのね…私、寂しかったの。幼い頃にお母さんが死んじゃって、その後育ててくれたお祖母ちゃんも死んじゃって。お父さんは仕事で忙しくて殆ど会えなかったし。家族を失うって、辛いよね…ゼウオンは凄いな、5年間1人で…」

私がポツリポツリと話している間、大きな手で優しく頭を撫でてくれるゼウオン。とっても気持ち良いな…

「凄くもないさ。俺は、銀狼族だつてことが知られるのが怖くて、誰も寄せ付けなかった。結果的に1人だっただけだ。」

「そう…それなのに秘密を教えてくれて、恋人にしてくれて…私、こんなに幸せって思ったの、初めてよ」

「ユリーナ…」

頭を撫でられる心地よさに身を委ね、目を閉じた。

「実はね、お祖母ちゃんが死んじゃった時…こんなに悲しくて辛い思いをするなら、家族なんて居なくていい、とか思っちゃったんだ。お友達には恵まれていたけど、お家に帰れば1人ぼっちで。でもホントはね、ずっと一緒にいたいと思う存在を…ずっと一緒にいてくれる存在を…いつも、求めていたの」

閉じていた目を開き、ゆつくりと顔を上げて彼を見詰める。

お祖母ちゃんが言っていた“想念”ってホントかも。

だって、出会えたんだもの。私のたった一人に…

「私…求めていた存在に出会えたのね…」

ゼウオンに出会えたことに、想い合えたことに、歓喜で心が震える。

愛しく想う気持ちを込めて微笑むと、彼も微笑み返してくれた。

そして、私のおでこに、瞼に、頬に、耳元に、優しくキスして、それから再び唇同士をくつつける。

しばらく舌で舌を弄られた後、苦しくない程度にギュッと抱きすくめられた。

「ユリーナ…俺のユリーナ…こんなに愛しく思うのはオマエだけだ」

…今の、ホントにゼウオンが私に言ったの？

あううっ。嬉しすぎて泣けてくる。

涙が出そうになったけど、私もギュッと抱きしめかえして、何とか泣くのを堪えた。

結構泣き顔見られているんだけど、それでもあんまり見せたくないんだよね…なんて思っている。

私の背中にあつたゼウオンの手が、胸元にきた。

あれ？なんか、胸を触られている？

あれれ？なんか、胸を撫でられてる??

あれあれ？なんか、撫でる擦るというより、掴む揉むといった手の動きをされてませんか???

状況判断しかねているうちに、私の身体は長椅子の上に倒されていた。

えーと、これって、あれかな？交尾体勢っていうやつ？

私の上にゼウオンが覆い被さり、唇を寄せてきた。そのまま受け止め、口付けに耽る。

その間もゼウオンはずっと私の胸から手を離さなかった。

「ユリーナ……」

手の動きは止めずに顔だけを離れた彼は、艶のある声で私の名を呼んだ。

愛しげな、でも少し切なげな彼の美声を聞いて、下腹部にまたナゾの感覚が沸き起こる。

ゼウオンの唇が、私の頬から首筋を伝って、鎖骨の窪みに落ちてきた。

彼の手がようやく胸から離れたと思ったら、今度は服の中に侵入して直に私の肌を撫でてくる。

はっ！！これはマズイ！

直撫でされた感触に、流されっぱなしだった理性が蘇った。っていうか、本能が危険信号を発信している。

ゼウオンてば本気？マジで最後まで、いたしちゃう気にいるんですか？！

ここまでされると、ちょっと過ぎたスキンシップってワケにはいかないよね？！

まさか、此処で？！こんな長椅子の上で？！第一ここ、宿屋の屋上だよ？！

焦りまくりの私の心中なんてお構いなしに、彼の手が私の腰骨あたりを撫で、色気もそっけもない簡素な長ズボンの腰紐を解こうとしてきた。

「うきゃっ、ちょ、待っ……ん、んんっ」

ちよっと待ってと言おうとした口は、彼の口で塞がれる。

ヤダヤダ！こんな所じゃイヤーっ

ジタバタともがくと、ゼウオンが動きを止めて私の顔を覗き込んだ。

「どうした？ユリーナ」

「（どうしたもこうしたも、こんな所じゃ）イヤっ」

「え？」

「（初エツチが宿屋の屋上だなんて）有り得ないからっ」

「……………（俺に身体を許すのは）有り得ないのか？」

「うん」

力強く頷くと、ガーンって効果音が聞こえそうなほどショックを受けたって表情をするゼウオン。

「何故だ？！俺のツガイになってくれたじゃないかっ」

「確かにそうだけど、でもっ、ここ屋上だよ？！」

真っ赤になりながら訴えると「は？」と言、とぼけた返事をするゼウオン。

「だから、ここ宿屋の屋上でしょ？こんなところでなんてイヤよう……」

「あ、そつか。そういうことか：良かった…」

「ええっ？！何が「良かった」なのよ？良くないよっ、いくら真夜中でも誰かに見られる可能性あるでしょ？！」

「あー、スマン。性急だったな、悪かった」

ゼウオンは謝りながら私の体を起こしてくれた。パパッと乱れた衣服を整える。

「じゃ、部屋に戻って仕切り直すか」

「えゝ？！あの、レギとルーシエが…」

「不可侵、不可視、不可聴の効果が3日間ほど持続する強固結界石を使うから、何も気にすることないぞ」

「ええ？！強固結界石？？」

「使いきりの結界石にしては割高だったが、効果は抜群だ」

「いや、そんな、何も今すぐじゃなくても…」

「俺としても、何の気兼ねも無くユリーナと交じり合いたいからな。結界石の1個や2個なんて惜しくない」

「ちょ、だから、今すぐじゃなくて日と場所を改めて…」

「行くぞユリーナ」

「え、や、ちょ、うわああゝゝゝんっつ」

もはや聞く耳持たずのゼウオンに半ば引きずられるように、部屋へと戻ったのでした。

第46話 重なり合う想い (後書き)

狼ゼウオンくんに拉致られちゃったユリーナちゃん。

部屋に戻った2人のその後は、ムーンさんの方で投稿させていただく予定です。

第47話 約束の品をいただきました（前書き）

で、視点が変わります。

第47話　約束の品をいただきました

ゼウオンってさ、かなり体力あるよね。

朝練の時も怪物と戦っている時もあんまり息切れしないしさ。

日頃、魔戦士としての彼を見ていて、その腕力やスタミナの高さは理解していたつもり。

つもりだけど……

自分の身をもって痛感するハメになるなんてっつ。くううつつ。

屋上で想いが通じ合ってから3日が経過しているけど、私はほとんど部屋から出ていない。

睡眠、食事、情交。これがこの3日間の全行動。

だって、ちょっと体力が回復するとすぐに襲ってくる魔物がいるんだもん！つとに狼だよね！

この魔物、食事も体を拭くのも親切にお世話をしてくれたけど、そもそも世話にならなきゃいけない体になってしまったのはコヤツのせいである。

数刻前に結界石の効果が消滅して、ゼウオンはようやく私を解放してくれたけど、まだ体がだるい…腰が痛い…大きな声じゃ言えないところが特に痛い…

だけど、今日はハフィスリード殿下の立太子式。

式典終了後、殿下が王宮前広場に姿を現すらしんだけど、それが正光頃だという。

ゼウオンもレギもルーシェも王宮前広場に行くというのに、私だけ宿屋でお留守番なんてヤダ。

今は丁度夜明け（風の1刻）だから、まだ休む時間がある。ゼウオンが作ってくれた薬湯を飲んでベッドに横たわる私。

「ユリーナあ、早く元気になって…心配なの…」

ルーシェが大きな銀の瞳をウルウルさせて見詰めて来る。

「別に病でもなんでもないから、大丈夫よ。薬湯も飲んだし、すぐ良くなるわ」

「良かったの～。ゼウオン薬湯ありがとなの～」

翼をパタパタさせながら、嬉しそうにゼウオンにお礼をいうルーシェ。

「あ、ああ…いや、礼をいってもらうほどのことではないが…」

些か気まずそうなゼウオンを見て、レギが含み笑いしてましたとさ。

今後は自重してよね、ゼウオン。

本日――土の赤月5日に、グリンジ阿斯王国第19代国王テイルアリード陛下の第2王子、ハフィスリード殿下が王太子となる。王宮前広場には大勢の人々が詰めかけ、広場前的大通りも溢れんばかりの人々に埋め尽くされていた。

王宮前に押し寄せたグリンジ阿斯国民は皆、歡喜に溢れ、口々にハフィスリード殿下を称えている。

バルコニーにハフィスリード殿下が姿を見せると、一際盛大な歡聲があがった。が、その歡聲は、どよめきに変わる。

新王太子殿下が民衆の前に姿を現した直後、殿下を包み込むような金翠のオーラが発生すると、見目麗しい少女が現れた。

『ワタクシは「大地の指輪」に宿る守護精マイスミーグ。我が主ハフィスリード様が変わらぬ忠誠を誓います』

守護精の宣誓は風に乗って王都中に響き渡った。先程までの喧騒が嘘のように広場が静まり返る。

その数秒後――割れんばかりの歡聲が沸き起こった。

「殿下が守護精に見放されたという噂は、これで完全に払拭されるな」

「だな。しかし、すんげー熱気。殿下、めちやくちや人気者じゃーん」

「こんなに沢山の人間、アタシ初めて見るの」

「ミーグも粹な演出するね。さすがグリンジ阿斯が建国した時から生きてるだけあるわ」

こんな雑談をしながら、王宮前広場を見渡す私達。

これだけの人混みの中、余裕綽々で広場や王宮を見渡せるのは、滅多に人がこない所にいるからなのです。

そこは何処かというですね、大通りから広場への入り口に設置されている大門の上なのですヨ。

私が不可視効果のある「水」の結界を張った後、ルーシェの「風」の力で此処まで上昇したの。

鳥居にとまるカラスよろしく、まさしく高みの見物と洒落込んでるワケ。

もう一人の王太子候補だった第1王子シリルリード殿下はと言うと、自ら王位継承権を永久に放棄し、自ら望んで片田舎の領主に着任することになったんだって。

シリルリード殿下が赴く領地は、農業が盛んな、軍の駐屯基地も無い平和な土地だから、武力を蓄え謀反を起こす可能性は無いのと。

魔力の強いシリルリード殿下が王都から離れることに難色を示す者は多かつたらしんだけど、本人の決意が相当固かったそうだ。

「私が王宮に居続ける事で、再び争いが起こることもありません。今後は地方を盛り立てることで、我が国の発展に貢献したく存じます」

そう言って、シリルリード殿下は王都から去った。

このシリルリード殿下の言動は、権力欲の塊みたいな王妃や残党貴族達に痛恨の一撃、まさに決定打を与えた。

王妃なんかは幽閉されたことより、シリルリード殿下の王位継承権

放棄の方がショックだったらしく、本当に病になってしまったとか何とか。

大歓声を受けながら、バルコニーから民衆へ優雅に手を振るハフィスリード殿下を見る。

「闇の帝団」本拠地のあの地下牢でアレフさんに「何が何でも指輪を死守して第2王子様に王太子になっていただきましょうね!」と言ってから約半月。

ついに、実現したんだなあ。

ヌーエンの情報広場でアレフさんからミーグの指輪を渡されてから今までを振り返り、感慨に耽ってしまったのでした。

立太子式から15日が経過して、今は土の赤月20日。

ハフィスリード殿下から時刻と場所を指定されてお呼び出しを受けた私達は、指定場所から殿下の私室へと転移させられた。

相変わらず絢爛豪華なお部屋ですね…。

グリンジラス王国の国力と、殿下の権力の強さを象徴するようなお部屋ですよ。

2度目とはいえ、やっぱり無駄にゴージャスな部屋は落ち着かないようっ。

簡単な挨拶を交わした後、勧められるままにフカフカのソファに座る。

最近の「ナギナタ」の活動状況を尋ねられたので、ゼウオンが簡略的に報告。

「なるほど。では、受理した依頼は怪物討伐と材料採取のみなんですね。「ナギナタ」ほどのチームならば、ギルドから「調査・探索」を持ち掛けられたりしませんか？」

「調査・探索」の依頼は、未踏の地に出没する怪物の調査や、発掘された遺跡や洞窟などの内部調査などするみたい。

これらの依頼は、信頼できて実力もあるチームだとギルドが判断したチームのみに持ち掛けられるもので、依頼書版には掲載されていない。

「今のところは無いですね。ギルド側も、我々が高貴な方の専属チームだという認識があるようで、遠慮しているのかもしれませんが」

殿下の質問に淡々と答える我らのリーダー。

「そうですか。――む、時間通りに来ましたね。ミーグ、結界の解除を」

『はい、主^{あるじ}』

あれ？誰かここに来るのかな？

チラッとゼウオンを見ると、彼も「さあ？」といったカンジで小首を傾げた。

「入れ」

先程までの口調とは違い、王者の風格漂う殿下の声に「はっ、失礼いたします」と扉越しに応える声。

この声、聞き覚えがある。もしかして……

重厚な扉がゆつくりと開き、大きめの布袋と小箱を抱えた、精悍な騎士が姿を現す。

彼の姿を見た瞬間、私は思わずソファから立ち上がり、騎士の名を口にした。

「アレフさん！」

濃緑の騎士服に身を包み、装飾無しの実用1点張りな剣を腰に佩いているアレフさんは、正に強く頼もしい騎士サマといったカンジだった。

地下牢でズタボロだった面影は全く無い。

「ユリーナ様。ご無事と伺っていましたが、お元気そうなお姿をこの目で確認できましたこと、大変嬉しく思います」

荷物を抱えながらも恭しく腰を折るアレフさんに、笑顔で駆け寄る私。

「お体は何ともありませんか？」

手足は問題無さそうだけど、確か首に斑点があったよね。キチンと解毒できたのかな？

この騎士服、カッコイイけど詰襟だから首が見れないなあ…

長身のアレフさんを見上げながら彼の首もとに手を伸ばし「首の斑

点は？」と尋ねると、何故か顔を赤くされた。

「あ、え、ええ。もう何ともありませんよ。すっかり完治しております」

「そうですか、良かったです」

ニコッと笑うと、アレフさんは一段と顔を赤らめてスツと私から視線を逸らした。

なんだよう、人が心配してるってのにソツポ向かなくなたっていいじゃん。

「ユリーナさん。アレフが持っている物はお約束の品なのです。ようやく出来上がりましてね」

殿下の言葉にアレフさんは機敏に反応し、高級そうなテーブルの上に抱えていた大きな布袋と10cm四方くらいの木箱を置いた。

「お約束のブーツと腕輪です。装着具合を確認したいので、早速身に着けていただけますか？」

アレフさんが袋と箱の中から取り出してくれたブーツと腕輪は、以前私が装着していた物と酷似していた。

躊躇いながらも、腕輪をはめてブーツを履く。

おおっ、これはスゴイ！

インソールに低反発素材でも使ってるの？って思うくらい、程よい柔らかさで土踏まずにしっかりフィットするブーツ。まるでオーダーメイドしたかのような素晴らしい履き心地だ。

腕輪の方も、装着した途端にブワッと魔力が溢れ出るかのような感覚がした。

意識しないと体内の魔力を感じ取れなかったのに、今は何もなくても魔力が駄々漏れてるカンジ。

見た目は以前の物と同じでも、効力がまるで違うよ！

「スゴイですね！」

感嘆の声を上げると、殿下は満足そうに頷き、アレフさんも眦を下げた。

「気に入っていただけたようで何よりです。装着者に馴染むよう特殊魔法加工を施しましたから、今後ユリーナさんの体型が変化されても使えますよ」

サイズ関係なく使えるんだ。スゴいな、特殊魔法加工。

この歳で足のサイズが変わるってことは無いだろうけど、浮腫んでもブーツがキツくならないってのは素晴らしい！

「ありがとうございます！大事に使いますね」

殿下とアレフさんにお礼を言って、今まで履いていた靴を亜空間に仕舞う。

少し雑談をした後、殿下はアレフさんを私室から退がらせた。

「仕上がった品はギルドに届けようかと思ったんですが、アレフがユリーナさんにお会いしたいと願ひ出ましてね。ミীগもユリーナさんとお話したいと言いますし、私も「ナギナタ」の状況をお聞き

したかったんで、お呼び立てしたんですよ」

『そうなのです。ワタクシ、ユリーナさんに確認したいことがあります』

殿下の指にあるゴージャス指輪がキラツと輝くと、ミーグが姿を現して実体化し、ちょこんと殿下の隣に座った。

「確認って何を？」

『魔法のことですわ。本当は山中に潜んでいる間にでもお尋ねすればよかったんですけど、ワタクシも主のことが気かりで、つい失念してまして……ユリーナさんは不思議な魔法を使われたよね？』

「ん」と、「雷」のことかな？地下牢でリズに放ったのと、庭園でゾンビみたいな怪物に放ったヤツ？」

『それですわ。あの魔法はどうやって開発されたのですか？』

「開発っていうほどのことでも…雷って、元の世界では珍しくもない現象なのよ。それをイメージしながら「風」「水」「重力」の魔力を練り上げて形成してるの」

『え？三属性の魔力を複合されてるのですか？！』

ミーグはとても驚いた顔をした。ビックリ顔でも美少女だな～ゼウオンや殿下まで驚いたかのように、一瞬「え？！」ってな反応をした。

「うん。そんなに驚くようなことなの？」

この世界では複合魔法なんて沢山あるから、そんなに驚かれるようなことでもないと思うんだけど…

「ぐふふつ、驚くようなことなんだよな、これが。3種混合なんて器用なことが出来るからこそ、オイラ緻密な魔力制御を要する戦い方を教えたんじゃない？」

『そういえばレギさんがユリーナさんを鍛えたと言っていましたわね。魔法もレギさんが伝授したんですの？』

「いんや。オイラが初めてユリーナと会ったのって「雷」の魔法を見た時だから、すでに魔法は習得してた。だよな？」

レギの言葉に「うん」と頷く。

「魔法は羊緑族のメルーロさんという魔戦士さんに教わったの。元の世界には魔法が存在しなかったから、初めて魔法を使えた時は舞い上がっちゃったわ」

『そうですか…。では、あの魔法は「空間」「重力」と同系統…すなわち無神の地で開発されたものではないのですね？』

「無神の地？「空間」「重力」と同系統って、何のこと？」

『あの魔法は「無神の地」が発祥なんだと確認したかったのですが…その様子ですと、違うようですわね…』

「うん、まあ…私、その「無神の地」とやらが何処にあるか知らな

いし」

『そうですか…「空間」「重力」が、ヘアグ創世期に4神から発祥した魔法とは異なる魔法だということはご存知ですか？』

「え？そうなの？知らなかったわ…。「空間」「重力」って他の魔法と起源が違うの？」

『はい』

ミーグの話によると。

今からおよそ430年前（この世界は1年が704日だから地球だと約830年前くらい？）に、グリンジアス王国が建国された。

建国当時には「空間」も「重力」も存在してなかったが、今から100年ほど前くらいに突如「空間」「重力」の魔法が出現したという。

この2つの魔属性は4神からの賜物ではなく、人為的に開発されたものである。

開発者は、4神のいずれも主神と仰がず独特の価値観を持った風変わりな魔法士で、大陸中央の「無神の地」にて新魔法を編み出した、と伝えられている。

その魔法士は次々と画期的な考え方や道具を世に広めたが、最も称えられている偉業が「冒険者ギルド」の創設と「転移装置」の開発作成だという。

ミーグの話を聞きながら、私は確信していた。

…その風変わりな魔法士は、私と同じ異世界人だ。

『監視者』は異界から誰かを招くのは極稀だって言ってたけど、そ

れってつまり、極少数はいるってことだ。

きっと、私の前にこの世界に招かれた人が『監視者』の願い通りに世を活性化させようと「空間」「重力」という新しい魔法や、「冒険者ギルド」という新しい機関や、「転移装置」という新しい魔道具を世に広めたんだわ。

確かな証拠は何も無いけど、「空間」「重力」という概念が異世界人っぽい発想だもん。
きっと、そうだよ！

ってゆーかさ。前の異世界人さんの偉業に比べて、私ってどーなの？！

今のところ、料理関係くらいしか貢献できてないんじゃない？
『監視者』がこの世界で生を与えてくれたからこそ、私はゼウオンに出会えて最高の幸せを得ることができたんだから、その恩に報いるためにも世の活性化の役に立ちたいなあ。

新しい魔属性を編み出した場所といわれる「無神の地」へ行けば、私も何か開発できるかな？

今すぐではなくとも、いつか「無神の地」に行ってみよう。

第47話　約束の品をいただきました（後書き）

シリル兄さんはハフィくんと結構仲良しで、王妃とは仲悪いです。幼少時から自分の事を権力の道具的扱いしてきた母親を好きにはなれなかったんです。

シリル兄さんは新領地で穏やかで幸せな生活を送れる予定です。

第48話「無神の地」は簡単に行けないようです（前書き）

後半、らぶあまR15になります。

第48話 「無神の地」は簡単に行けないようです

「無神の地」に行ってみよう、とは思っても。

行き方も分からなければ、どんな場所かも分からないんだよね。
大陸中央ってことだけど、ちゃんと道があるのかな？

「ね、ミーグ。「無神の地」って、大陸の中央にあるんだよね？ど
うやって行ったらいいのかな？」

『え？！ユリーナさん、もしかして…「無神の地」へ行くおつもり
なのですか？』

「うん。すぐにつてワケじゃないけど、そのうち行ってみたいな、
つて」

すると、それまで私とミーグの会話を静聴していたゼウオンが、急
に私の肩を掴んだ。

「ユリーナ、本気か？！」

少し荒めの口調で私を凝視してきたゼウオンに、ちょっとビクつと
しちゃう。

「あの…なんかマズイの…？」

ゼウオンの勢いに怯みながらもオズオズと尋ねると、彼はハツとし
たように私の肩から手を離し、普段の口調で話し出す。

「「無神の地」は4神の御力を阻む地とも言われている。4主神の

お護りする地で誕生した者にとっては不可侵領域なんだ。つまり、この世界で生まれた者は「無神の地」に入ることは出来ないから、どういった所なのかは誰も知らないんだ。樂園のようだという説もあるし、怪物の巣窟だという説もある。」

マジっすか？！

ちよっと思つとこつかなんて、気楽な気持ちで行くような場所じゃないんだ！

だけど、ギルド創設者の魔法士さんは「無神の地」に行ってるんだよね？

これは益々、風変わりな魔法士＝異世界人だつて説が有力になったな。

「しかしながら、ユリーナさんは4主神の影響を受けていない身。ならば「無神の地」に足を踏み入れられるかもしれませんね」

そう言つたのは、殿下だった。

殿下の言葉にミーグも賛同し、コクコクと頷いている。

『「無神の地」は常に「最果ての終霧」と同じような濃霧に覆われていると聞き及んでいます。地境付近の集落から自力で行く形になるんですが、もしユリーナさんが「無神の地」に行かれた暁には、どのような所なのか教えていただけますか？ワタクシ、大変興味がありますの』

「うん、いいよ。――殿下、ミーグにお知らせする時は、この伝達石を使用しても構わないでしょうか？」

「ええ。もちろん結構ですよ。私も「無神の地」には関心がありますし。ですが「無神の地」では伝達石を使えない可能性が高いです

ね」

そっか。伝達石や光源石などの原石となる魔石（ヘト石とかガマリ石とか何か色々あるらしい）も4神の賜物だっていわれてるんだ。4神の力を阻む土地では、その効力も無効化しちゃうかもしれないよね。

「そしたら「無神の地」から帰還した後にでも連絡を入れるようにしますね。――とは言え、いつ行くかも分からないうえに、本当に行くのかも定かではないので、行くことが決まった時に一応ご連絡致します」

「そうして下さい。――それはそうと、皆さんは土の緑月一杯までは、この王都に滞在されるんですよね？主神の大祭は、土の神殿まで赴かれるんですか？」

殿下の質問に、私とレギとルーシェの視線がゼウオンに向いた。

ギルドの依頼とかもそうだけど、私達は決め事の結論をゼウオンに委ねちゃってる。

彼は独断で決めたりせず、ちゃんと私達の考えを聞いてから、自身の経験などを踏まえて物事を決めてくれるの。

柔軟に私達の意見や希望を取り入れてくれるし、決断力もあるし、リーダーシップあるよね。

チームリーダーになるのを少し渋ってはいたけど、ゼウオンになってもらって良かったよ。

ゼウオンは私達3人と視線を交わした後、数秒間無表情になった。

「そうですね。ユリーナとルーシェは大祭未経験ですし、もしかし

たら土の神降臨という幸運に巡り会えるかもしれませんね。それに……」

そこで言葉を切ったゼウオンは何故か私を見ると、心臓爆発警報発令スマイルを浮かべた。

うきやあつ、不意打ち！不意打ちで胸ズキュンっつ。

あ、ヤバ。顔が火照ってきた。

レギに「すぐ赤くなる〜」なんて言われちゃったから赤面しないようにになりたいのよ。

なりたいたんだけど、今までだって狙って赤面してたワケじゃないからコントロールなんて出来ない〜っ。

内心でアウアウと焦っていると、殿下の表情が隙の無い王子様スマイルからニヤアってな意味深スマイルに変わった。

「ああ、なるほど。それは是非、土の神殿に行くべきですね。ゼウオンさんとユリーナさんの場合は特に」

『そうですわね！ワタクシも主神のお恵みが降されることをお祈りいたしますわっ』

なんだなんだ？！

殿下やミーグだけでなく、レギまでニヤニヤしてる。ルーシェもニコニコしてるし、一体なんなんだようっ。

なんでニヤニヤされるのかイマイチよく分からないけど、ここで理由を聞くのは良くないと思う。

だって、絶対恥ずかしい思いしそうなんだもんっ。

ゼウオンと殿下が和やかに会話している間も、私は顔の赤みが治まるまで俯いていたのでした。

チーム「ナギナタ」を元の指定場所まで再転移させたハフィスリードは、私室を出て真っ直ぐ執務室へと向かった。
ハフィスリードの後ろについて歩く数人の護衛騎士の中にはアレフもいて、職務中の騎士らしく引き締まった表情をしている。

ハフィスリードの生母、ティルアリード陛下の側室エディリアと、アレフの母セリユリアは姉妹である。

ハフィスリードと同年代で従兄弟という間柄であるアレフは、成人前にはすでにハフィスリードに仕えていた。

自分に忠誠を誓い、陰日向で支えてくれるアレフに、ハフィスリードは全幅の信頼を寄せていたし、日頃の働きに感謝もしている。
もしアレフが誰かに好意を寄せることがあれば、協力を惜しまないつもりでいたハフィスリードであったが…

「…よりによってユリーナさん、か。アレフも報われないと分かっているようだけど、こればかりは仕方ないことだからな…」

ハフィスリードは絨毯敷きの長い回廊を歩きながら、守護精マイスミーグと記憶共有した情景を思い返す。

薄暗い地下牢

獄に繋がれた、見るも無残なアレフの姿

「…生きることを諦めないでください…」

水の魔力で手足を治し、アレフの命を救った彼女

屋敷に囲まれた庭園

明らかに力量差がある相手に立ち向かう彼女

薙ぎ払われ、華奢な身体を石像に打ち付けられても、戦意を喪失しない

そんな彼女を土巨人ゴレムから身を挺して護る銀狼

- 銀狼さんが、ゼウオンが私のせいで傷ついたら、私は自分が許せないっ -

捨て身とも思える無謀な行動をとった彼女

あんな風に、互いが相手の為に己の身を投げ出すことができるとは…異種族なのに、あの2人には強固な絆があるのか…

チーム契約を持ちかけたのは、もちろん「ナギナタ」の面々の強さが並々ならぬものだからというのが一番の理由なのだが、ハフィスリードには別の私的感情もあった。

- - - あの2人の行く末を見たい。何の裏も無く、純粹にただ1人を想い続けることができる女性もいるのだと、証明してみせて欲しい。

ハフィスリードに近づく女は皆、欲に塗れた目をしている。

女性に対して冷めた感情しかないハフィスリードにとって、一途に相手を想うユリーナは貴重な存在なのだ。

澄んだ藍の瞳は、いつも彼をゼウオン熱く見詰めていて、その態度がハフィスリードを和ませる。

権力争奪、損得勘定、条件計算、駆け引き…そういった裏を感じない純粋な思慕を露わにするユリーナを見ると、冷めた心の穴に暖かいそよ風が吹くような気持ちになるのだ。

アレフには、幸せになってもらいたい。
ユリーナには、ずっとブレることなく一途にゼウオンを慕っていて
もらいたい。

- - - 恋愛沙汰なんて、なるようにしかないか。第3者がやか
かく口を出すことではないな…

相反する気持ちを掻き消して、ハフィスリードは微かに苦笑した。

ハフィスリード殿下に転移してもらった私達は、そのまま宿屋に戻
った。

恋人同士ツガイになってから、ゼウオン&私で1部屋、レギ&ルーシエで
1部屋になったのよ。

魔物的価値観では、ツガイは常に共にあるものなんだって。
ずっと一緒なのは嬉しいんだけど、毎晩毎晩求めるのは止めてねっ
て真剣にゼウオンに言い含めたから、ギルドの依頼に支障をきたす
ほど身体がダルくなることは無い。

さて、と。「無神の地」の場所を確認しよう。

ゼウオンから借りた世界地図を、書き物机の上に置いて眺める。

西の地の地図しか持っていない私と違って、各地を点々としてきたゼウオンは当然ながら世界地図を持っていたのよ。

この世界地図は魔道具の一種で、ギルド内の道具屋さんで販売されているんだって。

60cmくらいの正方形の石版みたいなカンジの地図で、10cmくらいの棒がセットになっている。

その棒で地図をトンとすると、その箇所を拡大させた地図に変わるのよ。

タッチパネルでズームってカンジで、ちょっと楽しい。

ま、拡大っていつてもグーグルマップのように鮮明で細かい地図ってわけじゃなく、RPGのワールドマップみたいに、ここは山、ここは森、この辺りに集落がある、みたいな表示なんだけどね。

大陸の中央を拡大させてみたけど、やっぱり地形は表示されなかった。

もう1回地図をトンとして元の世界地図に戻すと、次は西の地の最東端をトンとする。

「うーん…最東端付近は山だらけなのね…。山越えしないと「無神の地」には行けないのかなあ…」

ボソッと呟くと、ベツトに腰掛けて何やら分厚い書物を捲っていたゼウオンが顔を上げた。

「ユリーナ？土の神殿までの道を確認してたんじゃないくて、大陸中央付近を見てたのか？」

うん、と頷くと、ゼウオンは微かに眉間に皺を寄せて、分厚い書物を亜空間にしまった。

そして自分が座っている真横に手を置き、私を見る。

キョトンとしていると、急かす様に手を置いた所を2、3度ポンポンと軽く叩くゼウオン。

促されるまま、私は書き物机から立ち上がると、ベットに近づいた。ゼウオンの隣に腰掛けようと身を屈めた瞬間、急に腕を掴まれ引き寄せられたもんだから、バランスが崩れちゃって、よろめいた。

「うきや」

危なげなく私を受け止めたゼウオンは、すぐさま逞しい両腕で私を優しく拘束した。

背中ごしに感じる、彼の広い胸板。髪ごしに感じる、彼の温かい吐息。

私を抱きしめる腕に少し力がこもり、心地よい圧迫が上半身を駆け巡る。

首筋に彼の顔が潜りこんで来て、狼が額をこすりつけて甘えるように、スリスリされた。

「…ゼウオン？」

火照ってきた顔と身体を意識しないようにして、そっと呼びかけると、彼は更にすり付いてくる。

「本当に「無神の地」に行くのか？」

そう囁く彼の吐息が首筋をジンワリと刺激し、思わずピクっとしてしまう。

「う、ん。今すぐってワケじゃないけど…」

「俺は、行つて欲しくないな」

え？っと思つて振り返ろうとすると、そうはさせないよつてなカンジで益々ギュツと力強く抱きしめられた。

「ユリーナ1人で不可解な地に足を踏み入れるなんて、賛成できるわけないだろ？どんな危険があるかもわからない、何かあつても助けられない…それに、戻つてこれるのかも分からないのに」

ゼウオンの唇が首から離れて、耳たぶを甘噛みされる。

大きな掌が、両脇から掬い上げるように胸をまさぐつてきた。

「つつ…やつ、ゼウオン、だめえ」

繁殖期でもない限り、連日連夜では求めないよつて約束してくれたのにつつ

昨夜重なり合つたから、今夜は休息日のハズなんですケドっ

彼から与えられる甘い刺激に逆うも、一向に手の動きを止めてくれない。

「俺の傍にいたいと、離れたくないと言つたのは虚言じゃないよな？なのに、俺が行けない地へ行くつもりなのか？」

確かに「無神の地」に入れる可能性があるのは私だけなんだから、その間は当然ゼウオンやレギヤルーシエとは離れ離れだ。

「闇の帝団」の時とは違うけど、得体の知れない地に1人で行くということに不安はある。

だけど…

「もちろん虚言なんかじゃないよ？ずっとゼウオンと一緒にいたいでもね、私…あ、ちょ、やあ」

真面目に答えようとするも、如何せんゼウオンのアヤシイ手の動きに翻弄されちゃって言葉が続かない。

「ちょ、ゼウオン？！連日はナシって約束したでしょっ？！」

「だから服は脱がせてないだろ？それに、オマエは俺のツガイなのに、どうして他の雄に触れようとしたんだ？」

「他の雄…って何のこと？」

「アレフとかいう王宮騎士に駆け寄って手を伸ばしたじゃないか。

…殿下の前でなかったら止めてたのに」

「あれはっ、アレフさん「闇の帝団」の地下牢で首に毒っぽい斑点があつたからっ、ちゃんと治つたのかなって確認しようとしたただけだよ？！他意は無いってば！！」

もしかしてゼウオンてば、ご立腹？！穏やかな口調ながらも不穏な気配を感じるよあつ。

なんか不実だつて責められてる気分になるんですケドあつ。

後ろめたいことなんて何一つ無いのに、どーしてええ〜？！

「そうか。だが、アレフとやはオマエに懸想してるんじゃないか？そんな相手に思わせ振りの態度をとるのは、どうかと思うぞ」

「はあ？！まさか！！懸想とか、有り得ないからっ」

「どうだかな…まあ、いい。…それで？」

「それで…って？？」

「俺と離れてまで「無神の地」に行きたがる理由は？」

そんな敢えて「俺と離れてまで」の件を強調しなくてもいいじゃんつ。
くだり

尋問されてるみたいに感じるので、その黒っぽい雰囲気消してえ〜っ

「〔無神の地〕に行けば、私がこの世界に來た意義が見出せると思
ったの！」

少し大きめの声で言うと、ゼウオンの不埒な手の動きが止まった。
深呼吸して、今度は自分の気持を確認するように言葉を口にする。

「前にも話した通り、私、1度は命を失ってるのよ。だけど『監視
者』のおかげで再び生きることが出来て、ゼウオンに出会えた。ゼ
ウオンと想い合えて、この上なく幸せでいられるのも『監視者』の
おかげなの。だから私、『監視者』の望むヘアグ活性化に尽力した
いなって…これは確信に近い想像なんだけど、〔空間〕〔重力〕を
開発した風変わりな魔法士って、きっと私と同じ異世界人なのよ。
その人が新魔法を開発したのが〔無神の地〕なら、私も〔無神の地〕
で何かできるかもしれないって思ってた…だから、いずれは行ってみ
たい。行くべきだと思うの」

一気に話して、ゼウオンの反応を待つ。

5秒経過 - - 10秒経過 - - 20秒経過 - - あれ？何の反応も無い
なんて、どうしたんだろう？

抱きしめられていた腕の力が弱まっていたので、身を捻って彼を見
上げると、何故か無表情だった。

でも、仲間以外の第3者の前でする無機質な無表情とは違うカンジ
がする。

窺うように紫の瞳を見詰めると「この上なく幸せ、なのか？」と小
さく呟くゼウオン。

ん？私が「無神の地」に行く理由を知りたいって言ったのに、気になるところはソコなの？？

ポイントずれてる気がしないでもないけど、それはそれで事実なので「うん」と頷く。

すると、ゼウオンは無表情から一変、腰砕けになりそうな極甘笑顔になって、一言。

「俺も、この上なく幸せだ」

その表情のギャップと甘い言葉に、クラリ。

これ以上、私を骨抜きにしないでくださいいいいっっ

彼がソツと顔を近づけてきたので、私は自然にスツと目を閉じた。唇同士を重ね合わせながら、横抱きのような体勢にさせられる。

いつもより少し長めのキスをした後、ゆっくりと唇の触れ合いを解いて、両腕を彼の首に回した。

見詰めあい、微笑み合う。

なんだか知らないけど、ゼウオンの機嫌がなおってる。良かった、良かった。

内心で胸を撫で下ろしながら、再度口付けを交わしたのでした。

第48話「無神の地」は簡単に行けないようです（後書き）

「起きろ、ユリーナ。もう夜明け時だぞ」

「うゝん…おはよゝゼウオン」

「おはよう」

「ふああ…朝の鍛錬しないと、つい寝過ごしちゃうなあ……っつちよ、何?!」

「日付が変わったから、約束違反じゃないだろ？」

「えゝ?!えええゝゝっ?!」

「おはよゝゼウオン。あれえ?ユリーナはまだ寝てるの?」

「まあな、半刻もすれば起きてくるさ」

「ユリーナって結構お寝坊さんのねゝ」

「…まあな」

「（…オイラちよつとユリーナに同情）」

第49話 闇に蠢く怪魔

何も無い 何も見えない
虚無の暗闇

この空間に封印されて、外界では幾許の時間が流れたのだろうか……
1日も経っていないかもしれない。100年ほどの時間が過ぎたのかもしれない。
時の経過は分からない。
だが、どれほどの時間が経とうとも……決して変わることも薄れることも無いのだ。

出産したばかりの我が仔を目の前で殺された、あの衝撃は――
どれほど憤り嘆き悲しんでも“掟”と一蹴された、あの絶望は――

何故、我が仔が殺されなければならなかったのか……
あの仔はまだ目も開かず、立ち上がることもなかった。
生まれ出でたこの世界を見ることが出来ず、地を踏みしめることも出来なかった。

我が胎内で大切に育ててきた、大事な命。
くだらぬ“掟”のせいで、未来を奪われ散ってしまった……

抑えきれない嘆きと怒りは、やがて深い憎悪へと変貌した。

“掟”の名の下に、生まれたばかりの我が仔を無慈悲に殺した、同族。

加護する地に誕生した我が仔を護ることなく見殺しにした、主神。

そして・・・その主神を崇める、西の地の愚か者共。

奴等に、この身を焦がす悲しみと憎しみを知らしめるのだ。

同族を殺し、西の地に生きる全ての者を殺し、主神に思い知らせねば。

それは、歪んだ負の決意。

天災級の怪物と融合した銀魔狼の眼が、暗闇の中で不気味に光る。
族長の伴侶だった頃の面影は無く、恐ろしき怪魔と成り果てた嘗ての銀魔。

この怪魔の復讐と憎悪の念は少しずつ空間を侵食し、徐々に封印が歪み始める。

永き時を経て、葬り去られた黒い歴史が動き出そうとしていた。

土の緑月になった。

規模の大小に違いはあれど、西の地全域で主神「土の神」の大祭を執り行うので、土の緑月は西の地が平素よりも活気付くのだそう。
ここグリーンジラス王都も、商人や旅芸人などが集まりだして益々賑

わいを見せている。

市場や露店からは引つ切り無しに客引きの声が聞こえ、立ち止まって売り物を眺める者、素通りする者、商人の手練手管に丸め込められ購入する者など、様々だ。

西の地で最も品揃えが豊富と言われる王都の食市場も、多数の人々が行き交っている。

ふふ…うふふ… ついに バザーが始まりましたよ！
気合入れて食料買い溜めするわよっ。

ここ最近、ギルドの依頼ばかりしてたからチーム資金も貯まっているようだし、価格も通常より安いし、これはもうドツチャリ買い込むしかないでしょう！

苦笑するゼウオン、飄々としているレギ、ワクワク顔のルーシェと共に再度やってきました食市場！

もうリサーチ済みなので、サクサクとお目当ての店に行つて値切り倒す！

この半月の間で「ナギナタ」はグリンジアス王都ですっかり有名なチームになってしまったようで、私が値切り交渉すると「「ナギナタ」ほどのチームがケチケチしなさんなって！むしろ2割増し価格で買ってもらいたいよっ」と言われちゃう。

もちろん、そんな言葉に頷くワケないんだけどね。

「じゃ、アレとコレをもう1袋追加で買うから、全部でこの価格でどう？」

「嬢ちゃん、それじゃ3割引価格じゃないか、ダメダメ。ウチが

破産しちまう」

「じゃ、小銀貨1枚追加するわ」

「うゝん…。まだダメだな」

「あ、そう？これ以上は払えないからダメなら他所行くわ」

「うわつとお、ちょい待ち！…仕方ないな、それで手を打とう。
毎度あり」

こんなカンジでお店の人のやりとりを楽しみつつ（？）順調に食料や調味料を買い込む。

買い込んだ物はほとんどゼウオンが持ってくれてるんだけど、いい加減これ以上は持ちきれないってくらいになって、ようやく全ての食材を買い終えた。

人目のつかないところへ移動し、亜空間へ収納。

「だいぶ買い込んだな。これだけあれば1ヶ月は困らないだろ」

「だね。前みたいに急に山籠りになっても安心ね。あはは」

食市場で満足のいくお買物が出来た後は、他エリアのお店を物色する。

洗浄液類や薬液、温石などの消耗品も安くなっていたので、ここぞとばかりにガンガン買い込んだ。買った。

私以上にルーシェの方がお買物を楽しんでいる様子で、銀の瞳をキラキラさせながら「あれ、なあに？」「これ、どうやって使うの？」と尋ねてくる。

私にも分からないことはゼウオンが答えてくれた。

買わなくても見てるだけで楽しくて、キヤイキヤイはしゃぐ私とルーシェを生暖かく見守るゼウオン&レギ。

そんな調子で露店を見てまわっていたのだけど、レギが興味を示した胡桃に似た実を買ったり、ゼウオンが得体の知れない粉末とかヘンな形の枯れ草などを買ったり（薬の材料なんだって）、男性陣もそれなりに収穫があったみたい。

流し見程度とはいえ粗方の露店を見終える頃には、とつくに正光を過ぎていた。

すでに火の3刻半を過ぎていてビックリ。

何か軽く食べよっか〜ということで、今度は食屋台へと向かう。

食屋台エリアの活気も凄まじく、中途半端な時間帯なのに辺りは人・人・人。

美味しそうな匂いに、胃袋が刺激されます。

薄く延ばしたパン生地に味つきパスタを包んだものとか、ケバブのように大きな塊肉を分厚く削ぎ落として3本の串に刺したものとか、タロ芋のバター焼き（まんまジャガバター）とか、どれも全部美味しそう！

この前食べたお肉とタロ芋の串焼きもいいけど、せっかくだから違うものがないなあ。

結局、クレープ生地もどきに野菜と味付きのスライス肉を巻いたものと、ドライフルーツを混ぜ込んだマフィンもどき、それにハーブティのような飲み物（常温）を購入。

この世界には紙コップなんて無いから、飲み物を買う時はマイカップ持参なの。

この前買った果実ジュースも、今回のハーブティも、注いでくれたのは200mlくらい。

お店によってはサービスしてくれたり、逆に170mlくらいしか

入れてくれなかったりする所もあるんだって。

落ち着いた所で食べようと、てくてくと歩いて場所を移動していると、何やらズラーっと行列ができている箇所が目についた。

列の先には、木札をジャラジャラと持ったローブ姿のオジサンがいる。

「あれ、何の列なのかな？」

「ああ、あれか。土の神殿までの転移券を買ってるんだろ」

「転移券??」

「あのオッサンは転移が使える魔法士なんだな。あの木札に転移日と時刻が記されている。土の神殿にギルドの転移装置は無いし、自力で神殿に行くより転移の方がいいから、あんなに行列ができるんだ」

「へえ、転移が使えるって儲かるのね」

「まあな。だが、ああしてフリーで稼ぐより、どこかのお抱え魔法士になったほうが、よっぽど儲かるし、稼ぎも安定する。あえてフリーでいるヤツってのは、自由でいたいとか金持ちが嫌いとか性格に難有りとか、だな」

性格に難有り……って。ゼウオンてば結構辛口？

ま、でも、彼の言うことが現実なんだろうな。

あんなに行列ができるほど神殿に行きたがるのは、やっぱりこの世界の風習なんだと思う。

この世界では、伴侶を得た時や子供が生まれた時は、その年の主神の大祭で祈りを捧げるんだとか。

多くの者達は各地の街や集落にある小神殿でお祈りするんだけど、やっぱり4主神の大神殿でお祈りするのが一番いいとされてるみた

い。

ここ西の地では「土の神殿」が最高峰で、一番人気のお祈りスポット（？）だ。

でも、土の神殿っていうのは結構行きづらい場所にある。

西の地の中央部は草木や泉が点在している砂地で、その砂地の更に中心部に森に囲まれた岩丘があり、その上にドーンと建っているのが土の神殿なんだって。

裕福な人たちは転移が出来るお抱え魔法士がいるから問題ないけど、そうではない人たちは神殿に行きたいなら自力で行くしかない。

神殿まで行くには路銀も体力も必要だ。腕に自信がなければ護衛も雇わねばならない。

だったら、転移券買ったほうが手間もかからないし危険もないってことで、大人気なんだってさ。

ゼウオンが今回、土の神殿に行こうと決めたのも、私のことを一族に紹介することは出来ないけど主神へのお祈りはするよってことなんだって。

披露宴は出来ないけど、結婚式はするよってカンジかな。照れるなあ…えへ。

ブーツと腕輪を頂戴した時に殿下やミーグがニマニマしてたのは、ゼウオンと私が結ばれたって察したからなんだろうな…恥づ。

「ゼウオンさんとユリーナさんの場合は特に」っていうのも、私達の事情を知っているからこそその言葉だろう。

ちなみに私達はハフィスリード殿下のコネで、行きは王宮魔法士さんが土の神殿まで転移で送ってくれることになっている。

レギとルーシェも同行するつもりだったんだけど、土の神殿では人

型をとらねばならないうえに、メチャクチャ混雑するって聞いて、魔鳥さんと魔竜さんは困り顔になっちゃった。

「オイラ、人混みは極力避けたいし、此処で留守番してる」

「アタシ、人型になったことないの」。グリンジラス王都でも充
分楽しそうだし、レギと一緒に残ってる」

というワケで、結局はゼウオンと私だけ送ってもらうことになった。
でも帰りは自力になるので、お祈りが終わって土の神殿を離れたら
私がレギとルーシエを召喚して、そのままグリンジラス王都には戻
らずに最寄のギルドがある街まで行って、転移装置で北の地にある
「黒の民」の王国ヴェノブラーグレへ向かう予定なの。

グリンジラスを拠点にするつもりは今のところないので、もともと
「土の神」の大祭が終わったらグリンジラスから離れるつもりでい
た。

数日前に今後の目的地を皆で話し合ったんだけど、ゼウオンの事情
を考えると西の地から離れた方が良くということと、レギがライの
実を食べたがっていることなどから、北の地に行くことにしたの。
黒の民の王国では私の黒髪もそんなに目立たないだろうしね。

それに今から5ヶ月後の水の黒月には「水の神」の大祭が開催され
ることなので、しばらくはヴェノブラーグレを拠点にして、大
祭が終わったらまた移動しようかってカンジになっている。

私としては「無神の地」に行ってみたいんだけど、当分は見送るこ
とにしたんだ。

何だかんだ言って私もゼウオンと少しでも離れていたくはないし、
レギとルーシエとも一緒にいたいしね。

頼れる仲間と世界各地を自由に旅するって、危険もあるけどワクワク

クして楽しそうだし。

西の地ではシプグールとコルエン村とヌーエンとグリーンジアス王都しか滞在しなかったけど、どこも良い街だったな。闇の帝団の本拠地では散々だったけどさゝ…

北の地は、どんな街があるんだろう？ヴェノブラーグレ王国って、どんな所なのかな？

「土の神」の大祭も楽しみだけど、北の地も楽しみだなゝ。

この時の私は、大祭が終わったら予定通りにヴェノブラーグレ王国に行けるものだと思い込んでいた。

あんなことになるなんて…全く思っていなかった…

第50話　大祭前夜

「土の神」の大祭前日　夜

グリンジラス王都は前夜祭の熱気に包まれていた。

宿屋の部屋にいても、外の喧騒が伝わってくるほどだ。

本当は前夜祭を堪能したいところなんだけど、夜明け時に土の神殿に転移してもらうことになっているので、おとなしく就寝することにしたの。

光源石の明かりが微かに差し込む部屋で、ゼウオンと私は1つのベッドで身体を横たえていた。

「前日でこんなに賑わうなら、明日なんてもっと凄そうね。……土の神殿には、どれくらいの人が訪れるのかしら？」

「俺も大神殿には一度しか行ったことがないが、かなりの大人数になるだろうな。風の3刻前くらいには行かないと神殿内には入れないらしいしな」

「だから夜明けに転移してもらうの？」

「そういうこと」

腕枕してくれている彼の胸に摺り寄ると、消魔匂の胸飾りの感触が頬にあたった。

ゼウオンは結界を張っていないと、眠る時でさえも模造髪と胸飾りを外さない。

もう十何年もそうしてきたから当たり前のようになってるみたいだけど、私は彼の銀髪が大好きだから、いつか模造髪を外せるときが来るといいな、って思う。

でもそれは、銀狼族に彼の存在を知られる時だ。

彼は「同族に知られたら、殺される」と、そう言い切った。

そんなことは、させない。

私は恋人が欲しくて、一生涯を共にする相手を得たくて、幸せになりたくて、このヘアグという世界にきた。

そして望み通り、ゼウオンと想いを交し合えた。

彼はいわば、私がこの世界に居る意味そのもの。

彼の存在が消えるということは、私がヘアグで生きる意味も失くすということ。

彼を失うわけにはいかない。

そのためにも、強くならなきゃ。

「無神の地」に行きたいのは、もしかしたら私にも新魔法を開発できるかもしれないって期待しているからでもあるんだ。

新魔法っていう新たな力を手に入れて、もっともつと強くなりたい。銀狼族が私達に手出しできないくらいに強くなりたい。

それでも私の力だけではどうにもならないなら……ハフィスリード殿下や羊緑族族長さんに頼み込んででも、ゼウオンを――延いては自分を護るんだ。

最愛の想い人と愛情を交わし合うことの幸福と喜びを知ってしまったから。

もう、彼がいない人生なんて考えられない。

私を包み込むように寄り添うゼウオンの温もりを感じ、しばし無言

で幸せに浸っていたけど、徐に彼の耳元に顔を寄せ、そつと囁いた。

「大好きよ、ゼウオン」

鬱蒼とした森に星明りが微かに射し込み、光沢ある銀髪を照らす。銀髪の男の紫の瞳には、小高い岩丘の上に建つ神殿が映っていた。

「いつまで眺めているの？あと数刻ほどしたら、あそこに行くのよ？」

彫像のように微動だにしない銀髪の男に声をかけたのは、上位精霊

『紅蓮族』精霊長の実子、第3の姫精霊ファラフレア。

人型になっている彼女は、紅緋色の髪に薄紅色の瞳をしている。唇も、化粧を施したかのような紅色だ。

男はファラフレアを見ると、穏やかな笑みを浮かべた。

「ついに来たんだな」と。土の神殿も大層立派なものなんだなあ」

「そうね。火の赤月に行った火の神殿に勝るとも劣らないわねえ」

ファラフレアも同じように土の神殿を見詰め、それから隣に立つ男に視線を移した。

我が主神「火の神」の大祭では、何の問題もなく祈りを捧げられた。

西の地に旅立つ前に一族の宴も済ませたし…あとは明日、彼の主神「土の神」の大祭で祈りを捧げれば、私達はようやく名実共に夫婦になれる…長かったわ…

ファラフレアは再び土の神殿に視線を戻し、今までの軌跡を思い返す。

あの出会いは偶然だったのか、必然だったのか

ファラフレアが彼と初めて出会ったのは10年前。

当時11歳であったファラフレアは、魔法の修行に明け暮れていた。精霊型で操駆する精霊術はほぼ修めきっていたのだが、人型で発動させる魔法は不完全だったのだ。

ファラフレアは「火」「空間」の適正があると判明したときから、使用可能者の少ない「転移」が使えるよう日々修行に励んでいた。そんなある日、「転移」が発動したという手ごたえを感じたファラフレアは、自分が思い描いた場所とは違う、全く見知らぬ場所にいた。

目の前には、青々と生い茂る草木に囲まれた小さな泉。

その泉のほとりに、銀髪紫目の美形な少年が裸で立っていた。

ファラフレアと美少年は、お互い唖然としながら数秒見詰め合っていた、が。

「つつきやーっ、は、は、ハダカ?!」

「え?!……!!うわあぁーっつ」

ファラフレアの悲鳴に反応した少年はジャボントと泉に潜り、顔だけ水面から覗かせた。

「あの、キミは？突然現れたみたいだけど…」

おずおずと尋ねる少年に、ファラフレアはしどろもどろに説明した。

「えと、その、「転移」の練習してて、あの、里の東側の外れに転移したつもりだったんだけど、何故かここにいてっ、アンタどーしてハダカ?!」

「ここは誰も来れない場所だから、水浴びしてて…どうしよう…」

銀髪の美少年は眉を下げて困った表情をしてたが、すぐに真剣な顔つきになると。

「僕に会ったことは無かったことにして欲しいんだ。ここで会ったことは忘れて」

その言葉を受けた直後、ファラフレアはボカンとしたけど、すぐに真摯に少年の見つめ返した。

少年の表情は真剣だ。

しかし、紫の瞳は何だか悲しそうに揺らめいていて…ファラフレアの心が何故だかツキンツと痛んだのだ。

無かったことにして欲しいと言いながら、存在を認めて欲しいと言われた気がした。

忘れてと言いながら、覚えててと言われた気がした。

「……ヤダ。この場所素敵だから此処に「転移」するように魔法練習する」

「ええ?!あの、僕は無かったことにしてって「ダメ」…はい?」

「毎日来るから」

「え?!」

「今日は帰るわ。また明日ね」

強引に言い切ったファラフレアは、それから宣言どおり少年と出会った泉へ毎日転移した。

今まで上手く行かなかった転移も、少年と泉を思い浮かべると難なく出来てコツを掴むことが出来た。

少年は戸惑いながらも毎日ファラフレアを出迎えてくれたし、ファラフレアのとりとめもない話を真摯に聞いてくれる。

2人は次第に打ち解けていき――気づけば互いが互いを慕い合うようになっていた。

少年は自分の身の上を詳しく話してはくれなかったが、隠れて生きていかなければならない事情があること、面倒をみてくれる者達から世の中の知識や戦い方を学んでいることなどは教えてくれた。

「僕が生きてるって誰かに知られて噂にでもなったら僕は殺さちゃうかもしれないから……誰にも言わないで」

「もちろん。私だけの秘密よ。私だけの……」

「ファラ……」

どちらからともなく顔を近づけ、そつと唇を触れ合わせる。

ファラフレアは幸せだった。

彼はいつでも、自分の話を親身になって聞いてくれる。

楽しい話をする、彼も楽しそうに微笑む。

愚痴を言つと、理解を示しながらも諭す様に注意点を述べてくれる。落ち込んでいる時は、慰めてくれつつも優しく励ましてくれる。

ファラフレアを見つめる紫の瞳は、いつだって穏やかで、優しく包

み込んでくれるようだ。

彼がどんな素性だろうと、彼を恋い慕うファラフレアの気持ちに揺るぎはない。

いずれは彼と番つと願い、信じていた。

しかし、突然彼は姿を消してしまった。

ファラフレアに、彼の穏やかで優しい瞳とよく似た色の指輪と「ゴメン」と辛そうに囁いた一言だけを残して――

もう彼は来ないと分かっている、ファラフレアは毎日日課のように泉に転移した。

少しでも時間が出来れば、いつも泉に行って佇む。

彼と過ごした時間、記憶、その時感じた想いを失くしたくなくて、指に光る紫の指輪を見つめては過去の幸せに思いを巡らせ、彼の身を案ずる日々が続いた。

そして3年あまりが経過し、ファラフレアが15歳になった頃。

父である紅蓮族族長から、真実を聞かされた。

彼を引き取り匿い育てていたのは、ファラフレアの父母だったのだ。彼は、魔獣で西の銀魔「銀狼族」、しかも族長の実仔でありながら、一族の掟により生存を認められない存在だという。

父は、娘であるファラフレアが彼と想い合っていると知り、かなり狼狽したらしい。

そして、父母と話し合った彼はファラフレアの前から姿を消した……

納得できなかった。理解しなくなかった。

怒りと悲しみが大きすぎて霊力が暴発したファラフレアは、里の半分を焼け野原にするほど威力の強い火炎を身に纏い大暴れしそうになるも、父母と姉姪2人 - - 紅蓮族族長一家総出 - - に取り押さえられ何とか事なきを得た。

それ以来、ファラフレアは彼を探しに何度も里を出ようとしたが、嚴重に監視されて身動きがとれず - - 2年が経った。

ファラフレアは17歳になっていたが、相変わらず彼を求めて里を脱走しようとしていた。

その執念ともいえる強い恋心に族長夫婦は頭を抱えていた、そんなある日。

凶悪な怪物が、紅蓮族の里付近に大挙して押し寄せてきたのだ。

紅蓮族は里に侵入させまいと果敢に戦ったが、今回は相手が悪かった。

上位精霊である紅蓮族の戦闘能力は高いが、その紅蓮族の強力な火炎も、剣や弓といった物理攻撃も大してダメージを与えられない鉄壁の殻を身に纏った怪物 - - デザオウムと呼ばれる巨大な百足型むかでの怪物。

殆ど攻撃が効かない怪物相手に、紅蓮族は苦戦を強いられた。

ファラフレアも参戦していたのだが、怪物共に押され気味だった。

それでも諦めずに次々と精霊術を操縦していたのだが、精霊術を發動させる一瞬の隙に、怪物に詰め寄られてしまう。

濁った緑色の粘液を口元から滴らせ、ファラフレアに襲い掛かる巨大百足。

絶体絶命と覚悟したファラフレアだったが - - 目の前で信じられないことが起こった。

今まさに襲つてきそうな体勢のまま、デザオウムは石化していた……

ファラフレアをはじめ紅蓮族の面々が呆然としている間も、デザオウム達は次々と石化していく。

気付けばデザオウムの大群は皆、石となり砂となつて跡形も無く消えて去っていた。

怪物共を消滅させてくれたのは、雄雄しき銀狼。

その銀狼がまさしく捜し求めていた彼ななんと、魔物型であつてもファラフレアは一目でわかった。

数年ぶりに再会した彼に抱きつき、二度と離れたくないと思つたのだつた。

紅蓮族の里を怪物から守つてくれた彼の存在は、この機に一族の間で公のものとなつた。

他地の魔獣、しかも厄介な出生である彼は当然すんなりとは受け入れられなかったけど、彼の穏やかで聞き上手な性格と、紅蓮族には無い戦闘力が功を奏して、徐々に認めてもらえるようになっていった。

ファラフレアとの恋仲も当初は異種族だからと里の者に反発されたが、彼女の強い恋心を重々承知していた族長一家が強く反対をしなかったなので、表立つての非難も徐々に沈静化していった。

彼自身も時間をかけて一族の者達との関係を築き、何年もの月日が経つてようやくファラフレアとの仲を認められ祝福されるようになったのだ。

「そろそろ結界を張って休もうか」

その彼の科白に、ファラフレアは回想から現実に戻った。

「そうね。明日は夜明けと共に神殿に向かうんだったわ。：大丈夫よね？」

「うん、大丈夫。恩師から頂いた消魔勾の胸飾りがあるし、一緒にいるのが精霊のファラだから、仮に銀狼族の者が神殿にいたとしても僕が同族だなんて分らないよ。それどころか僕が魔物だって事自体、気づかれないんじゃないかな」

彼は優しく微笑み、ファラフレアを安心させるかのように柔らかく彼女を抱き寄せた。

彼女も彼の腰に腕を回し、頬を摺り寄せる。

彼の「大丈夫」という言葉を信じてる。

でも、もしも銀狼族が偶然来ていて彼を見咎めたなら――全力で振り切り、即、南の地に転移してやるんだ。

我が紅蓮族の里まで追ってくるようならば、その時は容赦なく燃消する。

彼は私の、この姫精霊ファラフレアの唯一無二の伴侶なのだ。

ようやく結ばれた最愛の伴侶を殺めようとする輩は、誰であろうと許さない。

私はもう、彼がいない人生なんて考えられないのだから――

ファラフレアはしばらくの間、自分を包むように優しく抱きしめてくれている彼の温もりに浸っていたが、徐に彼の耳元に顔を寄せ、そつと囁いた。

「愛しているわ、ソウオン」

齡^{よわい}21の歳を迎えたばかりの銀狼族族長の実仔は、輝く銀髪を夜風に靡かせ、己の生まれた里を見張り台から見下ろしていた。

「こちらにいらしてたのですね」

涼やかな女性の声。彼のツガイであるイウマナの声だ。

声をかけられる前から気配と匂いで彼女だと分かっていた。

振り返り、自分と同じく人型になっているツガイの姿を視界に収める。

「なんだか眠れなくてな…里から離れるのは初めてではないのに何故か落ち着かないのだ。俺に構わず先に休んでくれ」

その言葉にイウマナは静かに首を横に振った。

「実は私も眠気を感じなくて…あと数刻で夜が明けますので、いっそ眠らずにいきましょうか」

「そうだな。数日ばかり睡眠をとらずとも支障は無いしな」

イウマナはゆつくりと彼に近づき、隣に並んで里を見回した。

自分は、時期族長と目されている彼のツガイ。

今年の大祭で主神に祈りを奉げた後は一族の宴が催され、ツガイか

ら伴侶の立場となる身。

イウマナは銀狼族の中ではさほど力が強い方ではないため、時期族長同然の彼との婚姻はあまり歓迎はされなかった。

しかし、彼自身がイウマナを強く望んだことに加え、彼女は銀狼族にしては珍しく癒しの力があつたおかげで婚姻を認められたのだ。

「明日は風の2刻頃に土の神殿に転移するのですよね？私、里から出るのは初めてなので楽しみですけど不安でもあるんです…」

「里の外は結構楽しいもんだぞ。神殿前広場には多くの露店が建つらしいから、ゆっくり見て周ろう」

「はい」

イウマナが嬉しそうに微笑むと、彼もまた眦を下げて彼女を抱き寄せた。

日頃は厳しい雰囲気を纏っている彼が、自分という時は柔らかい雰囲気になる。

自分には気を許してくれていると思えて、イウマナは嬉しかった。大して力もない身だけれど、心から愛する彼と夫婦になれるのだから、精一杯努力して里と彼に尽くしていこう。

イウマナは自分を外気から守るように抱き込んでくれている彼の温もりに満たされていたが、徐に彼の耳元に顔を寄せ、そつと囁いた。

「お慕いしております、ジウオン様」

同じ日に生を受けた銀狼族の三ツ仔は、同じ年に魔物・人間・精霊という、それぞれ異なる三種族のツガイを得て、同じ目的地へと赴こうとしていた。

21年の時を経て、三ツ仔が今、生誕の地に集う。

第50話〜大祭前夜〜（後書き）

ソウオンが持っている封魔勾の首飾りはセラシアから貰ったもので、ゼウオンのものと御揃いです。ちなみにゼウオンの模造髪はヴアルバリドの髪で作ったものです。

第51話　大祭当日

「すっ……い！」

ポカンと口を開けたまま巨大な建造物を見上げて立ちすくむ私に、ゼウオンは「そうだな」と微笑する。

土の神殿は、呆気にとられるくらいに立派なものだった。

神殿の敷地となっている岩丘の上を囲い込むように、繊細で美しい彫刻が施された円柱が2 m間隔くらいでズラリと円形に立ち並んでいて、円柱1本1本がかなり大きい。高さ10 mくらい幅2 mくらいはありそうだよ。

岩丘の中央にある大神殿の本殿はパルテン神殿のような造形だ。

地平線から姿を現した主光と副光の明かりに照らされた土の神殿は荘厳且つ神秘的で、私はしばし見入っていた。

「ユリーナ、行くぞ」

「あ、うん」

ゼウオンに促されて我に返った私は、目だけでキョロキョロしつつも歩を進めた。

大神殿本殿の入り口に到着すると、まだ風の1刻半くらいなのに既に入殿の列が出来ていてちよつとビツクリ。

いつもより目深にロープを纏ったゼウオンと私は、手をつなぎながら列の最後尾へと移動して並んだ。

今回の神殿参拝(?)は、ゼウオンの主神である「土の神」に“私達は生涯添い遂げます”と宣誓するのが目的なの。

結婚式の誓いの言葉みたい、なんてドキドキしちゃう。

だけど、こうやって長蛇の列に並んでいると、結婚式というよりはデイ　二ーのアトラクション待ちしてるみたいなんですケド。

いや、神殿でのお祈り待ち行列なんだから、むしろ初詣の参拜行列っていった方がいいのか？

いずれにせよ大祭の祈祷が始まるのが風の5刻というから、あと3時間半も待つのか…

ファ　トパス発行して欲しーよー。

チラリと周囲を窺うと、焦げ茶色の肌に大きな尖り耳の人(土の中位精霊らしい)とか、2足歩行の服を着たウサギさん(下級魔獣らしい)とかがいて、人間だけじゃなくて人型となった精霊や魔物も大勢来ているんだなと実感。

実は数日前まで、土の神殿には銀狼族も来るかもしれないと思って私はここを訪れることに躊躇いを感じてた。

でも当のゼウオンが「銀狼族は匂いで相手を判断するから気付かれる可能性は限りなく低い。それに、同伴しているのが人間であるユリーナなんだ。まず、気づかれることはないさ。確かに多少の懸念はあるが、最も霊験あらたかな神殿でユリーナとの関係を確認たるものにしたいんだ」なんて言うから、結局来ちゃったの。

私もゼウオンとすっかりとした関係になりたいしね。えへへ。

視線だけで周囲を観察しつつ、ニマニマする私。

ローブ深く被ってて良かったわなんて思っていると、つないでいたゼウオンの手に一瞬力が籠った。

「どうかしたの？」

背の高い彼を見上げて尋ねると、俄かに緊張した様子のゼウオン。表情は無いけど、纏う気配が若干鋭くなっている気がする。

ゼウオンは私と？いでいた手を離して、親指と中指を立てると3回振った。

そのサインを見た私も、身体に緊張が走る。

土の神殿に来る前に、もしかしたら銀狼族も来るかもしれないからと、ゼウオンと幾つかのサインを決めておいたのだ。

言葉にして相手に伝えると、聴覚にも優れている銀狼族に聞かれてしまうかもしれないから、手でサインするって方法をとることにしたの。

今、ゼウオンがしたサインは「銀狼族が来ているが問題無い」だ。

ゼウオンは再び私の手を取り、ギュツと握って？いでくれた。

私も繋がれた手に力を入れて、ニコツと笑みを作る。

銀狼族が来るのは想定内だし、大丈夫。

私は早鐘を打つ心臓を静めながら、自分で自分に大丈夫と言い聞かせて、不安になる気持ちを押し殺した。

その匂いを感じ取った瞬間、不覚にも俺は身体を強張らせた。

あまりにも自分の匂いと似通いすぎている。

銀狼族が土の神殿に来る可能性は有りえたから、例え同族の匂いを感じ取っても動揺はしないと自負していた。

だが、この匂いは…まさか、血族か？！

察知した銀狼族の匂いは血族と思しき者と、もう1体。

距離的には離れているから、迂闊に近づくかなければ大丈夫だろう。

一瞬身体に力が入ってしまったが、すぐに冷静になり隣のユリーナを見た。

彼女は俺の様子を窺うように、真剣にこちらを見つめている。

俺は事前に決めておいた合図をして彼女の手を握ると、応えるように微笑んでくれた。

列がゆるやかに進んでいき、ようやく俺たちも神殿内に入る。

入殿すると同時に、ユリーナは「ほええ…」と小さく感嘆の声をあげた。

彼女は好奇心を漲らせた目線でチラチラと神殿内を観察しはじめる。あからさまにキョロキョロしないのは、場の雰囲気配慮してのとだろう。

一通り観察し終わったのか、今度は神殿内に入る時に神官から購入した「祈石」を繁々と見つめるユリーナ。

彼女は異世界人だから、この世界では当たり前のも物でも興味をそえられるみたいだ。

「祈石」とは、主神に祈りを奉げるのに必要不可欠なもので、何処の神殿でも置いてある。

祈りを奉げる者は「祈石」を購入し、神官達が主神に祈詞を上げて

いる間に「祈石」に祈りを込めて祭壇に奉げるのだ。

「祈石」が淡く発光して主神の紋が刻まれたら、神官が祭壇から石を回収して持ち主に返す。

紋が刻まれた「祈石」は「護石」と呼ばれるものになり、祈りを奉げた証拠ともなるのだ。

俺達魔物は伴侶を変えることなどは有り得ない話なのだが、一部の人間は伴侶変えをすることもあり、その時は祈りを奉げた神殿に「護石」を返し、新たに「祈石」を購入するらしい。

そういえば「祈石」を購入するよりも「護石」を返納するほうが料金が高いらしいが、俺には関係ないな。

「祈石」を凝視していたユリーナが顔を上げた。彼女は、幸せそうな笑顔を浮かべて俺を見ている。

その笑顔に、俺も幸せな気持ちになる。

微笑み返してユリーナの耳から顎までの輪郭をゆっくり指でなぞると、その滑らかな頬が薄っすらと赤く染まった。

ツガイになり身体を重ねてから1ヶ月以上経つのに、彼女は相変わらず初心で照れ屋だ。

何度も交尾しているのに、俺が触れるといつも恥ずかしがって赤面する。

なのに、俺の手を振り払ったことは1度も無い。

2往復ほど撫でたところで、名残惜しく思いながらも俺は彼女の顔から手を離れた。

ここが神殿内じゃなかったらもう少し彼女に触れていたけど…さすがに止めておいた。

大神殿内に響き渡っていた祈詞が、厳かな余波を残して終了した。約3刻ほどの時間をかけて、入殿者の全員が「祈石」を奉げ終えたのだ。

今大祭の司祭である神官長のバロージャは安堵したかのようにフツと一息つくと、祭壇に向けていた体を入殿者達の方へと向け、祈祷終了時に紡ぐ決まり言葉を口にする。

「この善き日に祈りを奉げられました入殿者の皆様に、土の神のご加護を……」

例年通りの言葉を言い終わろうとした、その時。

バロージャの視界がグラリと歪み……神殿内の動きが止まった。

《我はこの地を守護する、土の神。我の地に生まれし銀の三魂よ。汝等がこの地に集う時を待っていた…》

“声”なのだと認識するのが憚れるほど、厳かに身の内に染み渡る音。

高音でも低音でもない不思議な音が、言葉を形成していく。

バロージャは、己の口から洩れる言葉を霞む意識の中で聞いていた。

《今は時を止めている故、我の言が伝わっておるのは汝等三魂と…

体を借りている、この神官のみ》

体を借りている…？

恐れ多くも己の体に主神が宿っているということか…？

バロージャは、覚束ない意識下で状況を理解した。

《まもなく、この地に禍大なる災いが蘇ろうとしている…汝等一族の業である災い…百年前に一度は封印された災い…此度は完全に消滅させよ…》

土の神の言は続く。

《災いは恐るべき力…だが現し世にて我が力を直に揮うことは適わぬ故、汝等三魂に我の力を授けよう…一魂を受け皿とするには我の力は重すぎる…だが、同日に同母体より我が地に出でし三魂に分け授けることは可である…我の力は汝等が一体化する時にこそ顕れよう…授けし力を以って禍大なる災いを滅せよ…この地を滅することなかれ…》

土の神の言は、それで終わったようだった。バロージャの視界が再び歪む。

「…様、…官長様?! バロージャ神官長様つ、どうなさったんですか?!」

気付くと、焦燥の表情を浮かべた中堅神官達がバロージャの周りにいた。

ザワザワとさざめく入殿者達。

神殿内の時は、すでに動き始めていたらしい。

「あ、いや、何でもない……」

まだ微かにぼんやりする意識を懸命に奮い立たせたバロージャは、威厳を損なわないように態度を取り繕うと、改めて祈祷終了の言葉を述べたのだった。

ゼウオンの様子がヘン。

土の神殿でお祈りして「祈石」はちゃんと刻印付きの「護石」になったのに、ゼウオンは祈祷終了後から今に至るまでずっと心此处にあらずといったカンジなの。

お祈りが終わったら神殿前広場に建ち並んでいる露店を見てまわろうねって言ってたのに、結局すぐに神殿から離れようとするし……

もしかしたら銀狼族に見つかつたの？！ってサインしてみたけど、微妙な表情を返されただけだった。

どうして露店見るのを止めちゃったのか分かんないけど、無表情を貫いている彼の雰囲気は何かを警戒しているようにも思えて「露店見たいよ」。お腹も空いたし食屋台で何か買おうよ」なんて我俣言える感じじゃない。

私としっかり手を繋いでいるゼウオンは、人込みの波を乱さない程

度にサクサクと歩く。

私は通り過ぎる露店を横目でチラチラ見ながら、無言で彼に着いて行った。

そのまましばらく歩き続けて、神殿が建つ岩丘の外れまで来たところで、今度は岩丘を囲む大森林へと繋がる階段を下りる。

森林を少し進んだところで、ようやくゼウオンが口を開いた。

「すまないな、ユリーナ。俺もちよつと混乱してて… だけど何とか整理できたかな」

「混乱?! 一体どうしたっていうの?」

「… もうすこし神殿から離れた方が落ち着くから、後で話す」

「そう… わかったわ」

ゼウオンが混乱だなんて、何があつたんだろう?

大祭の祈祷が始まる前までの彼はいつも通りだった。祈祷中も特に問題なかったし…

思い当たることなんて何もないけど、彼が混乱だなんて余程のことだ。

心して話を聞かなくちゃ。

岩丘の神殿の全貌が見えるくらいまで遠のくと、ゼウオンは亜空間から結界石を取り出し発動させた。

「この結界石の効果は6刻程度だが、時間としては充分だろう。…

ユリーナ」

「はい」

真剣な瞳で私を見るゼウオンに、思わず居住まいを正す。

ゼウオンは瞬きもせず、私に言い含めるようにハッキリとした口調で一言。

「神命が、下された」

……

……え？神命って…何？

イマイチ言葉の意味が理解できない。

「神命って…神様からのお告げみたいなもの？」

キョトンとして尋ねるとゼウオンは少し訝しげな顔をした。

でも、すぐに「そっか」と何かに納得したかのように表情を緩めた。

「異世界に生まれたユリーナには馴染み無いよな。神命っていうのは主神から下された命令みたいなものだ」

「命令…？って、何を命じられたの？」

ゼウオンの答えを恐々としながら待つ。

とてつもなく嫌な予感がするけど、聞かないわけにはいかない。

「“禍大なる災い”を消滅させよ、と」

「禍大なる、災い…？」

「ああ。100年前に封印された災いが蘇るらしい。消滅させるための御力も賜った」

「……ど、して？どうしてゼウオンなの…？」

呟くような私の問いかけに、ゼウオンは落ち着いた声色で神命内容

を全て話してくれたけど、その内容は私にとっては到底得心のいくものではなかった。

ゼウオン達3兄弟が集うのを待っていたって…彼に神命下されるのは決定事項だったというの？！

一族の業…って、ゼウオン関係ないじゃない！！

心が嵐のように荒び、頭がクラクラする。

さっき、ゼウオンが「混乱してて…」なんて言ってたけど、私は混乱どころか取り乱しそうだよっ。

「主神のお言葉を受けたのは、俺達3兄弟と司祭を務めていた神官長のみだが…それはつまり、俺と弟が生存していると兄に知られてしまったということでもある」

そう言うと、ゼウオンは目を閉じて深く息を吐いた。

ゆっくりと目を開いた彼は、若干声のトーンを落として再び話します。

「弟も生きていたんだな…。一度も会った事がなく、名すら知らないから今まで気にかけてことは無かったが…同じ憂苦を抱えている身としては弟の生存は喜ばしい。おそらく何処かに隠れていたか、俺と同じく何らかの偽装をして暮らしてきたのだろうな…」

地面におとしていた視線を私に向けるゼウオン。

真っ直ぐに私を見るアメジストの瞳には、混乱も迷いも感じられない。

「銀狼族の掟では、俺と弟は生きていてはならない。だが、俺と弟は神命を下された身となった。一族の掟よりも主神の神命の方が重

大だ。禍大なる災いとやらを消すまでは、一族に狙われることは無い」

未だに内心パニックで言葉も出ない私に、冷静な口調で自己考察を語るゼウオン。

「こんな形で自分の存在を知られてしまう日があるなどと思ってもみなかったが、神命を下されたことは俺にとって……どうした？ ユリーナ」

ゼウオンの話の最中だったけど、私は詰め寄るように彼が羽織っているローブの胸部を握り締めた。

「納得できないっ！」

訴えるように、私は声を荒げた。唐突に大声をあげた私に驚くゼウオン。

「どうして?! どうしてゼウオンはそんなに冷静でいられるの?! ふざけるなって、理不尽だって、こっちの都合無視して勝手に決めるなって、腹立たしく思わないの?! 掟だかなんだか知らないけど、今まで常に同族に殺されるかもしれないって恐怖を背負って生きてきて……なのに結局神様に存在を暴露されてっ、封印されてた災い消させて……何それ?! ゼウオンにヘンな使命を与えないでよっ、ゼウオンを振り回さないでよっっ、うううっっ……」

悔しくて、遣る瀬無くて、気付けば泣き叫んでた。

泣きたくなんかないのに、昂る気持ちと溢れる涙を堪え切れない。醜態を晒したくなくて、彼のローブに顔を埋めて嗚咽を漏らした。

悔し泣きなんて、人生初だよ。

ゼウオンが絡むと、私は泣き虫になっちゃみたい。

ヒックヒックとしゃくり上げる私の背中をゆっくりと擦ってくれるゼウオン。

宥める様な優しい手の動きに、私の嗚咽は徐々に小さくなっていった。

「神命を理不尽だなんて言っただけで、ユリーナは本当に異世界人なんだなあ」

私の背中を撫でながら、ゼウオンは面白がるような口調でそんなことを言う。

「ヘアグで生まれてても、私きつと怒ってるよ…?」

「ははっ、それはどうだかな」

「どうもこうも無いっ。絶対怒るに決まってる」

「断言したな?」

「したよ!…だって、災い消滅なんてかなり危険そんな使命を一方的に押し付けてさっ。ゼウオンになんてことすんのよーって、腸はらわた煮えくり返っちゃうよ!」

からかい口調のゼウオンに、ムッとして言い返す。

すると彼は痛々しい笑顔を浮かべ、私をギュッと抱きしめてくれた。

「俺のことなのに…オマエは本気で泣いて怒ってくれるんだな…」

耳元で囁かれた彼の声は切なさを含んでいて、私は思わず縋るように彼のローブを掴み直した。

「だって…自分の事以上に感情的になっちゃうんだもん。子供っぽくて情けないよね…」

「情けないなんて思うわけないだろ。だが…オマエが心を痛めるのは辛い」

辛いと言われて顔をあげると、ゼウオンはホントに辛そうな顔をしていた。

実は彼もそんなに冷静じゃないのに、努めて落ち着いてる風を装ってるだけなのかも…って思った。

「…ツガイが俺で、すまない」

少しだけ震えがちに呟かれた謝罪の言葉は、ようやく聞き取れるくらいに微かな声で。

私は声を出さずに静かに涙を流しながら、振り子人形のように只管ひたすら首を横に振り続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8043s/>

薙刀女の異世界物語

2011年10月14日22時38分発行